

カイマクルの鬼

セツル@ポケモン熱発生中！

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

《注意》

本作では、クール病やヤコブ病などの同族喰いによる病気の表現があります。※最初の数話くらいです。

「何で！・よりもよって今！・思い出すのかな!!!」

この話は、鬼となった衝撃で前世を思い出した少女の物語。

原作キャラもですが、主人公はオリジナルキャラです。主人公周辺関係者もオリキャラの神父さんや幽霊が出たりしています。

鬼滅見ている、クール病やヤコブ病を思い出したので、その知識を知っている人間が鬼になった上で、果たして人間を喰うのか？と思いましたが、書きました。

目次

太陽を克服した野良鬼

カイマクルの鬼 | 1

《完璧》の定義とは？ | 7

春は植物の季節です。 | 11

なぜ無惨の呪いが解けたのか？ | 16

人との出会い | 19

懺悔せよ、さすれば道は開かれん。 | 23

オニの少女と私 | 28

善逸、とんでもねえ音を聴く…の巻 | 39

あなたの希少価値 | 46

Let's not lick the seriousness | 60

s of adults. | 60

柱合会議 | 66

鬼殺は第三者から見れば… | 74

無限列車の尋ね人 | 81

教会の孤児

神父さんは悲鳴嶼行冥に近い宇髄天元タイプ | 87

煉獄家の一コマ | 93

とあるジブリ作品のようなお話。 | 106

カイマクル2号 | 113

最初の贈り物／最高の情報 | 119

宇髄の思い／竈門炭治郎の決意 | 126

【堕姫】とは結局は何者だったのか？ | 138

宇髄天元は忍びの一族である | 142

見えない境界線

149

炭治郎の苦悩

164

あなただけを【悪】にはさせない。

171

優しい嘘と決意

178

柱集会議2

185

米国大使の養女

教会経由大使館行きです。

191

刀鍛冶の里

204

上弦の鬼

210

ハリス・ベネットという名の男

230

【鬼の音】

244

産屋敷の罪と罰

260

緊急!!柱合会議

266

ローズマリー特命連絡員

役目を果たせ

277

珠世との対談

291

現実を見てもらいましょう。

299

私も外交官ですから。

310

護る者と衛る者

322

試験結果と柱の評価

342

同じ単語で、意味が違うのはよくある事です。

351

第三者から見た我妻善逸

363

不死川実弥が玄弥を弟と認めなかった本当の理由

370

大人の世界

379

大人の暗躍

387

優しい言葉には裏がある	395
任命式と嘘	406
騙し合い	419
話をしましょう。	426
不思議なお茶会	433
mission【大きなツクシ】を絶滅させよ！	444
近づく死への波音	458
武器提供と対価	464
主人公が認められた理由	473
柱集会議3 上弦の過去	479
療養中の特命連絡員	
自らの行いには責任を	494
司祭の話	508
【先見の明】意外な弱点	514
さあ！茶番劇の始まりだ！	523
産屋敷耀哉の覚悟	530
鬼殺隊士side	538
銃器中隊side	547
童磨戦 胡蝶しのぶ編	551
獠岳戦 我妻善逸の覚悟	557
猗窩座戦 実は似た過去を持つ人間たち	567
猗窩座戦 響く言葉の刃	573
さあ！還ろうあるべき世界へ！	577

太陽を克服した野良鬼 カイマクルの鬼

前略、私、鬼になってしまったようです。

私自身、鬼になるまでは大正時代の中流階級で普通に生活していました。少し違う点と言えば、東京の中でも田舎方面に実家があり、かつ我が家が結構な土地を所有している地主にあたる家庭だったくらいでしょうか。

はー、例え、田園風景が広がっていても、鬼の頭領鬼舞辻無惨の本拠地。

まさか、女学校からの帰り道で無惨の気まぐれから鬼にされてしまうとは。

ん？なぜ、鬼にされたのにこんなに冷静なのかって？
それについて話すとなると鬼化までの時間まで遡る。

カランカローン

カランカローン

「はい、今日はここまで。裁縫の宿題については明後日の授業にて、クラス内で見せ合うので、柄に関しては指定はしません。

それと本日をもちまして、桜井さんはご婚約が決まりましたので、中退となります。

桜井さん、良き妻、良き母となるのですよ。」

「はい、先生！」

パチパチパチパチ

「おめでとう、桜井さん！」

「まあ！ついに決まったのですわね。お相手は華族と聞きましたわ。おめでとう。」

「もしかして、あそこの車は桜井さんの迎えかしら。」

「おめでとう！桜井さん！」

「ご祝儀は弾むわ！」

「おめでとう」

「ご婚約とは、誠にめでたきこと。」

私達は、女学校の2年生。元々学校を卒業したら結婚。女学校の卒業を前にして、婿の家に花嫁修行をするために中退と言うのも珍しい話ではない。

でも、華の18歳で家庭に入り、自由もなく夫とその家族に仕えるなんて味気ない。と感じる私は、かの平塚らいてうのような異端な女に該当されるのだろうか。

まあ、私は彼女のように強くもないから、この心は家族の誰にも話すこと無く、『普通の道』を進んで、死ぬのだろう。

思ってもいない祝福の言葉をクラスメイトと一緒に贈りつつ、私は友人達と甘露屋で餡蜜と団子を食べつつ、ガールズトークをして1人で自宅に帰っていた。

「ん？生臭い？」

八百屋なんてない帝都の中心地で、血の匂いがする。お肉の匂い？にしては焦げた匂いは一切しない。

「ここからか？」

路地裏から匂いが濃くなっている。

いくら東洋のパリと言われようとも、表通りと裏通りで貧富の差は見られる。そして、裏通りは治安が悪いことでも有名だ。

でも、万が一この近くで死体があったら、人が倒れていたら、

もしもそれが子どもだったらと思うと、私はあまり奥には行かないと決めつつ、路地裏へ道を進めてしまった。

ぎっ

ぎっ

「夕日が落ちそう…、匂いは強くなっているけど、ここまでが潮時か…。」

た。

「じよ！冗談じゃない!!」

脳がスポンジのようにスカスカになった挙句、発症後1〜2年以内に100%死ぬ病。

あの男のせいで、こんな苦痛を味わった挙句、プリオン病になって死ぬ未来なんて認めない!!

(私の細胞達！がん細胞は太陽とフジの花が弱点よ！お願い！特にB細胞！藤の花の遺伝子をもとに抗体を作って！がん細胞を私の身体の端に追いやって！)

そうやって自分の細胞たちに応援して、飢餓感を誤魔化し、それでも食欲に負けそうなら、「人間を喰う＝死」と自分で自分に暗示をかけた。

「人間喰べたら死ぬ」

「人間喰べたら死ぬ」

「人間喰べたら死ぬ！死んでしまおう!!」

そう叫んで自分に言い聞かせていると、外から声が聞こえた。

「オスマン帝国いや、トルコ共和国とやっとなんか。」

「あの戦争で、我が国はやっとなんか産業が西洋に追いついたな。」

「はは、お前もそれで儲けたタチだろう?」

「違ういな。」

トルコ、ヒツタイト、キリスト教、トルコの地下都市。

【穴を掘る！】

私は咄嗟に井戸を掘る勢いで穴を掘り出し、

実際に本当に水が出てくるまで穴を掘り進めてしまった。

確か地下都市は井戸が空気孔になっていたはず。ここからアリの巣のように枝分かれして、小部屋を作る。

(大丈夫、大丈夫！鬼に酸素が必要かは分からないけど、沼鬼のような例があるもの。最悪、空気が無くても死にやしない!)

そこからひたすら穴を掘ってゆき、人1人が丸まってようやく入れる穴を作れた。

「はっ、はっ、はー」

幸いだっただのが、鬼は夜目が効くこと。

そのお陰で、人間だったら真つ暗で何も見えない地下で、人の匂いがしない所で心を落ち着かせる事ができた。

そして、気づいた。

「呪い…解けてないか？」

そう…、少し前まであんなに飢餓感に苦しんでいたのが嘘のように、今の自分は頭がクリアになっていた。

「もしや…、【前世の記憶】が原因？」

短いとは言えども、数十年分の記憶が急にプラスされたのだ。いくら鬼舞辻無惨と言えども、最初から想定している負荷は耐えられても、想定外の意味不明な記憶を全て処理できるとは思えない。

それに鬼舞辻無惨は、生存本能の塊だ。

人喰いが原因の、致死率100%の病なんて記憶が流れ込んでみる。特に私の記憶は己が死ぬまでの過程まである。

他人とはいえども【死】を明確に実体験として記憶した人間の記憶に、あの鬼と言えども飲み込まれないと言い切れるか？

否。むしろ生存本能で千年を生きている人間だからこそ、飲み込まれるのを恐れて、自ら呪いを一部解除したのだとしたら。

「チャンスだ。」

無惨の血、恐らくはがん細胞に近い何かだと思うが、弱点が分かっている時点で勝機はこちらにある。

注射器はないけど、どうせ再生する自分の肌を労る必要などない。幸い今は春。桜と同じく藤の花も満開の季節だ。女学校にも藤の木がある。その花を夜に取って自分の血に入れ込んだら、抗体の材料を得ることができる。もちろん、最悪、蜘蛛姉のように死んでしまうが、どの道、毒で死ぬか、プリオン病で死ぬかの二択だ。

それなら、自分の意思で進める事ができる前者がいい。

そうして、女学校の藤の花を一つ一つ花卉を身体に飲み込ませた。

《完璧》の定義とは？

鬼になってしまい、無我夢中で呪いが解けた事を証明できた。
うん？どうやって無惨の呪いを解いたのを確認したか？

単純明快、地下の穴の中で、大声で「鬼舞辻無惨！」と叫んだだけ。
正直、人も鬼もない空間で叫んだだけだけど、スサ丸？の時も、事實上、あの時は弱々な鬼殺隊士一対一で、あれほどの報復措置をとったんだ。人も鬼もいようがいまいが、報復できるならするだろう。

でも、私は無事。要するにそう言うことだ。

そして、飢餓感が消えたと思っていたが、それでもないらしい。

まあ、人を見ていないから判別は難しいが、私は今「土を美味しく」と思っている。

パク

モグモグ

「うん…美味しいな、この土。」

いやいや、確かに人を食べるのはリスクが高すぎる。だから、この変化自体は望ましい。

問題は、もし、もし、この予想が当たっていたとなると、別の意味で問題になる。

今の私…【植物】になっているのでは？

見た限りでは、手も足もあり、視界が動かせる以上、人型なのは間違いない。

でも、土を美味しくそうと感じ、

実際に口に入れても、嘔吐どころか美味しいと感じる私の味覚。

無性に水を飲みたいと思い、

拳句に本来なら恐れるはずの太陽光を浴びたいと訴え、地上に出ようとする体。

「あー…もぞもぞするー…もうこの際、太陽を浴びるー！」

「嘘……でしょ。」

鬼特有のアルビノ張りの白い肌はいいとして、川に移るその目と目元周辺は、軍人の隠密作戦で使われる顔料のように覆われ、髪の色、首を覆う色、それは、

「植物特有の色……緑。」

首筋が特に硬い。間違いない、この部分は細胞壁で出来ている。

だが、それ以上に問題なのは、

フワフワ

太陽光を浴びると緑色じゃない部分を傘のように横に伸びる私の髪。

そして、満たされる満腹感。

太陽を恐れるどころじゃない。

太陽無くして生きられない体に変化していた。

「皮肉なものです。《最強の生物》とは植物の事だったんですね。」

少し考えれば分かる事だ。

そもそも動物が他の植物や動物を食べるのは、ひとえに栄養素を自分の体で作れないからだ。

そう言う意味では、太陽光に水、そこそこの温度・湿度があれば、生きることが出来る植物は、まさしく、《地球上、最も優れた生物》と言えるだろう。

でも、私は陽の光無くして生きていけなくなったとはいえ、本当の意味で【太陽を克服】したわけではない。

言うならば、今の状態は、防護服を着た上で太陽に当たれるというもの。

緑の葉緑体部分以外は、普通の鬼と変わらないだろう。

かと言って、全身を葉緑体持ちの細胞に変化させるといのは安着過ぎる。

緑の髪や緑目はまだ、大正時代では、外国人枠で通せるが、肌色が緑な外国人など、いくら情報伝達速度が遅い時代とはいえ、誤魔化す事は不可能だ。

後、単純に目立ちすぎる。

鬼殺隊とは、《鬼を討伐する組織》以前に、

《復讐を正当化する為の組織》である。

異論は認める。

でも、産屋敷の目的が本当の意味で【鬼舞辻無惨の討伐】であるならば、それこそ、ご自慢の【先見の明】を使って軍人や政治家・官僚を抱え込む事も可能はずだ。

伊達に名門の公家ではない。

もちろん、鬼の軍事化転用などを恐れて表立って協力できないのもあるだろう。

だが、手っ取り早く討伐したいなら、やはり国公認の組織にした方が早い。

鬼舞辻無惨の人間時代の身分から、それこそ帝と面会できるほどの殿上人であるのは間違いない。

いくら鬼が東京中心にひっそりと活動しようとも、人の口は完全に防げない。

そうでもなきや、国公認組織でもない鬼殺隊にまで情報が届く訳がない。

本来なら、人がいなくなったりすれば、真つ当な家庭なら警察に行くはず。

でも警察は動かない。

考えうる、理由はいくつもある。

一つは、【そもそも事件と思われていない】

言い方は悪いが、この時代の警察は市民のためではなく、国のために動く組織だ。

よっぽどのお偉方や一気に人がいなくなりでもしない限り、動かな

い。という可能性も高い。

二つ目は、「鬼と警察組織がグル」の場合、

この場合も、鬼関連の行方不明者が探されないのも納得できる。

鬼舞辻無惨も人に化けて、人間社会に溶け込んでいるのだ。

他の鬼が、血気術を使つて特定の警察署内を洗脳している可能性も高い。

最後はかなりメタ発言だが、「原作が警察関連との連携を阻止している」説だ。

ぶっちゃけコレが答えだと、解決策はない。

一つ目や二つ目だったら、お偉方を誘拐したり、元凶の鬼を殺したりすれば、解決できる。でも、敵が原作というか、作者となれば敵わない。

【鬼殺隊】に鬼関連の全てを終わらせる権利があるとすると、

仮に私が今から実家に帰り、

母や父に今の状況を説明して、

父の知人から軍に行き、

私を《実験台》として鬼討伐をお願いしても

寧ろ、無惨討伐の邪魔になってしまう。

今の両親には悪いが、国軍にも鬼殺隊にも頼れない私は、このまま行方不明者になった方が2人も安全だろう。

「軍にも、鬼殺隊にも頼れない…。とりあえず人を喰べずとも生きられることが確認できた以上、地下生活は問題なさそう。

引きこもるか…」

呪いを解いた身、鬼殺隊員はもとより、鬼に見られるのも命の危険がつく。

地下でも美味しい土にありつける。

この森を通気口に生活空間でも作るか。

春は植物の季節です。

昼間の太陽を浴びても問題ないどころか、むしろ栄養を得る為に必要な時間となったので、今の私はちょうど太陽を浴びた場所であり、人も来ない自然豊かな森の中で穴を掘っている。

理由は、かの「カイマクル」の地下都市も空気孔であり、地下都市の入り口である井戸を作る必要があるためだ。

だが、森の中にぽつんと井戸だけがあれば、万が一人が迷い込んだ時に疑問に思はず。

だからこそ、朽ち果てた井戸でなければならない。

あくまで井戸に見えればいいだけであり、周りを石で固めてそれっぽく《昔は使用されていた井戸》を作った。

鬼の体は便利でして、森の石を素手で大雑把な四角形に整えて、水が出た範囲に並べて、念のため丸太(昔、木を切っていたみたいだ)を薄くした蓋で覆った。

接着剤なんてものもないので、本当にただ石を丸く並べただけ。だけど、逆にそれが《昔は使われていた感》を出していた。

「ふう……このくらいで偽装はできたかな。」

念の為、鬼対策で開けた影のできない場所に偽装井戸を設置したし、

実際に地下水がでるまで土(豊かな森だったのでめちやくちや美味しかった)を食べ続けた力作だ。

鬼殺隊員も、それこそ主人公組や、柱クラスでないと、わざわざ行方不明者も出ていない森にやってきたりしないだろう。

そうそう、土をもりもり食べていたら気づいたんだ。

私、ミミズやサナギも食事としてカウントされるみたいだ。

最初は普通の植物寄りになったと思っていたけど、実際には「食虫植物」に近い方の植物になっていたようだ。

この森は、美味しい土と、それによって膨やかな虫も多い。

私としては理想の場所だ。

恐らく、無意識に《栄養素の高い土》に引き寄せられていたのだろ

う。

結果的には良かったが、偽装井戸を作る過程で、つくづく己が人間を辞めたことを実感させられた。

終わってしまったことはさておき、井戸造り過程でわかった【食虫植物】の括りなのは、結構重要な要素になる。

普通の植物は基本的に、太陽光・水・土から得られる養分で生きている。コレだけ聞くと【生存】の意味合いでは最強にも聞こえるが、実際は違う。

植物の弱点は【夜間活動ができない】だ。

植物なら当然のことだけど、生憎私は鬼。しかも、野良鬼だ。

鬼舞辻無惨の支配を解いた日から、私は鬼からも追われる身。

昼間なら、人を喰っていない私は鬼殺隊に追われる確率は低い。

そもそも、五感組のような主人公組くらいじゃないと、陽の光を浴びる私を鬼と判断できる人はいないだろう。次点で柱クラス。

でも、鬼は違う。

鬼の視界は見ようと思えば、全て無惨に繋がる。

自分の体質を知られてしまったら、太陽の克服を第一に考えている鬼舞辻無惨が私を放置する理由がない。

私は不完全とはいえ、太陽光に浴びても灰にならない事実は変わらないのだから。

だから私は鬼殺隊よりも鬼の活動時期である夜に、警戒をしなければならぬ。でも、昼間しか栄養補給ができなければ、すぐに限界がきてしまう。

彌豆子は寝ることで体力を温存していたが、それは人間に守られる事が前提だったから出来た事だ。

私が夜に安眠することなどできない。

だが、食事をしなければガス欠を起こしてしまう。鬼は共食いもするし、呪いの影響なのか同族意識という本来なら持ち合わせる本能もない。

だが、それよりも鬼舞辻のいいように使われて潰されるなんて私が認められない。

でも、鬼はより多くの人間を喰う事で強くなるが、生憎私は草食系、
というか植物系。

今の私は美味しいもの⇨光合成+地中生物だ。

光合成がある分、栄養自体はいくらでも補充できる。昼間なら並の
鬼殺隊員よりも有利だ。

なんといつても日光がある限り、理論上は闘い続けられるのだから。

そうそう、井戸作りの過程で判明した新事実の一つに、私の血気術
も判明した。私の血気術それは、

ひとかた
人形

分かりやすくいうと、【身代わり】

上弦の4から5の半天狗の分裂や、堕姫・妓夫太郎の両者の首を同時
に斬らないといけない。といった感覚に近いかな。

井戸作り過程で、幼虫も結構食べた結果、体がムズムズして、でも
力を発散する事も加減がわからないから出来ずに、

「ウウーウウー」と出来立ての地下生活空間で唸っていたら、帝王切開
をしたかのように腹が開き、内臓の代わりに親指姫が出てきていた。

親指姫といつても、自分を手のひらサイズにした人形だったけど。

コレが出てきた時に唐突にわかってしまった。

コレが私の血気術。

生きることを最優先した結果生まれた、身代わりであり、ジャガイ
モのような食料であるということ。。。

血気術があるとないのでは、戦略が大きく変わる。

血気術があれば、生き残る確率は格段に上がる。

そういう意味では、人を殺さずに血気術を獲得出来たのは幸運以外
の何者でもない。

でも…、なんだろう…この感覚。

自分を小さくした人形は10個ある。試しで、一つを食べた。

罪悪感でも生まれるかと思ったが、全くその手の感覚は生まれな
かった。普通は自分の容姿とはいえ、見た目はほぼほぼ人間だ。

なのに、食べた結果は、

「あんまり美味しくない」「これで生き残りやすくなる」だけだった

この感覚が、鬼の感覚なのだろうか？

でもこれで、人間時代の記憶を持つ鬼が、人間を喰うことに躊躇いがない意味が分かった。

無惨の支配の影響なのかと思ったが、恐らく身体の細胞が一気に入れ替えられた結果、DNAも人間と離れてしまっているのだろう。

これは人間以外にもいえるが、動物は近親者の異性を嫌う時期がある。これは近親相姦による種族の弱体化を防ぐ為にDNAに組み込まれた本能だ。でも鬼は生殖機能が退化している。だから、自分と同じ匂いを持つ身内を真っ先に襲う。

私が動きもしないとはいえ、人形を喰えたのは、ソレが原因だろう。子供と物理的な食事は別だが、どちらも《自分の血となり肉となる》という意味では共通している。

「いや…、だなあ…」

これが、人間を辞めた者の感覚、人外の感覚。

私は禰 豆子ではない。

血気術を無効化することもできないし、そもそも鬼側から見ても私は異端粹だ。原作の【人間化薬】も効かない。アレはあくまでも禰 豆子を人間に戻す為の薬であり、無惨にも効いた。つまり、あの薬で判明したのは、禰 豆子と無惨は、根本的には同じ体質だということ。私は違う。

不完全な、鬼。

中途半端な日光克服。

真つ当に闘う事もせず、身代わりに頼り、人間と鬼を恐れる存在。

「何も考えたくないなあ…。」
藤の花を撒き散らした空間で、1人眠った。

なぜ無惨の呪いが解けたのか？

「も、モノノ怪……」

小腹が空いたから浮浪者を喰い終わったところにいた女学生。

身なりからそこそこの家柄の娘だと分かるから、最初は適当にあしらって死体から遠ざけようと思っていた。

だが、この私を前に「モノノ怪」などと叫ぶ女は流石に放置はできない。

（陰陽師の家系の娘か？ そういうえば、神職者を鬼にしたことはなかったな。）

「ほう…、この姿をした私を相手にモノノ怪と言う女がいるとはなるほど、面白い。」

女、鬼となり、私のために生きろ。」

血を注いだ過程に流れる記憶

（ふん、つまらん。）

何かを得られるかと思ったら拍子抜けもいいところだ。当たり前障りのない普通の娘、

（どうでもいい、さっさと切り上げるか）

《そこをどけー！ 赤井秀一イイー！》

《狩るべき敵を間違えないでほしい》

はっ？

金髪に黒い肌の男と、白い肌に黒髪の白人系の男？

なんだ、この記憶は？

《人間が人間を食べる、つまりは同族喰いによって起こる有名な病気は、有名どころは牛の餌に牛の骨が入っていた事により起こった「ヤコブ病」》

場面は一瞬で変わり、顔はこの国の者なのに体格が西洋風の女が同族喰いによる病を話す記憶が流れる。

《これは人間にも起こります。では、「クール病」の末路の映像を流します。かなりショッキングだから、全員見終わったらカウンセリングを受けますよ。》

「五月蠅いイー！」
ブチン

人との出会い

どこの山なのかは分からないが、無事に衣食住の一応の確保が出来た私は今、山の中を歩いている。

今は太陽が暖かく照らす少し肌寒い程度の春だ。

「うーん！お腹いっぱい！太陽最高！」

血気術の発現、衣食住の確保による精神的余裕を得たことにより感情的になつてしまったが、人というのは割と単純。

鬼対策兼鬼殺対策で藤の花を撒き散らした空間で眠ったことで物を冷静に考える事ができた。

自分なりに考えてみたけど、親に会えない、友達に会えないことは言うほど苦痛でもなかった。

両親には悪いが、前世を思い出した時点であの人たちは、叔父さん叔母さんくらいの距離感になってしまった。

いや…、ちゃんと覚えているよ。大切に育てられ、愛されて何不自由なく蝶や花よと綺麗なもので私の世界を完結させてくれた事くらいは。

この時代の人なので、

《女は男の後ろで慎み深く、少し馬鹿なくらいが丁度良い》の考えを当たり前として、私を花嫁修業の一貫としてだが女学校に入れてくれた事も、良い縁談を必死に探していることも。

だが、それはあくまでも、【第三者目線】での話であり、私は、父母を恋しいとは思わない。だって両親の事は、【記憶】ではなく【記録】に置き換わってしまったのだから。

そして、友達についてだが、正直に言うと「大正時代のワタシ」には友達がない。両親とは違い、ワタシは日本人女子にあるまじき女だった。

だから《女は家庭に入り、夫と夫の両親に仕え、子をもうけて育てる》という一般的な感覚を拒絶していた。

もちろん、表向きは周りに合わせていたが、女の感というやつなのか、

ワタシには恋愛や婚約の相談をする人はいなかった。
必然的に女子グループから外されたワタシを構う同性も異性も
なかった。

「なんだ…、人間でも鬼でも私は1人じゃん。」

ふと、そう結論付けた結果、人を喰わずとも生活できる私の身体つ
てめちゃくちゃ便利じゃね? と思い、今はすっかりこの身体を受け入
れた。

「それにしてもこの山は本当にいい!!」

都会では味わえない綺麗な空気と水。

私は基本、夜間は地下で過ごすし、昼間なら鬼には会わない。

鬼殺隊と鉢合わせても、藤の木に少し穴を開けて作った空間に人形
を複数個、地下にも人形を置いている。

自分で実験したけど、私本体を何回か傷つけたけど、栄養素が足り
なくなると、人形の方が消えて私に吸収された。

つまり仮に私の首を切ったとしても、エンム? のように死んだりし
ないということだ。

「それにしてもこの山…やけに藤の木が多くないか?」

私が生活空間とする山から少し離れた2山越えた先にある山の中
だ。

鬼にとって弱点の一つでもある藤の香り。

藤の木自身も太陽がよくあたる所を好む性質であり、水を多く吸う
植物だ。この山はどちらの要素もあるから繁殖するのも分かる。

「これは、伐採後?」

刃物で切ったみたいに見える切り口がある。

つまりこの山は、誰かの所有物ということか…ん? つまり

「まずい…人にあったら」

「Hey! beautiful green hair Girl!」

この言語は英語! えつと、鬼とは思われていないな。

「Thank you! You are name?」

とりあえず、相手の名前でも聞かないと。

「…もしかして…日本人？」

日本語！少し古い言い方だけど、雇われ外国人なのか？

「ええ、このような髪と目ですが、日本人です。」

「Oh！コレはシツレイイタシマシタ！ワタクシ、この山のモチヌシデース！」

やたら整った藤の木、発音的にはアメリカ英語に近い。まだまだ排他的な人が多い時代でありながら、金髪碧眼の異人が持つ山。

それに…あの服は確か、

「カソック…ですね。カトリックの宣教師の方でしたか。これは失礼しました。それと、わざと発音を外さずとも結構です。私はキリスト教に偏見はもっておりません。」

そう言うと、宣教師さんは、

「Oh, my gosh!!この服をカソックと知っているとはい！それにワタシを見て二度見しない人は、ヨコハマの日本人以外にはいませんでした！」

あなたの容姿にその態度、ますます気になる人です！」

しまった！東京だから外国人くらい慣れていると思って、話してし

まったが、元々この時代の日本人は少し前までは、鎖国により異人を見る機会などまづない。確かに、横浜などの港町でもないと思つた目に釘付けになるだろう。

前世とこの世界は、似ているが根本が違う。同じ歴史を歩んでいると言ひ切れぬ。少しづつ誤差が生じていてもおかしくない。

私の世界では、大正時代プロテスタントに遅れて、カトリックが入ってきた時代だった。明治期に一時的にキリスト教が流行つていたはずだ。

もし、前世と同じ歴史を歩んでいるとすれば、「カソック」と言う言葉だけで、ここまで興奮しないはずだ。

もしや…、鬼の存在で、民衆が神を信じないから？

それとも、明治期に上流階級でキリスト教が流行らなかつたのか？

「ーさん、」

「お嬢さん！」

考え込んでしまったのだろうか？ 宣教師さんが私の肩を掴んでいゝる。

「お嬢さん、アナタはどうやってこの森に入ったのデスカ？」

あつ…、鬼の体力で山道を歩いてきてしまった。

「この山は散歩道以外は、装備を整えないと登れない崖が多いです。なのにあなたは、そんなボロボロの服と裸足で、私と会つた。私はずーと散歩道を歩いていました。なのに、あなたとはすれ違つていない。」

「それは…」

言ひ訳の言葉が出てこない。

「私は神職者です。フホーシンニューしたあなたを捕まえる権限はありません。ですが、聞かせてください。アナタは…何者ですか？」

この人のイントネーションには、変なところがない。一部外れているが誤差範囲内だ。つまり、普段から日本人と過ごしている証拠。

白豪主義の人ではない。この人は信頼できる。

「懺悔したいです。教会に連れて行つてください、私の話はそこで…」

懺悔せよ、さすれば道は開かれん。

バサーー

ひと風が吹き、藤の花が揺れた後、

「懺悔…ですか。ならば、この場は相応しくありませんね、こちらに。小さいですが、簡易の教会があります。」

一瞬、スン…と真顔になり、すぐに聖職者の顔になって、私を道案内してくれた。

コツカツ

コツカツ

コツン

カタン

石畳の上をブーツで歩く神父さんの足音だけが響く。（私はハダシなので足音しない）

「私が主に生活している場所ですが、中は教会になっています。」

建物自体は寺だが、中には十字架がかけられ、赤いランプがふわりと光っている。それに小さいが中央にはステンドグラスが飾られている。

「随分とまあ…本格的に作られましたね。」

「ははっ、本国には及びませんが、これでも兄の伝を使って教会らしくしているのですよ。」

机や椅子は年季がある。ゴシック様式ではあるが、逆にそれが寺と上手く同化していて、デザインの違いによる違和感をなくしている。

「本物には及ばない？サン・ピエトロは壮大ですが、アレはもはや教会ではなく、芸術作品ですよ。本来の教会はこのくらい敷居が低い方がいいのでは？ましてや布教に来たのならば。」

「これは、一本取られましたな。確かに本国に寄せようと思ったのが間違いだったか…。」

私の発言で、ぶつぶつと考え込んだ神父さんを尻目に私は久しぶりの教会の椅子に座った。

あー、懐かしい感覚。この固くてゴツゴツした手元に、2人がけの椅子。前世でミサの時に座った学校の椅子を思い出すなぜサン・ピエトロ大聖堂を知っている？

ん？何かいったかな？

「お待たせしました、では懺悔をお聞きします。」

芯が通った声、この人が紛れもなく本物の神父であると感じる。ならば此方も、嘘はつけない。

「先ほどの道中、…あなたが仰った通り、私はあの散歩道を通っていません。そして…私のこの髪も本来の色ではありません。」

「そして？」

「私は…人間ではありません。」

言ってしまった。

「元々ですか？」

「いえ、日付は曖昧なので分かりませんが、大体一月前までは、普通の人でした。」

「なぜ、人間をやめてしまったのですか？」

「私の意志ではありません。人間を【鬼】にする存在に会ってしまったが為に、人間をやめさせられたのです。聞いたことはありませんか『夜には鬼が出る』と。」

この世界も元の世界と同じく、キリスト教の宣教師は、かなり苦勞しているはずだ。ましてや東京なんて本物の鬼が出るんだ。前世以上に布教には困難がつきまとう。

「鬼が出る…ですか。確かに、先に布教のためにこの国に来日したプロテスタントの宣教師の手記にありましたね。」

「他の都市では聞かないが、東京では布教の際に、市民から『神が正しいならば、なぜ鬼などを作ったのだ。完璧ならばそうならないだろう。』と言われ市民階級からは、キリスト教が受け入れられない。特権

階級はそこまではないが、彼らの目的は学術的な興味で話を聞きにくるので、布教は困難である。」

と。そして、その話をするアナタはそのオニと呼ばれる存在なのですね。」

さすが、布教に来るほどの行動力を持つ人、聡明さや懺悔相手が人間でなくても動じない。

「はい…、幸い私は人を食い殺す前に、人喰いが原因の病気を知っていることで、人間を食べたい欲求を抑えることに成功しましたが、それもまだ不完全です。今は幼虫や太陽、水による補給で抑え切っていますが、いぎ、怪我をした際に、人間を見て襲わないと言い切れません。」

「疑うわけではありませんが、オニである証拠はありますか？」
「だろうね。私でも同じこと思う。だから、
ダンッ

「何をしているのですか!!」

木の枝を鋭利に加工したお手製ナイフで、自分の腕を切った。

「見てください、これでも私が…人間だと?」

回復速度はかなり遅いが、雑魚鬼でも鬼は鬼。切り傷くらいなら直ぐに治る。じわじわと傷口が塞がり、傷跡なく治ったのを見て、神父さんは顔を真っ青にさせる。

「あつ…あつ…」

ただでさえ慣れない土地に、思うように布教できない苦悩を背負っている人に、さらなる負担をかける気もなかった。だけど私は知って欲しかった。1人は辛すぎる。でもこの反応、やはり懺悔でも言っていない懺悔ではなかった。

「ごめんなさい、sorry…天と地と精霊のみ名において誓います。二度と教会には近づかないと。懺悔を聞いてくださり、ありがとうございます、Thank you very much、…それではさようなら」

「Please wait… Please wait!!お待ち下さい!お嬢さん!」
「えっ?」

まさか、呼び止められるとは思わなかった。

「たとえば、たとえばアナタが人の子でなくとも、ワタシは…私は Clergy of the church 教会の聖職者です！人と共に生きようと願うヒトを見捨てることなどできません！

オニについては一通り聞いています！

でも、でもアナタは私に襲い掛からなかった！それが証拠です！

ワタシは…私は、アナタを信じます」

予想外の言葉だった。

相手は特に厳格なカトリック教会所属だ。

よくて見逃し、悪くて十字架や聖水を投げつけるだろうと思っていた。

まさか…こんな姿になっても、受け入れてくれる人がいるなんて思ってもみない…

「ナミダ…流れています。」

その言葉で、感情が決壊した。

「寂しかった…」

「そうですね。」

「鬼だから、おちおち人にも会えない。」

「教会の門はいつでも開いています。」

「ゴシック様式の椅子、ステンドグラス…この教会は、（前世の高校を思い出せて）懐かしい。」

「いつでも来て下さい。人を傷つけないうちは、この教会はアナタを拒みません」

「ありがとう…」

どことなく懐かしい感覚を覚えて、泣いた日。

日が落ちない内に神父さんにお礼を言った後、生活空間に帰った私は気づかなかった。

近代化が進んだとはいえ、富豪でもない女が、【サン・ピエトロ】や【ゴシック様式】という単語、【懺悔】などのキリスト教関連の言葉を当然のように話すこと。英語をある程度、理解・話せることが異常であるかと言うことを。

オニの少女と私

私は、ウィリアム。ウィリアム・ウイステイリア
イエズス会所属の宣教師です。

最初はヨコハマで布教をしようと考えていたのですが、貿易港の町であるのも相まって、私と同じ考えを持つ同業が多く、仕方なくアサクサ方面に移動しました。しかし、ここで思わぬ事態が発生しました。

「もし、あなた」

「ヒツ！異人！」

見た目で逃げられ、ならば強面ならいけるかと声をかけてみれば、
「あの…」

「ああ、耶蘇教のやつか、鬼を殺すのに一つも役に立たたねえ教えなんぞ聞く暇はねえ。」

「おい、不死川、次の任務は俺様と合同だ！足引つ張んなよ」

オニなる聞くとところ、こちらで言うドラキュラのような存在がいる事から、最初から聞く耳も持たない者

「神がいるならば…なぜ…姉は…殺された…？」

黒髪に青い目の物静かな少年からは、そう言われ、
「うむ！完璧な存在などこの世にいるわけがないな！」

やっと、話を聞いてくれる人に会ったと思ったらバツサリと言いつけられ、

「信用しない、信用しない、鬼も人間も大っ嫌いだ。」

と一緒にいた包帯を巻いた子供にも言われ、

「ナム…ああ、哀れだ。このような国で布教などと…」

ジャラジャラと丸い飾り（確か仏教の道具だった気がする）をつけた盲目の男性はそう言いながら去っていった。

「そうですねー、異国の道具には興味があるのですが」

「まあ！国を超えてまで教えを説くなんて、素敵だわ！」

奇抜な髪色のレディ達は、道具にしか興味を示さない。

カツンカタン

ワタシは、宣教師として駄目だったのか？せつかく兄の取引先であるウブヤシキさんから、土地を借りられたのに、未だに1人もキリスト教に興味を持ってくれる人が現れないなんて。

「帰国も考えるべきか…。ん？あの色は？」

緑の髪？この国には奇抜な髪色の人が少数いるのは把握している。髪色もさることながら、傘のように髪を固めるなんて、なんと奇妙な…。そもそもこの山の現持ち主が《異人》であると分かっているのか？

「Hey! beautiful green hair Girl!」

奇抜な髪色の人は、ワタシの見た目で驚く人はいなかった。だが、

「Thank you! You are name?」

日本語の発音に引つ張られているが、英語を話す人は初めてだった。その上、

「【懺悔】したいです。」

懺悔、日本語だが、ワタシの服装をすぐに【カソック】と見抜き、ワタシの所属がカトリックであると把握していた。

日本人はキリスト教を知っている人は多かったが、カトリックとプロテスタントの区別を明白に理解している人はワタシの聞く限りは、ヨコハマの日本人しかいなかった。それに彼女の服装、土汚れが目立つ上に、切り裂かれた後、散歩道で会わなかった事からあの山道を歩いて来たのは明白。

さてさて、この人は何者なのやら？

教会（自宅）についたが、問題はここからだった。

「随分とまあ……本格的に作られましたね。」

簡易的な教会を見て、彼女が最初に言った言葉だ。【本格的】と言うことは、つまり本物を見ていなければ言えない言葉だ。だが、トウキョウにある教会のほとんどはヨコハマにある。彼女のような目立つ存在が一度も噂にならないなんて有り得ない。つまり、彼女はヨコハマ以外で本物の教会を見たということ。……少し、カマをかけてみるか。

「ははっ、本国には及びませんが、これでも兄の伝を使つて教会らしくしているのですよ。」

あくまでも、本国だ。バチカンとは言わない。

「本物には及ばない？サン・ピエトロは壮大ですが、アレはもはや教会ではなく、芸術作品ですよ。本来の教会はこのくらい敷居が低い方がいいのでは？ましてや布教に来たのならば。」

やはりだ……。彼女は、カトリックⅡバチカンだと理解している。

そして……本来なら一般人が入ることが許されていない、サン・ピエトロ大聖堂の中を知っている。

「これは、一本取られましたな。確かに本国に寄せようと思ったのが間違いだったか……。」

室内に入ってから、彼女の髪は大きな傘から、ストレートの長髪になった。もう……認めよう……。

彼女は……人の子ではない。

そんなヒトから懺悔を聞く機会がうまれるなんて、神は一体、矮小なワタシ如きに何を求めているのだろうか。

「お待たせしました、では懺悔をお聞きします。」

ロザリオを握る。正直かなり怖い。

「先ほどの道中、……あなたが仰った通り、私はあの散歩道を通っていません。そして……私のこの髪も本来の色ではありません。」

「そして？」

ある程度予想はついていた。

「私は……人間ではありません。」

いろいろと聞きたいことはある。でも一番知りたいのは、

「元々ですか？」

回答次第で、国に報告をしないと。

「いえ、日付は曖昧なので分かりませんが、大体一月前までは、普通の人でした。」

そうなのか？だが、嘘をついているようには思えない。

「なぜ、人間をやめてしまったのですか？」

「私の意志ではありません。人間を【鬼】にする存在に会ってしまったが為に、人間をやめさせられたのです。聞いたことはありませんか『夜には鬼が出る』と。」

彼女の目：猫のような縦に線が入った瞳。確か：そういう目は夜行性の生き物に多いと習ったことがある。この国の人に聞いた《オニ》という生き物の特徴に当てはまる。

まさかと、かつてのプロテスタントの宣教師の手記について聞いたら当たっていた。

「はい…、幸い私は人を食い殺す前に、人喰いが原因の病気を知っていることで、人間を食べたい欲求を抑えることに成功しましたが、それもまだ不完全です。今は幼虫や太陽、水による補給で抑え切っていますが、いざ、怪我をした際に、人間を見て襲わないと言い切れません。」

人間を喰うことでおこる病気？私はそんなのは知らない。
「疑うわけではありませんが、オニである証拠はありますか？」

彼女は私に嘘をついたところで何かの得を得られることはない。だから最初から疑うことはしないが、証拠がなければ、話しにならない
ダンッ

「何をしているのですか!!」

つい叫んでしまったが、彼女は木の枝を鋭利に加工した手製ナイフで、自分の腕を切った。

「見てください、これでも私が…人間だと？」

彼女が自ら傷つけた跡を私に見せる。じわじわと傷口は塞がり、かさぶたさえ出来ずに治ってしまった。

「あつ……あつ……」

うそ……幻覚……幻影……そう思いたかった。

だが、この心臓をつかまれたような息苦しさと、ロザリオを握りしめすぎて少しだけ、手のひらが出血しているのを見て、コレが、この現象が、現実であると物語っていた。

Japan……日本……、この国が《宣教師の墓場》と呼ばれている本当の理由は……

「gomen nasai sorry……天と地と精霊のみ名において誓います。二度と教会には近づかないと。懺悔を聞いてくださり、ありがとうございます、Thank you very much、……それではさようなら」

黒髪に茶髪？それにあの瞳は……

「Please wait…… Please wait!!お待ち下さい！お嬢さん！」

自分でもなぜ引き止めたのか分からなかった。だけど、あの一瞬の姿、あれは確かにみた！

「えっ?」

彼女の姿は、今は緑の髪にグリーンアイ、縦長の猫の目だが、あの一瞬は確かに人の子だった。

「たとえばたとえばアナタが人の子でなくとも、ワタシは……私はClergy of the church 教会の聖職者です！人と共に生きようと願うヒトを見捨てることなどできません！」

(それに……)

「オニについては一通り聞いています！

でも、でもアナタは私に襲い掛からなかった！それが証拠です！

ワタシは……私は、アナタを信じます」

いつの間にか、神父にあるまじき感情論で話してしまった。

懺悔とは……あくまでも聞き方は懺悔者から意見を求められない限り、話さないのが基本である。ましてや、相手からすれば私は他人。

この言葉は寧ろ重荷になる。でも、彼女は、

「ナミダ…流れています。」

絶望でも、憎しみでもなく、ただただ泣いていた。

そして、ポツポツと独り言を言い出した。

「寂しかった…」

「鬼だから、おちおち人にも会えない。」

「教会の門はいつでも開いています。」

そうだ…こういう人を救うためにあるのが、教会だ。

「ゴシック様式の椅子、ステンドグラス…この教会は、懐かしい。」

「いつでも来て下さい。人を傷つけないうちは、この教会はアナタを拒みません」

何故、この椅子や机が【ゴシック様式】であると知っているのか？

「ありがとうございます…」

聞きたいことは山のようにある…、でも、彼女のこの言葉はどことなく澄んでいて、居心地がいい。

彼女は…悪しき存在ではない。

その後、数日に1回の頻度で、彼女は遊びにやってくるようになった。

そして、彼女は《鬼殺隊》についても多く語った。

「ウィリアム神父さん、タンポポです。天ぷらで揚げると美味しいですよ。私の住む山に多く咲いていたので食べてみますか？」

「今のところ鬼殺隊には会っていないけど、もし遭遇したら私は死ぬでしょう。鬼は人と異なり死体が残ることはありません。もし、私が一ヶ月以上こちらに来なくなったら、死んだ者として扱ってください。」

「えっ？鬼殺隊についてですか？ああ、そうですね、政府公認組織ではないので聞くことはないです。あなたの反応が普通ですよ。」

「鬼殺隊とは、産屋敷という公家、あー、貴族が千年以上に結成した鬼を狩る為の組織です。《鬼を殺す軍隊》と書いて鬼殺隊です。」

「といっても、本物の軍隊のように認められているわけではありませんが。」

「なぜ産屋敷が鬼殺隊を維持しているのか？ですか。」

「まー、わっかりやすくいうと自分の為なんですよ。表向きは「鬼による悲劇を防ぐ為」とか「弱き人を守る為」とか立派な大義の名の下にやっていますが、そもその鬼による悲劇の元凶って、産屋敷なんですよ。」

「ほら、前に私が懺悔の時に言った《人を鬼にする存在》は実は産屋敷家の先祖である、鬼舞辻無惨なんですよ。」

「だから、産屋敷家の人間は長生きできない、若いうちに死んでしまう。でも、元凶である鬼舞辻無惨を殺せば自分達一族の寿命が伸びるのではないかとね。」

「そう言っで一息ついた彼女は、「はー」といい、「勝手なものですよね。柱とか言われる上級幹部なら知っていてもおかしくないけど、ほとんどの鬼殺隊関係者は鬼舞辻無惨が産屋敷家の先祖で、自分達は、貴族のお家騒動に巻き込まれて家族を奪われている。なんて…知らないんでしょうね。恐らく知っていたら鬼よりも産屋敷へ、ヘイトが集まって、あんなに組織内で和気あいあいと付き合えるわけじゃないですし。」

『君はキサツタイが嫌いなのかい？』

彼女が話す鬼殺隊の内部事情に関しては、疑っていない。私が鬼殺

隊を嫌つても、鬼殺隊も産屋敷も支障が出るわけがないからだ。彼女もただの神父一人が騒いだところで鬼殺隊の基盤が崩れるとは思つてもいない。なんと云つても彼女の態度や言動が馴れ馴れしいから。「いえ、鬼殺隊の人はそれぞれ立派な人だと思つていますし、辛い過去を背負つていながら、人を守りたいと願い、行動に移せる高潔な人が多いと思つています。勿論、組織だから【金目当て】【名誉欲】に取り憑かれている人もいますが、本当の意味で腐つた人はいないと思ひますよ。」

『根拠は?』

鬼殺隊という組織は嫌いだが、鬼殺隊関係者は好ましい。と言う事か。

「本当に金が欲しい、世間に認められたいなら、最初から鬼殺隊は論外です。経歴や出生を度外視する組織は、それこそ孤児や、やましい仕事をしていた人には最適ですが、それよりもデメリットが大きすぎます。」

考えてもみてください。

明日の命の保障がない、

仮に戦死しても世間はそれを知ることはないし、身内に金が入るとは限らない。

契約書を交わしても、相手は個人であり政府に認められていない武装集団、わかりやすく言うと【マフィア】と同じです。

ただの親なし子で男なら軍人になった方がマシです。給料は鬼殺隊よりも劣りますが、なんと云つても皇軍、世間に堂々と自分の職業を言えるし、実力を出せば良家のお嬢さんと結婚も夢ではありません。」

確かに彼女の言い分は、最もだ。どんなに給料が高くても、それよりも仕事の量が多くて、まとまった休みは取りづらく、いつ死んでもおかしくないならば、軍人の方がマシだろう。少なくとも名誉は守られる。

「女ならばどうなるか?と仮に問われても【分からない】としか言えません。この時代、まだ女性が経済的に自立することが困難であり、誰

かの妻になるのが一般的な就職先とされています。ですから《仕方なく》鬼殺隊しか選択肢がない人もいたでしょう。もしも、鬼殺隊が【完全な志願兵】で占められた組織だったら、私も鬼殺隊を悪く言うことはなかったでしょうね。」

『キサツタイに大きな欠点があるからこそ、君はそこまで組織を嫌うのですか?』

「はい、そうです。ウイリアム神父、これから話すのは現在も行われている《鬼殺隊に入る前の試験》の一つです。」

《前》を強調して一息ついた彼女は、話し始めた。

「その試験の名は【最終選別】鬼が生け獲られた藤襲山と呼ばれる山で7日間生き延びれば合格です。」

ちなみに生き残ればいいので、他の試験者を見殺しにしてもOK、助ける助けないは個人の選択。そして、大事なのはこの試験の死亡率、

大体20人が参加して合格者は5名。それだけでも人命軽視もいところなのに、この試験の一番の胸糞悪いところは、産屋敷耀哉：現在の鬼殺隊当主が、『5人も生き残ったのかい、優秀だね』と言ったこと。

ダン

『ヒッ!』

5人もじゃない!5人以外殺したのはお前だ!!!

産屋敷は呪われて正解だ!!!鬼舞辻無惨の呪いが産屋敷家を蝕む?

本気でそう思っているのか!お前たちを呪っているのは、【鬼】ではない!【人の子】だ!!」

怒り心頭とはまさにこの事を言うのだろうか。

彼女は基本的には明るい子だ、昼間を愛し、布教が思うように進まない私の現状に同情し、日本人がなるべくキリスト教に親しみやすいようにアドバイスもしてくれる。

「あつ……ごめんささい……神聖な教会で怒鳴ってしまって……」

今もそうだ。彼女は異人である私の考えを否定しないし、度を超えそうにならない限り尊重してくれる。教会の道を清掃するのも率先

してやってくれる。そんな人がここまで怒るとは…、いや、気持ちはい分かる。

『あの…その試験って、試験であっていますか？死者が出る試験なんであり得ません。処刑の間違いでは？』

彼女がいくら正確な情報を持っていても、間違いの一つや二つはあるだろう。公開処刑を試験と勘違いしているのではないか？

「いえ、私もそう思いましたが、間違いなく【試験】なんですよ。

全く、さすがは血縁というべきか…鬼舞辻無惨と対して変わらない本性です。」

彼女は、情報元は分からずとも鬼殺隊そのものを恐れている。

間違った情報かと疑えば、何度でも確かめるだろう。

彼女には身代わり人形があるし、藤の花は効果がない、実際にそのフジカサネ山に行つて確かめたのだろう。

ああ、それは、

『なんと…非人道的なことを…』

「ほんとですね、【役に立たなければさつさと死ぬ】と鬼殺隊に入る前で、自分の所属でもない未来ある若者を殺す産屋敷と、【自分の意に沿わぬ者は死ぬ】の鬼舞辻無惨。一体、どこに違いがあるのやら。」

ああ、なんと残酷な人たちなんだ。知らぬとはいえ、そんな人から土地を借りて、教会を開いた私もまた、【オニ】のようではないか…。

「あの…ここに！緑の髪を持つ昼間しか会えない人がいると聞いたのですが！」

ハオリと呼ばれるジャケットにカタナという剣を帯刀した、おでこ

の横に赤いアザをつけた黒髪の子どもが教会の門を叩いた。

善逸、とんでもねえ音を聴く…の巻

炭治郎 side

今日は久しぶりの休日、善逸が唐突に言った会話から浅草に行くことになった。

「ええー！ありえん！ありえない！こんなかつわいい禰豆子ちゃんに着物ひとつも買わないなんてえー！」

「うっせえぞ！紋逸！」

「そうは言っても、うちは貧乏だから着物は家族みんなで使いまわしているし…」

「それは、鬼殺隊に入る前でしょ！今は給料もあるから既製品の着物くらい新調できるでしょお！何も布から帯まで全て新調するわけじゃないのに！」

「それも…そうだなあ。」

確かに禰豆子も一応、あの裁判から鬼殺隊公認になり、禰豆子分の給与も入り出した。着物一つくらいなら買えるよな、それに元々禰豆子には綺麗な着物を買いたかったし。うん、

「じゃあ、みんなで呉服屋に行ってみるか？」

「やったー！じゃあ、じゃあさ！俺のおすすめの店があるんだ！そこに行こう！女の子の着物の柄がたくさんあるんだ！」

「でもよお、禰豆公は鬼だろ。服合わせとかいうやつ、出来るのか？」

「大丈夫、大丈夫！大体の身長を言えば、店員さんがおすすめを教えてくださいからさあ！まあ！禰豆子ちゃんの顔を見せられないのは勿体無いけどね！」

そんな会話をしたことで、俺たちは浅草にやってきた。

そうしてついた善逸おすすめの呉服屋。

「いらつしやいませ、今日はどのような着物を？」

善逸は昔ここにきたことがあるらしく、店員さんも慣れた手つきで可愛らしい着物の柄を見せていった。

「こちらは輸入物の西洋の柄を取り入れた、お着物とドレスを半々にした物です。」

ドドンと大きな薔薇の花をあしらわれた白い柄と、上は着物だが、下はスカートになっている物、でも、

「うーん、妹には派手すぎるかな」

「俺は可愛いと思うけど、炭治郎がそういうなら、店員さん、他には？」
「ならば、こちらはどうか？黒と言われれば地味と思われるかもしれませんが、レースを入れたことにより、逆に華やかに見えます。女学校の生徒さんがレースだけを買うこともありますよ。」

掛襟や襟部分を細やかな白いレースを入れて、レース単品の柄の説
明をする店員さん。

「いや…、レースの素材が高いな。」

「まあ、これ、輸入物だからねえ」

「予算内に収めたいとのことなので、いっそ、洋服もどうでしょうか？
お客様方の予算内なら女学校のセーラー服なら3着は買えますよ。」

「いいねえ炭治郎、禰豆子ちゃんも動くし、鬼殺隊服も洋服でしょ。」

「洋服…か。」

確かにいいかも、着物は禰豆子が人間に戻ってからでも遅くない。
でも、それなら鬼殺隊服の方がいいよな？

「と、とりあえず、レースだけをください。」

着物はダメでも、髪飾りくらいなら蝶屋敷の子なら、お願いすれば作ってくれるだろう。すみちゃん達へのお土産もコレでいいか。

「はい、お買い上げありがとうございます。またのご来店をお待ちしております。」

「よし、帰ろっか、善逸、伊之助。」

「えー、まだあるのにい！」

「おう！帰るぞ子分ども！」

ドン

「オウ！」

「うわっ！」

そこに立っていたのは、大きな異人だった。

「コレはシツレーシマシタ。オケガはありませんカー？」

「いえ、こちらこそ前を見ていなかったです。すみませんでした。」

「あつ！ウイステイリアさん、ご予約の品、完成しましたよ。」

「アリガトーゴザイマス」

それから、俺たちは浅草の町で、食事をとっているところ、善逸だけは心ここに在らずの顔でいた。

「さあ善逸、蝶屋敷へ帰ろう……か。」

「た、た、炭治郎、あの人、」

「どうしたんだ善逸！」

善逸が怯えている？あの人？呉服屋の人か？それに、決心の匂いがある。でも、都会育ちの善逸が異人に怯えるとは思えないけど、

「炭治郎……あの人、微妙に……鬼の音がする。」

「えっ？」

鬼の音？でもあの方は昼間に呉服屋に入っていたんだぞ、それにあの人からは濃い藤の花の香りがした。

「おっ？あのイジンとかいう奴、鬼なのか？」

もし…、あの人が太陽と藤の花を克服していたら、大変な事になる。
「微妙…微妙に違うんだ。人間の音が大きいけど、ふと思いついたかのように、鬼の音がするんだ。」

一体、どうということなんだ!?

「善逸！それは禰豆子とは違うのか？」

もしかしたら、禰豆子のように人を食べない鬼かもしれない。

「うおっ！びつくりした。違うよ、禰豆子ちゃんは常時鬼の音がするけど、あの異人さんは、普段は人間の音、時々鬼の音って感じで、音の入れ替わりがあるんだ。俺たちとぶつかった時は鬼の音がしたけど、店員さんと話している時は人間の音がしていたんだ。」

「んで？結局、そのイジンは鬼なのか、人間なのか？」

鬼舞辻は人間に擬態していた、あの異人さんが鬼で人間に擬態していたとしてもおかしい話ではない。だが、鬼舞辻からは、とんでもない悪臭がしたけど、あの異人さんは寧ろ藤の花のいい香りがしていた。

「人間…だと、思う。店員さんへ向けた音は穏やかだったし、仮に鬼だったら、あんなに目立つ容姿にはしないだろうし…。炭治郎、炭治郎どうしたの？」

あの人は、異人な上に男性なのに、女性物を多く置く呉服屋に来た。

と、いうことは、あの人には妻子がいる。車でも人力車でもなく徒歩で来ていたから、家も浅草の近くだ。

「善逸、伊之助！先に帰ってくれ！俺はもう一度、呉服屋に行ってくる！」

「おい！待てや！子分」

「えっ？ええ！…まあ、大丈夫そうだけど。」

そんな2人の会話を聞く暇なく、俺は呉服屋に入った。
「すみません、」

「おや？あの時のお客様ですね、お忘れ物でしょうか？」

「いえ、あの：俺たちの後に入った異人さんには、奥さんか娘さんでもいらっしやるのでしょうか？」

もしかしたら、妻子が鬼の場合もある。でも、

「奥さん、娘？いえ、あの方はキリスト教の宣教師なので、妻子は持てない立場ですよ。」

「えっ！でも、確か女物の服を持っていましたよね？」

予約の品と言っていたし、妻子もいない人が頼むとは思えない。

「ああ、それですか。ウイステイリアさんのお手伝いをしている、別の異人の女性の物ですよ。一度教会に行った時に会った人でしてね、緑の髪に緑の瞳を持つ、日本語が得意な人で、昼間は教会に、夜間はウイステイリアさんとは違う自宅に帰っているそうですよ。今日もできれば来たかったんですけど、予定が合わずにウイステイリアさんが代理で受け取りに来たそうです。」

「そうですか…」

この時点ではその女性が鬼なのかが、分からない。緑の髪：緑の瞳：でも、異人ならおかしくない色合いなのかもしれないし、店員さんは昼間に会っている。

「あの、そのウイステイリアさんの教会を教えてくださいませんか？」

「もちろんです。浅草の外れにある藤の木が多い山の散歩道を通った先に、教会があります。ウイステイリアさんは日曜日ならそこにいますよ。」

「はい！ありがとうございます！」

「えっ？着物？いや、これは修道服、どういうことですか、ウイリアム神父さん！」

「どうもこうも、あなたはアサクサの人と会ったでしょ。あの時、アサクサのショーンンになんて言われたか、分かりますか？」

『綺麗なお嬢さんですね、羨ましい限りです。』……よ。」

「あつ……」

そうか、あの時は客人が来たから、神父さんからカソックを借りて、丈を無理やり合わせた服で対応したんだった。（隠れるほどの時間がなかった）確かにカソックを知らない人から見たら、男物、女物の区別は付きづらい服だ。親子でペアルックしているように見えてもおかしくない。

私も緑の瞳に緑の髪、透き通るような……を通り越して死人のような白い肌だ。日本人に見えた方がおかしい。ならば、必然的に親子判定をくらうだろう。

「すみません…、外見による誤解を甘くみていました。」

「いえ、こちらもヒイキにしているショーンンが来ることを想定せずに、あなたの外見と服を見過ごしていました。それに、布教のお世話になっていながら、あなたに服をプレゼントする考えさえ、浮かびませんでした。この修道服と着物はそのお礼です。受け取ってください。着物の方は、汚れに強い麻の布です。」

「それは、助かります。ありがとうございます。では、教会では修道服で過ごしますね。」

「それをお願いします。ところで、洋服も着れるのですね？」

「はい、一応ですが、分からなければ聞きます。」

本当に助かる。いや、鬼になってから服をどう調達すればいいのかわからなかったんだ。だから、ある程度土汚れをおとした最初の服をずっと着続けていた。でも、それも限界に近かった。

そこに、麻の布で作られた黒い着物と、緑の帯だ。使い回しできるように3着もある。これは助かる。

「そうだ、今日、呉服屋でキサツタイの子どもに会いました。」

「えっ！それ大丈夫だったんですか？」

もし、あつたのが柱クラスだったら、鬼の気配とかいう第六感で、神父さんに違和感を覚えるかもしれない。

「はい、相手は14か15くらいの子どもでしたし、店員さんに聞いたら妹への着物を探していたそうですよ。結局、レースだけ買ったそうです。」

「そうですか…、それは、よかった。」

珍しい髪色だったら、神父さんも言うだろう。この様子なら村田さんあたりの鬼殺隊士だろうな。

そう思って油断したのが、いけなかったのだろうか？その会話から数日後、

修道服を着て、外の掃除をしようとした時に来客があつた。

コンコン

「私が出るので、あなたは後ろにいてください」

「はい、なんででしょうか？」

「あの…ここに！緑の髪を持つ昼間しか会えない人がいると聞いたのですが！」

あの時の隊士はお前か、竈門炭治郎。

あなたの希少価値

「あの……ここに！緑の髪を持つ昼間しか会えない人がいると聞いたのですが！」

後ろに下がっていた私にも聞こえるほどの大声。

でも、この声ではつきりと誰が来たのかが分かった。

「それが何か？」

あつ、ウィリアム神父、素がでてるよ、素が。いつもの下手くそな日本語を話す陽気な異人の仮面が外れてしまっている。

「えっ……あつ……」

私から見てもウィリアム神父が警戒しているのが、見て取れる。

ましてや、炭治郎は匂いで感情が読み取れるのだ。私以上に神父さんが不快感を覚えている事がわかったのだろう。言葉が詰まっている。

でも、ほかの鬼殺隊士ならともかく、この人は、

「ウィリアム神父、この人は「大丈夫」な人です。」

「レディ……」

その言葉の後、神父さんは静かに私を守る手を下げてくれた。

でも、最後の確認をしないと。

「はじめまして、【緑の髪の異人】です。あなたの名前は？」

「はじめまして！竈門炭治郎と言います。」

うん、さすが少年漫画の主人公、太陽のような人だ。

「少しお待ちください。」

「ウィリアム神父、彼は大丈夫です。教会に入れてもいいですか？ Father William, he's fine. Can I enter the church？」

「レディ、一体どういう風の吹き回しですか？あれほど鬼殺隊を警戒

していたのに。Lady, what kind of wind
is blowing around? Even though
I was so wary of the demon squad.

「彼は大丈夫なのです。」

異人のふりをする際、どうしても外せない要素が言葉だ。日本語ばかり話していれば、いくら見た目が異人でも、『もしかしたら…』なんて思われかねない。だから外国語を特に英語の日常会話はスムーズに出来る様になるのが急務だった。幸い、ウィリアム神父は日本語はほぼ完璧。

英語万年オール2だった私でも、ウィリアム神父とのマンツーマントレーニングで日常会話なら出来るようになっていた。

「…分かりました。君、いや、炭治郎君か？その物騒な武器を持ち込まないなら、教会に入ってもいい。」

「はい！ありがとうございます！」

そう言つて、なんの躊躇いもなく日輪刀を教会の扉にたて置いた。こういう行動が主人公が主人公たる所以だよな。

教会の椅子に座つて、最初に言った言葉は、まあ予想通りすぎた。

「あなたは鬼なのに、何故藤の香りを纏っているのですか？」

「私はそんなに藤の香りがするのですか？ウィリアム神父、私の体臭はキツくないですか？」

「いえ、特段強い香りとは思いませんが？」

私が鬼になつて最初に食べたのは藤の花だ。だから藤の香りが体

臭になっけていてもおかしな話ではない。でも、それよりも気になつたのが：

「その件は後で話します。しかしこちらの質問から先に答えて下さい。なぜ…ここに来たのですか？日輪刀を持つてきている時点で、私が鬼であることを前提にしていますよね。緑の髪、緑の瞳だけなら、柱の中にも似たような容貌の人がいます。ましてや、私は「異人」特段珍しい事ではないと思うのですが。」

そうなのだ。柱の面々は、日本人離れした容姿に髪色、瞳の色も異なる。時間軸は分からないが、日輪刀の鏢が煉獄杏寿郎の物でない以上、現在血の匂いがしないので無限列車前、柱合会議の前の軸なのか？ならば、念の為に來ていてもおかしくない。

「あ、それは、善逸、同期の友達が、そのウイステイリアさんから『鬼の音がする』と言つていたので。」

「鬼の音？」

声はもつてしまつたが、鬼の音？しかし相手があの善逸、音に關しては疑い様がない。そんな人が鬼の私ならともかく、人間であるウイリアム神父から鬼の音がする？

「ウイリアム神父、口を開けてください。」

「え、ええ」

とりあえず確かめないと。

「牙はなし、その日向に行つてください。」

「どうですか？」

「日光がきついと感じますか？」

「いえ、何も感じませんが？」

「竈門炭治郎さん、あなたはこの人を鬼だと思ひますか？」

鬼に現れる特徴がなく、何より私と違つて生身で太陽光を浴びている。

鬼の音がするなら何処かに異常をきたさないとおかしい。

「いいえ、この建物は藤の香りが強いので、いつもよりは匂いを感じ取れませんが、この人からは誠実な匂いがします。鬼ではないです。」

こういう時、便利だよな。超感覚持ちは。説得に時間がかからな

い。

「私も同じ意見です、この人は人間です。ウイリアム神父がどう
ございました。」

「いえ、ですが、鬼の音…ですか？」

「はい！善逸はあの呉服屋の時、俺とぶつかった時に鬼の音がして、
ウイステイリアさんが店主と話している時は人間の音がしたと言っ
ていました。何か心当たりはありますか？」

えっ…そんな事があり得るのか？

「心当たり…ですか…。そうですね、強いて言えば、呉服屋で君たちと
ぶつかった時、カタナが見えて、キサツタイかと警戒はしましたね。」
「警戒…ですか…？他には？」

警戒だけで、人間の音から鬼の音になる？それだけなら他の人も同
じ音にするはずだ。でも善逸はウイリアム神父を名指ししている。
なら、それは仮説としては成り立たない。

「他…なら、そうだ、その時はレディ、この人の事を考えていました
ね。」

そう言つて、隣に座る私の方に視線を移した。

「なら、店主と話している時は違う事を考えていたのですか？」

「いえ、この服を着たこの子の事を考えていたので、それは違いま
す。」

善逸の音は、ただ単に【音】だけではなく、感情や心の声も聞こえ
る設定だったはずだ。私のことを考えていた時、鬼の音がする？あり
得るのか？

「あつ！もしかして、俺たちとぶつかった時は【鬼のレディ】さんの事
を考えていて、店主と話している時は、【レディ】さんの事を考えてい
たのではないですか？」

「Oh, for sure. 心当たりならそれですね、君たちとぶつ
かった時は、この子が恐れるのは君たちなのか？と思ひ、呉服屋の店
主と話している時は、この服を着たあなたの事を考えていました。オ
ニの事を考えたのは、あの時だけです。」

「実は善逸の音は、ただの音ではなく感情によつて音が変わっている

そうです。ウイステイリアさんの話を聞くと、おそらくはソレが【鬼の音】の正体だと思います。」

「そうですか…、しかしそれでは、他の人が間違えて私に攻撃する危険性があるのでは？」

「あつ、それはいいです。善逸が特別聴覚に優れているのであつて、俺たちが気づかなかつたので、他の人がウイステイリアさんが鬼と誤解して、夜中に襲い掛かるのはありえませんが、その辺はご安心ください。」

「それは良かった…、」

ウイリアム神父…やはり私のせいだったのか。人と関わるべきではなかった。鬼は鬼。人は人。竈門兄弟のような血縁でもなければ、鬼殺隊と関わる度胸もない私が、人と会い、人と共に過ごしたいなどと…烏滸がましい願いだったんだ。

「では、竈門さんの質問に答えます。なぜ鬼なのに藤の香りがするのかというと、実は私が鬼となって最初に食べたのが、藤の花だったのです。」

「えっ？でも鬼は藤の香りはダメなんじゃ…」

最もな意見だな。

「ええ、私も最初は藤の花で酷い目にあいしましたが、鬼舞辻無惨の支配下に置かれるならば、自分で賭けにでたのです。」

「賭け？」

「私は女の身ではありませんが、医学にはそこそこ詳しいです。」

(嘘ではない、この時代の女なら詳しい方だ)

「そこで分かってしまったのです。無惨細胞は癌細胞と呼ばれる細胞に近いということが。」

「そんな細胞があるのですか？」

あー、まだ癌細胞が見つかる前だったのか？

「癌細胞とは、もともと自分の体の中にある細胞であり、それが体内でバグって…うーん…異常繁殖を繰り返す事で、体全体に不都合を起す細胞です。もともと、人間にしろ何にしろ一つの細胞が増殖できる回数は決まっています。」

「はあ…？」

やっぱり理解されていないな。

「うーん、ものすっごく簡単に言うと、体を【家】と例えて、【家の木材】を細胞としますね、どのくらいの家を建てるかで木材の量は変わりますが、なるべく余りは出したくはないですね。で、あらかじめ木材の量を調整するのです。癌細胞とは一度建てられた家の中を無理やり増築しているようなものなんですよ。もちろん、無理に元の家の中で増築しようにも広さには限りがある。結果的に元の家を破壊してでも、新しい家を建てようとする動きをします。」

「えっ？でもそんなことは」

「ええ、その通りです。そんな事…出来るわけじゃないですよ。腕を切られても再生するわけがないのは、元の家が主軸だからです。主軸を無くした家は、壊れる。」

「癌細胞は、元の持ち主の家を壊す存在…？」

「結果的に言えばそうです。前々から不思議ではあったのです。ねえ、炭治郎さん、あなたが斬った鬼の中で、最後に人間時代の事を思い出した鬼にはある共通点がありました。それはなんだと思いますか？」

「えっ！俺が斬った鬼の中で、ですか？えっ、うーん…」

考えてる、考えてる、彼は鬼を人として扱える子どもだ。ならば、自ずと共通点は分かる。

「手鬼は斬った後に、悲しい匂いがして…下弦の鬼は富岡さんに首を斬られたあと…あつ！」

「気づきましたね？」

「はい！両名とも【死ぬ前際】に悲しくて嬉しくて幸せな匂いがぐちゃぐちゃとしていました！」

「半分正解です。共通点は【無惨の血が大量に流れた】ということ

す。」

「無惨の血が大量に流れた？」

「神父さんのお国であるアメリカを含む、列強国には『瀉血』という治療法があります。これは、体内にある悪き血を外に出すことで、体の不調を治すという方法です。実は、人間だと効果がない…どころか、調子を悪くしてしまう医療行為なのですが…まあここでは置いておきましょう。鬼の場合は、この『瀉血』…かなり効果的なのですよ。」

「なぜですか？」

「先ほど癌細胞の話をしましたね、主にそれが含まれるのは無惨の血です。効果的な治療薬がなく、かつ藤の花もダメとなると、死ぬこと覚悟で瀉血すれば、無惨の血を体内から出すことができます。」

「あつ、そうか鬼は基本的に死なないから。」

不老不死の利点はそこだ。でも問題点や懸念点も多いが、

「もちろん、全ての鬼に効果があるとは思いません。瀉血はあくまでも応急措置の類です。鬼になったばかりで人を喰っていない者が、『人間時代を忘れずにすむ方法』と考えていただければ宜しいかと。一度鬼になると言うことは、『元の家を壊して新しい家を建てた』という事です。少なくとも『鬼が人間に戻る方法』ではありません。」

「でも…この情報があれば、鬼になる前の人だったら、人喰い鬼にさせなくてもすむかも…！」

炭治郎という人物は、本当は鬼殺隊なんかと縁がある身分ではない。妹を守るためだけに剣士となった。どちらかという徴兵、いや脅しで鬼殺隊に入らざるを得なかっただけのこと。だから聞きたい。「竈門炭治郎さん、あなたは鬼殺隊に向いてはいません。なぜ、金銭欲や名誉欲とは無縁の性格でありながら鬼殺隊に入ったのですか？」

私は理由を知っている。でも、私は本人の言葉を聞きたい。

「実は…俺の妹が鬼で…でも！人は喰っていない！のですが…、妹を人に戻すために鬼舞辻無惨を倒したいのです！」

そうか…、まだ例の情報を知らなかったのか…、

「それは…妹さんを殺したいのですか？」

「えっ!？」

「レディ！一体なにを！」

神父さんも巻き込んでしまうが、私は彼にこそ《この情報》を知る権利があると思っている。

「妹を守りたい？ならば鬼殺隊をすぐに辞めなさい。知らないのですか？《鬼舞辻無惨が死ぬ》、全ての鬼が死ぬ》というのを。」

「えっ…、」

「そういうことだったのですか」

炭治郎は呆然としているが、神父さんは冷静だ。やっぱり身内と他人だと反応に差が出るな。神父さんの負担にならないならそれに越したことはないけど。

「はっ…え、お館様は何も言っていないかった。」

だろうね、産屋敷一族は鬼舞辻無惨を殺すことに…文字通り、血反吐を吐きながら鬼殺隊を運営している。ならば、この情報も知らないだろうな。

「炭治郎さん、お館様と言っていたので、妹さんの裁判は終わったのですよね？」

「はい、そうですが…なぜあなたがそれを知って。」

「私の血気術の一つと思ってください。」

説明すると長引くから、前世の記憶は血気術としよう。

「お館様…産屋敷におかしな点はなかったですか？…そう…例えば、《鬼舞辻無惨と顔が同じ》…とか。」

「あっ!!」

「産屋敷一族は、鬼舞辻無惨の子孫です。もちろん、鬼舞辻無惨の直接の子孫ではありませんが、同じ一族です。あなたの反応を見るにそれは知らなかったのですね」

「えっ…でも、それなら俺は…お館様に先祖を殺しますと宣言してしまっただけ」

「妙な罪悪感は抱かなくても問題ありませんよ、産屋敷一族の悲願は《一族の汚点》を殺すことにあるのですから。」

勝手なことにな。

「ホントーに、部下の心情なんてドーデモいいのですねー、ウブヤシキさん達は。」

神父さんが、仮面をつけ終えた。でも、この雰囲気、もしや、

「あの…なぜ、あなたが怒っているのですか？」

やっぱりか。

「怒るなど言われた方がオカシイと思いませんか？だってアナタ、ウブヤシキとキブツジの関係をナーンニモ知らされていなかったのでしょう？ホントーなら、真っ先に知らなければならなかった情報を。特に妹さんが鬼なら、本当の善人ならキサツを真っ先に否定しますよ、間接的に妹さんを殺すことですからね。」

「えっと…それは…」

すごいな、私が言いたかった不満を全てぶつけたな。炭治郎さんは言葉を探しているようだが、神父さんの発言が正論だから、産屋敷を擁護できないようだ。ここで曇みかけるか。

「炭治郎さん、あなたの志望動機は、それは志願ではなく、脅しによる強制労働です。用は《妹を守りたいなら鬼を殺せ、殺せなければお前ら諸共死ぬ》と言われて鬼殺の剣士になったのでしよう。あの《非人道的な最終選別》を受けて」

「確かに！確かに！最初は彌豆子を富岡さんに殺させないために剣士の修行を受けました！脅しの面は否定できません！！でも！今は！俺は！自らの意志で鬼殺隊に所属しています！！」

さすが、本家の主人公。逆境の中で足掻く姿は、確かに人を引き寄せ、戦いたいと思うだろう。でも、ここは漫画の世界ではない。主人公不在でも無惨討伐は誰かがしてくれる可能性もある。1番のネットワークは、第二次世界大戦だが、私の知る史実と神父さんから聞いた過去の出来事は、微妙な誤差があった。つまり、第二次世界大戦が起こら

ない世界観の可能性もある。

ならば：ただの少年がわざわざ、寿命を削ってまで鬼舞辻無惨を討伐する未来は必要なく、他の柱達が無惨を討伐するのもし起こりえる未来の可能性だ。

「今の君の心情はどうであれ、ハジマリが脅しの時点で、組織としては終わっています。キミのようなコドモたちをセンジョーに立たせる組織はチカイミライに、人の手によって解体させられるでショー。」

ウイリアム神父は、司祭を職業として選んだ人だ。自らの意志で神に仕える覚悟を決めた人にとっては、脅しによる少年兵と、その少年兵を当たり前のように戦場に立たせる組織は論外だ。

それに時代も下れば、鬼殺隊はどんな隠蔽工作をしても表に出してしまう。最終選別などの狂った実戦は非難の的となり、マスコミに面白おかしく取り上げられるだろう。当然、世界的な目もあり鬼殺隊は解体、産屋敷一族は当主と妻は死刑。子供達は表向きは保護となつて、裏では一族郎党、国によつて暗殺されるだろう。神父さんの発言は間違っていない。

それに、

「竈門炭治郎さん、今のあなたは、炭焼きの息子ではなく、他にも付加価値があります。そう……特に陸軍が欲しがり、例えば妹が鬼だとしても手厚く保護する価値が。」

「確かに剣士としての腕前はありますが、それだけなら他にも」

「全集中の呼吸、常中。ただの呼吸ではなく、ちよつと呼吸法を変えただけで常人の2倍、3倍の力を出せる上に、極めれば軽い出血なら自力で塞がってしまう技。」

「そんなことが出来るのか！まるで魔法だ！Can you do that? It's like magic!」

「富国強兵を掲げている帝国軍には、現在の軍縮の流れの中では最高の福音です。だって、1人の兵士を養うにもお金がかかる。出来るだけ兵士は少ない方がいい、でも兵士の質を上げようにも、それをする為にもお金がかかる。でも、全集中の呼吸には、設備費などのお金はかからない。もともとある軍隊の土地や建物をそのまま使える上に、ひょうたんなどは単価が安い。陸でも海でも利点を見出せます。」

そして、それを知れば、鬼殺隊でも異端梓であり、上級幹部に嫌われているあなたは、裏切りの可能性が限りなくゼロ。眠り続ける妹を大切に保護すれば、あなたは全力で軍隊に従うでしょう。元々あなたは可愛がられる後輩タイプです。説明は下手くそですが、軍人は基本的に習うより慣れるです。出来る人は実践し、できない人は出来る人から教わる、そうすれば自然と全集中を覚える者が増える。

身内の妹だけを責任持って守れば、1人で10人、いや100人力の技を教えてもらえるのです。

もし、私が軍人だったら、たとえ人喰い鬼だったとしても大切に匿いますよ。」

そう、鬼滅の刃を読んで腑に落ちなかったこと。それは、全集中の呼吸・常中を修行時代に教わらなかったこと。

相手は元水柱だ。当然、常中の利便性を知っている人、なのに炭治郎はまだ妹という不穏分子があったから教えられなかったにしろ、孤児で居場所がない善逸も知らなかったのはおかしすぎる。

隊士の質が下がっているのならば、修行時代に常中を教えていた方がいい。なのに、教えない。それはもしかしたら、教えないのではなく、教えた事による情報漏洩がリスクだったのではないか？

仮に鬼殺隊が国公認の組織だった場合は、いくらでも監視をつけられるが、鬼殺隊は政府非公認の存在、監視役の鏖鳥だけでは、産屋敷

の影響が及ばない土地に行かれた場合、対処のしようがない。

だから、鬼殺隊内で死んでくれそうな人にしか教えないとしたら：いろいろと納得できてしまっただよなー。

「あなたは人を守ると言っても、一口にいつて何をもって守るのが明確ではありません。失礼ですが、それでは大切な局面で一番大事な存在を殺すことになりかねませんよ。」

そう…、この時代の竈門炭治郎は炭焼き小屋の息子の面が抜け切っていない。だから、死の間際に立たない限り本気を出せていない。本人がそれを自覚していないのは危険だ。

「何を持って守る…のか？」

「私は正直に言って、産屋敷一族が嫌いです。自分達の問題を他人であるあなたたちまで巻き込んでいる上に、本当の事を話さないで、のうのうと鬼殺隊当主として慕われていることが。別に子孫だから死んでくれというわけではありません。むしろ産屋敷には何があっても、鬼舞辻無惨を殺してほしい、いや、殺せ。だが、そこに志願兵でもない人、ましてや子供を使う事に嫌悪感があるのです。鬼殺隊士の心は美しい。柱も人を守るために足掻く、そこには明確な信念があります。」

でも、あなたには《妹を守る》という絶対の芯はあれど、本当の意味で《人を守りたい》とは思っていないように見えるのです。」

顔つきが変わっている。これは迷っている目だ。

「仮に…民間人と自分の妹、どちらかしか守れないとしたら炭治郎君、君はどちらを取りますか？」

「そ、それは、」

刀鍛冶編では禰豆子よりも小鉄？だったっけ？を優先していたが、それは鬼殺隊士として成長した竈門炭治郎だったからだ。

今の時点では、どちらかを選ぶことはできない。

「答えなくていいです。ですが、戦場で迷うということは命取りです。それに関しては貴方はよく理解しているはず。少なくとも今の貴方では鬼殺隊士としては不十分であり、また民間人というには知りすぎているのです。どちらにもなれないと言うならば、別の道を選ぶのが

最良です。」

「だから…軍人になれ…と。」

「私は産屋敷ではありません。強制はしませんが、妹の命を最優先にするならば、鬼殺隊は見切り、陸軍省に飛び込む事をおすすめします。」

「でも、富岡さんや、鱗滝さんが…」

ああ、そういうえばそういう約束をしていたな。

「竈門禰豆子が人を喰った場合、鱗滝一門が腹を切る』ですか？」

「なんと、野蠻な！」

「はい…。」

不死川実弥と同意見だが、人喰ったら切腹って、意味なくね？

「それは、『禰豆子が人を殺したら』ですよ、ね、『竈門炭治郎が妹を連れて転職する』のは全く問題ないですよ。」

「あの一、結局、レディさんは俺に何を求めているのですか？」

長ったらしくなってしまったな、私の悪いところだ。

「竈門炭治郎さん、あなたには【鬼殺】以外の道があるのです。」

鬼殺隊から離れるのは「逃げ」ではありません。戦略的撤退と呼ばれるものです。負けではありません。どうか…それを忘れないでください。」

「炭治郎さん、私のアニは貿易商人です。商売相手には日本人の軍人もイマス、ニホンがダメなら、アメリカという手もあります。妹さんを守りたいなら道は沢山あった方がいいです。」

「……………あなた達の気持ちは嬉しいです。でも、俺は、この道を進みたいと思います。」

その目には、もはや悩みの色は見えなかった。やはり、そうだよな。

「私は、あなたの選ぶ道が茨の道だと知っている、だけどそれを止める資格はありません。ですが…道は必ずしも一つではない。ということだけは心に留め置いてください。」

「はい…ありがとうございます…ウイステイリアさん、レディさん！」

タタタ

「さようなら！」

室内から出た炭治郎は、日輪刀を片手に持ち、陽の光をバックに帰っていった。

「それでは、私は教会の草むしりを…」

「レディ…いえ、お嬢さん、なぜ、貴方は彼に言わなかったのですか？自分の本当の名前を思い出せないと言うことを。」

「それをいえば…道が開けるとしても？今の名前は探せば分かります。ですが…、前世の名前を知っている人は…私しかいない。どれほど願っても探せない名前ならば、最初から…仮名で…無惨が殺されるその日まで、生きるだけです。」

「レディ…」

Let's not lick the seriousness of adults.

【竈門炭治郎教会襲来事件】の件以降、私は考えた。そもそもウイリアム神父に【鬼の音】がした元凶は他ならぬ私だ。

彼は、私とは違い本物の異人さんだ。

まだまだ帝国主義がまかり通っているこの時代、産屋敷とはいえ他国の宣教師、ましてや、全盛期に比べれば権力は衰えたとはいえども【カトリック イエズス会所属の司祭】相手に害をなすとは思えない。あの時の神父との出会いと交流は、自分の不安と、この世界への反逆心から生まれたものだ。

そして：大前提として《ウイリアム・ウイステイリア》という人物には弱みがないということだった。

でも……今は違う。

今、私が着ているこの服も神父さんからの贈り物だ。本人は《布教の手伝い》のお礼と言っていたが私は基本、教会の敷地外に出たりしない。だから《布教》の方面では役に立っていない。

だから、その名目は「私」が受け取りやすいように作ったものだ。自惚れでもなく、神父さんは私を気に入っている。いくら職業柄「弱者」を慈しみ支援する必要があれども、私への対応はそれの度合いを超えている。そうでもなきや偽名とはいえ「名付け親になるうか？」などと言ったりしてこないし、竈門炭治郎から私を守ろうとは動かない。「神父さんの好意に甘え、いつの間にか依存していた私の落ち度だ」交流を断とうと思えばいくらでも機会はあった。神父さんは私がどこの山に住んでいるのかは知らない。暗いところに住んでいるとは言ったがまさか地下に空間を広げているなんて思わないだろう。よくて洞窟に住んでいると思われる程度だ。私が教会に行かなくなれば連絡の仕様もない。

それに、

「竈門炭治郎……いや産屋敷には既に私の存在は知られてしまった。」

鬼殺隊士には必ず付く鎧烏、隊士の連絡係であり生きてきたGPS、特に妹が鬼の隊士ならば普通の鬼殺隊士よりも報告は頻繁なはず。

「私の存在が、2人の立場を苦しめる弱みになってはならない。」

ただでさえ炭治郎は《鬼を連れた隊士》として柱からの印象は最悪だ。

そこにさらに不完全とはいえ、《太陽と藤の毒を克服した鬼》とも友好的に話し合っている。なんて情報が漏れたら最悪、鬼ではなく人間に殺される。

神父さんも同じだ。産屋敷は神父さんへは手出しできないが、隊士が感情的になり《鬼の協力者》として神父さんに襲い掛からないと誰がいえる？いくら鬼殺隊士としてのプライドがあっても、鬼に家族や大切な人を奪われた人達には、理屈は通じない可能性が高い。

「やはり、直接的な交流はもう終わりだ。さて…やるか。」

今は、穴の中には子どもがほく前進で通れる程度の通路に大人1人が住める居住空間が一つだけ。

ここに穴を掘り進め、幼虫や人形などの食糧庫を作る、

「鬼殺隊に知られた以上、大つぴらに外には出れない。だけど、竈門炭治郎や神父さんには伝えたい情報はある。いざ、襲われた場合に備えて部屋は複雑に作らないと。」

通路道は、竈門禰豆子が小さくなっていたのを利用して、通路を作る際は幼児になってから掘り進めた。出来るか？と思っていたけど、案外こっちの方がエネルギー消費量が少ない事が判明。力は変わらないし、直ぐに掘り進める事ができた。

これって迷いそうと思ったけど、「ヘンゼルとグレーテル戦法」でなんとかまりました。

穴を掘り進めると同時に土を食べる。

← 栄養がいつぱい

← 血気術が発動【人形が出る】

←

人形を置く

これを繰り返す事で最初の大人1人が暮らせる空間に戻る事ができる。

まあ、食糧庫であり、自分の人形を置く空間を作るから、道は狭くて長い方がいい。半天狗のような一寸法師までには出来なかったけど、幼児のはいはい体勢で進める道を掘り下げて、一つ一つ、自分でもわからないようにバラバラに設置した。

だけど、これだけなら音柱のように穴を掘り下げる能力者ならすぐに全て壊される。

自分が死ぬ分には問題ない。問題は人形を使って産屋敷に脅されること、私の命と引き換えに炭治郎や神父さんが産屋敷に脅されてしまうことだ。

前者ならまだマシだ。そもそも私という存在がこの世界へ与える影響力は未定。いてもいなくても問題ないならまだしも、私がいる事で無惨討伐失敗しましたなんて結末を迎えられたら困る。

私だけなら自殺する事も可能だ。一度死んだ命、今更惜しむ心などありはしない。

でも、後者になったら最悪だ。炭治郎も神父さんも優しい人柄だ。特に神父さんは私が二度目だとしても、殺されるのを黙って受け入れるほど心を殺せる人ではない、寧ろ関わって知ったが、けっこういや、かなり情熱的な人である事を知っている。最悪の場合、『刀を持った人に斬られかけた！』と大使館まで逃げ込む事態も起こしかねない。そうなれば宣教師を斬った犯人を大使館側が要求してもおかしくない。

それは困る…、産屋敷は気に食わないが【鬼殺隊】は必要だ。

鬼殺隊の最高の利点は、政府管轄じゃない分自由行動ができるという事だ。公認組織の場合はどうしても利害関係で揉める。それがないからこそ、無惨討伐に千年も費やせし、無惨討伐もできた。鬼殺隊は表向き、存在した事実さえもなかった事にし続けなければならぬ。

なのに、原作では登場しない神父さんが鬼殺隊に近づいたら、どん

なバタフライエフェクトが起こるのが分からない。

「ふー、とりあえず手紙でも出すか。」

教会で勉強する際に、言葉と同時に文字も習った。その際にもらった紙と、緊急時には換金できると切手ももらった。もしかしたら、神父さんはこの状況を予見していたのかもしれないな。

【Tommy friend William Wistiria,
reading this means】

一方その頃、教会では、

「レディ……こないな。」

竈門炭治郎くんが来たその日に、帰り際レディ：アミークスは『もうここには来れないかもしれない。』と言った。理由は教えてもらえなかったけど、大方の検討は付いている。あの子が鬼殺隊だからだ。あの子、炭治郎くんは素直な子だった、だからいずれ、ここに来ていることがバレてしまう。炭治郎くんから聞いたハシラと呼ばれる上級幹部は、鬼を殺すのに躊躇いはないそうだ。人間は殺さないと聞いたけど、ウブヤシキさんの部下だ。あの子はともかく組織は信用できない。

カラーンカラーン

「鈴の音？」

「あっ！いたいた、えーと、ウイリアム・ウイステイリアさんですね、あなた宛に手紙が届いています。」

「レター？」

誰からだ？本部からの連絡文は書いたばかりだが。

【Priest William】

「この文字は、」

間違いない、あの子の文字だ。

バサツ

【Tommy friend William Wistiria,
reading this means……

我が友、ウイリアム・ウイステイリアさんへ

今この手紙を読んでいると言うことは、私が一週間以上教会に立ち寄らなかつたことでしょう。そしてこの手紙は、私はあなたとは二度と会わないと決意を固めたことを表明するためです。実は鬼殺隊士にはそれぞれ連絡係として喋れる鳥が支給されます。もちろん唯の連絡係ではなく、隊士の近くに待機しているので産屋敷へは隊士の行動が全て把握されるようになっていきます。竈門炭治郎が来た時点で、神父さんから時々鬼の音がすること、不完全とはいえ鬼の弱点を克服している私の存在は今頃、産屋敷一族にはバレているでしょう。

ここに鬼殺隊士が来るのは確実です。もしかしたら柱クラスが来る可能性もあります。だから、巻き込まれる前にイエズス会日本支部や、大使館などの人々が多くいる場所に逃げてください。

そして、出来るならば日本からは離れて帰国してください。

手紙はどうかイエズス会日本支部に送り続けます。竈門炭治郎にも渡したい手紙があるので、伝言をお願いします。その際は手紙のシメは神父さん宛には十、竈門炭治郎宛には△のマークで区別して下さい。

ごめんなさい、巻き込んでしまいました。ですが、あなたの優しさ

のおかげで、私は本物の鬼にならずにすみました。

ありがとう……私の大切な友よ。

そして、さようなら、どうか、お元気で……。

psこの手紙は読み終わり次第、燃やしてください。

あなたに救われた人の子より」

「レディ……私はこんな手紙をやりとりするのために、便箋と切手を贈ったわけではなかったのに……。」

手紙を燃やせ……か。この手紙を燃やせば「オニ」と関わった証拠は消える。国の組織でもない武力組織なら、証拠もないのに【異人】を拉致するメリットがないからか。

でも、

「レディ、私が何も対策を考えていなかったとでも？」

大人の本気を舐めていると、痛い目にあいますよ。

柱合会議

産屋敷邸

「よもやよもやだ！鬼を連れた隊士の件による集合命令はあったが、
またもやお館様が直々に伝令を飛ばすとはな！」

いつも通りな煉獄杏寿郎

「そうだな…なーんか、嫌な予感がするんだが。」

話が始まる前から、苦虫を噛み潰したような顔をする宇髄天元

「定期的な柱合会議以外で、こいつも短期的に集まるとは…」

南無南無と言いつつ、数珠を鳴らす悲鳴嶼行冥

「でも、不謹慎ながら少し興味深い話になりそうですね。」

「そうね、しのぶちゃん！」

余裕な顔立ちながらも、好奇心が抑え切れていない胡蝶しのぶと、
それに同意する甘露寺蜜璃

「鬼を連れた隊士といい、今回の集まりといい、この所の鬼殺隊は規律
が甘い、舐めているのか：ブツブツ」

(相変わらずネチネチしていて伊黒さん素敵だわ)

「おい、とみおかアー、まさか…またあーお前ん案件じゃあねえよな
？」

富岡に絡む不死川実弥と、

「(今の鱗滝一門は俺と炭治郎だけだ)違う、(機嫌悪そうだな)おはぎ
でも食うか？」

相変わらずの言葉足らずで喧嘩を売る富岡義勇

「アツ？舐めてんのかテメエはよ！」

「……………あれ？なんだっけ？」

柱同士の口喧嘩などには興味を示さずに、空を見上げる時透無一郎
だが、そんな力オスな空間も、

「お館様のおなりです。」

ザッ

「おはよう…私の子どもたち、今日も全員が揃って嬉しいよ」

「お、お館様におかれましても、お元気そうだな、なによりです！」

「その声は、蜜璃だね、ありがとう。」

「それよりもお館様、《鬼を連れた隊士》の件から日は経っておりませぬ。今回はどのような案件なのでしょうか。」

「そうだね、実弥…でも、今回の案件は、竈門炭治郎は関わっていないよ。むしろ、あの子よりも重大な案件なんだよ。」

「それは？」

「これから話す内容は君たち…いや、鬼殺隊士の誰もが信じたくない話だけど…まずは君たちに知ってほしくてね。………単刀直入に言うと【太陽と藤の毒を克服した鬼】を私の鎧烏が見つけた。」

「「「「「なっ…!!」」」」」」

「まさか！ならば鬼舞辻も！」

「いえ不死川さん、もし鬼舞辻無惨が太陽を克服していれば私たちはとうの昔に殺されています。」

「つまり、まだ【太陽を克服した鬼】はその一匹だけと言うことか…」

「ああ、何という悪夢…南無阿弥陀仏」

「まあ！どうしましょう！」

不死川実弥、胡蝶しのぶ、宇髄天元、悲鳴嶼行冥、甘露寺蜜璃がそれぞれの反応を示す中、

「ですがお館様！その鬼は本当に鬼なのでしょうか？」

先の《鬼を連れた隊士》の案件では、真つ先に反応した煉獄杏寿郎はそう言った。

「あん？…どういふことだ煉獄。」

と、不死川実弥、

「煉獄のいう事も一理ある。」

と、富岡義勇、

「おめーには聞いてねえーんだよ、富岡あ！…んで、どういう意味だ？鎧烏が鬼つつたら、鬼だろ。しかもお館様の鎧烏だぞ、俺らよりも信憑性が高エじゃねえか。」

「うむ！鬼であることは間違いないだろう！だが！…この場で話すまでにかかりの日にちが経っているだろう！」

「お前らにはわからないのか？確かに、俺たちの知っている鬼ならば

日光を克服したと同時に鬼殺隊士に襲いかかるはずだ。だが現に今、誰一人その手の報告をしていない。つまり…」

「つまり、無惨配下の鬼ではない、もしくは無惨と敵対関係にある鬼が日光を克服したのね！」

「そうだ、甘露寺は聡いな。」

「おいおい、ほはお前が言ったことだろう。」

「ん？つまり、何だ？煉獄お前、まさか、その鬼を鬼殺隊に加える気なのか？」

「うむ！【人を喰わず人間を守る鬼】続いて【太陽と藤の毒を克服した鬼】、まるで運命のようではないか！ははは！」

「正気か煉獄！鬼を連れた隊士はまだ人を食べないと証明できているが、藤の毒と日光を克服した鬼は、どう克服したのか分からないんだぞ！それこそ上弦の鬼のように…」

「それは、なかりう！現にそこまでの被害報告は出てないからな！俺も鬼を連れた隊士の妹という一例がなければ、鬼殺の一択だったかな！」

「うん、杏寿郎の言う通りだよ…、私の鎧烏に監視を命じているけど、その鬼の子は、むしろ、人間を守る動きをしているんだ。」

「誰を…ですか。」

「身内ならまだしも…鬼は鬼です。」

「まあ！種族が変わっても人を守るなんて素敵だわ！」

「身内なら…人質に取れるな…」

と、人質（鎖）付きなら鬼殺隊に加えてもいい肯定派と、

「ああ、自分の現状を理解できないなんて、何と哀れな…直ぐに楽にせねば。」

「竈門彌豆子はまだしも、日光を克服した鬼など、鬼舞辻に見つかれば鬼殺隊存亡の危機です。早急な鬼殺を命じてください。」

と、断固として否定の反対派、それぞれが反応する中、無言の2人はというと、

「俺は…むしろ自由にさせていた方が得策だと思う。」

「僕は、どちらでも…、どうせ忘れるので。」

「あつ!? どう言う意味だ、富岡ア! 先の鬼を連れた隊士といい、最近のテメエは鬼を庇うことが多いなあ!」

「義勇はそう思うんだね、理由を教えてくださいませんか。」

「はいお館様、鎧烏が見つけたのに隊士の一人も派遣しなかったのは、その鬼かその鬼を庇う者が、こちらでは手出し出来ない相手だったのでは?。」

「富岡、テメエ、そんな流暢に喋れたんだな。」

「いつもこうでしたら、誰も嫌わないのにですなあ。」

(流暢に話す富岡さんも素敵だわ。)

「そうだね、義勇の言う通り、例の鬼もその保護者も、こちら側が手出しできない立場なんだ。」

「警察、もしくは軍人…高官職か?」

「政府官僚?」

「まさか、華族か?」

「名家の方かしら?」

それぞれがそれぞれの意見を言う中、

「【太陽と藤の毒を克服した鬼】とその保護者は、どちらも外国人だった。」

「異人!?!」

「よもや!」

「しかし、お館様! 領事裁判権の撤廃は明治の世に終わっています!」

「不死川、それは法の上では…だ。俺たちは政府非公認、異人を拉致したら裁判沙汰になるぞ。」

「そうですね、そもそも私たちの中で異国の言葉を話せる人がいないではありませんか。」

「そうだったわ! 言葉が分からないわ!」

「…誰か、いないのか?」

「鬼殺一択のぼくたちが、出来るとでも?」

「そうだな…」

柱同士がざわめく間、当事者代表である産屋敷基、お館様は柱の様子にほっと一息をついていた。

(よかった、この子達が深くまで聴き込む相手ではなくて)

実はお館様、竈門炭治郎の鎧烏からの報告で、本鬼(本人)が推定日本人であることを予想していた。

だが、そこであえて鬼を「外国人」の括りに加えたのにも、ちゃんとした理由があった。

(例の鬼には、是非とも私たちの協力者になってほしい…、だが、鬼を庇っている相手があの《ウィリアム・ウイステイリア司祭》…：彼だけならまだしも、彼の兄である《ジェイムズ殿》には火薬や爆発物などの後ろ暗い取引をしてもらっている。

司祭とは違い、ジェイムズ殿は己の不利益になると感じたら、速攻で私たちを売り飛ばす性格だ。

その上、ひどい白豪主義者。

私たちとの取引も、金になるからしているのであって、本来なら私たちのような黄色人種と話すのも嫌なはずだ。

火薬類の取引は金をちらつかせても、応じる貿易商は少ない。

後ろ暗い取引であると自覚しているからだ。

いくら私たちが華族とはいえ、それが通用するのは日本限定だ。そういう意味ではジェイムズ殿とは仲良くしていきたい。思考の違いで折りが合わないとはいえ、弟君に手が出る事態は防がなくては。)

そう、最終決戦の産屋敷邸爆破の、火薬や爆発物の入手先は外国だった。理由は簡単、日本人相手だと政府関係者に繋がっている確率

が上がるからだ。

もちろん他の入手先もあるが、一番比率が高いのが幸なのか不幸なのかは現時点では分からないが、《ジエイムズ・ウィステイリア》ウィリアム司祭の兄だった。

そのような裏事情を知らない柱達は「異人の鬼」をどのように確保するのかを話し合っていた。

「めんどくせえな、もう普通に斬ってしまえばよくねえか。どうせ鬼だ。死体は残らん。」

「不死川（保護者も異人だぞ、異人が騒げば裁判だ）犯罪者になりたいのか？」

「あつ？」

「富岡さん、言葉が足りていませんよ、ですが不死川さん、富岡さんの言う通りですよ。この国に来ている異人さんは、基本的には招かれてる者です。行方不明になれば警察が動きますよ。」

「まあそうなるよなー、少なくともこれまでのように、斬って捨てては通用しない。」

「鬼舞辻無惨も考えたな、日本人相手ならお館様の権力が使えるが、異人なら使えない。」

「そうよね、伊黒さん。でも何か他に手はないのかしら？」

「ああ：見知らぬ異国で、鬼にされるとは：なんと哀れな：」

「だが、人を食べぬならば話し合いもできるといふことだ！」

「居場所知ってるの？」

「知らん!!」

（居場所を教えれば、杏寿郎と天元は訪問してしまう。鳥からの報告では、鬼殺隊士には好印象を持っているのは間違いない。でも、それは訪問したのが竈門炭治郎だったからの可能性もある。：いきなり柱を連れて行ったら、警戒されてウィリアム司祭のいるイエズス会日本支部に逃げ込みかねない。2人なら：間違いなく日輪刀も持ち込むだろう。）

一般人に咎められる失敗をするとは思えないけど、杏寿郎のあの顔は目立つ。無駄に警戒心を煽ってまで得られる物はないだろう。）

「みんな…落ち着いて、例の鬼は一先ずは私の鎧鳥に見張らせておくよ。みんなの意見もあるけど、しのぶや天元の言う通り、相手は異人。下手に警戒されたら帰国される可能性がある。鬼を外国に放流させると鬼舞辻に有利になってしまう…。だから…特に実弥」

「はっ!!」

「鬼殺にかける君の思いは知っている、けど…だからこそ、悲劇を広げない為にも…ここは、私に任せてくれないかな?」

「はっ!お館様の仰せのままに!」

「わ、私も、お館様の意見に賛成します!」

「甘露寺と同様に賛成します。」

「僕も…あまり興味ないし。」

「うむ!ここはお館様に任せるしかあるまい!帰国されたら困るからな!」

「そうだな…俺ら平民風情が異人に手を出したら…不利すぎる」

「ああ…異人と言うだけで…慈悲を与えられるとは…南無」

「賛成します。」

「できれば血を採取したかったです…仕方ないですね。」

上から、不死川、甘露寺、伊黒、時透、煉獄、宇髄、悲鳴嶼、富岡、胡蝶、9人の柱の賛成を得られたところで、今回の緊急柱合会議は幕を閉じた。

ニヤア

「茶々丸…ですか。いい加減にしてください、珠世さん、私の血は諸事情により、今は渡せないのです。」

ニヤアン？

「然るべき時がくれば、ちゃんと採取させますよ。全く…竈門炭治郎が来たから、あなた方も来るとは思っていました、まさか、こんなに早く私がここに来ることを特定されるとは思いませんでしたよ。」

ニヤニヤ！

「神父さんは私の手紙を受け取ったその日のうちに、この教会を去りました。もう、戻ってくることはないでしょう。それでいい…ここは日光浴をするのに最適です。なんとと言っても藤の木が生い茂る中にある教会には、鬼は来れない。」

ニヤーニヤー！

「郵便局のある町まで降りた時に、窓から見られるとは思いませんでしたよ、珠世さんに愈史郎君。ですが……」

手紙を火にうつす。

「鬼殺隊に協力する理由も道理もない。」

なぜ、【大日本帝国】の生まれでもない私が【この国】の平穏を守らなくてはならないのですか？

君たちの問題でしょう。スウ

Go away. This is not a good place for people like you to come!

鬼殺は第三者から見れば…

さてさて、ここはとある山の中にある寂れた井戸、その中にあるのは井戸水？いいや、中は鬼の住処である。

未練たらたらで教会に寄ってしまったのが運の尽き
珠世さん達に自分の存在がばれてしまった。

その上、住んでいる場所までばれてしまい、中には入ってこないが井戸の周辺でまあ騒ぐ、騒ぐ。

とはいえ、それも茶々丸の前で一喝したら来なくなりました。本当によかった。

これで安心して、

「手紙を書き進めることができる。」

一方通行の手紙によるやりとりだが、私は表向きは異人だ。

少しイントネーションをおかしくした日本語で話しかければ、普通の日本人なら質問に真摯に答えてくれる。こういう所は未来から変わらないな…日本人の本性はそう簡単に変わるわけないということか。

少し安心した。私からすれば鬼が居ようがいまいが「大正時代の大日本帝国」は十分に【異世界】だ。

「過去だろうが…未来だろうが…人は人だと言うことなのか。」

もしかしたら、あの中に私のご先祖様がいたのかも…ね？

「さて…と、何から書くのかな？」

んー…、とりあえず教えたことから書き出そうかな。

- ①産屋敷一族は鬼舞辻無惨の子孫（直系ではない）
 - ②鬼舞辻無惨が死ねば、全ての鬼が死ぬ
 - ③鬼同士ならテレパシーで全て鬼舞辻無惨に伝わってしまう
 - ④竈門禰豆子は《呪い》を解いているから情報が漏れる心配はない
 - ⑤ヒノカミ神楽は日の呼吸
- 大体、こんな感じかな。

「うーん…現時点では伝えられるのはこのくらいかな？」

最後の《ヒノカミ神楽は日の呼吸》であること。

これを伝えるか伝えないかでかなり迷った、もともとヒノカミ神楽が呼吸の一つであることを竈門炭治郎が知ったのは無限列車後、つまり煉獄杏寿郎の死後だ。だからどうせ『知る』のだから早まってもいいのでは？とも思った。だって知ったところで戦地で使えなかったら『知らない』も同然だからだ。

「生存報告の為に、定期的に送り続けないと…でも、ほかに現時点で書き出せるものは…。手鬼の過去、累の過去…だめだ。鬼に情が湧いてしまったらそれこそ鬼殺どころではなくなる。」

実際に会ってみると病的に優しすぎる人…と思った。それにまだ私情と仕事の区別ができてない時期。上弦の参を前に大切な人を失い、無力な自分を知った経験が彼を《病的に優しすぎる人》から《普通の人》にした。遊郭で鬼とはいえ、女性相手に殺意を持てたのだから、一種のフラッシュバックがあったからだとも考察できた。

そして、これはあまりにも矛盾しているかもしれないけど…煉獄杏寿郎を殺したのが上弦の参、猗窩座もとい《ハクジさん》だったことが、炭治郎が鬼殺一直線になる要因だった。

これは完全な私見だけど、もしこれが上弦の弐、童磨だったら原作のように『鬼を完全に滅ぼそう』と思わなかったはずだ。

だって、【鬼】ってようは「見た目人間の喰い熊」のような扱いでしょ。熊に家族を食い殺されたからって、『全国の熊を滅ぼそう』とは思わないでしょ。

なんだつけ…？<https://www.news24.jp/s/article/2021/08/12/07922235.html> 確か前世で戦後〇〇年特番で戦艦大和に乗っていた少年兵の証言の中で…

『恐怖が殺意になり快感に変わった。これが戦争の怖さですよ』とか言うのがあったつけ。あれになんか似ている気がする…。私は戦場を知らないから、的外れかもしれないけど。

猗窩座はいい意味でも悪い意味でも、あまりにも《普通の人》だった。そして炭治郎は鬼を人として見れる人だった。だからこそ、心の

どこかでわかっていたのかも知れない。

『煉獄杏寿郎を殺したのは人間だ』と。

炭治郎という人物は名誉欲などがほとんどない。

【化け物殺し】とかなら寧ろ、伊之助辺りが稽古に熱心になるはずだ。なのに実際は炭治郎が誰よりも熱心になった。

「だからこそ…何でもかんでも情報を提供し過ぎると本人の成長を阻害してしまう。」

鬼滅の刃は、少年漫画の王道。

主人公の成長と友情が主なテーマだ。

癖のある現時点では敵キャラと真っ直ぐな主人公、お互いの譲れない領域を守り、競う事でお互いがお互いの意志を尊重する…展開になる。

ここは前世とは微妙に史実が違ってても現実世界であることは間違いない。

未来の知識を先取りさせたところで問題ないのかもしれない。

でも…本来なら知っているはずがない知識を【知っている】ことは、不気味に思われてしまうだろう。それが炭治郎と柱たちの交流の妨げになる…までならともかく、不気味すぎて殺される展開になってしまう可能性が高い。

この世で最も多くの人間を殺してきたのは、他ならぬ人間なのだから。

「とりあえず、【鬼の特徴】？を主観で書いてみようかな。鬼だからこそ分かったこともあったし。」

横浜

「お久しぶりです、ウイステイリアさん、いえ神父さんと呼ぶべきでしょうか?」

「どちらでも構いませんよ炭治郎くん、はい、今回の分です。」

「ありがとうございます!」

パラッ

【竈門炭治郎くんへ

しばらく日が空いてしまい申し訳ありませんでした。こちらは特段何もなく平和な日常を謳歌しております。今回書き記したのは、鬼の特徴です。鬼となって気づいた点をあげていきますので鬼殺の参考になればと思います。」

「よかった…無事だったんだ。」

教会が空になった時は、討伐されてしまったのかと思った。でも伝言でお互いの直接交流は途絶えたが、手紙によるやりとりは続いている。

【まず一つ、鬼の体は鬼舞辻無惨の一部といった感覚がしました。初対面の時に言いましたよね、『主軸を無くした家は壊れる』と、この主軸が鬼舞辻です。呪いを解いた時に体が軽くなりました。もしかしたら同じく呪いを解いている妹さんも、同じ感覚かもしれません。これは私の感覚ですので妹さんは違いかもかもしれません。やはり大事

をとって無惨討伐前に妹さんを人間に戻すべきです。」

「体が軽くなった？ 禰豆子はどうなんだ？」

「ムー？」

「二つ、横浜にいることから私の名前がレディではないと気づいたと思います。ではなぜ名前で呼ばれていないのかと言うと、私は鬼となった時の衝撃で、自分の名前を忘れました。おそらくは妹さんも自分の名前を本当の意味では理解できていないはずです。」

「禰豆子…が禰豆子と分かっていない？」

「三つ、これが一番重要な部分です。鬼は人間時代の最後の日から精神的な成長はしません。君が対峙した鬼は見た目に比べて言動が幼いと感じた鬼もいたでしょう。間違っではないません。」

鬼の中には《人間時代を完全に覚えている鬼》と、

《人間時代の重要な記憶が歪んでしまった鬼》と、

《全く覚えていない鬼》の三種類に分かれます。

そして強い鬼というのは基本的には人間時代を多かれ少なかれ覚えていて鬼です。君がこれから対峙する鬼とは、そういう鬼となるのです。鬼殺とは結局のところ人殺しです。そういう意味では鬼と対して変わらないのかも知れません。君は…人を殺す覚悟がありますか？」

「人を…殺す覚悟…！」

鬼ではなく、人を殺す覚悟…！ いや…下弦の鬼と対峙したあの時に強く感じた。やり方こそ間違えていたけど、あの子も普通の子供だった。

これから強い鬼と対峙して、より多くの血を採取するということは…レディさんの言う通り、あの子のような鬼と遭遇する。

決意をしても心が追いつくわけではない。

「ムー？ ムー！ ムー！」

「ね、禰豆子？」

どうしたんだ？ 禰豆子が裾を引っ張るなんて？

「おやおや、お兄様が心配のようですね。」

「ウイステイリアさん…！」

そうだ。俺は決意したんだ、せつかく2人が用意してくれた別の道、今よりも楽で禰豆子と安定した平穏な生活の道を閉ざして、鬼殺の道を進むと。

なら、

ボツ

パチパチ

「ありがとうございます、ウイステイリアさん。」

「迷いが消えたようですね、ですが……本当に嫌になったら、迷ったら……いつでも来なさい。教会も私も、君を拒む理由はないのだから。」

「はい……！」

「そうだ、俺は1人じゃない。鬼殺隊には善逸と伊之助、外にはウイステイリアさんとレディさんがいる。」

「ところで差し支えなければ教えてほしいのですが、次の任務は？ 教会の仕事も忙しくなりそうですし。」

「無限列車だそうです。」

「そうですか。」

「えっ？ 今、一瞬迷いの匂いがした？ だがその匂いを覆い隠すように「そうだ……これを持って帰りなさい。」

「そう言つてウイステイリアさんが禰豆子の手に渡したのは、

「金平糖？」

「これが好きなのでしょう？ 人の子に戻ったら食べなさい。私もいつまでこの国に入れるのか分からないからね。」

「そうか！ ウイステイリアさんは何度も会っているせいで忘れかけたけど、異人だった。」

「ありがとうございます、さあ禰豆子、帰ろっか。」

「そうして、外に出たらウイステイリアさんは、

「グッバイ！ タンジロー！」

「片言の日本語を話す人になった。」

「さようなら！」

「無限列車…あの子は茨の道を進む決意を固めたんだ。私が止めてはならない。」

パラッ

無限列車で竈門炭治郎は目の前の上官に守られ、その人は亡くなる。

「Tanjirō Kamado was protected by his superior officer in front of him on the Mugen Train, and he died.」

「そして、それが終わった後、炭治郎くんにあの子の血を渡す…か。」

無限列車の尋ね人

「もし…ムゲン train…れつしや？とはドチラのハウコーにありますが？」

今日は情報収集のために人里に降りた。外国人ぽく見せるために服装は唯一の洋服である修道服だ。

「おやまあ！異人さんですか！ムゲントレイン？ああ！無限列車ですか、それは今、点検中ですよ。」

「点検中？ナゼですか？」

こういう情報収集では地元のおばさんとかがいい情報を持っている確率が高い。その上肝っ玉があるから異人相手でも物おじしない。「どうにも最近の無限列車では行方不明者が増えているそうですね、設備不良がないか調べるのですって。」

「そうですか、いつ頃終わりそうデスカ？」

「明日にはと聞きましたよ」

「アリガトーございます。」

カツカツ

（明日、つまり無限列車編は明日…、炭治郎たちが列車に乗り込みエンムを滅し、そして…煉獄杏寿郎が猗窩座に殺される運命の日。）

何度も考えた、このままでいいのかと…。

でも、私は救済できるほどの攻撃力が高い血気術も使えないし、そもそも戦闘経験がない。民間人？いや民間鬼？が戦場に立つと、いくら鬼とはいえ足手まといだ。それを自覚しているからこそ私は何一つ干渉できない。その上私は鬼舞辻無惨とは敵対関係にある鬼、不完全とは言え「太陽を克服した鬼」

この時点で私が出たところで、何も得られない。何も救えない。

だから、希望は竈門炭治郎…この世界の主人公に任せるしかない。

ヒソヒソ

「雨も降っていないのに、傘なんて」

「異国では当たり前なのかしら？」

「まあ嫌ね、あんな黒服で死人のような白い肌、その上目元には緑の顔料を塗るなんて」

異人として歩くところという声もまた多い、横浜あたりなら外国人も多いから違和感もなく、人々も親切だが、…いや、浅草でも親切な人は親切だがやはりまだこの時代、異人に対しての偏見は大きい。私が話しかけるのも商人関係者が主なのは内心はどうであれ、親切にしてくれるからだ。

もちろん素で親切な人もいたけどね。

「あつ、着いた。」

ガラガラ

「いらつしや…異人？…ここは服屋ではありませんよ。」

「イエ、ココであつています。あの…このキモノは売れますか…？」

私が街に降りた理由の一つ、それは【女学校の着物】を売ること。

「えつと…売れはしますが…なぜ異人さんがわざわざ質屋なんかに？」

「これは、私がこの国に来た時に、とある人からもらったモノデス。しかし私はこれは着ません。」

「なるほど、使い所がないから売りたいと」

「YES、ハイ」

間違つてはいない、これは【人間のあの子】の服、私の服ではない。私にはもう神父さんから洋服も和服も贈られている。だから、本来ならこの服たちは【あの子の実家】に送り返すべきだ。でも…送り返すと【私】の存在があの子の両親に露見する。鬼と関わり合いがあると思われては、鬼殺隊に巻き込まれる。それだけは避けなければ。

「うーん…生地はいいのですが、汚れがねえ…。いや…小物に作り直せばいけるか？うーん…よし！異人のお嬢さん、このくらいでどうですか？」

「1円80銭デスカ、ハイ、それでオネガイします。」

土汚れがある中古の着物が1円80銭、まあ上がった方かな？確か1銭≒200円くらいだったか？1円≒100銭なら3万6千円か、着物が普段着のこの時代なら妥当な額かな？

「ありがとうございました、またのお越しを」

「アリガトー」

これで切手代と葉書代は確保できた。

「いらつしやいませ」

「ありがとうございました」

よし、葉書と切手の確保に成功。でもやっぱり収入源がないとキツイな…。いや…着物を売らずともお金を貸してくれる“人”はいるが、あの人だと、確実に対価の血を求めるところなあ。

まだダメだ。まだ、柱は上弦には敵わないし、炭治郎の心の成長も発展途上、直接会って話そうとも思ってたけど、あの方は過去が過去だ。

鬼舞辻無惨への殺意で私の意見を聞かない可能性がある。

そうなれば、身代わりの血気術しか持たない無力な鬼だと押されてしまう。

特に珠世さんの血気術【惑血】。視界を遮る、これだけを聞けば「えっ、それだけ？」と思うけど、戦闘経験のない私からすれば十分な脅威だ。それに原作で明らかにされていないだけで、他の血気術を持っていてもおかしくない。知らぬ間に血を抜き取られて研究に回されたら、それこそ私にとっては大惨事だ。なら、あらかじめ決めていた時期に炭治郎を経由して渡した方が早い。その後なら直接会って話をする事ができる。

(そういえば炭治郎には手紙で、

【日の呼吸を鬼の前で公言してはならない。】

【舞を剣技に昇格する為にまずは《ヒノカミ神楽》をイメージネーションしながらつかうべき。】と書いたっけ。無限列車ではどうなるのかな？)

無事に《ヒノカミ神楽 碧羅の天》は使われるのかな？それとも《日の呼吸 碧羅の天》になるのかな？確かこの場面は心の声だったはずだから問題ないはず…。

「う…………ん。」

考え込むと直ぐにこうだ、眠気が襲ってくる。早く地下に帰らなく

ちや。

「手紙は後で考えよう…今は…寝ない…と」
おやすみ。

一方その頃、

「はあ、はあ、はあ、」

彌豆子の血の匂い、外は、現実はどうなっているんだ！もし俺以外も眠っていたら取り返しのつかないことに！

俺は全集中の呼吸を使えているのか？

「お兄ちゃん？どうしたの？」

「兄ちゃん、たくあんくれよ」

ダメだ！夢だと理解できたのに夢から抜け出せない！血気術なら術者である鬼がどこかにいるはずだ！それを切らないと夢から抜け出せないのか？臭いがするのにな、特定できない！

どうしよう…！どうすれば…！

「この程度の血気術に惑わされる軟弱者が、よく妹を人間に戻し、鬼舞辻無惨を倒すと言い切れたな。」

「なっ…！」

いつの間に…！背後を取られた、いくら夢とはいえ不甲斐ない…！
でも、誰なんだろうこの人？

白地に紫の藤の花柄の着物に、赤の袴、髪飾りは薔薇の花なのか？
柄に統一性はないけど、この人は女学校の生徒だ。着物の質からも富

裕層の娘さん。

でも今の夢と現実の俺もこの人と関わり合いはない。

こんな冬山の中でハイカラさんに会うなんて、この世界が夢であると教えるようなもの。鬼がそんな事するわけがない。

(鬼も予想していない乱入者?)

この人からは敵意がしない。むしろこの状況で俺の前に現れたと言うことは味方だ。

「君は物語は読みますか?」

「えっ? まあ読んでいましたが...?」

何を言い出すのかと身構えていたらコレだ。物語? この夢とどう関係があるんだ

「では、主人公がいない物語はどうなるかご存知ですか?」

主人公がいない物語? それは物語として成立するのか? ん、成立しない...? 夢の主人公は俺、

「まさか...!」

「この世界の主人公が退場したら、この世界はどうなるのでしょうか? 竈門炭治郎くん、だから、さっさとその日輪刀で退場しろ。」

ブワッ

急に雪が強く吹き、

「いない...」

主人公不在の物語... 日輪刀で退場... 分かった。この夢から抜け出す唯一の方法。

「う、うわわわわわわわア」

ザシユ

「人の心の中に土足で踏み入るな!」

(何故だ? なぜ何度も術が解かれる?)

(あの女は誰だ? なぜ夢に干渉できる?)

(夢は俺の配下なのになぜあの女は排除できない!)

炭治郎と偽物とはいえ戦っていた魘夢は混乱していた。完全なイレギュラーが炭治郎が眠るたびに、それを認識する前に、夢の炭治郎を切り殺していたからだ。

だが、混乱していたのは炭治郎もだった。

(あの鬼の血気術が俺に効かない？ありえない、俺はあの時は自害して夢から覚めたんだ。同じ血気術なら俺は眠らないとおかしい。)

「ナゼだ！ナゼ夢の中にいるあの女は、本体に危害を加える事ができる！」

(あの女……やっぱりあの人だったのか！)

そうと決まればもう心配はない！列車の本体を斬る！

ヒノカミ神楽 碧羅の天

一方その頃、横浜では、

「I did it! I did it! I can finally pick her up! やった! やった! やつとあの子を迎えに行ける！」

神父さんは1人、念願叶って手に入れた【本部からの返信】を片手に飛び上がっていた。

教会の孤児

神父さんは悲鳴嶼行冥に近い宇髓天元タイプ

「ん…ん？」

光が見えない土の中の匂い、そうか、無事に日が落ちる前に帰ってこれたのか。つまり無限列車編は終わったということか。全く自分のこの体質はどうにかならないものだろうか？考え込むと直ぐに眠気が襲い、下手したら数日も寝込む体質。

「とりあえず、日でも浴びるか。」

スルスル

鬼になってからの身体能力の向上には目を見張る。

こう言ってはなんだが、私は所謂【お嬢様育ち】だ。そうでもなきや、女学校になんか通っていない。当然木登りなどの一般に男の遊びなんてしたことは今世も前世もない。なのに今では当たり前のようにロッククライミングの真似事が出来てしまっている。

「鬼になって得られた少ない利点の1つかな。」

外は晴天、風も穏やかな夏の兆しがきている季節。これからは昼がどんどん長くなり、鬼にとっては不向き、私にとっては有利な時間が増える。これからが楽しみだ。

「しばらく日光浴をして、手紙を出すか」

寝た後は日付を確認しないといけない。神父さんとの交流がまだあった時期、私が寝た後に教会に行ったら日付が4日も経っていて、神父さんを泣かせてしまった事があった。あれからはなるべく寝ないようにしているけど、やっぱり考え込むと寝てしまう。日付も確認できる機械がないこの時代は、日付確認のために街に降りざるを得ない。

「本当は見た目からなるべくは降りたくはないけど…仕方ないか。」

手紙を片手にいつもの郵便局まで修道服で行った。

「この手紙をお願い『その必要はありませんよ』

『ウィリアム神父ナゼここに!』

表向きは異人だし、見た目が見た目だ。探そうと思えば直ぐに情報が集まるだろう、だから神父さんが私がここに来るのを知っていてもおかしくはない。だけど、なぜココにやってきた?

『迎えが遅くなりました。でもやつと準備が整ったのですよ、さあレデイ、あるべき場所に帰りましょう。』

あるべき場所に帰る?

『あるべき場所? 一体どう言う意味『いいから着いてきて』

そういった神父さんは私の手をとって、外へ出た。

そこにはまだこの時代では珍しいタクシーが止まっていた。

『お嬢さん、乗ってください』

と言い、私をタクシーにエスコートし、その後一緒に乗り込んだ神父さんは日本語で、

「アカサカの米国大使館まで」

大使館!? だけど、神父さんは私に不利益なことをする人ではない。

「はい。」

プルル

『お嬢さん、これからの貴方はローズマリー・ベネット。教会付きの孤児であり、シスター見習いです。』

『えっ…。』

なぜ急に? これまで拒否してきた名付けをしたんだ? この人は無理強いする性格ではない。

『神父さん、一体どういことですか? 急に名付けするわ、大使館に行

くわと、あまりにも貴方らしくありません。』

この人は冷静で客観的な判断ができる人だ。私が環境の変化に弱くなっていることは交流期間で理解してくれていた。だから新しいことを始めたり、物を増やす際は事前に私に知らせてくれていた。

なのに、今回の行動はおかしい。

『事前報告をしなかったことは謝りますが、それはそれです。今日を逃せば次はいつ来るのかわからないのです。とりあえず大使館に着くまでに目元の緑はファンデーションで消しますよ。』

『次はいつ来るか分からない？』

大使館、新しい名前、もしかして…！

『単刀直入にいいいますが、今日、貴方は「ローズマリー・ベネット」としてアメリカ人として国籍を得てもらいます。君の身元保証は「イエズス会」です。』

名付けを拒否する君には悪いけど、今回ばかりは私の我儘を貫きますよ、今の君は無国籍、産屋敷一族に拉致されたら私は手出しできません。しかし外国籍を持つ人だったら話は別です。日本警察も大使館も動かざるを得ません、ましてやその人が「宣教師の関係者」だとすれば…ね。』

『まさか…！本気で私に国籍を！』

鬼となつて見た目が変わり、前世の記憶を取り戻した私は、昔の私とは別人だ。何より自分の本当の名前を思い出せない私は、確かに無国籍だと思うし、それを神父さんに「テセウスの船」パラドックスの1つの例を出して話したことはあった。

『君が私に救われたと手紙に書いたように、私も君がいたからこそ布教が進まず、本物のデーモンがいる国に残る決意ができたのです。』

そして…私に《特定の誰かを守りたい》という心を持たせたのは貴方です。お願いです、守らせてください…』

『ウィリアム・ウイステイリアさん…』

お願いの部分から声のトーンが下がり、まるで泣きそうな顔になった。

いや、現実逃避してはダメだ。まるで、ではなく本気で泣くだろ

うこの人は。

『そこまで心配されては…布教に支障がでますよ…、はい、私も覚悟を決めました。』

私に関わらなければ、彼は、ここまでの決意と行動に移ることはなかった。私という存在は確かにこの世界の存在なんだ。

ならば…私も前に進まなければ、

『私、ローズマリー・ベネットは司祭ウィリアム・ウイステイリアの補助として大日本帝国での布教に全力を尽くします。』

ローズマリー・ベネットと言った時、何かガチンと音をたてたように聞こえた。

そう思っていた時に、

「着きましたよ、神父さんとお嬢さん」

「ありがとうございます」

「アリガトー『さあ行きましょう、ローズマリーさん』

『ええ、神父さん』

そこには車でのモヤモヤな心は消えていた。

アメリカ大使館

今とほぼ変わらないアメリカ国旗が風に揺られる中に入った。

(ここが他国の大使館の中！)

前世では縁もゆかりもない場所、まさか大正時代で入ることになるとは思わなかった。ここで働いているのは白人、日本だと浮いてしまう私の肌や目の色は誰も見向きしなかった。改めて自分の容姿が日本人ではなくなったことの証明を見てしまった。

(いや、良い、これで)

これから名実ともにアメリカ人になるんだ。むしろ好都合だ。

『手続きをしたいのだが？イエズス会のウィリアム・ウイステイリアと言えば分かるはずだが。』

『ああ、その子が無国籍の子ですか。』

そう言つて大使館職員の一人在私に顔を近づけた。

なんだろう？好奇心？

『ふーん？確かにその見た目では日本では浮きますね。確か髪の色は…と』

ウィンプル髪を隠すベールのことに手を出してきた時、
パシッ

『子ども相手とはいえ淑女の許可なく髪を触ろうとは失礼では？その子が見習いとはいえ、シスターだと理解しているのか？』

怒声が混じった言葉…。私が産屋敷一族について話した時の声だった。

『オウ…これは失礼しました。では改めまして小さなお嬢さん、髪を見せていただけませんか？』

なるほどね、私が言葉が分からないと思つたのか。どの道これからはこの髪を見せる機会があるかも知れないし、問題ないか。

『ええ、いいですよ』

クルクル

パサッ

髪を切る事がなかったから随分伸びたな。

『これは…確かに本物のエメラルドグリーン…！』

神父さん、あなたが過保護になるのも分かります』

エメラルドグリーンで過保護になる？

『そういう訳です。所で場所は？』

『こちらです。』

私には分からない会話が一段落したら、すぐに移動になった。移動中、神父さんは説明してくれた。

どうにも昔（といつても17世紀）エメラルドグリーンが人工的に作られて女性たちの間では一時期、全ての服や装飾品、壁の色がエメラルドグリーンになったんだと。

でも実際はエメラルドグリーンは有毒性が強く、死者が多発したそう。今では危険性のないエメラルドグリーンが使われているが、

古い世代やフアツションデザイナーの間では「エメラルドグリーン
Ⅱヒ素」というイメージが根強く残っているとのこと。

あの人は元々フアツションデザイナーを志望していたから、この話
を知っていたと解説してくれた。

『失礼します、大使。イエズス会より司祭とシスター見習いです。』

そこからの記憶はかなり曖昧だった。でもすごく緊張したのと、大
使館職員さんが飴やらチョコレートやらを渡してくれたこと、ずっと
神父さんが手を握っていてくれたのだけは覚えていた。

そして、

『書類にサインを』

『はい……！』

【Rosemary Bennett】

『はい、確かにここに貴方をアメリカ人として迎え入れます。自由の
国アメリカへようこそ、ローズマリー・ベネットさん！』

『はい……』

この日から私は、本物の【異人さん】になった。

煉獄家の一コマ

さて、主人公がウィリアム・ウイステイリア司祭の手により「ロズマリー・ベネット」として誕生し、それを報告する為にイエズス会関係者の元に挨拶回りをしていた時期に、

やっと傷が塞りつつあった竈門炭治郎は動いていた。

「ハアハア！」

ありがとう煉獄さんの鴉、俺を案内してくれている

「ウツ：ハア」

やっぱり動くには早過ぎたか、ん？あの子は確か

「千…寿郎君？」

聞いてはいたけど、本当によく似ている。

「煉獄杏寿郎さんの訃報はお聞きでしょうか？杏寿郎さんからお父上と千寿郎さんへの言葉を預かりましたので…お伝えに参りました。」

「兄…から？それよりもあなた大丈夫ですか？顔が真っ青ですよ」

「えっ？」

俺ってそんなに顔色が悪いのか？

「やめろ！どーせ下らん事を言い残しているんだらう。大した才能もないのに剣士などなるからだ。だから死ぬんだ！」

酒？酔っているのか。

「くだらない！愚かな息子だ！杏寿郎は！」

何を…言っているんだ？この男は。

「人間の能力は産まれた時から決まっている、才能がある者は極一部。後は有象有象、何の価値もない散り役立たず…、う…うん。」

まさか、ずっと酒を飲んでいたのか！

「杏寿郎もそうだ、大した才能は無かった、死ぬに決まっているだろう、千寿郎！葬式は終わったんだ。いつまでもしみつたれた顔をするなあ！」

本当にこの男が、あの煉獄さんの父なのか？見た目は似ている、だけど匂いが違う。酒の匂いで鼻が利きづらいが、この男はまるで…暗

闇に迷っているようだ。だけど、

「ちよつと…それは余りにも酷い言い方だ！そんな風に言うのはやめてください！」

「ん？なんだあお前は？出て行け、うちの敷居を跨ぐな！」

「俺は…！鬼殺隊の！」

「空気が変わった？」

「ん！」

パリンン

「はあ！お前…！そうか…お前！日の呼吸の使い手だな！そうだろう！」

「日の呼吸…！」

煉獄さんが言っていた《日の呼吸について教えてくれる人》はやっぱり

「ご存じでしたか！そうです、それについて聞きたい事が…！」

「ふん!!」

「うっ！」

早い…！素人の動きじゃないぞ！

「父上！やめてください！その人の顔を見てください！具合が悪いんですよ！」

「うるさい！黙れえ！」

バシッ

ドン

(千寿郎くん！)

「いい加減にしろ！この人でなし！グツ！ハア…さつきから一体何なんだ！あんたは！命を落とした我が子を侮辱して！殴って！何がしたいんだ！」

「お前、俺たちのことを馬鹿にしているだろう！」

「どうしてそうなるんだ！何を言っているのか分からない！言いがかりだ！」

「お前が日の呼吸の使い手だからだ！」

その耳飾りを俺は知っている！書いてあった！

始まりの呼吸、

一番初めに生まれた呼吸、

最強の身技、

そして全ての呼吸は日の呼吸の派生、全ての呼吸が日の呼吸の後追いにすぎない。日の呼吸の猿真似をし、劣化した呼吸だ。火も！水も！風も！全てが！」

どういうことだ？うちは代々炭焼きだ。家系図もある、日の呼吸、ヒノカミ神楽、いや、それよりも、そんな事よりも！

「日の呼吸の使い手だからといって、調子にのるなよ、小僧オ！」

「クツウウ！のれるわけないだろうがあ！今俺が自分の弱さにどれだけ打ちのめされてると思ってるんだあ！このー！くそジジイ！」

「危ない！父は！」

「煉獄さんの悪口、言うなああ！」

「元柱です！」

「あっ！」

何でだ！もし俺があの中に、ヒノカミ神楽ではなく、日の呼吸を使いきなせていたら煉獄さんは助かったということなのか？何である時、俺は動けなかったんだ！

「ううーううー！」

もう殴られているのなんか気にならない。何でだ？何でだ！

何でなんだー！！

(やっってしまった…。)

人様の家の玄関前で、主人を頭突きしてしまった。

「お茶です、どうぞ。」

「あ、ありがとうございます、ご、ごめんね本当に…お父さん頭突いちやつて…大丈夫だった?」

母さん譲りの俺の頭は、猪を気絶させるほどだ。いくら元柱とはいえ人間が真正面で受け止めてしまったら、それこそ…!

「大丈夫だったと思います。目を覚ましたらお酒を買いに出掛けていったので。」

「そっか…」

無事で良かった…。

「ありがとうございます」

「えっ?」

「すつきりしました。兄を悪く言われても…僕は…口答えさえできなかった。兄は…どのような最期だったのでしょうか?」

「それは、」

(この子はほんとうに)

「そうですね…、兄は最期まで立派に…、ありがとうございます。」

「いえ…そんな…!力及ばす申し訳ありません。」

「気に…なさらないでください…、アニもきつと…そう言いましたよね」

(小さいけど…なんて立派な人なんだろうか。)

「強さとは肉体に対してのみ使う言葉ではない!」

「父がよく見ていた書物には心当たりがありません、これではないかと思うのですが。」

「あ、ありがとうございます。」

「炭治郎さんが知りたいことは書かれているのでしょうか？」

「こ、これは！」

「これは！」

「ズタズタだ。…ほとんど読めない。元々こうだったのかな？」

「いえ：そんな筈はないです。歴代炎柱の書は大切に保管されているものですから。恐らく：父が破いたものだと思います。申し訳ありません。」

よく読んでいたのに破いた？何か：都合が悪いことを書かれていたのか？

「いえ、千寿郎さんのせいではないです。…どうか気になさらず、」

「わざわざ足を運んでいただいたのに、日の呼吸について結局何も…」

「大丈夫です。自分がやるべき事、分かっていますので、もつと：鍛錬します。」

「俺は日の呼吸以前に、舞の手順を知っているヒノカミ神楽ですら、使いこなせていないのです。」

「そ、そうなんですか。」

ヒノカミ神楽が日の呼吸を元に作られた神楽であるというのは、レデイさんの手紙で知っていた。でも俺は…

「全集中の状態でヒノカミ神楽を使うと、体が思ったように動かなくなります。俺の問題です。」

技に体が追いついていない。

全集中の常中で体力が向上しましたが、それでも足りない。

常中出来れば、日1日と体力が向上してゆくとの事だったけど、一瞬で強くはなれないんです。

あの時、俺がもつと強かったら一瞬で煉獄さんを助けられるくらい強かったら、強くなれる方法があったならば、ずっと考えていました。

だけどそんな都合がいい方法はない。

近道なんてなかった、足掻くしかない、今の自分が出る精一杯で、前に進む、

どんなに苦しくても、悔しくても、そして俺は杏寿郎さんのような強い柱に…！必ずなります…！」

病弱だった父さんができていた神楽すら舞えない。

だから俺は鍛錬を続けなければならぬ。

その話をした後、千寿郎くんは俺に話してくれた。煉獄家の伝統を。

「…兄には継子がいませんでした。」

曰く、

代々炎柱は煉獄家の人間が実力で継承していたこと

本来なら千寿郎くんが杏寿郎さんの継ぐ子となって、鬼殺隊で実績を積み重ねてきたこと。

でも、千寿郎くんは色変わりの刀の色が変わらなかったこと。

「ウ…：けんしになるのは、あきらめます。それ以外の形で人の役にたてることをします。炎柱の継承は絶たれ、長い歴史に傷はつきませんが、兄はきつと、許してくれる。」

「正しいと思う道を進んでください。千寿郎さんを悪く言う人がいたら、俺が頭突きします！」

「それは、やめた方がいいです。」

「あつ…：はい…。」

「歴代炎柱の書は、私が修復します。他の書も調べてみます。父にも聞いてみて何か分かったら、鳥を飛ばします。お話ができてよかったです。気をつけてお帰りください。」

「いえ、こちらこそ、ありがとうございました。」

「そうだ、炭治郎さん、これを…受け取ってください。」

千寿郎くんが懐から出したのは、

「兄の日輪刀の鍔です。」

「い、頂けません、こんな大切な物、俺は！」

何も守れなかったのに…

「持っていて欲しいのです。きつと、あなたを守ってくれます。」

「ありがとう…。」

刀が出来次第、鍔を換えないと。刀…、そういえば鋼塚さんは、
プシュープシュー

「刀アを無くすとはどういうことだー！ばんじい！万死に値するウウ
!!」

「ごめんなさーいい!!」

一方その頃、煉獄父は、

だからあれ程言ったのに、馬鹿息子が。炎柱は俺の代で終わりだ
と。

所詮炎の呼吸は日の呼吸の下位変換、

『体を大切にしてほしい』兄上が父上に残した言葉はそれだけです。」

「ウツ、きょうじゅろうウ…」

どうせなら恨んで欲しかった、軽蔑してほしかった、どうしようも
ない父だと、呑んだクレの馬鹿親父だと罵倒された方が楽だった。

いや：俺の息子がそんな事を言うなんて万に一つもないと俺が一
番良く知っていたのに…。

「お久しぶりです。」

この声はあいつか…、

「何のようだ、お前の予言を放置した俺の様を見に来たのか」

この女は元々杏寿郎に憑いていた。いや、服装だけを見れば娘と
言った方が正しいが相手は亡霊、実際の年齢は分からない。

俺が視えていると知った後は、俺に憑き始めた。

遡る事数ヶ月前、

「行つて参ります、父上！」

いつものように挨拶をした杏寿郎を無視し、酒を飲もうとした時、「聞こえますか、やっぱり聴こえてないか…、あなた無限列車で上弦の参に殺されますよ。」

「はっ？」

この屋敷にいるのは杏寿郎と千寿郎、そして俺。何だ、この聴き取りづらい女の声は。

「杏寿郎、少し待て！」

「はい！何でしょうか父上！」

杏寿郎の後ろには見覚えのない女がいた。しかも、この女…影がない。亡霊か？だが…それにしても内容が具体的過ぎる。

「お前、最近身体が悪いのか？」

杏寿郎には視えていない上に、亡霊は『上弦の参に殺される』と宣言している。

「身体…ですか？いえ、柱となつてからは調子が良いくらいですが？父上、何かあつたのですか？顔色が真っ青ですよ。」

「よかつた〜！視えてるんだ、初めましてキョウコと申します。」

幻覚か…、酒は控えるべきか。

「いや…なんでもない…。引き止めて悪かつたな、さつさと行け。」

「はい！行つて参ります！」

「はあ…」

「視えてるのでしよう、私は幻覚ではありません。どうか私の話を聴いてくれませんか？」

鬼の血気術…にしては害がない。

「とりあえず話しますが、このままでは貴方のご子息は無限列車の任

務で途中参戦した上弦の参、猗窩座に殺されます。上弦の参は女は殺せません。無限列車の任務では派遣する柱を女性の蟲柱や恋柱に変更してください。」

家には千寿郎がいるから話せない。」

それにしてもこの女、なぜ上弦の内部情報に詳しいんだ？見た目は人間だ。それに服装はまさしく現代、少なくともここ100年は上弦の討伐報告がない以上、上弦の人間時代を知る者がいるとすれば、同じく100年以上前の人物でなければ道理が合わない。

「私は正直に言えば、鬼の事も人間の事もどうでもいいです。あの子の安全が保証された以上、鬼殺隊と関わることもの方が身を危険にしますから。しかし…あんな子どもが命を落とすのを黙って見ているほど、人の心を捨てた覚えはありません。」

子ども？俺よりも立派なアイツが？

「亡霊が何を言っている？それに杏寿郎は二十歳、立派な成人だ、それを子どもだと？お前の目は腐っているのか？」

「目が腐っているのはアナタの方ですよ、杏寿郎さんは所謂、外国の言葉で言うところ【アダルトチルドレン】です。」

「アダルトチルドレン？」

異国の言葉を知りそれを使う娘、やはり服装からみて女学生か。

「アダルトチルドレン…。主に家庭環境が原因で…大人のような性格に成らざるを得なかった子どもの事を指します。慎寿郎さんに質問します。あなたの息子さんが父であるあなたに弱音をはいた事を思い出して下さい。」

杏寿郎が俺に弱音をはく？飲んだくれの俺にか？

「そんな事一度もなかったが？」

「やっぱり…ですか。ですがこれであなたの息子が異常な精神状態だと証明できました。」

杏寿郎か【異常】だと？どこがだ、途中で脱落した俺と違いアイツは柱としての責務を全うしている。その何処が異常なのだ？

「お前…アイツに憑いていたのだからアイツがどれほど立派な心持ちか知っているだろう、なぜそれを異常者扱いする？」

「あなたこそ、何も分かっていない…。子どもとは親に甘えて、我儘を言つて、叱られて、それによつて善悪とやつていい事と悪い事を学び、愛情をもつて『心』を創るものです。ですが、あなたの話を聞くにまともに息子さんと過ごした日々の絶対数が少ない。別に親が育てなくても周りが育てれば《立派な大人》に育ちます。しかし彼はそもそも特殊な環境下にいる。奉仕するのを当然と思い、自分の身を守る為に尽力する心がないに等しい。彼の心は空っぽだ。虚だ。このままでは…」

「他人風情がずいぶんとまあ流暢に『他人の息子の心』について話すな」

俺は駄目だったが、アイツは違う。アイツは全力を尽くせる、それこそ上弦の月相手でも。

そんな俺の心でも読んだかのように、

「ええ、上弦相手でも文字通りの死闘を繰り広げ、華やかに死にますね。周りの命を守る為に。」

想像しやすい光景だ。アイツなら確かにそうするだろう。だが、

「俺に話して何を企んでいる？亡霊」

「企むなんて人聞きが悪いですね。ただ、一度は親子で本音を話す機会をつくりたい…ですかね？私は親に自分の心を隠したままこのような姿になってしまったので。生きているあなた方は後悔して欲しくないのです。」

「アイツは俺がいなくても立派にやっついていく…何も話すことはない。」

ブワッ

ガタガタ

「ナゼ言わない…！」

愛している！死んでほしくない！だから鬼殺隊は辞めてくれ！と縋ればいいではないか！言つて後悔するのと言わずに後悔するのは違う！」

「お前こそ何だ！勝手によその息子に取り憑いて挙句に『上弦の参に殺される』と不吉なことをほごぐ！出て行け！」

と怒鳴つたら、

「分かりました。」

拍子抜けするほどあっさりと亡霊は去っていった。

そうして、亡霊は出てこなくなった。杏寿郎の葬式が終わり、忌々しい日の呼吸の使い手のガキが来る日までは。

「結局…お前の予言は当たった。」

亡霊の嫌がらせだと一蹴し、杏寿郎と話すことなく本人はあっさりと黄泉の国に旅立った。

「杏寿郎亡き今、俺に用もないだろう。日の呼吸について話すことはないぞ」

日の呼吸の使い手が現れた日にまた亡霊はきた。今度はあのガキが死ぬのか。

「いえ、日の呼吸はどうでもいいです。用はありますよ、あなたにね。」
「また予言か。」

「予言なんて大袈裟な。私はただ知っている情報を教えただけのこと、そんな事よりも、これから貴方はどうするのですか？」

「俺か？」

日の呼吸をそんな事と一蹴する。本当に鬼殺隊も鬼もどうでもいいと思っっているのだな。

「とりあえず…酒をやめることにする。」

日の呼吸の小僧に軽蔑されたら、それこそ末代までの恥。

「そうですね。…ならば、私の話し相手になってくれませんか？鬼殺隊はどうでもいいですが、私を視れる人は今のところ貴方だけなの

で。」

「話し相手？」

酒をぬく際に、酒欲しさに暴れる事があると聞いた事がある。千寿郎に手が出る事態は避けなければならない。相手は女とはいえ亡霊、俺が傷つける心配はない。それに上弦の…真偽が分からぬとはいえ、情報を持っている。

「構わん、千寿郎がいない時なら話し相手になつてやる」

「ありがとうございます。」

その後、千寿郎が尋常小学校に行っている昼間の時間に亡霊がやってくるようになった。

「あ！酒瓶全て破棄したのですね、思いつ切りがよくて気持ち良いです。」

ある日は酒瓶が無くなったことを楽しげに話し、

「上弦の情報を…ですか？まあ構いませんが、とりあえず鬼となった原因が人間側にあるのが、上弦の壺、式、参、陸ですかね。式に関しては微妙ですが、それでも真つ当な愛情を受けていたら鬼となつても今のように歪まなかった可能性が高かったですし。」

またある日は、俺が『何か面白い話はないのか？』と聞いたら上弦の過去話をし始め、

「何故、上弦の人間時代を知っているのか？ですか。まあ私って、見ての通り『亡霊』でしょう、だから時の流れから外れているのですよ。数100年前でもまるで昨日の如く知ることが出来る。亡霊だからこそできる事ですよ。」

それに疑問を突きつけたら回答はコレだった。相手は幽霊、この世の理で通じる相手ではないと知った。

「500年前からあなた方は変わりませんね、それに苗字が《煉獄》やはりカトリックとの関係があるのですか？」

ある時は先祖の話をし始め、

「カトリックとはいわゆる耶蘇教の宗派の一つです。そして《煉獄》の概念はカトリックの宗教用語の一つです。」

生前小さい罪を犯した者、地獄に堕ちるほどではないが、かと言って天国：極楽に行けるほどの善人ではなかった人が、罪を浄化して天国に行けるようにする為に、己の身を炎で燃やし尽くす所。」

異国の宗教話をし始めた。鬼殺一択で鬼殺関連の知識と一般常識しかなかった俺には、中々興味深く、【炎柱ノ書】には載っていないかつた、あつたかもしれない先祖が鬼殺隊に加わった可能性の話は年甲斐もなく楽しかった。

思えば、こんなに誰かに話しかけられたのは妻が生きていた頃以来かもしれない。

「鬼殺には、あまりにも……優しすぎる苗字ですね。」

この言葉はかなり印象に残った。

そして、俺が酒断ちに成功した日、幽霊は言った。

「どうか…竈門炭治郎と鬼の妹、そして何より、千寿郎くんを導いてください。亡霊となった私にはできないことなので…。」

「ああ、了解した。子どもが命をはっているのだ。大人の俺が立ち止まっている訳にはいかない。」

それと、

「こちらこそ、俺の話し相手になってくれて…ありがとうございます…」

そう言うと、幽霊は、

「キョウゴ…香りに子と書いて、【香子】と言います。こちらこそありがとうございます…意味がわからない私の話し相手になってくれて…。それは、さようなら。」

「ああ、さようなら…」

そして、幽霊ごと、香子はこの日以降、この屋敷にやってくることはなかった。

とあるジブリ作品のようなお話。

「ここが……私の部屋」

ここ数ヶ月、アメリカ国籍と新しい名前を得たことを関係者に報告する為に宣教師や先に入国しているシスターさん達との交流や他県だと手紙のやり取りに追われていたから自分の立場を忘れていた。

これまでは大使館から浅草、横浜、カトリック教会の布教支援者との交流で一つ所に留れず、現地の旅館（少し高いけど強盗対策で泊まっていた）や支援者ならゲストルームに泊まらせてもらっていたから自分の部屋を必要としていなかった。

でもこれからは違う。

『なるべく君が過ごしやすいように、南向きの部屋を用意したよ、外の空き地は昔は畑だったそう。今は誰も使っていないから君が使っても大丈夫だよ、許可は取った。』

さらりと神父さんは言ったが、かなり大変な事をしてしていると自覚はあるのだろうか。そもそも司祭だろうが修道女だろうが教会という組織の一員であるのは変わらない。言うならば《大きな家族》だ。集団生活が基本で私有財産を持ってない立場である。だから物や部屋は下着とかならともかく基本的には借り物で共有財産だ。（修道女服も借り物）いくら私が表向きは【迫害から逃げてきた10歳の子ども】であり、まだ【誓い】を立てる前の見習い期間とはいえ、1人部屋を与えられるなんて度を超えた鼻痕だ。

『神父さん、いくら見習い期間だからと言ってもこれは…あまりにも鼻痕が過ぎます。私の体質上確かに1人部屋は有難いです。ですが、ただの子ども相手にこれほどの配慮を行えば、傍目から見れば他の聖職者に誤解されてしまいます。』

そう…これまでは、神父さんと出会ったあの教会は、基本的には神父さん1人の在住だったから派手な行動をしない限り問題なかった。

でもこれからは違う。常に誰かが見ている。こんなあからさまな垢鼻痕は…、

『何か誤解しているようですね、君に1人部屋が与えられたのは君が

病弱だからですよ。』

『病弱?』

病弱だから1人部屋?むしろ病弱なら人が多い場所になりそうだけど。

「レディ:いえ、ローズマリー・ベネットさん」

「はい、なんででしょうか?ウィリアム・ウイステイリア司祭。」

雰囲気ガラリと変わった。これは:仕事の顔だ。

『ローズマリーさん、あなた:訪問先で食事を提供された時、その場で食べては吐き出していますよね。紅茶や野菜類などは耐えれましたが、肉類はまるで駄目でした。』

『ええ、』

集団生活を送るにあたって1番のネックは食事だった。

鬼は基本的には人肉しか食べれない。

他の物で代用しようにも吐き出してしまう。

私は植物寄りになったから、茶葉や野菜などの植物系の食材なら我慢が効いたが、肉類は駄目だった。

どうしても吐き戻してしまう。

でも訪問先では食事を提供されるのが常だった。

礼儀上断る訳にはいかないし、食べる姿を見せないと自分が人間ではないとバレる可能性が高い。

案の定、食べては吐いてを繰り返した。

『君が病弱であること、野菜類は問題なく食べているように見える事、この2点が前提条件にあつたので君の《食事の吐き戻し問題》は自然に見えなかった:。ここまではよろしいでしょうか?』

『はい。』

訪問先の人たちには悪いことをしてしまった。食べた物を速攻で吐き戻した私の姿で食事の場合は凍りついた。

事前説明をしていたけど、まさか:動物性油も駄目だったとは:

『あまりにも食事に制限がかかるので、こちら側も【保護した子ども】とはいえ毎回食事を準備するとなると、手間と時間がかかりすぎる。正直、あなたに割ける時間は多くない。でも保護した手前、君を世話

する義務が生じる。』

『つまり：畑をやる代わりに食事は自分で作れと言うことですか？』
『ええ、その通りです。こちらも流石に子ども1人で全てを賄わせる訳ではありません。野菜を育てる際には大人も参加します。それに君は表向きは10歳の少女です、他の修道女のように外出制限があるわけではないし、現時点では君が本気で修道女になるとは誰も思っていないません。だから男である私が君の部屋に訪れても誰も苦言を言わないのですよ。』

君に1人部屋と畑が与えられた本音はそれです。

今の君はただ：朝のお祈りさえしていれば、後は畑を耕すなり、教会の手伝いをするなり、修道女に料理を教わったり好きに過ごしているのですよ。子どもを頼るほど我々はプライドを捨てていませんからね。』

最後はほぼプライベートの顔になった神父さんは話が終わった後には教会の掃除をしに帰って行った。

「何をしてもいいとは言われても、畑を耕す：私の前世は農家じゃないからなあ。こんな見た目のせいで顔も知らぬ親に捨てられた私に、結構な無茶を仰る…。とりあえず、もう一個作るか、カイマクルを。」

「…… What?」

私の独り言を聞いた神父さんが怪訝な顔をしていたのを、その時の私は気づかなかつた。

▽▽▽

「と…言うことがあつたのですよ。炭治郎くん、」

煉獄さんの死後、ヒノカミ神楽の特訓をしながら横浜に近かつたからウイステイリアさんの所に寄つたら、怒涛の勢いで新情報もたらされた。えつと…つまりは、

「レディさん改めてローズマリー・ベネットさんは、元々は大日本帝国の生まれだけど、見た目で迫害されていたから、戸籍もなく、事実上の無国籍で、それをウイステイリアさんの国が保護したのですよね？」

「はい、彼女は知識こそ豊富ですが心の成長は遅い人ですからね、実質10歳児と会話しているようでしたよ。私も彼女の本当の年齢は分かりませんが、本人も分かっていないですよ。」

あの見た目と、異国の言葉が流暢なレディさんが元々は日本人だったとは思わなかつた。てつきりウイステイリアさんと同じ国の人だとばかりに。

「それとローズマリーさんの独り言と何か関係が？」

「ローズマリーは、私と最初の教会で交流していた時は《山菜の話》をしていたのですよ。」

「えっ…？山菜の話、なのに畑仕事をした事がない？」

「おかしいでしょう？山菜やタンポポなどの一般的に食べられる植物の話をしてきた人が、畑仕事が出来ない、やり方が分からないなんてあるのでしょうか。」

確かに、それだと話の辻褄が合わない。でも、レデイさんがわざわざ嘘をつく理由がない。

でも、彌豆子も鬼となつてから記憶の退行が見られる、ましてやレデイさんは最初会った時から英語が出来ていた。

「元々日本人だという記憶が間違いなのでは？」

「それはいいですね、もし彼女がこちら側の人だったのならば、着物を1人で着れるわけがありません。」

どうやらウイステイリアさんの国の人には、俺たちの日常着は使いづらい物らしい。わざわざ洋服があるのに、着づらい着物を好んで着る人がいたら目立つとのこと。だとすれば、

「記憶が…薄れてきている…？」

「やはりそうですか…。ネズコさんの実年齢と中身の幼さを知っているので覚悟はできていましたが…やはり、本人は知らずとも、記憶がなくなる様を見るのは…辛い…ものです。」

俺は彌豆子の本来の姿を知っている。

でも、ウイステイリアさんは違う。

大切な人から記憶が薄れていく様を見続けて、それを指摘する事も出来ないのは、辛いよなあ…。せめて、

「これから沢山の思い出で埋めて下さい。溢れても、また埋めれば、ローズマリーさんは生きることができるとでしょう。」

俺はローズマリーさんに鬼殺の情報を与えられてばかりだ。本当は俺も何とかしたい、でも出来ない、俺は《鬼殺隊》彼女が《鬼》である限りは、

「最後に…これを」

厚みがあるインク入れを差し出された。これは一体、

「万年筆のインク入れ？」

「中身はローズマリーの血です。」

「えっ?」

なぜこれまで断ってきていたと言う【血の提供】を急に?

「ただし条件があります。」

「はい、何でしょうか」

「1つ、これを渡す代わりに珠世、愈史郎はローズマリーに近づくな

2つ、人間化薬の試験薬を無闇に鬼に使い太陽に耐性がある鬼を増やしてはならない。

3つ、人間化薬は最低4つは造ること

4つ、人間化薬を投与するのは竈門ネズコを最初とすること、

最後は：ローズマリー・ベネットを戦地に巻き込む事は許さない

以上です。これを守るならば今すぐにでも渡しますが、守れる保証がないならば、君が《上弦と対峙して生き残れたなら》条件なしで提供します。どうしますか?」

上弦と対峙して生き残る：事実上の提供拒否だ。本当は今すぐにももらいたい、でも、全ての条件を満たすことはできない。特に条件の最後、「ローズマリーさんが鬼殺隊と関わらずに全てを終わらせる」のは不可能だ。お館様が【太陽を克服した鬼】という最強の撒き餌を使わないなんて有り得ない。でもここで嘘をついたらいけない。匂いが、決意の匂いが強い……!

「俺が…俺が上弦と対峙して生き残れたなら、その血を貰ってもいいのですよね?」

「はい、無限列車の話と君の決意を聞いた今、私は君を1人の《戦闘員》とみなします。民間人ではない以上、こちらが譲歩する理由はありません、それなりの報酬を求めます。」

「わかりました…!俺は…必ず上弦と対峙して生き残ってみせます!」

1人の鬼殺隊士として認められたんだ。ならウイステイリアさんとローズマリーさん、この2人の期待に応えなくては!

「そうですか…、日が暮れてきましたね、そろそろお戻りを。」

「はい！失礼します！」

バタン

▽▽▽

「駄目だったか…このままでは本当に、上弦の首をとってしまおう。

すまない…ローズマリィ、養子縁組よりも先に鬼の殲滅が始まりそうだ。」

「Jogen no Riku, the fallen princess Gyutarobrothers were defeated in a red-light district by Tengen Onbashira, Tanjirou Kamado, Inosuke Suiehi and Zenitsu Uzumaki. As a result」

カイマクル2号

桜が咲き始めた時期、私はついに決心した。

「カイマクルを作ろう」

最初に作ったカイマクルは、神父さんと横浜に移動した以上、往復できなくなってしまう。こういう時は不便だよな、身元が保証されているというのは。

もちろん、不便よりも利点の方が大きかったが、特に1番嬉しかったのは、

この見た目で、大手を振って歩けることかな。

流石に昼間は横に伸びる髪は隠さなくてはならないけど、【異人の子】【教会の子ども】と身元が保証されているから、日本人はもとより、商売や外交で来ている外国人からも声をかけてもらえる。（大体好意的な意味合いで）

場所が外国人の多い横浜の港街だからか、日本人もある程度英語ができたり、警察官も浅草よりも質が高い。なんとと言っても、この生まれ持った緑の髪を異端視する人がいない。

「今が幸せすぎる…」

怖いくらいには。

だからこそ、備えなくてはならない。誰だっけ？『幸せが壊れる時はいつも血の匂いがする』と言っていたのは。

流石に鬼殺隊も、外国人が多い横浜周辺で、刀を振るって襲いかかる事はしないだろう。鬼殺隊は政府非公認、ちよつと怪しい所はあるけど、鬼の存在が公にされてない以上、私や私の関係者に危害を加えたら、外交問題になってしまう。

いくら産屋敷が強大な権力と財力を持っていても、ようやく列強に加われた国であり、まだ西洋国家から見れば二流国家な面が抜け切らない国の貴族だ。

正当な手段で国家の承認を得て入国している外国人を襲ったら【一流国家】から、また【野蛮な国】に評価が逆戻り。

そんな事したら、帝国の面子を潰したも同然。

産屋敷の権力が大きくても、いや大きければ大きいほど確実に潰しにかかるだろう。

産屋敷一族は狡猾で、表裏の落差が激しい。

死刑囚を非合法な手段で解放させて、本名で活動させている時点で国家との癒着は確実にある。だけど、だからといって《産屋敷一族を政府が守る》か？と問われれば答えは確実に否だろう。

《政府が守る》ならとうの昔に鬼殺隊は国家公認の非公開武装集団になっっている。

だが現実としてなっていない。

「利害関係が合うから【見逃してあげている】だけにすぎない」

ガツガツ

政府は【鬼の存在を国外に知られたくない】

産屋敷は【一族の汚点を自分達の手で滅ぼしたい】

政府側の気持ちはわかる。だって相手は事実上の【不老不死者】だ。

金、権力、名声、女を手に入れた者が最後に求めるのは不老不死だ。

それは日本でも外国でも変わらない。一部の日本人は鬼の脅威を知っているし、鬼のデメリット（無惨の呪い）も知っているから、不老不死でも【鬼】に憧れを抱く者は、よっぼどのド変態か、狂人だろう。

でも外国勢力は違う。【不老不死】【死なない兵士】なんて、まさしく【夢】だ。研究材料として【鬼】と接触するアホや、『鬼を寄越せ』

と日本政府に要求する国も出てくるだろう。もしかしたら古い時代にそういう話が出てきたから、公認できないのかも知れない。

政府側は擁護できるが、産屋敷一族は違う。

私は前世では漫画の一面しか見ていないから、違うのかもしれないが、産屋敷一族は千年もかけて、たった1人の男を殺す事に躍起になっっている。それはいい、『身内の恥は身内で収めよう』という気概は立派なものだ。……外部に被害が出なければの話だが。

実際問題、鬼舞辻無惨が起こした被害を見れば、本人が最終決戦で言った『私を災害だと思え』は間違っではない。災害クラスの被害を生み出しているのは事実だからだ。そしてそれを間近で見てきた

のは産屋敷だ。もはや、一族で滅ぼす云々言っている状況ではない事を、1番理解していた筈だ。

なのに：外部の協力を仰ぐ事はなかった。もしかしたらあったのかも知れないが、漫画ではそういう描写はなかった。

仮に日本人でダメだった場合は、今の時代、外国を頼る事も出来た筈だ。藤襲山という鬼の存在を証明できる施設まである。なのに《先見の明》というチートクラスの能力保持者でありながら、頼らなかった。

あくまでも私兵で滅ぼそうとした。

ガツガツ

「土が柔らかい：海が近いからか。ここから部屋を作ろう。」

こういう時は便利だ、長く尖った爪は、

1人とはいえ、冤罪だとしても、法のもとで裁かれた死刑囚を解放、本名で生活できているから、確実に書類上は「処刑済」になっている筈だ。刑法の裁きを、いくら名門の当主とはいえ警察関係者ではない民間人が法を捻じ曲げている。

「後ろに少なくとも、特高現在の公安あるいは軍が関わっているとしか思えない。」

そうなるとさらに解せないのは、何故、協力を得られたのに使わなかったのか？だ。産屋敷は利用できるものなら、それこそ《人喰い鬼》でも使う。

《珠世》なんて良い例だ。《鬼》は使って《人間の権力者》は使わないなんて、不自然すぎる。

「やはり名譽を捨てきれなかったのか？」

ガツガツ

産屋敷一族は復讐に囚われているが、馬鹿ではない。馬鹿だったら今頃鬼の存在は日本中に知れ渡っている。

だから最適解は分かっている筈だ。

《鬼の被害を最小限に抑える》最適解。それは、

《国が民衆に鬼の存在を公表すること》

《藤の香り袋の所持、外出の際は香り袋を肌身離さず持つことを義務

化すること》

この2つだけでも、弱い鬼なら被害を抑え切れる。その空き分を強い鬼の討伐に当てれば、被害は減らせるし、鬼殺隊士の仕事量も減らせる。

私でさえ考えつく方法を、産屋敷一族が考えつかない事はない。分かった上で、やっていないんだ。

「所詮は華族、平民の死体がどれほど積み重なっても気にしないのか。」

この時代で過ごしていると、本当に現代ではあり得ないほどの【階級社会】だ。

まず男女差別がすごい。

正直にいうと『女は男の影に隠れて育児と家事に精を尽くすのが理想』という考えは、悲しいかな、

現代でも残っているから気にしてない。

それにこの言葉自体は差別？というよりは区別に近い。

実際、機械化が進んでいない今、ほとんどの職業は女が働くとなると、体力が足りない。身体を壊す可能性が高いなら『家にいてくれ』という男の主張はむしろ、女性を気遣っていると言える。

問題は：『女に個性は必要ない』という主張だ。

女性雑誌で書いてあった。

内容は本当に酷かった：が、現代でも同じ考えが残っているから本質的には変わっていない。だが違うのは表立って言われている現状だ。

田舎の爺さんの主張ならまだしも、これの主張者はあろうことか女性雑誌の編集長だった。

「ほんとうに嫌な時代…嫌な国…だ！」

ガタンツッ！

アメリカ国籍にしてくれた神父さんは、私を子どもだから、女だから、と侮ったりしなかった。男女差別の歴史は深い。アメリカも例外ではないが、神父さんのような人がいるなら、少なくとも日本よりはマシだろう。話が脱線してしまった。

まあ結論としては、

「産屋敷一族は信用も信頼もできない人間だと言うことだけだ！」
とりあえず、大まかな空間が出来たから今日はここまで。

▽▽▽

『ローズマリー！ローズマリー！』

『ここです！ウイリアム神父！』

やばい、時間が経ちすぎていたか。井戸から空間を作る際は、時間感覚がなくなるのが厄介だ。腕時計でも有ればいいのだけど。

『もう、心配しました！どこにいたのですか、日が落ちていますよ。』

『はい、ごめんなさい。』

『はあー無事で良かった。井戸から出てきたのには驚きました。ですが、ほどほど…にね。』

シークレットのジエスチャーをした神父さん。やっぱり人として信頼できる人ってこんな人だよね。

『さあ、帰りましょう』

『はい、神父さん』

2人の顔は、とても穏やかだった。

「お館様、引退した私を呼ぶとは何事ですか？」
「君のところに来た面白い人について教えてくれないかな？ 慎寿郎。」

最初の贈り物／最高の情報

「うーん…あつ！お祈りしないと。えっと…」

『新しい朝を迎えさせてくださった神よ、

きょう一日わたしを照らし、導いてください。

いつもほがらかに、すこやかに過ごせますように。

物事がうまくいかないときでもほほえみを忘れず、

いつも物事の明るい面を見、

最悪のときにも、感謝すべきものがあることを、

悟らせてください。

自分のしたいことばかりではなく、

あなたの望まれることを行い、

まわりの人たちのことを考えて生きる喜びを見いださせてくださ

い。

アーメン。』

《鬼》が神に祈る…か。滑稽な話だと思う、でも…それでも願ってしま
う。

「早く終わってほしい…」

無理な話だと分かっている。

『ローズマリーさん、畑の種が芽吹きましたよ』

『本当ですか！直ぐに行きます！』



『相変わらずですが、面白い髪質ですね。』

『ええ、私もそう思います。だけどコレのお陰で日焼けしないのです

よ』

私は植物系に進化？したとはいえ《鬼舞辻系の鬼》であるのは事実。

太陽が弱点であるのは変わらない。

この髪がなければ私は太陽に灼かれて骨も残さずに死ぬ。

出来れば「髪」の事は隠し通したかったけど、畑を活用するとすると、どうしても昼間に動かざるを得ない。神父さんと相談した結果、『元々、特異な体質で迫害されていたから髪もソレで通してみても？緑の髪自体も目立つものなので。』

と言われたので『体質です』と言い切ってみたら、

その：通った…。

さすがは…宣教師とその関係者。

肝の太さが違う…。

『そういえば、そろそろイースター（復活祭）ですね。畑の野菜は順調に育っていますし、私たちは卵のペイントに移りましようか。体調は大丈夫ですか？ローゼ』

『はい、大丈夫です。シスター』

そう、暦は早くももうすぐ4月、教会関係者はイースターを前に肉類を控えて、祈りを捧げる時期になっていた。私は関係者じゃないけど、体質上、今は他の司祭関係者と同じ食事を摂っている。

そうして畑を見終わった私たちは、教会で卵のペイントに移った。

▽▽▽

『ふー、楽しかった！さあ日記に移ろう』

神父さんがくれた日記用のノート。英語の勉強にもなるからその時の気分に合わせて、日本文、英文を書いている。

『今日は…日本語で書こうかな』

.....

3月
????日

今日、畑で植えた大根とハーブの芽が出ていた。

シスターさんが言うには『育ちが良い』とのこと。

それとイースターが近いから信者さんやシスターさん方と一緒にイースターエッグのペイントをした。

色とりどりの模様が美しく、イースターの日が楽しみだ。

イースターでは普段は来ない子供もたくさん参加すると聞いたから盛り上がりそうだ。

そうそう信者さんの1人、村田梅さんは最長年で60歳！彼女は、まだ禁教令が解かれる前からキリスト教を信仰していた人。

まさしく命がけの信仰を貫いた人でした。

その人からふと言われた言葉が印象深かったな。

「迫害されていたとは聞きましたが、ちゃんと愛されてもいたのですね。安心しました。」

随分とおかしな事をいう人だった。確かに今では、この見た目のお陰で神父さん達に会えたし、私も幸せだ。でも、それは彼ら彼女らが【外国人】だったからであって、私は【日本人】に愛された思い出はない。でも村田さんのあの目は、シスターさん方に向いた目ではなかった。

.....

「本当に…何をどう見たら、私が愛されて育つたと見えるのか？」

前世の記憶か？確かに前世なら平凡な家庭で愛されて育つたから、村田さんはそっちの記憶でも感じたのかな。

『考えるな、今が幸せならそれでいいではないか。』

分からない事を考えても無駄だ。今を生きればいい。

そういえば…この薔薇の髪飾り、誰に貰ったんだっけ？後で神父さんに聞いて…文字が書いてある？

【香子】

「カオリコ？それともキョウウ…子…？」

ズキンッ

「うっ…」

「女学校入学おめでとう、本当に大きくなって…」

「お前、今からそれじゃあ嫁入りの際はどうなることやら」

「まあ、あなただつてソワソワしていたわよ」

日本の家、日本人の夫婦、女学校入学……。まさか……

「今の記憶が今世の私なのか……？ そうだ日記！」

英文、日本語、ごちゃ混ぜに書いてある日記帳だが、私は読める。問題ない。

.....

February first,

Dad, mom, please be happy in a world without demons. Please forgive those who are unfilial to die before their parents.
.....

「2月1日、お父さん、お母さん、どうか鬼のいない世界で幸せになつてください。親より先に逝く親不孝者をお許しくださいませ？」

父、母、両親、わたしは……私は何かを忘れている……？」

『ローズマリー！手伝つて！』

『はい！直ぐに行きます、シスター！』

あれ？私、何を考えていたんだっけ？

▽▽▽▽

ところ変わって、

「お久しぶりです、お館様。」

「久しぶりだね、慎寿郎。」

カコーン

「ところで本題は？」

目星はついているが。

「相変わらず君はせっかちだね、そうだね…君の元に来たキョウコというお嬢さんの話を聞かせてほしい。」

やはりか、大方杏寿郎の鎗鴉【要】が伝えたのだろう。アイツは息子と同じくらい律儀だからな。

「相手は亡霊、存在の証明は不可能。いかに上弦の過去話とはいえ、鬼殺に有利になるとは限りませんが？」

お館様がどこまでの情報を知っているのかを、確かめなければならぬ。疑う訳ではないが私を密偵と見ているかもしれない。

「もちろん、君が話せる範囲でいいよ。私たちは主従関係ではないのだから。」

主従関係ではない。……鬼殺隊に長く在籍していたせいで忘れていたな。

お館様はあくまでも【雇用主】
隊士や隠は【従業員】

そうだな、俺が話さなかった所で煉獄家に影響を及ぼすことはできない。…なら、俺の気持ちは？

俺はどうしたい？千寿郎には鬼狩りの才能はなく、俺自身は引退した身。鬼殺隊に拘る理由はない。

杏寿郎ならば…杏寿郎なら迷わずに話すだろう。

アイツはそういう奴だ。

「行って参ります！父上！」

俺自身は？俺は何を望んでいる？

人を救う事？いや、俺は煉獄家の長男として、産まれた時から鬼狩りの道しかなかった。

「人を守り、救う事」その事自体に不満はなかったが、好き好んで鬼狩りになった訳ではなかった。

溜火は言った。

「生まれつき強く産まれた者は弱き人を守るのが責務です。」と。

その言葉は間違いなく正しい言葉だ。杏寿郎もその言葉に従った結果が今だ。

だが…俺は心の中でこうも思った。

(ならば、強い者は誰に守ってもらえばいいのか?)

何も守るは直接的な意味合いだけではない。

心を守るのもまた強い者だろう。俺にとつては溜火がそれだった。どんなに炎柱の責務に潰されそうになっても、溜火がいたからこそ耐えられた。

俺が今したいことはなんだ?

「あなたは勿論、歴代の炎柱は痣が出ない事に悩んでいました。しかし私たちの世界では、煉獄家の人間には痣が出ないという呪いがかかっているのでは?という説がありました。」

「なぜ煉獄家だけかかって?それは煉獄家の成り立ちにあります。煉獄家は最低でも400年以上に渡って、一代も途絶えることなく炎柱を出し続けました。他の柱は基本的には一代限りであり、よくても弟子が柱になる程度です。ですが:煉獄家は違う。血筋による柱の継承を行なってきたのは煉獄家のみ。」

「それが何だ?という顔をしていますね。ですが、それこそが【煉獄家の人間にアザが出ない理由】ですよ。」

「戦国乱世の時代:、始まりの呼吸の剣士のようになりたい者は、人の身には余る能力を求め、それを手に入れた者は軒並み25を迎える前に死んだ。ここまでは貴方もご存知のはず、:問題はそれ以降の話ですよ。」

「残っていないのですよ...:子孫が。」

「時透無一郎?ああ、彼は例外枠です。彼は現上弦の壱、黒死牟が人間時代の時の子どもの子孫です。しかも鬼殺隊に関わる前の時の子どもです。」

「一時的な強さならば、痣者に優るものなし。だけどソレは継続出来ない。炎柱は他の柱とは異なり、代々血族で繋いできた存在、貴殿は武家なので似た話は知っていると思いますが、何事も始めるよりも継続することの方が困難です。」

どんなに努力しても鍛錬しても、痣が出ることはないと思った時、これまでは痣が出ないことが悩みの種だったのに、スウーと心が晴れた気がした。

その時俺は唐突に理解した。

俺は、痣者になりたい訳ではなかった。

俺は本当は鬼殺隊に所属できるような心を持っていなかった。

俺の本心は、

【死にたくない】

【でもどうせ死ぬのならば、誰よりも印象に残りたい】

我ながら随分とまあ遠回りしたものだ。

「煉獄家が炎柱を輩出しなくなった時……それは、鬼殺隊が終わる日が近いのかもしれないね。」

「良い意味か、悪い意味か？私がそんな事を知る訳ないでしょう？ですが……そうですね。」

「どちらになるかは今を生きている者の行動次第では？」

千寿郎には鬼狩りの才能はない。だが……千寿郎の子に鬼狩りの才能がないと誰が言える？この、呪いのような鬼殺隊との縁を……一代限りで切れるか？否、切れるわけがない。

ここで終わらせねば……孫が鬼狩りとして死んでゆく。

「現在の 上弦の壱……黒死牟、人間時代の名は継国巖勝……始まりの呼吸の 剣士の兄君であり」

知っている情報は全て話した。

「ありがとう……慎寿郎。私のゴホツ人生で……最も嬉しいカハツ最高の……情報だよ。」

優しい顔をしていたが、目は狂気に満ちていた。

宇髓の思い／竈門炭治郎の決意

カアカア

「ん？何だ？」

今日のカラスはやけに騒がしいな。

《伝令！伝令！お館様よりシジイ！シジイ！》

「おっ！珍しいなあ何だ？」

これまでも下弦クラスの鬼の場合は、他の隊士を撤退させる指示が出たらししたが、今回はどうも、違いそうだ。

「ありがとよ、虹丸」

さて、中身は、

.....

天元、今いる遊郭での任務だが、今回は君の予想通り上弦の鬼だ。相手は、上弦の陸【墮姫・妓夫太郎兄弟】普段は妹鬼の墮姫が表に出ているが、有事の際は兄鬼の妓夫太郎が墮姫の身体の中から出てくる。

特にこの鬼の兄弟は二枚目に書く血気術にあるが、かなり厄介だ。遊郭という遊郭が全て破壊される事を前提に作戦を進めておくれ。

.....

「うつわ：ヤベエ、【2匹同時に首を落とさないといけない】か。

上弦だから例の3人は蝶屋敷に帰りたいが：派手な俺でも2匹同時は不可能だ」

これさえ無ければ、毒耐性のある俺なら毒の鎌をある程度食らっても問題ないが、この鬼兄弟：特に手紙では下弦程度とあるが、妹鬼も血気術でいくらでも食糧を喰らえる：か。つまりは妹鬼と連携している兄鬼も戦闘の合間で、食事していることになる。それにこの兄鬼の連携技を喰らえば、吉原は跡形もなく壊滅する。

「譜面を派手に作り直す必要があるな。」

それと例の兄弟は、鬼兄弟とどうやって戦わせようか。

▽▽▽

一方その頃、横浜では、

『Happy Easter!!』ハッピーなイースターを！

イースター本番の日を迎えていた。

『ローズマリー！肉を買ってきて！』

『はい！直ぐに！』

『ローズマリー、傘！傘を忘れているよ！』

『あ！ありがとうございます！』

いくら準備をしていても、来客人数が多ければ不足する物も多い。

いや…本当にイースターを舐めていたわ…。

前世ではカトリックと言えば、学校行事のミサ程度しか、した事がなかったからお堅いイメージが強かったけど、こんなに盛り上がるものなんだな。

そうだ、私に関しては他にも

『随分と珍しい髪色ですな。』

『ねー！お姉さん！何でそんなヘンテコな髪なのー？』

『変な髪ー！』

『こらー！』

子どもとその保護者に囲まれてしまった。そういえば、教会には私以外に明確な子どもはいなかったな。

『ねー、変な髪色でしょう、でも私はこの若葉のような髪が気に入っているの。綺麗でしょう？』

子供は否定されるのを嫌う。それに、本来なら存在しない髪色だから否定する理由がない。

『うーん、確かにキレイだね！』

『そうだねー！』

『じゃあお姉さんは、買い物があるからじゃあね！』

『バイバイー!!』

子どもは可愛いなあ、いつの時代でも。

▽▽▽

「いいか、3人共、俺様の情報網で判明したが、今回の鬼は上弦の陸だ。」

「えっ……頑張ります！」

「おう！首が鳴るぜ！」

「バツカ！首じゃない、腕だよ！えっ、上弦！滅茶苦茶強いじゃん！俺たちじゃ無理じゃん！帰らせてえー！」

「五月蠅いぞ、善逸！」

「うるせえな！紋逸！」

「いっやー！馬鹿なの！2人とも馬鹿なのー！相手は上弦だよ、絶対勝てないって！」

竈門炭治郎は予想通り、猪もまあ予想通り、だが、この黄色、滅茶苦茶ウルセエな。

だけど、黄色が一番現実を覗いている。最初こそは竈門炭治郎が頭脳担当、猪は脳筋、黄色は馬鹿の印象が強かったが、生存本能が強い黄色は、竈門炭治郎と猪のいい意味での重荷になっている。成程な、お館様が任務でこの3人を合わせているわけだ。

「いいか、テメエらはまず、京極屋の花魁【蕨姫】こと、上弦の陸の片割れの食糧保存庫を見つけ次第、囚われている奴ら全員を守りながら戦え。もし見つけられなかったら、片割れの鬼と戦え。」

無茶な命令を下していると自覚はある。だが、お館様がこの3人を希望とみなすのならば、それ相応の成果を俺に見せてくれ。

「えっ…食糧庫？」

「遊郭で花魁をしているなら人目がつきづらい場所にあるはず…」

「おっ！俺の見た蛇みてえな奴の場所か！」

「俺も出来るだけ早くお前らに合流する予定だが、俺は上弦の片割れの相手で行き着くまでに時間が派手にかかる。お前らは弱い方の上弦、京極屋の蕨姫花魁の相手をしろ。だが、無理はするなよ、命あつての鬼殺だ。不利だと感じたら逃げてもいい。俺が認める。」

「あっ…逃げていいんだ！やったー！」

「こら、善逸！すみません宇髄さん。」

「テメエら子分は俺についてくりやあいんだよ」

「お前ら、さっさと店に戻れ、居ないことがバレちまうぞ。」

「あつ、では失礼します！」

「もう怖いよー！」

「ガハハ、腕がなるぜー！」

「やつと帰ったか…、さて…俺も仕事に移るか。」

上弦の陸の片割れの堕姫…表向きが花魁であり、主だつて外に出ている鬼…お館様の手紙にあつた能力を知れば、いくら下弦程度の実力とはいえ油断できる相手ではない。

まずは、食糧庫と厄介な帯の能力を封じ込めなければ。

ガツ

ガツ

カツン

「ピンゴ…」

見つけた、地下への入り口。

とはいえ、俺の技で派手に壊せる場所ではないな。アイツらに任せるか。

▽▽▽

数日後

「はあ？黄色が行方不明？」

「はい、善逸がいる店は京極屋なので、恐らくは鬼に感づかれたところか。」

「俺はもう見つけたぜ！地下への入り口をなあ！」

確かイノシシは感が鋭いと炭治郎が言っていたな。俺と同じ音から場所を特定するやつか？

「イノシシ、穴はかなり小さいが入れるか？」

大人の頭がやっと入る程度で、かなりの深さがある。俺の技でト派手に壊したいが、場所が場所だから出来ない。

「おう！俺は頭さえ入りゃあ全部入るぜ！」

「本当か、ちようどいい、黄色がいるのは十中八九そこだ。お前は鬼の食糧庫から黄色の救出をして、他の囚われの民間人を守っていけ。俺も直ぐに追いついてやる。それと、炭治郎。」

「はい！」

「イノシシが食糧庫で暴れば、自ずと帯の本体である、上弦の片割れが鬼殺隊士を襲いかかる。お前はその鬼を足止めしろ。」

「はい！わかりました。」

「返事はいいな、だがお前はまだ庚かのえ、例え下弦程度とはいえども、上弦の片割れの相手をするんだ。命が消える覚悟はできているのか？」

竈門炭治郎の調査では、下弦の伍と一騎討ちをしたが、富岡が来なければ死んでいた。と聞いた。下弦の相手が身の丈に合わないと自覚していなければ、このまま蝶屋敷に返すしかない。

「はい！俺は煉獄さんの件で、己の弱さを思い知りました。そこから強くなるためにヒノカミ神楽を中心に鍛錬を続けてきました。下弦の伍にはあの時は敵わなかったけど…今なら禰豆子と共に戦えます！」

「そうか。」

負けた事を認めて、強くなるために鍛錬し、鬼の妹と戦えると言い

切った。俺の経験上、この手の奴は強くなる資質が高い。今のこいつなら【墮姫】の相手が出るだろう。

「よし…わかった。なら作戦はこうだ。俺とイノシシは帯の血気術を使う鬼の食糧庫を先に壊す。そして、そこからお前は【蕨姫花魁】の相手をしろ。食糧庫が終わり次第、俺たちはお前のところに合流する。」

「おう！」

「はい！」

「作戦は今夜、イノシシ、お前が食糧庫に先に行き、囚われの民間人を守りながら、黄色と共に帯の一部と戦え！」

「おう！俺様に任せろ祭りの神！」

▽▽▽

数刻後

「禰豆子！禰豆子ダメだ！ごめんな！痛かったな！俺を守ってくれたんだな！」

飢餓による暴走か。人間を襲いかかる一歩手前、やはり鬼と人が協力など土台無理な話だったか。

いや…違う。上弦と渡り合える鬼がたかが一隊士の防御を振り切れない？そんなことはない。つまり、あの鬼…竈門禰豆子は踏ん張っているのか？人の世界に…。

「お館様の前で大見得きつてたくせに、なんだこの体たらくは!? 誰も鬼化を派手にやれなんて言ってねえぞ！グズり出すようなバカガ

キは、戦いの場にいらねえ。地味に子守唄でも歌ってやれや」

子守唄で鬼化が防げるなんて、俺は思ってもいなかった。だが、竈門禰豆子は確かに子守唄で鬼化が治まった。煉獄…お前がこいつらを認めた理由…今ならわかるよ。確かにこいつらは他の鬼と違う。

なら、今の俺がするべきことは、

「もうお前に用はねえよ、地味に死にな」

目の前の片割れの首を斬り、

「だってお前、上弦じゃねえじゃん」

「はあ！この瞳が見えないのかしら！」

「だったらなんで首斬られてんだよ、弱すぎだろ。脳みそ爆発してんのか？」

妹鬼を煽り倒し、本物の上弦を引きづり出すことだ。

チャンスはそこにしかない。嫁たちには火事騒動を起こさせて、吉原から避難させるように指示したから、問題ないだろうが、破壊の規模を広げさせるわけにはいかない。

「妬ましいなあ、妬ましいなあ。死んでくれねえかなあ、そりやもう苦しい死に方でガキンツ…なあ…」

「チツ、流石は上弦…派手に固え首じゃねえか。」

妹鬼の首が切れている今、兄鬼の油断が残っている状態で頸を斬りたかったが、一度目で失敗した。もう同じ手は使えない。

「なんだあ、お前え、俺たちの事を知っていたのかあ。ならなあ、尚更生きて帰すわけにはいかねえなあ。取り立てるぜ、俺はなあ。やられた分は必ず取り立てる。死ぬ時グルグル巡らせる、俺の名は妓夫太郎だからなあ！」

「竈門！お前は俺と一緒にいろ！黄色とイノシシは妹鬼の相手をしろお!!」

「おう！祭りの神！」

「了解した」

「はい！」

「いいなあ、かわいい部下に囲まれてえ、そんな綺麗な顔をして生まれただんだからさあ、さぞかし幸せな人生を歩んできたんだろう？」

いいなあ、いいなあ！だから死んでくれないかなあ！」

お館様の情報から知っている。こいつらは人間が鬼にした鬼だと。妹鬼は知らないが、この兄鬼は覚えている。何百年も生きてきたのに遊郭から出られない本当の理由を。

「才能？俺に才能なんてもんがあるように見えるか？俺程度でそう見えるなら、てめえの人生幸せだな」

俺は違う、煉獄のように胸を張って生きれる身分ではないし、時透のように才能に溢れた奴ではない。だが、俺は生きねばならない。殺した兄弟の分も、

「外を見ろよ！何百年も遊郭に閉じこもっているせいで、俺程度で幸せに見えているんだよ！上弦のくせに地味な兄弟だな！お前たちの血気術は忍びの俺様の情報網で既に分かっているんだよ！イノシシ、黄色、そして竈門炭治郎！頸をとりに行くぞー！」

▽▽▽

side 炭治郎

宇髄さんは、忍びの情報網と言つてこれから対峙する鬼兄弟の血気術の詳細を話してくれた。だから俺たちは妹鬼の中から鬼が出てきたのにも冷静になれたし、宇髄さんのお嫁さん達が予め吉原から人を出していたから、戦闘に集中できた。妹鬼の時はまだ避難が終わり切る前だったから、民間人が大勢亡くなつてしまった。だからもう、「みつともねえが、俺は嫌いじゃあねえ。俺は惨めでみつともなくて、汚いものが好きだからな…そうだ！お前も妹と同じ鬼にならないか？他人の妹には興味ねえが、身内となりやあ別だ。お前とお前の妹、両方守ることができる！」

「ちよつとお兄ちゃん！そいつらなんてどうでもいいじゃない！」

「俺は君たちとは違う…！」

この兄弟は、違う道を進んだ俺と彌豆子だったんだ。あの時、たまに会ったのが富岡さんだったから、俺たちは鬼殺隊に。でも…：…違つたら？もし、会つたのが鬼だったら、鬼舞辻だったら？果たして俺は『彌豆子を守りたい』という思いで、鬼にならないと誰が言える？俺は否定できるのか？あつたかもしれない俺たちの未来の結末を。

「譜面が完成した！ 勝ちに行くぞ！」

「チツ、あの野郎オ、まだ生きていたのかよお」

「読めてんだよ！ てめえの汚ねえ歌はよ！」

ゴオオオ

あの音は善逸と伊之助！そうだ、まだ終わってはいない！戦わなければ、3人が作つた活路を！

（腕の力だけじゃダメだ、全身の力で斬るんだ。頭のとっぺんからつま先まで使え。体中の痛みは全て忘れろ、食らいつけ。渾身の一撃じゃあ足りないその100倍の力を、ひねり出せ!!）

「うあああああーああああー！」

ザシユツ

キリ

キリ

キリツ

「ああああああー！」

キーンーブシユーパシヤー

パシヤン

「あは！あは！あはっ！」

（まずい！毒だ！ど、毒を、なんとかか…呼吸で、す、少しでも毒が回るのをお、遅らせ…なんだ？何か言っている？く、頸、切れていなかったですか？）

▽▽▽

「逃げろー!」

まずい、ここからだとは距離が保てない。庇ったところであまり意味がない。くそー!どうすれば、あれは、

「まさか!血気術を無効化する血気術なのか?」

兄鬼の最後の足掻きを血で相殺している。鬼なのか、鬼が鬼の血気術を無効化する?力によるゴリ押しではない。まずい、俺の方が毒で頭が……。

「天元さまあー!死なないでください!」

「うるさい、天元様は病人なのよ!」

「うええーん、ひどいですよー!」

嘘だろ……何も言い残せずに死ぬのか、俺? 毒で舌も回らなくなってきたんだが……どうしてくれんだ、言い残せる余裕あったのに……マジかよ

ボツ

「ちよ、ちよつと!火葬にはまだ早いですよ!」

「許しません!見た目が可愛くても許しませんからねー!」

「いや……これは違う」

毒が、毒がどんどん消えていく。まさか、竈門禰豆子の血気術か。

人間にも効果があるとは。

あれ?竈門兄弟はどこにいった?

「陸ね……一番下だ、上弦の。陸とはいえ上弦を倒した訳だ、実にめでたいことだな。陸だな……褒めてやってもいい」

「伊黒か、俺は派手に引退するぜ。こんな手じゃ柱はおろか、隊士も無理だ。」

嫁達との約束を守らないとな。

「お前程度でもないよりはマシだ、死ぬまで戦え」

伊黒は若手が育っていないからという理由で俺の引退に反対のよ
うだが、

「いいや、若手は育ってるぜ、確実に。お前の大嫌いな若手がな」

近い未来、アイツらは柱になるだろう。俺の仕事はもう終わりだ、
なら次にすることは、

「ああ、凱旋しよう、派手にな！」

▽▽▽

本当に上弦の陸を倒し切れたのか、確かめたかった。

あつたかもしれない俺たちの未来の結末を見なければならぬと
思った。

「お兄ちゃんなんて！私のお兄ちゃんじゃないわよ！だって顔が似て
いないものー！」

「はあ！俺だってなあ！俺だってお前がいなければ今回だって勝てた
んだ！」

兄弟喧嘩、そういうえば俺と彌豆子が喧嘩した最後はいつだったっけ
？

「お前なんか俺の妹じゃ……」

「ダメだよ、それだけはダメだ。」

その言葉を言ったら全てが終わってしまう。俺は咄嗟に兄鬼の口
を塞いだ。

「嘘だよ……本当はそんなこと思ってないよ。全部嘘だよ……仲良く
しよう、この世でたった2人の兄妹なんだから……」

「君達のしたことは誰も許してくれない。殺してきたたくさんの人に
恨まれ、憎まれて罵倒される。味方してくれる人なんていない」

「だからせめて2人だけは、お互いを罵りあつたらダメだ」

なぜだろう…まるで自分のことのように聞こえるのは。

「あんたに言われなくても分かっているわよ！」

「だって、私／俺たちは2人で最強なんだから／なあ！」

「梅！梅エー！」

さようなら、妓夫太郎、梅。

▽▽▽

「善逸！伊之助！よかった！良かった！」

「うわあーん！怖かったよお！炭治郎お！」

「俺様、強くなっただろ？」

「みんな生きてて良かったあ」

【墮姫】とは結局は何者だったのか？

「上弦の鬼が倒された…か。」

長いと言われれば長い、だが炭治郎が鬼殺隊に加わってからの時系列で言えば、かなり短いスパンだ。

さて…ならそろそろ彼女が来るか。

「香子…お兄ちゃんがあの世こっちに来たって、おばちゃんが言っていたー」
ここはあの世とこの世の境目、仏教で言うところの【三途の川】と呼ばれるところ。そしてこの子は【梅ちゃん】。天国の住人からは【白梅ちゃん】と呼ばれて可愛がられている。

特に天国において子どもは、この世の人生では悲惨な生い立ちで、志半端で亡くなるケースが多く、梅ちゃんはまさしくそのケースだったので、尚更、天国の住人たちからは孫のように愛されている。

さて…ではなぜ、天国にいる梅ちゃんがコチラに来れたのかと言うと、それは簡単、彼女の希望が【兄と共に墮姫の罪を償うために地獄に行きたい】だったからだ。

えっ、墮姫と梅は同一人物ではなくて？

確かに身体は間違いなく同一人物だけど、中身が違う。

前世の記憶から私も疑問だったけど、あの世のシステムを聞いて、なぜ【墮姫】は【梅】の姿で地獄に墮ちたのかを知れた。

要は…私と同じだった。

私は、香子は、間違いなく大正時代を生きる普通の娘。

だけど、途中で鬼となった時に、別人格、すなわち前世の私が表に現れた。その時はまだ同一人物だったけど、彼女が【ローズマリー・ベネット】として本物の国籍と名前を得て、その名で呼ばれて本人もそれを本名だと認めた時、あの世のシステムでは別人として登録されてしまった。

今の彼女には香子としての記憶は殆どなく、新たに誕生した【ローズマリー・ベネット】に相応しい知識と常識を持つ人格となった。

「本当によかったの？梅ちゃんは天国で幸せに暮らす事も出来たのに…わざわざやってもいない罪を償うなんて。」

そう：累が家族と共に地獄に堕ちたのは、理由はどうであれ、【自らの犯した罪は自らが背負わなくてはならない】というあの世の法則が適応されたからだ。勿論、鬼になるまでの過程により罪の重さは変わるけどね。

でも：梅ちゃんは違う。

梅ちゃんは兄を侮辱された事により、侍の目を刺して片目を失明させたけど、その後の報復措置が生きたままの火炙りだ。

そもそも件の侍も、真つ当な店に相手にされない時点で人格はお察し。

梅ちゃんは罪を背負って死んだわけではない。

だから天国に行けたんだ。

【堕姫】は天国に向かっていた梅ちゃんの魂を半分、鬼化により引つ張られて肉体に引き戻された言い方は悪いが、ゾンビの一種だ。

多重人格と異なる新たな人格。分かりやすくいえば、善の魂は【梅】悪の魂は【堕姫】だ。過去の記憶こそ同じだけど、同一人物であり同一人物ではない。人を騙し、鬼としての罪を行ったのは【堕姫】だ。だから悪の魂である【堕姫】は地獄に堕ちるが、善の魂である【梅】は天国がとうの昔に迎え入れていた。

それにしても：

「よく：天国側は受け入れたわね、梅ちゃんが堕姫の罪を背負うなら、堕姫が天国に来る事になるのでしょうか？」

この世界は、良くも悪くも因果応報が絶対原則。数えきれないほどの人を騙し、殺してきた堕姫をあの世は苦しめないとは。

「うん！天国の偉い人も最初は嫌がっていたけど、私が「お兄ちゃんがない世界が私にとっての地獄！」って言ったら、「その手があったか！」と言って許してくれたの。そうだ、これを香子に渡してって！」

「これは？」

まるで、かぐや姫の天の羽衣みたいだ。

「これをね、ダキがここに來たら羽織らせてほしいって。」

「堕姫にこれを羽織らせる？」

絹のようなそうでもないような、光沢がある綺麗な羽衣：、天国の

羽衣なら、名実ともに天の羽衣：かぐや姫：竹取物語…、

ああ…確かに堕姫にとつて、最も重い罰だな。

「分かったよ、ちゃんと羽織らせるね。」

「ありがとう！あつお兄ちゃん！じゃあね、香子！」

梅ちゃんは、お兄ちゃんがいる地獄の入り口に一直線に向かった。

「さようなら…どうか次は2人で幸せに…ね。」

「ちよつと！…その不細工！お兄ちゃんはどこよ！」

本命登場か。さて…ここに滞在している以上、頼まれた仕事はしないかね。

「ようこそ、蕨姫花魁。わたくし、さるお方からの使者でございます。お美しい蕨姫花魁にこちらをお渡しするように、ご命令を下されました。どうぞ、お受け取りくださいませ。」

「ふーん、確かに私に相応しい衣だわ。羽織らせてちょうだい。」

「勿論でございます。ささっ、どうぞ。」

「ふふん、まあまあいいじゃない、あつそうだ、お前、私のお兄ちゃんは何処に…：…：…あれ？私、何を考えていたのかしら？」

「天国への道を聞いておられましたよ？私はこの川を渡ることは出来ませんが、あなたは渡れますよ。」

「あつ！そうだったわね！ありがとう案内人！」

「えげつない罰だな。天国のお偉いさんも、何も知らない梅ちゃんも。」

堕姫は二度と【お兄ちゃん】を思い出せず、天国という優しい檻で、何も知らずに心の喪失感に苦しみ、仮に罰が終わって、転生が叶っても【お兄ちゃん】と関われる立場には産まれることが叶わない。

梅ちゃんは、堕姫の罪を背負って地獄に堕ちるけど、大好きなお兄ちゃんと常に一緒だ。刑罰は苦しいが、必ず来る終わりを迎えれば、次もまた人間の兄弟として産まれることが出来る。

はて、どちらが幸せなのだろうか？

少なくとも、梅ちゃんと堕姫の根本にあるのは

【お兄ちゃんと2人で1つ】

【2人が揃えば最強】

「妓夫太郎がいくら妹を溺愛していても…見分けはつかないだろうな。」

だって、同一人物だもの。」

堕姫の存在が、この世の人から忘れ去られた日こそが、堕姫の本当の意味での命日になるのだろうか。

そして、堕姫を最後に忘れるのは…、

「無知は罪だと…言ったのは誰だったけなあ。」

可哀想だけど、仕方ないよね。だって忘れることが罰なのだから。

宇髓天元は忍びの一族である

「以上が、遊郭に蔓延っていた【上弦の陸兄弟】の血気術でした。」

「ありがとうございます」

「おめでとうございます宇髓さん」

「凄いわ！宇髓さん！」（強くてキュンキュンするわ）

「まあ…ほめてやらんでもない…」

「あの雲…なんだっけ？」

「南無…100年越しの上弦撃破…」

「俺は（宇髓みたいにはできないから）関係ない。」

100年越しの上弦撃破の報告に鬼殺隊は盛り上がった。それと同時に柱の面子は予想よりも厄介な上弦の血気術と、最下位でありながら柱が片腕を失くす結果に、危機感を覚えた。

「最下位の上弦でこれかあ」

「私たちは上弦を過小評価していたようですね。」

と云いつつ、胡蝶はぶつぶつと「藤の毒…限界値…」と毒の製薬を広げようと俺に質問をしにきたり

「太陽を克服した鬼という前例がある以上、他の上弦が克服していないと誰が言える？」

と、上弦撃破に沸く柱付きの隠に忠告をする伊黒、（流石に柱付きにまで誤魔化すとなると、気が休まらないという甘露寺の主張が受け入れられた）相変わらず変わらない富岡と時透、そして一通りの質問を終えた後は各自解散となった。

▽▽▽

俺としてはこれからが本題だ。

「お館様、それと…屋敷にいる煉獄慎寿郎さん、お話があります。」
例の情報源を教えてくださいませんか？

「ふふ、勿論だよ」

「さすがだな宇髓君」

俺は室内に案内された。

「では、単刀直入に聞きますが、上弦の能力はともかく、人間時代の過去まで知っているのは何故ですか？その情報元は信用できるのでしょうか。」

煉獄の旦那は鬼殺隊を離れてからの月日は長い。仮にその間に、遊郭にいる鬼を知って情報を集めていたとするならば、俺と鉢合わない訳がない。

「人間時代の過去もあたって…いたのか…？」

柱集会議では、上弦の能力を話し、それ以外の話はしていない。当たり前だ。数百年前の人間の過去など、今を生きる我々が知る訳ないからだ。

(煉獄の旦那のこの反応、自分で手に入れた情報ではないな)

元々そう予想していたが、そうなると謎が深まる。

途中で腐って鬼殺隊を辞めたとはいえ、煉獄の旦那は元炎柱。直感力や策戦能力は高い。そんな御仁が不確かな情報を俺に渡すとは。

「天元：君のような現実主義者には、理解できないだろうけど…信じられない奇跡だって、おきる時にはおきるのだよ。」

「宇髓天元殿、これから話すのは全て事実です。息子の名に誓って嘘はないと言い切ります。」

酒の匂いがしない…この熱い瞳、やっぱりアイツの父親なんだな。

煉獄：良かったな、もうお前が支えなくても生きていけるぞ。

「始まりは、息子が無限列車に乗る前から…、いつものように挨拶に来たアイツの背後から、女の声が聴こえたことが初対面の話…その亡霊はこう言った、『このままでは無限列車で上弦の参に殺される』と。」
「ちよつと待ってくれねえか、煉獄の旦那。」

初っ端から飛ばしやがった。これならまだ情報元は、鬼と言われた方が説得力がある。

無限列車前に予言？相手は亡霊？

信じられない話だと、前置きはしていたが、まさかここまで奇想天外な内容とは思わねえだろ。

「天元の気持ちもわかるよ…私だって、最初に慎寿郎から聞いた時は頭を抱えたからね。」

「そう言っておられても、最後まで話を聞き、宇髓君に情報を送ってくださり、感謝しております。」

「産屋敷家の勘が、悪いものと判断しなかったからだよ。それに君が荒唐無稽な嘘をつくとは思わないからね。」

「宇髓君、大丈夫か？後で話す事もできるが？」

煉獄の旦那とお館様の朗らかな雰囲気、嘘ではない。

「いえ、このままお聞かせください。」

「そうか…じゃあ続きを、俺は最初は当然信じなかった。だが、不吉な事を言う亡霊は取り除かねばならなかったから、亡霊を受け持った。」

その時の亡霊は、俺が亡霊の言葉を信じないと知ったら、さつさと何処かに消えてしまった。

その時はよかった。

だが、その後、【杏寿郎が上弦の参に殺された】と聞いた。

俺はその時、後悔した。

亡霊は視えている俺に熱心に、杏寿郎が如何に華やかに大切な種火を残して死ぬのかを話していた。」

大切な種火、確か無限列車にいた隊士は、猪、黄色、そして竈門炭治郎。

「亡霊が再び現れたのは、竈門炭治郎君が俺に日の呼吸を聞きに来た後だ。あいつから見れば、鬼殺隊も鬼もどうでもいい存在だが、話し相手がいない事が、本人からすれば退屈だったようで、亡霊が視える俺に取引を持ちかけた。」

条件は【上弦の血気術と人間時代の過去】を話す代わりに、俺は【話に真面目に付き合うこと】だ。」

宇髄君宛の手紙の内容も、亡霊からの情報だ。そして、
一息ついた煉獄の旦那は、

「内容が合致したと言うことは…他の上弦の血気術も、過去話も、事実である可能性が高まったと言うことだ。」

「天元…ゴホツこれはかなりの収穫だよ。ゴホツ、我々は人間だ。ガハツ、身体上、鬼には負けてしまう。だけど、ゴホツ、予め、未来の作戦を作ればゴホツ、君よりも容易く、鬼に勝てる。」

俺は忍びの一族だった。だから、この情報がどれほどの価値を持っているのかが分かる。かの、【始まりの呼吸の使い手】よりも価値がある存在だ。

「その…亡霊は何処に？」

亡霊の存在を認め、それに会わなければならぬ。

「亡霊はいなくなつた。話し相手ができて成仏したのか、それとも別の場所で彷徨っているのかは分からない。だが、亡霊の身元は判明した。」

「身元が判明…？」

亡霊ならば、数百年前の人物では？

「例の亡霊は、女学生の着物を着ていた。ハイカラな簪を挿し、異国の言葉や耶蘇教にも詳しかった。だから、亡霊は今の時代を生きていた者だ。お館様にお願ひし、東京の女学校でここ数年、生死不明の生徒がいないか調べてもらった。そして1人だけ名前が該当する人物がいた。」

ここ数年の人？なのに上弦の過去を知っている？

「そいつは何者なんだ？」

「橘キヨウコ」

「香りに子と書いて、香子。最後の日に教えてもらった名前だ。

偽名の可能性も高かったが、帝都の女学生であり、裕福な家庭の娘を探してもらったら、行方不明者の中に、ここ数ヶ月に警察に届け出があったのがこの名前の娘だった。

帝都内にそこそこの土地を持つ、地主の一人娘、

上に兄が2人いる。

通っていた女学校は、浅草にある【藤の花女学校】

学校とは名ばかりの花嫁修行の場だが、調査の結果、この橘香子という人物、かなりの変わり者だったそう。

結婚をそれとなく拒否し、異国の物語を好んで読んでいたそう。表向きは周りに合わせていたそうだが、両親はそれとなく気づいていたそう。だから最初の数日は、家出と思われていた。」

異国の言葉や宗教に詳しい女学生、確かに辻褄は合う。だが、【花嫁修行の場】で、そこまで詳しい本を置くか？

何か他の事情も持っていそう。

「だがゴホツ、いつまでもゴホツ返ってこないゴホツ娘に、痺れを切らしたゴホツ、両親が、」

「浅草の女学校に問い詰めた結果、学校にも来ていない事が判明。直ぐに警察署に行方不明の届け出を出した。現在も見つかっていない上、死体もないとなると…鬼に喰われたとしか考えられない。」

シーン

「煉獄の旦那、それは矛盾してないか？仮に鬼に喰われたとなると、鬼への復讐心で亡霊となったとしか思えない。なのに、『鬼はどうでもいい』と言うか？そして、数ヶ月前まで生きていた人間が、数百年前の人間の過去を細やかに知っている訳がない。」

最も、亡霊に人の道理が通じぬのかも知れないが。

「最もな意見だな。俺もその矛盾を突いたら、香子はこう言った。

『亡霊は過去の事なら時間軸の外れにいる』と。

だから、過去のこととは知れるが、未来のことは分からないそう。そしてこうも言っていたな、香子を殺したのは鬼舞辻無惨だったそう

だ。だからこそ、無惨と縁が強い上弦の過去を観る事ができた。

その代わり、無惨が気に留めない鬼の事は何も知らないそうだが。」
「と、言うことは、まさかその亡霊は、無惨の過去も知っているのか。」
「そうだ…。だが、無惨に関して言えば、過去の話は言えない事が多い。鬼殺隊の団結力を損なう内容も多いからな。」

気になる話はまだまだあるが、一先ずは例の亡霊の生前の過去を洗い出すか。

「そうですか…では、私はこれにて失礼致します。」

「聞きたい事、疑問に思うこと、俺は基本煉獄家に居るから会いにきなさい。」

「ゴホツ、天元、近い未来ゴホツ、【上弦の血気術を纏めた冊子】をゴホツ、柱に配る、表向きはゴホツ【産屋敷一族の勘】と宣伝ゴホツしてくれ。」

「はっ…仰せのままに。」

お館様は自分の代で全てを終わらせるつもりか。



『吉原が大規模破壊…原因は不明…か…』

あの子がまだ、アメリカ人になる前に…物語のように話していた内容。

数百年前…、理不尽に妹を奪われた兄による…人間への復讐劇が幕を閉じた。確か、炭治郎君は二ヶ月ほど目覚めなかったはずだ。

そしてもう少しで、二ヶ月が過ぎる。目が覚めてからは意地でも此

処に来るだろう。約束を果たさねばならない。例え……あの子が『自分が鬼である』という事実を忘れかけていても。

『ローズマリー、瀉血をしようか？』

『はい、ウィリアム神父さん。』

見えない境界線

「たんじろー！炭治郎うー！よ、良かったー！」

「目え覚めるの遅かったじゃねえか！俺様はもう任務に行っているぜ！」

「ありがとう2人とも、それとアオイさん。」

吉原の件から俺は意識を失って、気づいたら2ヶ月も経っていた。

そこから訓練をして、体力回復に力を入れた。

「なあ炭治郎、体力がなかなか戻らないからって、無理はするなよ。」

「あ、ああ分かってるよ。」

善逸は俺の焦りを体力が回復しないことだと誤解して、俺に話しかける回数が増えた。

「なあ、炭治郎？何か悩みでもあるのか？お前の音、かなり不規則だぞ。」

「そ、そうか…？」

蝶屋敷にいれば当然の話だが、俺は1人になれる時間がなくなる。

レディさん、いやローゼマリーさんだったっけ、彼女の事は2人には話していない。そもそも彼女は俺たちが滅するべき鬼ではない上、【太陽を克服した鬼】。誰かに話して情報が漏れたら、いくら2人が異人とはいえ、命の保証はない。

俺だって鬼殺隊に一応認められたとはいえ、禰豆子の存在を知った隊士の中には、俺たち兄弟に不満と憎しみの匂いを纏う人が多いんだ。

話せるわけがない。

俺はお館様のように声で人を操ることは出来ないのだから。

「だけど…このままだと駄目だよなあ。」

刀がない以上任務はわかりかわり、これまでのように別行動する機会がない。だけど急に縁もゆかりもない【横浜】に行きたいと言えば、怪しまれる。珠世さんに頼むか？いや、確かローズマリーさんは珠世さ

んから嫌がらせをされたとか何とかで、珠世さんを嫌っていたと聞いたな。やつぱり俺が直接行かないと駄目か。

「元氣そうで何よりです、竈門炭治郎。」

「しのぶさん！お久しぶりです、あの、相談があるのですが。」

「相談…ですか？わかりました、別室に案内します。」

「それで竈門君、相談とは？」

この人は聡い、下手な嘘をついてもバレてしまう。ここは正直に言おう。

「はい、実は俺の知り合いが仕事で横浜にいます。遊郭潜入前に一度会っていて、帰り際に俺は「次は1ヶ月以内には会いに来ます」と言いました。なのに気づけば2ヶ月以上過ぎてしまい、先方は俺が鬼殺隊所属だと知りませんから、さぞかし心配させているでしょう。なので体力回復も兼ねて、横浜までの外泊許可を頂きたいのですが。」

間違っではない、彼は本当の意味で「鬼殺」を知らないし、これからも知ることはないだろう。

「なるほど…わかりました、痛み止めを出しましょう。」

「あ、ありがとうございます！」

良かった、これでようやくウイステイリアさんの所に行ける。

カア

「これを宇髄さんに」

▽▽▽

休暇申請と外泊申請が通つたので、俺は2ヶ月ぶりに横浜にやつてきた。そういえばウイステイリアさんと会うのはいつもは夜間だったな、どこにいるのだろうか？

「コンニチハ、ホンダさん」

えっ？この匂いは、

「異人の旦那か、本の売れ行きか？まあぼちぼちだな、とにかく客層が限定的過ぎる。このままだと売れなくなりそうだな。」

「ソウデスカ：コチラもジツはオイテ欲しいデス。」

「へー、絵本か。ちいと高めだが、富裕層に受ける形状だな。中身見てもいいか？」

「モチロソデス」

「ふーん：【灰かぶり姫】と【白雪姫】か。女兒受けを狙ったようだがな、内容が残酷じゃないか？何だこの【腹違いの姉妹が失明する】とか【継母が主人公の結婚式で焼けた鉄靴で死ぬまで踊り続ける】とか、おたくらの国ではそれでいいのかも知れねえが、この国でこんな女の下剋上は受けねえぞ。」

そんな内容を本屋に置くつもりだったのか!?

「ソウデスカ：なら、コチラはドウデスカ？」

「今度は絵本じゃなくて、絵画か。へー、こんな綺麗な建物があるんだな、それにその設計図？間取りか、これは建築家に受けるな、旦那こういう内容の本なら売れるぜ。次からはこの手の物を持ってこいよ。」

「ヨカッタ、ではオネガイします。」

「まずは試しで30部ずつ入荷するよ、印刷業の奴らに伝言を頼む」
「モチロンドス、ではまた」

カラン

あつ、今なら話しかけても良さそう。

「ウイステイリアさん！」

「タンジロー久しぶり！」

一瞬、考えてから陽気な声色で答えた。

「あの、教会の懺悔室、空いてますか？」

夜間に会う場合はウイステイリアさんの自室に忍び込んで話し合っていたが、昼間だと無理だ。事前に昼間に鬼殺隊関連の話をする際は、【教会の懺悔室】を使う事を決めていた。

「ワカリマシタ、確かめてキマース！」

▽▽▽

「それで…何の御用でしょうか、炭治郎君。」

懺悔室に入った途端、外と違い淡々と話すこの人に最初は驚いたものだが、今ではすっかり慣れてしまった。

外では【陽気で片言な外国人】の姿を装っているのは本人曰く、【こちらの姿の方が日本人は警戒しないから】だそうだし、俺も外では鬼殺隊士である事を隠しているんだ。人の事を言える立場ではない。

「俺は【上弦の陸】を相手に生き残りました。」

約束を反故にする相手ではないと分かっている、だが証拠はない。そこを突つかれたお終いだ。でも、

「吉原の大規模破壊ですね、知っていますよ、約束通り【ローズマリー

の血」を提供します。はい、どうぞ。」

あつさりと信じてもらえた上、その場で血を提供されてしまった。

「あ、ありがとうございます！」

「それはそうと……一っただけ聞きたいことがあります。」

「何でしょうか？」

この人は懺悔室に入る前に、香水を振りかけていた。だから匂いから感情を読み取りづらくなっている。

「上弦の陸……を倒して、何を感じましたか？」

「え……？」

上弦の陸……を倒してどう思ったか？

「君は随分と……変わりましたね。」

強い香水の匂いで感情が読み取れない、でも……どういう事なんだ？
「詳細な話をすることは禁じられていますので、大まかに説明しますが、昔あった懺悔者は戦場帰りの軍人でした。軍人です、平時はともかく戦争では敵を殺すのが仕事です。ですが、仕事と割り切れない人が多いのですよ。当然ですよ、だって相手は血も涙もある普通の人間なのだから。」

「普通の人間……」

あれ……？そういえば俺はあの兄弟を殺した後、直ぐに昏睡状態に陥ったから考える余裕はなかったけど、あの兄弟の最後に何を思った？
「そうだ、《仲直りできたのか》を考えていたんだった。」

ゾワツ

「っ……ッ」

なぜウイステイリアさんに聞かれる前まで、あの兄弟の存在を忘れていたんだ。あつたかも知れない自分達の姿を忘れているなんて……。

「やはり……忘れていましたね。」

「なぜ……分かったのですか？」

ウイステイリアさんは俺のような特別な感覚を持つ人ではない。なのに、なぜ、

「最初は鎌をかけました。初めて会ったあの日の君は《オニを殺すこと》に抵抗感があつたのに、今の君は結果だけを伝えて、その過程を

省きました。罪悪感を持った人間は、こちらが質問せずとも勝手に詳細を話し出します。なのに…話さなかった。」

そういえば、初期の俺はあの教会でよく禰豆子の状態と鬼の現状を話していたな。確かに一度も鬼殺の件を、ウイステイリアさんから質問された事はなかった。

「今の君は…感覚が鈍っている。キサツタイではその感覚の方が楽でしょう。ですが、今の姿を知ったら…幼子の記憶しか持たないネズコさんは、あなたを「兄」と認識するのでしょうか？」

俺は、悪い方にならなっていたのか…？

戦いではあれほど荒れた心だったのに、終われば直ぐに鬼の事を忘れては有利だろう。だって止まらなくてすむのだから。

でも、でも、それは…その姿は「煉獄さんが認めた俺の姿」なのか？

「ふう…言い過ぎました。炭治郎君、君がどう変わろうとも私たちに関係のない話です。目的の物を手に入れたのでしよう、もう…お帰りを」

そこで昼間の話は終了した。

▽▽▽

はあ…どうしようか？

目的の物、「ローズマリーさんの血」を手に入れることができた。珠世さんに送れたから「人間化薬」の研究は進むはずだ。

でも、何だろうな、この消失感は何？

ウイステイリアさんのどこか冷めた口調、前あった時はそうでもなかったのに。

「よう！お前も来ていたのか、竈門！」

「う、宇髓さん！」

なぜ柱の宇髓さんがこんな所に？

「宇髓さん、なぜここに？」

「おう！胡蝶から頼まれた物を取りにきたんだよ。」

そうやって手元にある箱には、ガラスで作られた板と、顕微鏡という医療道具を説明された。

「しけた顔してんなあ！ちようど会ったし、ここは祭りを司る神の俺様が奢ってやるよ！こい！」

「は、はい！」

そうして案内されたのは、観光者向けの通りにある【かふえ】の看板が立てられた飲食店だった。

「♪×—+*×||*×\$||?」

異人さんもいて、言葉は分からないけど楽しそうなのは分かった。

「この店は元々通訳者が開いた店だからな、外国語に堪能な店員も多い。まあ高い店ではないから、せいぜい楽しめ。」

「は、はい！」

そこで食べた【シチウ】（ビーフシチュー）という料理とパンが宇髓さんの言う通り美味しかった。

「ご馳走様でした。」

「ごちそうさん、んで？お前これから予定はあるか？」

「予定……」

ウイステイリアさんが気になる。

それにレディさん、いやローズマリーさんのことも。

でも、今のウイステイリアさんが俺の訪問を歓迎してくれるはずがない。となれば、

「はい、機能回復も兼ねて今日は人混みの中を歩きます。それに善逸や伊之助、蝶屋敷の子たちにもお土産を選ぶので宇髓さんと一緒に行動できません」

「ああ、今日のお前は休暇だと胡蝶から聞いている。安心しろ、俺の都

合にお前を巻き込まねえよ。じゃあな！」

「やようならー」

宇髓さんの姿が視界からいなくなった。

よし、俺も動くか。

▽▽▽

「着いた…」

ここで会う時はいつも夜だった。人が出歩かない時間帯だったから気付かなかったけど、この地区、

どこを見ても異人だらけだ。

『……！……！……！』

『……！……！……！……！』

言葉が分からない。異人が多く住む地区だけに俺の容姿はかなり目立っていた。建物もより異国風で、窓も多くて蝶屋敷と構造が似ている。

でも……、

『迷子かしら？』

『随分と貧相な服装なこと。』

あの夫人方が何を言っているかは分からない。でも、匂いで分かったのは「未知」と「不快」。俺の会った異人はウイステリアさんとレディさん、どちらも子供の俺と彌豆子には友好的だったけど、この地区の異人は違う。

俺を見る人のほとんどは、「何でこんな子どもが？」という顔をしていた。まるでここだと、俺が異人のようだ。ウイステリアさんも外で演技をするのは、こう言うことだったのかな？

少し離れよう……。俺は異人たちから距離をとり屋根の上に移動した。

『こんにちは』

『あら？教会のローゼじゃない、お買い物？』

『はい、ここから一番近い花屋はどこでしょうか？百合を買いたいのです。』

『まあ！10歳とは思えないほど働き者ね、なら観光街の方がいいかもしれないわ、信者もよる道だから花屋が多いのよ。』

『そうなのですか、ありがとうございます、行ってみます。』

ローゼ？ローズマリーの略称か？それにしても凄く馴染んでいる。

というか、この姿の方が本来の姿なんだな、陽の光を浴び俺に不快な匂いをつけていた夫人の1人は、ローズマリーさんの前だと、とても楽しそうな匂いがする。人1人違うだけで、ここまで変わるものなのか。

意図していなかったけど、ローズマリーさんの姿を見れた。

本当にウイステイリアさんの言う通り、《日本よりも過ごしやすい場所》だったんだな。

おつといけない、ローズマリーさんを追いかけないと。

『ローズマリー、昨日のシスターさんにこれを渡してちょうだい』

『はい、お渡しします。』

『ローズマリー、お花を育てたいそうね、薔薇の花はどうかしら？』

『わあ！ありがとうございます。教会に植えさせてもらいます』

異人の集団に混ざっても違和感がない。日本だと目立つ髪色だけでなく、異人は善逸みたいな金髪、俺よりも濃い赤毛、明るい茶髪、他にも灰色みみたいな髪色もいるし緑の髪もそこそこ目立つけど、ここだと個性の一言で収まる。

『こんにちは、百合の花をくださいな』

「ローズマリーか、すまん日本語で頼む」

「コレはシツレーしました。百合の花をくださいな。」

「ああ、いつものか。何本だ？」

「2つです。」

「はいよ、お金もちようどだな。ウィリアム神父によろしく伝えとい
てくれ！」

「はいー！」

花屋に着く頃には昼間が終了していた。

『まずい、早く帰らないと』

人混みの中をすいすいと進んで、完全に日が落ちる前にレディさん
は教会に帰っていた。

『 $\div \cdot \parallel + \times \in < 1 \cdot \parallel \times !$ 』

とても強い親愛の匂いがする。溢れ出る幸せの香りだ。まさか遊
郭の潜入で宇髄さんに教えてもらった忍びの基礎が、こんな所で役に
立つなんて。

ガリガリ

「彌豆子か、ごめんな今日は疲れただろ？」

「ムー？」

「今日は潜入だからな。」

「むー！」

ウイステイリアさんに聞きたいことがある。

俺は【上弦の陸】としか言っていなかったのに、彼は吉原に居たと
知っていた。吉原の大規模破壊は新聞にも載っていたけど、それを何
故【上弦の陸との戦闘による破壊】だと知っていたのか。お館様の計
らいで吉原の破壊は【地盤沈下】だと捏造されていたのに。

それに宇髄さんの事前情報も今思えばおかしなものだ。

ガチャ

来た…！

『神よ…どうかこの小さな祈りを届けてください。』

ウイステイリアさんは俺と会う時と違って、今日は白い服を着ていた。

そして、十字架の前に白い百合を2本置いて跪いた。

そして…、

『天の父よ、この世からあなたのもとに召された妓夫太郎と梅さんを心に留めてください。キリストの復活によって、わたしたちには復活の希望と永遠の命が約束されました。わたしたちは、妓夫太郎と梅さんの死を悼みながらも、再会の喜びに慰められます。キリストよ、あなたの言葉に従っていない人とはいえ、いまはこの世を去ったすべての人を、あなたの国に受け入れてください。みもとに召された人々に永遠の安らぎを与え、地獄の刑期を終えた後は、あなたの光の中で憩わせてください。アーメン。』

言葉は分からないけど、何をやっているのかは分かった。

これは……葬式だ。

百合の花が2本…。死者は2人？なのにコソコソとやる必要がある人？

まさか……！

「妓夫太郎さんと梅さん…どうか来世では、真つ当な両親と幸せな人生を送って」

ガタン

「誰だ！」

「お、俺です！竈門炭治郎です！それよりも何で【上弦の陸】の名前を知って……い」

この人の真顔は初めて見た。

「忍び込んで盗み聞きとは、随分と【キサツタイ】に染まっていますね。私が誰のために祈ろうが君たちには関係ない話です。お引き取りを、それとも…泥棒として引き渡そうか？」

この人は本気だ。本気で警察に引き渡す気がある。

【怒り】【不愉快】【疑惑】祈りを捧げていた時の穏やかで澄み切った匂いが消えている。

でも…俺も引き下がる訳にはいかない！

「いいえ、下がりません！確かにウイステイリアさんの祈りを邪魔したのには謝罪します。でも名前を知っている以上、こちら側にも話してください。

あなたは何を隠しているのですか！」

一瞬、目を丸くした後、

「君は……Uncourteous…分かりました。こちらの負けです。話しますよ、不思議なストーリーを。」

▽▽▽

「知って…いた。」

椅子と机に腰をかけて俺はお茶を、ウイステイリアさんはコーヒートを片手に話してくれた内容は、信じられない話だった。

「ええ、煉獄キョージュロが、上弦の参に殺される事も、吉原に何百年と蔓延る鬼兄弟の事も…ね。」

「えっ…じゃ、じゃあ宇髄さんに上弦の陸の血気術を教えたのって」

「は？それは知りませんよ。もしかしたらローズマリーのような「予知能力」を持つ鬼が他にもいるのかも知れませんね。」

あつさりと言われてしまったが、お館様ほど頭が良くなくても分かる。ウイステイリアさんの持つ情報の価値を。

「あ、あの！ローズマリーさんの血気術は「予知能力」。それを知ってしまえば、いくらお館様でもローズマリーさんを鬼舞辻無惨を誘き寄せる餌にさせる心配は無くなるのでは！」

そうだ。ウイステイリアさんが纏めた未来の情報と、上弦の血気術

をお館様に渡せば、いくらレディさんが「藤の毒と太陽を克服した鬼」とはいえ、捨て駒にされる心配は無くなると思うし、禰豆子のような荒々しい裁判にならないのでは。

正直にこの時の事を思えば、俺は色良い返事が貰えると確信していた。

だけど、

「何故、私がキサツタイに協力する事が前提なのですか？」

「えっ？」

続けて、

「なぜ私がヨシワラで、あれほどの被害を出した妓夫太郎と梅を弔うことができると思いますか？」

「それは…ウイステイリアさんが聖職者だからでは？」

祈るのが仕事だから。

「全くもって違いますよ、理由は…所詮、他人事だからですよ。」

「他人事…」

鬼をわざわざ国籍まで与えて受け入れた人が、鬼のことを他人事？

「ヨシワラでどれほどの被害を出そうが、何百人の人を騙そうが、殺そうが、それこそ食おうが、それって、日本人の問題ですよね。」

私たち「異人」が被害を被る話ではありませんよね。

だから祈れる、許せる、この国では何と言うのでしたっけ？ああ、そうだ【対岸の火事】というものですよ。」

「対岸の火事…」

話の内容と異なり、にっこりと上品に微笑むウイステイリアさんが、これまでのウイステイリアさんと別人のようだ。

「…協力…しないの…ですか？」

「どこをどう見たら私が協力すると思うのですか？キサツタイは政府非公認の武装集団でしょう。そして私は民間人な上に異人、なぜ日本人の問題に異人の私を巻き込もうとするのですか？」

それに私もローズマリーも、ここにいる異人全てに言えますけど、日本政府から見れば私たちは【お客様】ですよ、あなたは招待客に台所でお茶を出させるのですか？」

「あつ……」

改めて聞くと、確かに非常識な事だ。でも、

「ローズマリーさんが死んじゃうのに……？」

「ローズマリーを人質扱いか…呆れた。あなたは勘違いしていますね、私たち宣教師が本当にオニとキサツタイの実態を知らないとも思っているのですか？」

この国は長らくキリスト教が禁じられていたので、こちら側も情報は古いですがオニとキサツタイに関する記述はありますよ。

何百年経つてもオニの頭領を見つけれない無能組織と。

真偽はともかく、宣教師は【日本には本物のデーモンがいるらしい】程度には情報が回っているし、【オニは藤の香りが嫌い】という弱点も知られている。ほとんどの人はお呪い感覚で香水をつけているけど、それとなくは知られているですよ。

ローズマリーが人間ではないと感づく人もいたのに、何も言わないのは、彼女は「藤の香り」を好むからですよ。

さて、ではもう一度聞きます。

どこからともなく法律で禁じられたカタナを片手に【オニ】と言って【人の言葉を話す限りなく人に近い生き物】を相手に問答無用で首を落としかかる子どもが、自らが所属する組織に異人を勧誘しました。さて、異国から来たお客様は相手をするでしょうか？」

「……………」

分かりきった答えだ。客観的に見てみれば鬼殺隊は【人殺しを楽しむ集団】にしか見えない。

「この会話もどうせ漏れるから言うけど『私とローズマリーを巻き込む気なら、大使館を通せ、出来なければ自分達で何とかしろ。日本人の問題に巻き込むな』」

コーヒーを飲む優雅な姿は、手を伸ばせば直ぐに掴める距離なのに、遠くに感じる。

ズズ

渡された緑茶はすっかり冷えていた。

「面白れえ繋がりだな。」

屋根裏部屋から聞いていた人には誰も気づかなかった。

炭治郎の苦悩

俺は横浜から帝都にある蝶屋敷に帰ってきた。

だが、

「炭治郎、お前からめちやくちやな音がするんだけど、休暇中に何があつたんだ？」

「あ、ああ、知り合いに言われたことが気になって…。」

ウイステイリアさんは言った。「変わった」と。だが、俺は自分が変わったとは思えなかった。

「何を言われたんだ？」

「えつと…俺の事を昔とは変わったと。」

「まあ、鬼殺隊に所属していれば変わるもんだろ。その知り合いが鬼殺隊を知らないなら尚更だ。」

「どう言う事なんだ？」

「お前の横浜にいる知り合い？そいつ民間人なんだろう。なら昔が鬼殺隊に所属する前や、鬼殺隊に入ったばかりの頃からの付き合いなら「変わった」と思われのも、言われるのも当然の事だ、俺たちがやっている事は、どんなに麗句を重ねてもただの自己満足なのだから。」

「えっ……っ？」

善逸は女の子関連の話になるとポンコツになるから忘れていた。

そもそも善逸は望んで鬼殺隊に入ったわけではない

家族がいない善逸は、俺とは違い明確な仇がない

「自己満足？」

「いいか炭治郎、俺はお前や他の鬼殺隊士と違って、爺ちゃんや兄貴が鬼殺隊に所属していなければ、どんなに給金が良くても、鬼殺隊に所属しようとは思わない。もちろん軍人も嫌だけど。」

俺たちが動く事で助かる命も確かにあるけど、同時に鬼殺隊によって大切な人の命を奪われる人もいるんだ。お前だつてそうだろ？禰豆子ちゃんは理由はどうであれ鬼であるのには変わらない。言い方は悪いけど、本来なら鬼殺されないのがおかしい。

でも、お前は許さないだろ。なら俺たちが殺してきた鬼の親族も同

じ思いだよ。」

「そ…それは。」

確かにそうだ。俺はたまたま運が良かった。あの場に来たのが富岡さんであって、その人は俺たちを認めてくれて、育ての鱗滝さんも彌豆子を殺しにかからず、鬼を連れて来た俺を真摯に育ててくれた。それだけじゃない、富岡さんが現水柱であり、鱗滝さんも元水柱。2人の立場が高かったから、柱集会議まで開かれた。これが普通の隊士だったら、ここまで見逃してもらえなかったはずだ。数多い隊士の中から柱が来る確率、かつその柱が彌豆子を見逃す確率、自分の恩師を紹介する確率、他人の為に命を張って守ってくれる確率、ほぼ家業で学校に行った日数は少ないけど分かる。とんでもなく低い確率であることが。

「君は変わりましたね」

あの時のウイステイリアさんの顔は、匂いは、どうだった？ たまたま運良く彌豆子を受け入れてもらって、そのくせに彌豆子とほぼ変わらない【鬼を鬼殺する俺の姿】に何を思ったのだろうか。

「なあ善逸、知り合いの家に忍び込む事に関して、どう思う？」

「なんだ急に？ あー、それは事情が有れば…かなあ？ その知り合いが危機的状況に陥っていたり、鬼を知らずに匿っていたならいいんじゃないか？」

「だよな。……えっ…？」

さつき言った自分の言葉に血の気が引いた。

今俺はなんと言った？ 「だよな」だ。それはローズマリーさんを鬼と認識していたことだ。普通の鬼殺隊士ならともかく、俺は彌豆子を連れているんだぞ。人を不幸にする鬼ではないのに、俺は…！

「あっ……」

自分の手が、真っ赤になって

「お、俺は」

視界が、ぶれる。

「………！ た………！ 」

▽▽▽

あれは…、俺？

「お前…最低だな。」

あの姿、あれは鬼殺隊士になる前の姿。

「俺と禰豆子は運が良かっただけだ。理由は分からないけど、禰豆子は人を襲わない、だから鬼殺隊は不服ながらも俺たちを認めた。」

「あつ…」

確かにそうだ。普通の鬼は人を襲う、それは変わらない。

「ローズマリー・ベネットが俺たちに不利益を被る事はない。それどころか鬼に関して重要な情報をあれだけ提供されていながら、お前ときたら…」

ウイステイリアさんと同じ表情だ。この夢を認めよう。確かに俺は無意識にだが、ローズマリーさんを鬼として認識していた。

「挙句に、お前を気遣って異国の他人相手に「安全の確保」を提示してくれたウイステイリアさんからの恩を仇で返すような事を言った。大切な人を失う痛みを知っているお前がだ。」

「そ、それは…！」

ウイステイリアさんがどれ程ローズマリーさんを大切にしているのかは、目の前で見ていたから知っている。あの2人にある強い親愛の匂いが何よりの証拠だった。

「私かなぜ、レディの話に反応しなかった…かですか？」

そういえば初めてあの2人と会った時に聞いたことは、

「レディは生きる事を諦めているからですよ、あの子は…未来に希望を持っていない。何より…あの子は…どの道人間には戻れない。」

そう…悲しい匂いを纏って言っていた。俺は、

「それでいいのですか？」

と、聞いたたら、

「私とあの子には、君たちのような繋がりはない。あくまでも他人です。それに私はこの道を選んだ時点で、妻は当然の事ながら、養子を迎えることもできません。だから…あの子の望む形で、せめて安らかな永遠の眠りを」

と、答えていた。すっかり忘れていた。

人に戻れないなら、鬼舞辻無惨を倒したらローズマリーさんは死ぬ。ウイステイリアさんは…大切な人の寿命を縮める俺を、どう見ていたのだろうか。

そう思い返したところを昔の俺は、

「もう1人の俺…、お前は無自覚でもいや、無自覚だからこそ余計に夕子の悪いことを言った。恩人の1人を人質として扱い、家族を奪われる悲しみを知りながら、ウイステイリアさんから大切な人を奪おうとした。」

「そうだよ、にいちゃん！」

「お兄ちゃん、目を覚まして！今のお兄ちゃんが1番鬼だよ！」

「炭治郎…、ウイステイリアさんに謝りなさい。例え許されなくても。」

ああ…、下弦の鬼の血気術が生温く感じる日があるなんて。昔の俺と花子、彌豆子に母さん。俺は一体いつから、間違っていたんだ？ウイステイリアさんに「変わった」と言われる訳だ。最初に貫こうと決意していた自分の心を忘れるなんて。

「ウイステイリアさんに…謝らなければ。」

▽▽▽

一方その頃、蝶屋敷では、

「炭治郎ーウウー！起きてエー！」

「うるさいですよ、善逸さん」

「おい、またこいつコンスイジヨウタイというやつになったのか？」

「不謹慎ですよ、伊之助さん！」

「はあ、しのぶさんは柱集会議だからいないので、問診だけをします。

善逸さん、炭治郎さんが倒れるまでの経緯を教えてください。」

「えっと、炭治郎は元気だったんだよ、俺と素振りの訓練をしていた時の休憩時間に、炭治郎は横浜の知り合いに言われた事を話して、その後…手を震わせて…ボタンって。ねえ！ほんとに炭治郎は大丈夫なの!?!」

「横浜の知り合いに言われた事を話した後、手を震わせて倒れた…」

（見た限りでは致命的な怪我も完治とは言わないものの治ってはいらる。なら、もしかしたら、）

「その話した内容を教えてください。」

「それは…うん、分かった。炭治郎は横浜から帰ってきたんだけど、その日から音がかなりおかしかったんだ。普段の炭治郎の音は、トントントンといった感じの落ち着いた音だったのに、横浜から帰ってきたらドドドドドという感じで、豪雨のような音と雷雨のような音が混じっていたんだ。内容は…知り合いに「変わった」って言われた事で、あつ！それと、「知り合いの家で忍び込むことに関してどう思う？」って聞かれて、俺は「状況次第じゃない？」って答えたら、あいつは肯定した後、手を震わせて倒れて…！ヒックたんじろうは大丈夫なの？」

（間違いない、私が刀を置いた理由と同じだ。）

「落ち着いてください、体は問題ないです。心が追いついていないだけですよ。じきに目を覚まします。今の炭治郎さんに必要なのは睡眠です。君たちは出て行ってください。」（また、刀を握れるかは別として）

「ふう…」（どうしたものか）

「アオイ、炭治郎君がどうしたのですか？」

「あっ！しのぶさん、実は、」

「心の問題…ですか…、ならこちらは治す事は出来ませんね。私たちはあくまでも、体の不調を治すことが専門ですからねえ。」

「ところでしのぶさん、随分とお疲れですね？何があったのですか？」

「少し…ね、しばらくは忙しくなりそうです。」

「そうですか。」

「レ……ロ……ごめん…なさい…、ウイス……ア…さん…ごめん…
なさい」

「随分とうなされていきますねえ。」

「上弦と戦って、生き残った過去の隊士は、己の実力不足で亡くした命に耐えられずに、鬼殺隊を去ったという話もあります。正直な話…何も無い方がおかしいのですよ。」

「そうなのですか？」

善逸さんと伊之助さんは普通に過ごしていたから、大丈夫と思ったけど、そうか…、そうだよね。

「さて…、私たちも仕事に戻りますか。」

「はい」

そして、しのぶとアオイは部屋を後にした。

この状況に置いて、唯一の幸運と言えば、

「レディローズマリーさん…ごめんなさい…ウイステイリアさん…ごめんなさい」

この言葉が聞かれなかったことだろう。

あなただけを【悪】にはさせない。

私はウィリアム・ヤコブ・ウイステイリア。

イエズス会所属の司祭であり、現在は日本で布教活動をしている数多い教会関係者の1人です。

少し前に訪れた炭治郎君には、ひどい言葉をかけてしまったけど、後悔はしていない。分かっている…彼自身は悪くないのだと…。だけど、初めて会ったあの時の幼げな表情と、今のキサツタイシとしての彼の顔のギャップで、きつく当たってしまった。

『我ながら大人気ないことを』

400年前のあの日記の著者、かつての同胞に書かれた【キサツタイ】の評価。

【悪いのは鬼の源であって、鬼となった人ではないのに、それを理解してもらえない。】

【産屋敷が抱え込む戦闘員は、国に仕えることができない溢れ者が多く、武術には精通しているが何かしらの飢えを持った者が多い】

【鬼の頭領を見つけた人を、ただ兄が鬼となったからとこれまでの功績を無視し、先が短いアザモノは関係のない弟を責め立てる、あれほどの人材を殺しにかかるとは日本人の思考を理解できない】

初期はまだ、理解が得られないが被害を思えば否定できない。とあるが、日記の中期からはアザ者とか呼ばれる、寿命を削る代償で途方もない力を得た人々への批判が目立ち始めている。

【アザ者は焦っている。そもそもおかしな話だと誰も気づかない時点でこの組織はお終いかもしれない。】

【私からすればオニと呼ばれる人外と真っ当に戦い、勝てる時点でアザ者を人間とは思えなかった。実は既に太陽を克服したオニとなっているのでは？】
【アザ者のアザはまるでペストのようであり、模様の異なりの理由は判明しなかったが、何かしらの法則はあるはずだ。】

【戦闘員に比べ、医師や補助員の比率が低すぎる。】

この辺りは、炭治郎君の話では改善されているようだが、

「鬼が元々人であるならば、鬼の頭領もまた人の子である。ならば、鬼殺隊のいう鬼とは人工的に造られた存在という他ない。」

「悪魔とは違う、日本の鬼はまだ救い方がある。人に戻せればそちらの方がコストがかからない。なのになぜ方法を模索しないのだ」

この辺りは、炭治郎君がしようとしている事と全く同じ。炭治郎君も柱とか言われる上級幹部からは、「馬鹿な事」と切り捨てられたそう。キサツタイの根本は400年前から変わっていないと見れる。

『はあ、せめて人の心持ちが変わっていれば、協力もやぶさかでもないのに。』

組織の構造を変えたり、人事の大幅変更は実は思っているほど難しいことではない。それよりも難しい事は、人の心を変えることだ。

少なくとも、《鬼は強さや経歴に問わず殺せ》の考えが主流のうちは、情報提供した所で、良いように使われてローズマリーの死期を早めるだけだ。

あの子は自分の死を受け入れ、それに従おうとしている。

初めて会ったあの日が懐かしい。

▽▽▽

「その服は、カソックですね。」

布教が思うように進まず、日本を離れようか悩んでいた所に現れた奇妙で、不思議な雰囲気を持った人。

「私は人間ではありません。」

泥水で汚れた服に、手作りの髪飾りをつけた少女は自らを傷つけて

証明した。

「なぜ、【H a l l e l u j a h】を英語読みの【ハレルヤ】ではなく、ラテン語読みの【アレルヤ】と読んだのですか？それに最初にあった君も【ゴシック様式】と【カトリック】を知っていましたね、どこで習ったのですか？」

「信じられないでしょうが、私はこの体に生まれる前の記憶がありません。」

それからだ。あの子が知識として知っているこの世界を話し出したのは。

「日本版のデーモンもとい、鬼とは人工的に造られた存在です。」

藤が咲き乱れる中庭で言った言葉だった。

「つまり…元は人？」

「ええ、そうです。鬼となる方法は基本的に一つ、鬼舞辻無惨と言う鬼の始祖の血を体内に入れること。ご安心を、私の血を飲んだ所で鬼になる事はありません。」

そうしてオニの特徴と弱点、彼女がいかにしてオニのトップからの呪縛から逃れたのかを説明され、

「鬼の中でも特に強い鬼は特別な呼ばれ方をされます。上弦と呼ばれ、1から6までいます。そして…壹、貳、参、陸は人間が原因で鬼に成らざるを得なかった人達です。」

「人が原因？」

「壹は弟への嫉妬と自らの責任感の強さから鬼となり、貳は周囲の大人が彼を子どもではなく、神の子として扱い、参は、大切な師匠とその娘であり婚約者を人の妬みによって、毒殺されました。陸は最下層の遊女の子として生まれ落ち、お腹の中にいるうちから何度も墮胎させられ、それでも産まれてくれば、何度も母親に殺されかけ、それを兄弟で乗り切って生きていたのに、これからと言う時、妹は人の手により火炙りにされ、それを助ける為に2人揃って鬼となりました。」

オニと呼ばれる者の過去を聞き、それを纏めた物をあの子には内緒にして保存した。あの子が語るオニの話では、オニとなると心と記憶が曖昧にされてしまうというような内容が多かったからだ。

そして、私たちにとって運命の人、炭治郎君が来た日、あの子は、帰りに際に教会で言った言葉。

『私は年末には死にます。だから私は：ヴィランになります！』

『ヴィラン？レディ、一体？』

急に私の耳元に近づいた彼女は言った。

『どこでカラスが見張っているか分からないから、小声でいいですよ。私は不完全とはいえ【太陽を克服した鬼】です。

どれほどの人が私を殺したいと願えども、私の存在は鬼舞辻無惨を誘き寄せる餌として大きい。なるべく無傷で最後まで保ちたいと考えます。蛇のような一族ですからね。』

蛇：キリスト教における蛇は、【原罪の蛇】だけでなく、【不死や治癒、罪からの癒しの象徴】…。

でも、あの一族は日本人。蛇、スネークを日本のイメージにする…、【狡猾】、【ずる賢い】【しつこい】【執念深い】

『いずれは今日は会えなかった、彼の妹が本当の意味で太陽を克服します。そうなれば、悪役はお役御免。ちょうど異人と誤解されていますもの、ヘイトを集めるのに私ほど最適な役はない。』

『レディ、何故わざわざ敵からヘイトを集めよう？』

レディはヴィランと言った、悪役だ。Evil、悪ではなく、あくまでも悪役

レディは教会の真ん中に立ち、芝居がかったジェスチャーをしながら、

『ヒーローが主役の物語において絶対に外せない要素は、ヒーロー、ヒロイン、そしてヒーローを支える仲間たち。

だけど、現時点では肝心のヒーローである竈門炭治郎は、本当の意味で仲間に認められていない。

そこで問題を解決するのに登場するのが共通の敵です。

人は単純です。どんなに敵対していようが、共通の敵がいれば、一

時的にでも仲間にすることができると。

この世界のヒロインであり、物語を円滑に進めるのに大切な存在は、炭治郎の妹。

鬼である以上、鬼殺隊は彼女にとっては敵地と同じ、ならば彼女と同じ《人を喰わない鬼》でありながら、《傲慢な性格の鬼》がいれば、周囲は「鬼だけと竈門妹は素直だよな、けどあの鬼は嫌いだ」と妹はさらに特別視され、私はヘイトを集める事で、鬼殺隊士共通の敵となり、全体の士気は上がる。

だから私は、《ある意味、鬼の始祖より厄介な嫌われ者》になります。』

いや、傲慢とか無理だろ。と言おうとした時、レディは、

『だから、もう：私を気にする必要はないですよ。どうせ、近い未来には自分のことなんて、全てを忘れるのだから。』

急にしおらしく、何かを悟った顔で微笑んでいた。そして顔色を変え、

『どの道、鬼は日本人を襲いますから、異人のあなたを襲う危険性はありません。それよりも厄介なのは産屋敷です。』

産屋敷が時期は知らずとも、少なくとも100年以上は行なっている《最終選別》という名の《役立たずを殺すシステム》それを聞いてからは、私も警戒していたが、あの子は今回の話でさらに警戒を高めた。

『なぜ、異人で人間の神父さんから《鬼の音》がするのかわかりません。しかし、産屋敷は鬼舞辻無惨を殺す為なら何でもします。ただの異人なら、わざわざ敵を増やす真似をするのは避けませんが、人間でありながら《鬼特有の音》をさせる人を放置するとは思えません。』

あの子はそう言って、外に出た。そして、

『ありがとう』

ビュオツ

『うわっ！』

一瞬、瞳を閉じた後には、彼女はいなくなっていた。

『オニ…の身体能力か。』

聞いてはいたけど、なんと凄まじい。

▽▽▽

そして、数週間の時が過ぎ、彼女が来ないことを心配する私は、1つの答えに導かれていた。

『ありがとう』

『ありがとう…一人で死ぬのは…いやなんだ…』

そうか…、初めて会った相手なのに、初対面の時から妙な既視感があつたのは、あの子は初めて会った日から既に【危篤】だったのか。

司祭として、信者の最期に行う【臨終の祈り】。

この国に来る前に何件か行ってきたけど、年齢も性別もバラバラだったが共通していたのは、

瞳が澄んでいたこと、

そして…とてもキラキラとした目で、今を生きている私たちを慈しむことだった。

ああなるほど…、私が他人のあの子に、恋情でもなく、かといって司祭という立場故の義務感からでもなく、いや…、初対面の時は義務感が強かったが、途中からはあの子が人に害をもたらず存在ではないと確信できていた。その時から義務感もなくなっていた。なのにあの子の来る日を待ち望んでいた本当の理由は、

『死にゆく人の心の美しさと、純粋な好意が心地よかったのか。』

あなたは「私によって救われた」と言ったけど、実際は私の方が救われていました。だから、

『私は…本当は鬼ではないのでしょうか？』

『あなたは少し特殊な人の子ですよ、でなければ、ここに居ることなど出来ないでしょう？』

私も嘘を貫きましよう。

あなたが望む、最期の日まで。

優しい嘘と決意

私は前世の記憶を持つ、日本人だった人でした。

今の記憶は、ウイリアム神父に会うまでは苦勞の連続だったな。

なんとと言っても、この【緑の髪】と【グリーンアイ】前世だったら、隔世遺伝やDNA鑑定で親子証明が出来るけど、この大正の世、そんな知識や便利な機械はない。

両親共に平均的な日本人の容姿なのに、産まれた私は白人の肌に緑の髪に緑の瞳、顔も知らないとはいえ母親には同情してしまうよ。

真っ先に不貞を疑われたのだろうね、私は名付けもされずに捨てられた。記憶にはないけど、この世界は赤ん坊の伊之助はイノシシに育てられて生きれたし、善逸もなんやかんやで鬼殺隊に入れるまで生きれたんだ。私も記憶にないだけで、そんな感じだったのだろう。

まあ、過去の事なんて、ウイリアム神父との出会い以前の話はどうでもいい事だ。だが、この世界には鬼がいる。

私もウイリアム神父が言うには、『鬼に似た何か』だそうだ。

確かに光合成が出来る髪に、土や植物類を食べれる私は純粹な人間ではない。だけど、人を見て食欲がそそられる事はないから、鬼ではない。

本当に何なんだろう、私の身体は？

こんな特異な身体をもつ私だが、鬼滅の刃には私のようなキャラはいなかった。つまり、完全なイレギュラーという事だ。そもそも、ここは物語の世界と似ているだけで、完全な鬼滅の刃の世界ではない。そうでもなきや、神父さんやシスターさんなどと言った外国人が【鬼の存在を認知】している訳がない。

そうそう、ウイリアム神父が言うには、私との出会いは浅草の近くにある教会だったそうだ。

その時はウイリアム神父1人が在籍していて、そこに迷い込んだ私が、鬼の存在や鬼舞辻無慘の話、上弦の血気術などの話をしたんだって。

今でも前世の記憶はあるけど、どちらかという今【ローズマ

リー・ベネット」の記憶の方が比率が高い。鬼滅の刃の内容もうつすらとなってしまうた。まあ、いいか。今の【私】には鬼殺隊は関係ない話だ。

あつ、これは、

『この木は…サクラ…かしら？』

吉原の大規模破壊から二ヶ月ほど経ち、避難民も各自、店や自宅に帰る人が増えたのもあり、教会のボランティア活動も収まった。

さて、日光浴もこのくらいでいいか、次は畑を見にいこう。

▽▽▽

『ローズマリーさんの育てる野菜や花は、実りが早いわ。あなたは緑の手の持ち主なのですね。』

緑の手…グリーンハンドか。

確かにそれに近いのかも知れない。

私は自分が光合成で栄養を吸収できるから、自分の好む環境にしようとする。そして結果的に、それが植物にとっても最適な環境になってしまう。

それを緑の手と呼ぶならば、確かに私は緑の手の持ち主なのだろう。

『そうだ、あなたの作った大根を料理にして、信者さんに提供したら好評だったの、私たちも手伝うから、他の畑も見えてくれないかしら？』
『勿論です。シスター』

『じゃあ、教会から少し遠いけど、ここと、この畑を見てきてくれないかしら？往復してもこの季節なら暗くならないわ。』

『はい、行って参ります。』

カラン

▽▽▽

畑には既にシスターさんが待機していた。

『お久しぶりです、シスターさん』

『最近はお会いする機会が少なくなりましたね、元気だった？ローズマリー』

このシスターさんは、教会の移動命令があったのもあり、疎遠になりつつあった。でも、まさか野菜の育成不良問題で再開するとは。

『はい、この所は体調も安定しております。』

『それは良かった。さて、あなたの「緑の手」の噂は聞いたわ。とりあえず、ここ一体の畑を見て、何か思うかしら？』

手を大きく広げたシスターさんを見ながら畑を観察する。

日当たりよし、水捌けも問題ないし、土は…今なら大丈夫そう…。

ペロツ

うん、これかな？美味しいけど、何か味が薄いな。

『シスター、この土は肥料や堆肥を混ぜたりしたのはいつですか？』

『えっ、うーん…：そういうえば、最近は農家の人を雇ったりしていなかったわね。随分と混ぜていないと思うわ。』

『育ちが悪い原因はそれですね、とりあえず堆肥を私が言う分、土に混ぜてください。』

『分かったわ、重いものは任せなさい。』

『ありがとうございます。』

本当は鬼のような体質の私なら1人でも出来るけどそれだと人と暮らす意味がない。

ここはシスターの好意に甘えましょう。

『ローズマリー、お疲れ様！はい水、よく飲んでちょうだい。』

『えっ…：1番動いていたのに、水汲みまでするのですか？私は座っていたので私に頼めばいいものを。』

表向き私は『病弱』だが、それは主に肉類を摂取できない身体だからだ。それ以外ならむしろ、並みの人間よりも体力がある。

『一応、声をかけようとも思ったけどね、何故かしら？木に身体を預け

るあなたの姿が絵画みたいで動かしたくなかったのよ。まるで…そのこのサクラに同化しているようだよ。』

何か遠くを見るような瞳で、私を見ていた。

サクラのように…か。強ち間違ってもいない。私は【鬼】ではないけど、【人】でもない。どちらにもなれない中途半端な存在。

そして…何より、

《帰っておいで、欠けた子よ。》

《こっちにおいで、人の子よ》

サクラの声が聞こえるようになった。一つだけ言うとサクラだけではない。植物の…特に木、長い時を生きた植物の声が聞こえるようになった。

とても人に話せる内容ではないけど、私はこれで救われている。

だって私に話しかける植物たちは皆、こう言う《人の子》と。

私はまだ《人の子》なのだ、一度も《鬼》と呼ばれなかった。

鬼ではないと臆げな記憶からも思う、一度も人の血で食欲が沸くこともなかったし、何より私は肉類がそもそも受け付けない。

でも…この縦長の瞳（昼間は丸い）太陽光で焼けた私の素肌。

特徴か合致する存在は一つしかないんだよな。

帰りに…、確かめよう。

▽▽▽

『ただいま戻りました。薔薇の棘を抜くので部屋にいますね。』

『あら、お疲れ様、食事の際は呼ぶわね。』

庭には、野菜類の他にも、香辛料や教会に飾り付ける花も植えている。それを育てて飾り付ける為に加工するのも、出来ることが少ない私の仕事だ。

そして、これをする際は、花の近場にある小屋に入る。その際は基

本的に1人だけだ。だから、
ザシユ

『やっぱり、少し痛いなあ』
ジワジワ…

『治るのが…早い。』

いくら小さくて、棘は棘。出血量は少なく直ぐに血は止まるとは言え、こんなに早く傷が塞がるなんて、こんな回復力はやはり人間のモノではない。

『大体10秒…か。』

独特な瞳、食事を摂ってはいるが、根本的には必要としない身体、日光を浴びていながら、素肌を晒すのを本能的に嫌悪する自分の心。やはり、私の予想通り、私は…、

『はは…、やっぱり鬼なんだ。』

と、なると可笑しいのはやはり私に国籍を与えるきつかけをくれた神父さん。この回復力から考えて、いくら記憶が朧げになっているとはいえ、そこそこの時間を共に過ごした神父さんが、私の回復力を見る機会が一切ない、なんて事は起こり得ない。つまり彼は、私が【鬼】である事を承知の上で私に国籍を与える為に奔走した事になる。優しい人である事は間違いない、だけど…

『あまりにもデメリットが大きすぎる…』

竈門兄弟のような身内でもなければ、ノック…今はスパイか？でもないだろうイエズス会所属の1人の司祭が、【人を襲う化け物】を大切に匿うか？それに私はこんな見た目でも神父さんと会った当初は、大日本帝国の臣民であった事実がある。百歩譲って同じアメリカ人の白人種ならば、まだ分かるが、今でこそ白人種と変わらない肌色でも私はアジア系の顔立ちだ。神父さんと会った当初も今と変わらないとは思えないし、彼は人種で対応を変える人ではない。肌色程度で優遇措置をとる人なら、私が懐くわけがないだろう。つまり、違うという事だ。もしくは…

『私を…【1人の人間】だと認められるほどの行動をした…のか？』

あー、思い出せない！

少なくとも覚えていた範囲では、私は人を見て食欲を増進させた事はないと認識している。これが当たっていたとするならば、優しい彼ならば私を「一人の人間」と認めて、嘘についてまで国籍と名前を与える為に奔走してもおかしくは……

『いや、やっぱりないわ…』

彼は、いい意味でも悪い意味でも「博愛主義者」だ。差別はしないし、この時代は一般的な児童労働を咎める姿勢をするが、代わりに「誰かを特別に鼻屑することもない」そんな人が、いくら無理やり鬼にされたとは言え「化け物」をよりにもよって職場であり、自宅とも言える教会で受け入れさせようと嘘をつくか？

『埒があかない、やっぱりここは鎌をかけないといけないな。』

▽▽▽

『おかえりなさい、ローズマリーどうしたんだい？』

薔薇の棘取りを終えて食堂に顔を出したら、ちょうど先に食事を終えた神父さんは、いつものように聞いてきた。

『ウイリアム神父、一つだけお聞きしたいことが』

『いいよ、何だい？』

私と一番交流が長く、私をアメリカ人として日本人からの迫害からの保護を率先としてしてくれたのは彼だと言っていた。

私もこの人の人柄が大好きだ。

だからこそ、《欠けた子》の意味を知ってしまった今、聞きたい。

『私は…本当は鬼ではないのでしょうか？』

『あなたは少し特殊な人の子ですよ、でなければ、ここに居ることなど

出来ないでしょう?』

この言葉が優しい嘘を含んでいると、分かってしまった。

だって…、それが真実ならばサクラは私のことを《欠けた子》などと言わないでしょう。

ねえ、ウィリアム・ヤコブ・ウイステイリア司祭。例え嘘で塗り固めた結果だとしても、今の暖かい教会暮らしで、私はあなた達を守りたいと思えたのですよ。だから、私も、

『守るためには手段を選びません。』

産屋敷? 鬼殺隊? 主人公? そんなモノ知るか! ここは現実世界だ。ならば、この私の特性は…結構な

『利用価値がある。』

歴史は多少変わるけど、パラレルワールドだと仮定すれば、問題は無いはずだ。

柱集会議2

「ようやく、普通の柱集会議だなあ」

「ああ、また皆で集まれて…南無」

「しのぶちゃん、おはよう！」

「おはようございます、蜜璃さん」

「上弦を倒した後の久々の集まりだな。」

「雲…」

「ところで、まだ宇髄は来ないのか？」

「……」

「無視するな、お前に聞いているんだぞ、富岡。」

「……知らん」

「ところで今日は、すごい情報があるって宇髄さんが言っていたわ！
楽しみ！」

「もしかしたら、その情報の為に遅くなるのでは？」

「そんなこんなで話していたら、」

「お館様のおなりです」

ザッ

「おはゴホッ」

「「「「「お館様!!」」」」」」

いきなりの吐血で、騒然とする中、当の本人は、

「すまない、話を続ける…ゴホッ、今日は、みんなにウツ、私の先見の
明で見えたウツ、【上弦の能力】とゴホッ、【過去】を、纏めた物を、配
りたい。ゴホッゴホッ」

「お館様、もう、お休みください。そのような体では…！」

「ありがとうございます…さゴホッねみ、大丈夫だよ、あとは、」

「俺様が説明するぜ、お館様、よろしいでしょうか？」

「もちろんだよ、頼んだ…ゴホッ」

「お館様の退場です」

ゴホッ

ゴホッ

▽▽▽

「まさか、あそこまで悪化していたとは…」

「ところで、どう言う事ですか、宇髓さん？」

「まあまあ、ここで説明するぜ、お前たちも室内に入れよ、これからの情報は本当に凄いだからな。」

そうして、宇髓が出したのは表紙に「上弦の月」と書かれた雑誌くらいの厚さの本だった。

「悲鳴嶼さんもいるから俺が朗読するな。陸は倒したから上弦の伍の能力から説明するぜ。」

【しばらくお待ちください】

「ヤベェ…」

「南無…今の柱が全員でかかったところで倒せるとは思えぬ。」

鬼殺隊最強の言葉を皮切りに、

「上弦の伍の血鬼術は、狙い撃ちをされたら、かなり厄介かと。宇髓さん、万世極楽教の調査は勿論してますよね？」

壺が有れば、どこでも転移できるといふ特性を聞き、とりあえずは蝶屋敷にある壺は捨てようと決意した胡蝶しのぶ。

「それを言うなら肆もだア、なんだよ《首を斬られて分身が暴れ出す》とかあ。」

半天狗の本体の首を斬らない限り死なない。という事実からバーサーカーな面もある不死川実弥はチツと舌打ちし、

「参もよ！素手が武器で本人の実力を底上げするだけだったなんて。」
単純明快な分、半天狗のように武器を取って優位に立つという作戦が取れない為に、アワアワしている甘露寺蜜璃。

「胡蝶の仇…上弦の弐…呼吸を使う者とは相性が悪すぎる。」

相変わらず顔色は変わらないが、淡々と事実を述べる富岡義勇。

「そうだな、甘露寺。」

甘露寺蜜璃の意見に同意する伊黒小芭内。

予想を遥かに上回る上弦の能力を聞いた柱が、自分の世界に入りそうになった時、ふと、

「…ねえ、宇髄さん、まだ言っていないこと…あるよね。」

普段、ボーとしている時透無一郎が聞いた。

「へえ…なんでそう思ったんだ？」

「なんとなく」

そんな会話を聞いた柱も黙ってはいない。

「おい、宇髄テメエ、何を隠していやがる？」

「情報共有の場です。隠し事はやめて下さい。」

「仲間とは…協力できないと？」

「え！なにになに？教えて宇髄さん！」

「甘露寺が知っていたがっている、教えろ。」

「隠し事は良くない、宇髄。」

最強の柱による重い言葉により、宇髄天元は両手を上げた。

「わかった、分かったって、だが、これは特に禁忌事項だ。直ぐに記憶から消せよな。」

「わかりました」

「勿論です。」

「当然だ」

「南無…」

「ああ」

「うん」

「上弦の壱については血鬼術以外にも、重要な面がある。それはだ…上弦の壱が人間時に捨てた子供の子孫が、時透無一郎である。」

「えっ！」

「えっえええー！」

「……はっ？」

「南無……」

「僕のご先祖様は、始まりの呼吸の剣士ではないの？」

「……！」

「正式には血縁者であるのは事実だ。だが、お前の直接の先祖は、継国巖勝、今の上弦の壱黒死牟だ。」

「違和感があった理由はそれだったんだね。」

他の柱が驚愕の顔をしている中（富岡は除く）当の本人はその事実を受け入れていた。

「もともと……おかしいとは思っていたんだよね。本当に始まりの呼吸の剣士の子孫だったら、僕は【日の呼吸】を使えるはずなのに、出来た呼吸は【霞の呼吸】。でも、僕のご先祖様が【月の呼吸】の使い手だったとすれば、月と霞、関連性があるし。」

時透無一郎には名誉欲はない。

もともと鬼殺隊とは無縁の世界で生きてきた人である。

才能だけで結果的に柱に収まったが、本人は炭治郎のような挫折もなければ、鬼殺に心を捧げた人でもなかった故に、周りが【始まりの呼吸の剣士の子孫】と囁し立てるのに、違和感を持っていた。

だからこそ、【直接の子孫ではない】と言われて納得が出来たのだ。「別に隠すことではないでしょ？今の僕が鬼なわけでもないし、これから鬼になる予定もないのだから。」

「まあ、それもそうだが、案外あっさり受け入れたな」

「先祖と言われても、400年前の血でしょ。今の僕にはその血は一滴も流れていないよ。」

「それも、そうよね。」

「科学的には血の繋がりはありませんもの。」

「時透は時透だろう？」

「南無……然るべき時に判明したのは良いことだ。」

「俺は……どうでもいい。」

「甘露寺が納得したならそれでいい。」

「それじゃ！これで本当の意味で終了！継子にも隠にも話すなよ。」

「当然だ。」

「もちろんよ」

「ああ」

「うん」

「南無」

「…」

「富岡ア、返事しろよお」

そうして、柱集会議が終わった。

▽▽▽

「あまね…輝利哉…手筈通りに頼んだよ」

「はい、あなた。」

「はい！ちゃんと演技します！」

裏では、新たな企みが始動していた。

▽▽▽

ガタンッ

『なんででしょうか、この本は？えつと…【血を使った解除方法】？そういえば実家に解読できない文の本があったと聞いたから持ち込んだけど、日本語だったんだ。それにしても…何故、日本人と関わりがなかった実家で日本語の本があったのでしょうか？』
こちらでも新たな動きをみせていた。

米国大使の養女 教会経由大使館行きです。

さて、穏やかな日常を過ごしていた私は、そんな中でも考えていた。どうすれば、教会の人たちを守れるのか？と。

正直に言おう、私は弱い。

それに、立場もはつきりいって微妙だ。

私はれっきとした「アメリカ人」だ。だけど、それで優位な立場に立っているのは、ここが日本だからだ。私はあくまでも、「迫害から逃れて、アメリカ国籍を得た元日本人」であり、今は「教会付きの孤児」であり、「養子縁組募集中」である事実は変わらない。

「日本人からの迫害」により国を追われた私の表向きの立場を考えれば、一般的な良心ある大人ならば、間違っても「日本人」と家族になれ。という訳がないが、あくまで私は受け身であり、拒否権はほぼない。いや：教会のシスターや司祭さま達なら、『無理をするな』『拒絶しても構わない』『幸せになりなさい』と私の背中を押してくれるだろうが、それは相手が「一般人」だったらだ。

産屋敷は最終決戦の始まりの自爆で、鬼舞辻無惨からの評価は「蛇のように狡猾」だ。そんな人が、利用価値が高い、太陽を克服した鬼を利用しないとは思えない。この世界で生きてみて思ったのは、

【産屋敷】の幅広さだ。

商売相手を見ても、産屋敷と一切繋がっていない人を見つけるのは、少なくとも帝都内ではいなかった。大手などは必ずといっていいほど産屋敷は筆頭株主となっていた。

さて：、では仮にそんな「権力者」から養子縁組を持ち出されたら、あくまでも【お客様】でしかないイエズス会の宣教師は断れるか？否、金銭関係ではない以上、より断れないだろう。

特に【産屋敷】は口先がうまい。

嘘だと思われないような心地よい表向きの事情を説明すれば、善良な司祭さまやシスターさん達は【お試し期間】を私に勧めてもおかし

くはない。

『どんな手を使つてでも、それだけは排除しなくては。』

ザクツ

ザクツ

私？今は【教会関係者用のカイマクル】を作り直している。当初は【鬼から避難できる場所】を作ればいいと考えていたけど、よくよく考えてみると、鬼舞辻は裕福な家庭に擬態して紛れ込み、人として生活するような存在だ。わざわざ少数派であり、非常な事態になれば警察が騒ぐような《お客様》を襲いかかるか？

否、そんな事をしてまで紛い物の鬼を捕獲しようとは思わないだろう、例えば、【太陽を克服した鬼】であつてもリスクが高すぎる。

だから、ぶつちやけると外国人である私の関係者を鬼が襲いかかる心配はない。

むしろ危険なのは鬼舞辻よりも産屋敷だ。

鬼は集団行動ができない。

鬼舞辻無惨が己に対する下剋上を恐れた結果、お互いの欠点を補合える仲間を持たせないようにした同族嫌悪の呪いだ。厄介な血鬼術を持つ鬼もいるが、そう言う鬼は基本的に戦闘能力は低い。上弦大集合なんてされたら、それこそ結果は分かりきっているが、そんな目立つ行動を異人街で起こす命令をするとは思えない。

だけど、産屋敷もとい、鬼殺隊は異なる。

廃刀令が出されてそこそこの年数が経った今でも、刀を振り回す…いや、振り回す事ができる状態だ。

鬼殺隊は政府非公認と、原作では善逸が言っていたが、本当のところはどうなのかは不明。

『公然の秘密というものだよ。』と言われれば納得せざるを得ないような状況だ。いくら鬼が帝都から離れたところに居住しているとはいえ、基本的には東京府の範囲内にいる。

政府の人間が、軍人が、何も知らないというのは余りにも無理のある言い分だ。

本当は政府は知っていて、あえて放置しているとすれば、それは最

早【政府公認の武装組織】と言っても過言ではない。

自爆の際に屋敷ごと吹き飛ばしていたが、その爆弾もどこから入手したかは不明。

もしも…その爆発物や鉱山資源を【政府】が秘密裏に提供していたとするならば…

「どこかの鬼殺隊士の身内に、私を強制的に入れ込みかねない。」

ただでさえこの時代は、法律上は人身売買を禁じているとはいえ、吉原なんて公然と営業しているんだ。産屋敷だけでは無理でも、政府が関われば【ローズマリー・ベネット】という名の【アメリカ人】を殺すことは出来る。

《右に行つて…》

《もうすぐだよ…》

《上に進んで…》

《おいで、人の子よ》

ん？地中からどうやって声が聞こえるのか？つて。それは私の血鬼術の中に【植物の言葉が分かる】というのがあつて、今は桜のソメイヨシノさん達にお願いして、道案内をしてもらっているの。アメリカ大使館の中に桜が植えられていて、それがソメイヨシノだったから、大使館に行かずとも協力を仰ぐことが出来た。

『さすがに…鬼とはいえ疲れてきたな。』

でも、もうすぐなんだ。もうすぐで、大使館に着く。

ガツツ

ガツツ

ボゴツ

星が見えた！着いたんだ！

バサツ

「ありがとう…ソメイヨシノさん」

《お礼はいらないわ、鬼殺隊に関しては私たちも不満があつたからね。》

長い時を生きた桜木の言葉。

何が不満なのかは分からないけど、桜という植物は1000年以上

に渡り日本人と深い関わりがある。人の醜さも美しさも観てきた存在故の言葉の重みがあった。

『割と建物も近い…な。』

当然か…桜は観賞用の木だ。人が見やすい位置に配置するのが当たり前。

『さて…どうやって説得しようか。』

大使館ですることは主に、

「鬼の存在を認知してもらうこと」

「鬼殺隊の存在、産屋敷の本当の姿を信じてもらうこと」だ。

でも、みんなが寝静まったこの時間帯、高官職の人が起きているとは思えない。だけど、昼間は私も教会の手伝いで大使館に1人で来ると、周りが探し始める。

ザツ

人の音？こんな時間帯に？

大丈夫、見つかったても、発砲されても。私は…【鬼】なのだから。

『驚きましたよ、ローズマリー・ベネットさん。』

この声！まさか、

『ハリス全権大使様！』

まさか、1番会いたかった人に会えるなんて！

『お久しぶりですね、しかし…君の髪色から普通の子どもではないとは知っていましたか？まさか、それが「一人の子ではない」とはね。』

『どこから見ていたのですか？』

全権大使に選ばれるだけの人ではある。私が人間ではないと確信しているながらも、発泡しなかった。

『君がサクラに話しかけていたところから…ですね。まさか、地下から大使館に忍び込むとは…、アナタの保護者はご存知で？』

ほぼ全て見られていたのか。だけどこの人は私と話し合おうとしてくれる。ならば、こちらこそ正直に答えなくては、

『いいえ…、出来損ないの私の為に奔走してくれたウィリアム神父も、教会の司祭様もシスターさんたちも、何も知りません。私が自らの保身の為に忍び込んだ。ただ…それだけです。』

私の言葉に少し考え込んだ大使は、ふむと言い、

『なら、詳しい話を聞かなくてはなりませんね。出来れば正規法で来てくれた方が良いのですが、今の君の様子を見るに非常事態のようですし、特例で今回の件は見逃しましょう。どうぞ中へ』

意外な内容だった。一国の大使、ましてや全権大使が不法侵入者に独断で特例措置を与えるなんて、でも、私としては好都合だ。罨かも知れないけど、入るしかない。

『それでは…お言葉に甘えて』

▽▽▽

『まずは君の本当の姿と経歴を教えてくださいね。』

言葉自体は優しくても、圧が命令だった。

『もちろんです、とはいえ、この姿が本当の姿としか言えませんね。基本的に擬人化しているのは、私の場合は爪とこの瞳だけです。』

元々、人の形に近い姿を保つ事ができていました。それはひとえに…私を【人の子】として扱い、受け入れてくれた人の存在あってこそです。…でなければ…とつくの昔に、人の形も、人の倫理も、忘れていたでしょう…』

不思議なことに、何一つ嘘をつかなかった。

私が、人であるように、人の気持ちを忘れずに、この時間まで生き残れたのは、私を【鬼】であるとして知っていながら、それを受け入れ、そ

の上

私を守ってくれた最初の人、ウイリアム・ヤコブ・ウイステイリア司祭と、私を鬼とは知らないとはいえ、異端である私を受け入れてくれた他の司祭様とシスター様たち。この人たちがいなければ、とうの昔に、人の倫理観なんて捨てていた。

だって…日本人は私を守ることはないと知っていたから。

『君は…いや、質問を変えよう。君は今、私の場合はと言ったな。君以外の存在はどのような生態をしている。』

『はい、私のようなものを日本人は「オニ」と呼びます。』

人を襲い、人間の血と人肉が唯一の食糧であり、老いることがない存在。この国の人から見れば、吸血鬼よりの悪魔と言った存在です。

そして、吸血鬼寄りと言ったのは、それは、鬼は太陽を浴びると灰になって骨すら残らないからです。』

『だが、君は太陽を浴びている。』

『それは私の特異体質が原因です。先程、私は桜と話していましたよね、あれは、そう見えていたのではなく、事実、私は分かるのですよ、植物の言葉というものが。』

私が鬼とされてしまった日、私は人喰いが原因の病を知っていました。だからこそ、私は人を喰う…死であると認識しました。

だから私は、普通の鬼ならば真つ先に身内を喰らうのに対し、植物の花を食べて、自分の体の構造を作り替えたのです。

人を喰わずとも生きることが出来る様に…と。

代償は、「肉を喰えなくなる」と【植物に身体が近づくこと】です。

そして、私は山に籠り、山菜を漁って、太陽光を浴びて栄養をつけていた中で出会ったのが、ウイリアム・ヤコブ・ウイステイリア司祭です。』

今思うと、もし同年代で、私に前世の記憶がなければ、彼に恋をしていただろう。前世の記憶が蘇らなかつたら普通の鬼となって、今頃、こんな風に他国の大使と話すことなんてなかつたんだろうな。

『政府は…この国の政府は何をしているのだ？』

こんな存在が闊歩しているのに、何も対策をしなかったのか？と言わんばかりの声色だった。

『残念ながら、公的には何もしていません。代わりに私兵ですが、貴族の産屋敷と呼ばれる一族が、鬼殺隊なるものを作り、鬼を狩っています。』

『貴族の私兵に任せるだ!!この国の人間は正気なのか!!』

信じられない!と言った顔をした大使に、「本当にそれな」と同意しなくなっただけど、ここは我慢我慢。

『ええ、正気とは思えません。』

漫画だった時は、特に疑問もなかった。だって政府の人間やら、軍人やらが入っていたら、なんか、漫画としての娯楽性に欠けるというか：妙にリアルになって、鬼の存在が浮いてしまうもの。

でも、この世界は間違いなくリアルだ。そんな世界で、鬼の存在を野放しにし、国民の被害を見て見ぬふりする政府関係者や、特権階級者は、ある意味、鬼よりも残酷としか思えない。

本当は裏で鬼舞辻と繋がっていると聞いたら、私は信じる。

『だからこそ、私は人間時代の記憶が曖昧になっているとはいえ、この国を捨てる決断をしたのです。この国は好きですが、この国に住まう人々はどうでもいいのです。先に私を捨てたのは、この国の人々です。だから私も大日本帝国も、その国の臣民も捨てました。』

あなた方にとっては、不本意でしょうが…、私のホームは「アメリカ合衆国」です。』

私を受け入れてくれた人々の為になら、この命をかけて守ると誓える。

でも、この国は違う、私を捨てた人々の勝手に巻き込まれるなんて御免だ。

『ウブヤシキと呼ばれる貴族と、キサツタイについて教えて下さい。そして、オニ…についても。』

『はい、まず、そもそも鬼が生まれた理由と産屋敷の関係は……』

巻き込まれるであろう無関係の隊士や隠には、心の中では謝るけ

ど、どの道、戦争に巻き込まれるんだ。戦時下のゴタゴタでどうにか生き残るだろう。産屋敷？まあ、生き残ると思うよ？執念深いし。

『はあ…馬鹿な理由ですね、その呪いとやらも、どうせ近親婚が原因でしように。』

話の内容では当然のことながら、産屋敷家の呪いも話したが、科学の時代の人として「呪い」なんて信じず、《代々、神社の家系から嫁をもらう》の件でそう言った。

私もそう思う、産屋敷家は資産家な上に公家の家柄。

名家には名家の嫁が来るから、当然、血も濃くなる。

スペイン・ハプスブルク家も、従兄弟婚、叔父・姪婚を繰り返した結果、最終的には血の濃さは兄妹婚の子ども並みに濃くなってしまったんだ。絶対に産屋敷家の夫婦も何代か前の先祖が同じ人にたどり着くだろう。

『国の外交に関わる重要な話をしてくれてありがとう、レディ・ローズマリー。全権大使として礼を言います。』

そして、最後に聞きたい。

君は…何を望む？』

悪い事を企んだ顔だなあ、まあ、大日本帝国がどうなるうが私の知った事ではないけど。でも……私の望むこと？

『私は…どの道、長生きできません。』

そう…私は人には戻れない。だから鬼殺隊が鬼舞辻無惨を討伐す

れば、私も死ぬ。でも、

『長くない命…私を受け入れて…愛してくれた教会の人たちと共に…こんな出来損ないの人モドキではありますが、教会の人たちと一緒に暮らし…人として死にたい。』

そんな自分勝手に、傲慢な私の望みを彼は、

『そうですか…』

クシャと笑って聞いてくれた。

▽▽▽

『いざという時の為に、君が掘った地下通路はこちらが秘密裏に繋がります。君は教会に戻りなさい。』

『はい、ありがとうございます。』

『国民を守るのは当然の責務です。オニなんて、とんでもない存在を野放しにし、我が国の国民を危険に晒すわけにはいかない。ここから先は、国の領域です。君は最早、我が国の国民、守られる立場です。』

最も…地下通路や、君の能力は使わせてもらおうがね。』

『私はアメリカ人です。アメリカの国益になるなら言われずとも喜んで使われます。』

『それは嬉しい言葉ですね、君の身分についても考えがあります。また後で』

『信じてくれてありがとうございます、この国の国民になれて良かった』

心の底から思った言葉を吐き出して、私は大使館を去った。

『なんで…君のような良い人を日本人は捨てたのでしょよね。』
そんな大使の言葉なんて、知らずに。

▽▽▽

数日後…

神父さんと次の祭祀の準備をしていた時に、

『ローズマリー！朗報よ！あなたを養子に迎えたいという手紙が届いたわ！』

『えっ!?!』

『どこなのですか？シスター』

養子縁組？そしてシスターが朗報と言ったから日本人ではない。

なら、一体誰が、こんな見た目の私を？

『ハリス・ベネット夫妻、大使館の全権大使様よ！迫害から逃れて今を生きるあなたのその高潔で不屈な精神を気に入ったそうよ！手紙には『ローズマリーが教会で暮らすのを望むなら、帰国までは今の教会に預ける』ですって！これ以上はない縁組よ！』

『ハリス大使さま…』

考えて、まさかコレ？えっ…いくら私の存在を野放しに出来ないからって、偽装養女にするの？私としては構わないけど…。

よく奥さんを説得できたなあ。

『ローズマリー？もちろん、あなたが望むなら…よ、縁組としては理想的だし、人格も良い方ですけど、あなたが嫌だと言うなら…』
『お受けします。ハリス大使…いえ、お父様と会わせて下さい。』

『え、ええ、勿論よ。直ぐに連絡するわ。』

パタパタ

『ローズマリー、何をしたのですか?』

すかさず、神父さんが質問した。

『鬼について、私の本質を話しました。この国が安全とは言い切れませんから…』

『人体実験をされてしまう可能性も高いのですよ。』

『私はアメリカ人です。神父さんの苦労を水の泡にしてしまう行為だと理解していました、しかし…私は見て欲しかった。この国は隠し事が多すぎる。』

『私たちの為にした事だと、理解はしています。しかし、私たちもまた宣教師です。ただの民間人ではありません。死も覚悟の上で、この国に来ているのです。君は…君の幸せのためだけに生きなさい。』

こんな風に、真っ直ぐと説教をされたのは久しぶりだろうか。

でも、とつても暖かい…。この人たちのためなら、寿命が短くてもいいかな?』

▽▽▽

『私が妻に教えた、君が【人の子】ではなくなった元人間だと言うことを。』

『あなたのことが怖くないと言えば嘘になります。しかし私も外交官の妻、人と共に生き、そして死にたいと願うあなたを…ベネツト家の娘として迎え入れる事にしました。』

凜とした声と、真のこもった言葉と表情。なんて心が美しい人なのだろうか。

『短い間ですが、あなた方のような高潔な夫婦の娘になれる事を光榮に思います。よろしくお願いします。……お父様、お母様。』

むず痒い言葉だったけど、心がウィリアム神父と話す時と同じくらいに満たされた。

『ようこそ、我が家へ』

こうして私は、教会に住みながらも外交官の娘になった。

▽▽▽

一方その頃……

「香子が……鬼に喰われた？」

「はい……鬼殺隊士の1人が言うには、これだけが残っていたそうで……」

「香子……！私が作った香子の髪飾り！」

「それと……実は私の息子が不思議な事を言っていました」

「あまね殿、どのような事でしょうか？」

妻、もとい、香子の母は、薔薇の髪飾りを握りしめて泣き出して話にならなくなった。代わりに同伴していた夫が質問した。

「産屋敷家時期当主、産屋敷輝利哉です。実はその髪飾りと全く同じ柄の薔薇の飾りを、横浜の異人がつけていました。聞けば手作りとか……なら、全く同じ柄を持つ異人がいると言うことは、奥方様は同じ柄を2つ作り、異人に渡したのかと思ったのですが……どうにも、違うようですね。」

「どういうことですか！我が家に異人との交流はありません。」

「この髪飾りは女学校に入学する娘のために作った物です！一つしかありませんー！」

「しかし、柄は確かに同じだったのです。珍しい柄だったのでよく覚えていきます。」

「息子が申し訳ありません。しかし、親の鼻眞目で見ても、我が息子は賢いです。柄を間違えるとは思えません。」

「ふーむ…、その異人の特徴は？」

「緑の髪に緑の瞳を持つ少女でした。」

「それなら、すぐに見つかりそうだな。おい、横浜に行くぞ」

「はい、あなた」

「それでは私たちはここで失礼します。息子の保護をしてくれてありがとうございます。ありがとうございました、お礼は後日。」

「お気をつけてお帰りください」

「ありがとうございます」

「あまね様、輝利哉様、お疲れ様でした。しかし、これで本当にいいのですかね？」

「良いですよ、親の存在は例の鬼を誘き出すのにちょうどいい。」

「鬼殺隊と関わりがない分、警戒もされません。いざとなれば保護すれば良いだけです。」

途中から車に乗り込んだ親子はそう言った。

刀鍛冶の里

目が覚めたら、吉原の一件から早2ヶ月経っていた。みんなに心配させて、泣かれて、怒られて、それから一週間かけて俺は復活した。

とはいえ、体力は簡単には戻らないし、昏睡状態が長引いたのもあって、体もすっかり固くなってしまった。

あつ！そういえば、

「刀は大丈夫だった？」

「うっ！それは、」

そう言つて、鋼鐵塚さんからの手紙を見れば、

【お前にやる刀はない】

【呪つてやる、憎い、にくい、憎い】

【ゆるさない、ゆるさない、許さない、呪う】

乱雑な文字に、大きく書かれた【呪う】という文字。

そして聞かされるのは、2ヶ月あったのに刀が届かなかつたという事実。そんな中で悶々とする俺に蝶屋敷の3人は、

「直接、里に行つてお話をすれば良いかと。」

「えっ！行つていいの？」

鬼殺隊に置いて、刀は命と同じ。そんな重要な施設に俺が行ける？ そんな感じで考えていたけど、あつさりと許可は降りて、俺は刀鍛冶の里に着いた。

▽▽▽

辺りに漂う硫黄の香り、

そして、俺は刀鍛冶の里で1番偉い人に挨拶をした。

「どうもコンニチハ、ワシこの里の長の鉄地河原鉄珍よろびく」

「ちなみに、この里では陶器製の壺の持ち込みは禁止されているから、壺を見つけ次第、コナゴナに砕いてネ。」

「はいー」

1番小さくて1番偉い人で、俺にかりんとうをくれた人。

そして、鋼鉄塚の名付け親だった。

だけど、それだけではなかった。

「いや、違う。折れるような鈍を作ったあの子が悪いのや」

ビリビリ

強い…圧を感じた。

そして、その後俺は温泉に案内されて、その中で柱の1人、甘露寺蜜璃さんと交流した。

俺たちのように家族を失ったわけでもなく、まさか、【結婚相手を探しに鬼殺隊に入った】なんて思ってもいなかったけど、俺だって【鬼の妹を人に戻す為】なんてとんでもない理由での入隊だし、人のことは言えない。それよりも柱の中にも、

「甘露寺蜜璃は竈門兄弟を応援しているよ〜」

彌豆子を好意的に見てくれる人もいる事が嬉しかったな。

そして、甘露寺さんから教えられたこと、

「この里には強くなる為の、秘密の武器があるらしいの、探してみてね」

「じゃあねー」

なんか…、なんか凄い人だった！

▽▽▽

そして、次の日、俺は甘露寺さんが言っていた武器を探していたところ、

「あの人は…」

霞柱、時透無一郎、揉めてる？だが、話しかける前にあろう事か、

ドン

子どもに、手をかけた。

その後の話は、こう、ものすつごつく！嫌な奴だった！確かに柱は

強い。煉獄さんも宇髓さんも、この時透無一郎もそうだが！それが、刀を持つてこそ強いという前提だ。基礎を習得しなければ、呼吸ができないように、剣士は刀がなければ、ただの無法者だ。

だけど俺の主張は、時透無一郎には届かず、

ドン

気絶させられた。

▽▽▽

そして、俺は時透無一郎に首を絞められていた人に、詳しい話を聞いた。

「絡繰人形？」

「はい、俺の先祖が作ったもので、百八つの動きが出来、人間を凌駕する力があるので戦闘訓練に利用しているのですよ。」

そうか、彼はその為に鍵を求めたのか。でも、どれだけその人形が優れていても、老朽化しているなら訓練にならないんじゃないか？

ガキキャン！

「音？」

そして、音のなる方に進んだ先にあつたのは、時透無一郎と【縁壺零式】だけど、あれ？あの人形の顔？見た事がある？知っている気がするけど、わからない。

「その剣士って誰？どこで何してた人？」

聞けばその人は、戦国時代300年以上前の人だそう。

でも、それよりも気になったのは…

「すごいな…あの。俺とそんなに年も変わらないのに柱で…才能があつて…」

「ソリヤア当然ヨ!!アノ子ハ『日の呼吸』ノ使イ手ノ子孫ダカラネ！」

えっ？

霞柱の鳥が彼の経歴を話してくれたが、そのやり取りで思い出した

！

「夢だ！俺あの人を夢で見た!!」

その事を言うと、霞柱の鳥（小鉄君が言うには意地の悪い雌鳥）には馬鹿にされたが、小鉄君は、俺の不思議な夢を【記憶の遺産】ではないかと言ってくれた。

そして、霞柱によつて壊された人形の残骸を見た小鉄君は、何かが壊れた。

「あのクソガキには言いませんでしたけど、絡繰は首の後ろの鍵を回す以外でも動きの型を変えられるんです。」

「この人形の場合、手首と指を回す数によつて動作が決められるから、刀鍛冶が剣士の弱点を突く動きを組んで戦わせる。そうでないと、本当に意味のある戦闘訓練にはならないですよ」

「拷問の訓練なんか受けなくてもな、嫌いな奴には死んでも教えねえよヒヒヒヒヒ」

その後始まった訓練は、訓練という名の拷問だった。

ゴッ

ドザザッ

「炭治郎さん遅い！全然ダメ！」

「今日も飯抜きです!!」

この訓練で何度も三途の川を渡り掛けた、だが、空腹で川に落ちると、何か温かい人の手のようなもので、もぎもぎと揉まれて、その中で、

ふと、水底の底を見ると、何かが光っていた、それをもぎもぎさせつつ掴みに行ったら、不思議な事にこの光る石は水の中でも匂いがした。

カッ

何だこの匂いは？

隙の糸とは違う匂い

左側頭部

首

右胸

左脇腹

右腿

右肩

来る！

俺はようやく、絡繰人形に一太刀を加える事ができ、7日振りの食事にありつけた。

俺はこの経験で、隙の糸と違う、いや、隙の糸よりも強力な力を得たと自覚した。

その後も訓練が続いたが、この経験から前よりもずっと動きが分かりやすくなった。

でも、これだと壊れ

「斬ってー！！壊れてもいい！！絶対俺が直すから！！」

撃てた！そして…壊れた。でも、人形の中から300年以上前の錆びた刀が出てきて、それを小鉄君は俺に譲ってくれて、それを鋼鐵塚さんが打ち直すと言い出し、その後は解散となった。

▽▽▽

「と、言うことがあってさ、刀の研磨が終わるまで、三日三晩かかるらしくて」

同室になった玄弥にも話したけど、玄弥にはどうでもいい話だったらしくて、落とした歯を返したら追い出された。

やっぱりお腹が空いていたのかなあ。

だが、俺は新しい嵐に気づかなかった。

▽▽▽

一方その頃、

「壺？とりあえず壊す…か」

バリン

ニユルン

「ひどい…ひどい、これだから芸術に理解の無い者は」

「お、鬼い！」

「血鬼術、蝟壺地獄。」

シユルン

「やはり山の中の刀鍛冶の肉など、喰えたものでもないわ。だが、それもまたいい。しかしここを潰せば鬼狩り共をヒョツ確実に弱体化させられる」

「急がねば…急がねば…玉壺のおかげで里は見つかった。けれどもあの御方はお怒りじゃ…早う早う皆殺しせねば…あの御方に楯突く者共を…!!」

▽▽▽

「私の娘を…！香子を返して!!」

『うっ！』

『ローズマリー！』

『警察を！誰か警察を呼んで！』

「ローズマリー…ベネット…、米国の全権大使のお嬢様相手に何ということ…！」

上弦の鬼

眠っていたところに、時透無一郎が来た。

鼻をつまんで起こされたけど、敵意はなかった。

まあ、この子、小鉄君にも敵意がなかったしなあ。

「鉄穴森っていう刀鍛冶知らない？」

反応が鈍いと言われたが、流石に敵意があれば起きるよ。

「鉄穴森さんは知っているけど…どうしたの？多分鋼鐵塚さんと一緒にいるんじゃないかな？」

鉄穴森さんは霞柱の新しい刀鍛冶だそうだ。

まあ、この子の性格を考えればいくら柱とはいえ、専属の刀鍛冶に成りたがる人は少なそうだしなあ。

でも、そういう話なら、

「一緒に探そうか？」

俺も鋼鐵塚さんに用があるし、《人のためにすることは結局巡り巡って自分のためにもなるもの》だと父さん達も言っていたし、俺も行こうと言ったら、

「えっ？」

何か、今初めて目線が合ったような気がした。

そして、禰豆子のことを『すごく変な生き物』と言って『前に会ったかも？』とも言っていたから、薄々感じていたけど、この子…「人の顔を認識できていない」し、【記憶能力が低い】。

生まれつきなのか、何かしらの理由があって後天的にそうなったのかは分からないけど、非戦闘員である小鉄君への暴力行為を誰も咎めなかったのではなくて、本人がそれを覚えられないからだったのか？

「ん？誰か来てます？」

「そうだね」

ぬらり

「ヒイヒイ」

鬼！嘘だろ！匂いもしなかった！この鬼…上弦だ！

ズサー

「ヒイヒイヒイ！」

早い……！気づかなかった！

霞柱もそうだが、鬼も早い！

怯えているように見えるが、この鬼は大勢を殺している鬼だ！

そうでなきや柱の攻撃を避けることなどできない！

俺も……！

ヒノカミ神楽 陽華突

「ヒイヒイ」

地面に降りた。当たった感触はしない。外れたか？なぜ反撃してこない？……まさか！

ザン

「ヒイヒイヒイ斬られたああ」

首を斬った？だけど、上弦の場合は陸のような例もある。

「時透君油断しないで！」

ビキッ

分裂！頭が生えたのと、体ができた！でも俺はあの時とは違う。

「後ろは俺が!!」

煉獄さんの時のように守られるだけの存在ではない！だが、俺は焦りのあまり、

フオッ

バキヤ

「彌豆子……！」

は、大丈夫、

「時透君!!」

鬼が持っていた武器を認識できていなかった。

「カカカツ！楽しいのう、豆粒が遠くまでよく飛んだ、なあ積怒」

「何も楽しくはない、俺はただひたすら腹立たしい、可楽……お前と混ぜざっていたことも」

「そうかい、離れられて良かったのう」

何だ？鬼を斬るたびに鬼が分裂する血鬼術？

ドドン

ババツ

何っ…だ、これは…あの錫杖

まずい、意識が

飛ぶ…

あれは…屋根に…誰か

玄弥

ドン

ドンドン

あれは…ウイステイリアさんに一度見せてもらった事がある武器

…！

銃…！だけど日輪刀と同じ匂いがする

「おおおお、これは楽しいおもしろい、初めて喰らった感触の攻撃だ」

この余裕の表情、やはりこの鬼は、

「玄弥駄目だ!!どんなに強い武器でもこの鬼は倒せない!!」

首をわざと斬らせている。

「斬ったら斬っただけ分裂する！若返ってる!!強くなるんだ!!頸を斬らせるのはわざとだ!!」

四体に分裂…再生が早い!!規則性は?どこが1番早く治る?鬼である以上急所はある!探すんだ!見極めろ!何か…!

▽▽▽

《私の娘を…!香子を返して!》

『キョウコ…?…は?』

何かを…思い出せそうな…?

あの人…どこかで見たような?

私は…何かを…忘れている?

『うっ！』

駄目だ、頭痛がする。

『ローズ……！ローズマリー良かったあ！』

『シスター……！』

そうだ！私を襲ったあの人と、取り押さえた男性は？

『シスター、私が意識を失った後どうなりましたか？』

『ええ、安心していいわ。あなたを襲った人は警察署内にいるわよ、あなたは立場が立場だからもつと上の方に行くはずよ。もう、鉢合わせる事態は起こり得ないわ。』

『そうですか……』

昼間、シスター様たちと教会で使うお花を買いに行っていた時、突然、見知らぬ女性に胸ぐらを掴まれ、首を締め付けられた。

幸い、その場を歩いていた男性が、件の女性を取り押さえてくれて、騒ぎを聞きつけた警察官に引き渡した。

私は突然の事で過呼吸を起こしてしまつたらしく、日が暮れるまで、警察署の医務室で安静にし、その間にシスター様たちがお父様であるハリス大使に連絡を入れてくれたそうさ。

一通りの説明をしてもらった後、お茶を片手に雑談していたところ、

ドン

『ローズマリー!! ああ……！無事でよかった!!』

『お母様!?!』

『大使……お父様は、どちらに?』

『ハリスは日本政府に抗議しているわ、結構怒っていたわよ。それよりも、ローズ。首を締め付けられたと聞いたわ、本当に大丈夫なの?』
首周りにそつと手をかけて、痛々しい顔をするお母様に、私はこそつと

『鬼は首を斬られない限り死にませんよ』

と、伝えた。

余談だが、私が【米国全権大使の娘】だと知らされた警察署内はパ

ニツクに陥った。

(失神した私の周囲を、騒がしくしたくないと思ったシスター様たちが黙っていたそうだな。)

お母様は外交官ナンバーのついた公用車で来たこと

通訳が外務省職員であったことにより、

お母様が来る前は、医務室の医者と事情聴取の為に控えていた警察官のみだったのに対し、警備が厳戒態勢となった。

今更だけど…これって外交問題になる感じ？

『大使館に泊まります。車の準備を。』

『はい、夫人』

▽▽▽

「うーっ!!」

「カカカツ喜ばしいのう、分かれるのは久方振りじや」

「この鬼は飛んでいる!能力が全て違うんだ!

「禰豆子俺に構うな!玄弥を手助けし…」

あれは!

「玄弥ーっ!!!」

刺された!

「禰豆子助ける!!玄弥を助ける!!頼む!!急げ」

「このままだと死んでしまう!

「人の心配とは余裕があるのう」

早い…!!

攻撃が来る……!!

ヒノカミ神楽

ギャアイイン

波動…か…まずい……！

枝に掴まれ！

枝に！！

バキッ

ダン

早く立て！！立ち上がれ！！里の人たちも危ない守らなければ…くそ
！体が痺れてる、耳も聞こえない

ゴオオオオオ

まただ！！

ならほど、そうか

攻撃の威力が落ちてる！！

これは…恐らく強くなつていく分裂は無限じゃない

ちらりと見えた口の文字、喜怒哀楽。その四体の状態が1番強いんだな？それ以上分裂すると

ドドス

弱くなる！！

後ろ！

ギヤイイイ

弱くなつても波動自体が強い！倒さなければ！一体だけでも！早く禰 豆子と玄弥の所へ！！刺した口が消え…！！
服を引き裂かれた！？

「どうだ俺の爪は、この速度切れ味！！金剛石をも砕く威力だ、震えるがいい、歓喜の血飛沫をもっと上げてみせろ！！」

この鬼の特性がわかった、なら…！

「お前もな」

一 太刀はいけた！だが、致命傷ではない！

ドン

ババババ

ギヤイイイ

「ぐっ…！！」

速度が上がった早く戻りたいのに…！

2人のいる建物さすぐそこなのに…!!どうするんだ、考えろ!!そう
だ!!今ここで倒せないなら…いやでも、もしかしたら余計に事態が悪
化するかも、わからない、わからない、迷うな!!もうとにかく殺るし
かない、禰豆子!!玄弥!死ぬな!!すぐ行くから!!

禰豆子たちのいる建物はすぐそこだ。あそこまで行く一息で!!

方向を見誤るな、相手の飛行能力と勢いを利用する!!

一刻も早く禰豆子と玄弥を助けるために

急速に飛んだ!今だ…!!

ガッ

「カッ」

やっぱりだ軽い!!そうでなきやこの大きさの翼で、これ程飛び回れ
ない、いける!!

「アアアア!!」

「禰豆子!玄弥!」

杖?あれは電気!!

「禰豆子!!やめろー!!」

やはり杖を使うか!

ガッ

鬼の血鬼術は鬼の血を元に作られている、なら杖も同じだ。同じ細
胞で作られた鬼の足を盾にすれば、血鬼術は無効化する!!

そして!

舌をやられるとこの鬼たちは、ほんの僅かだが回復が遅れる

よし、抜ける!

まずい!背後が…!!

ドス

止まった…

ゴッオオオ

「ぐっ…!!ぐあああ小賢しい術を…!!」

禰豆子の血は相当効いている…!

「禰豆子…」

あれは…!!

「楽しそうなのう、儂も仲間に入れてくれ!!」

何て重圧だ、体がひしゃげる…

何だ？

何だろう、これは

この匂いは…

「ちよこまかと逃げるなアア!!」

「ぐはっ…」

そうだ俺は団扇の鬼の攻撃を受けて、気を失った…!!

禰豆子が先に意識を取り戻したんだ

不甲斐ない…!

考えろ!!考えるんだ!!敵に大打撃を与える方法

直ぐに回復させない攻撃

「!？」

禰豆子？

「カカカツ随分見晴らしが良くなったのう」

「さあこれで、ちよこまかと隠れる場所はない」

くそっ!!瓦礫が…!!

「禰豆子大丈夫だ！見捨てたりしない！刀から手を離すんだ！瓦礫をどかすから！禰豆子！やめろ！指が切れる!!禰豆子!!やめろ」

このままでは共倒れ…

ボツ

これは…、禰豆子の血で刀が燃える

刀の色が変わる!!

温度が上がって黒い刀が赤くなる!!

爆ぜる血をまとしてこれは……!!

爆血刀

《赤くなるんですねえ》

《お侍さまの刀、戦う時だけ赤くなるのねえ》

《どうしてなの？不思議ねえ》

《普段は黒曜石のような漆黒なのね》

《とつても奇麗ですねぇ》

見たことのない女性、誰だ？

そうだった、これは遺伝した記憶だ

お侍さまというのは、あの耳飾りの剣士のことだろうか

あの剣士の刀は漆黒だったのか？

俺も同じ黒刀だ

俺の刀も今赤くなった、色が変わった

彌 豆子の血の力によつて赤くなった刀だから、きつとあの剣士とはやり方が違うけれど、

強くなったと思つても、鬼はまたさらに強く、生身の体は傷を負い、ボロボロになり、でも、その度に誰かが助けてくれる、命を繋いでくれる

俺は応えなければ

俺に力を貸してくれる皆の願いは、

想いは、一つだけだ。

鬼を倒すこと、人の命を守ること

俺はそれに応えなければ!!

「小細工した所で儂には勝てぬ、斬られたとて痛くも痒くもないわ」
来る…!!

ヒノカミ神楽 日暈の龍頭舞い

ずっと考えていた

あの一撃のことを、妓夫太郎の頸を斬れたあの一撃の威力の理由を
あの瞬間の感覚、呼吸、力の入れ方、
燃えるように熱くなった体中、そして額が
わかった、もうできるぞ

あと一体だ。一度に四体斬らないと、あと一体は

玄弥!!!無事だった!!

四体目の頸を斬ってる!!

やった!やった!同時か?同時に斬れていれば…

「玄…」

玄弥…？玄弥なのか？何だあの姿は、まるで…

「ガアアア!!何だこの斬撃は!!再生できぬ!!灼けるように痛い!!」

「落ち着け見苦しい、遅いが再生自体はできている」

攻撃は効いている!!玄弥の状態はわからないが、一体斬ってくれたことでわかった!

恐らく四体同時に斬った所で、妓夫太郎たちのようには倒せないんだ!!この喜怒哀楽鬼への攻撃は殆ど意味がない

ずっと気になっていたことがあった

頸が急所じゃないなんてことが、あるのか？

違和感の正体、一瞬だけしたあの匂い

そう、あれは

五体目の匂いだ!!

五体目がいるんだ!!見つけなければ…

五体目の鬼の頸がきつと…

「うわ…っ」

「凶に…乗るなよ、上弦を倒すのは…俺だ!!!上弦の陸を倒したのはお前の力じゃない、だからお前は柱になっていない、お前なんかよりも先に俺が…」

玄弥の様子がおかしい、だけど今は、

「五体め見つけたらすぐに教えるから!!禰 豆子だけは斬らないよう気をつけてくれ!俺の妹だから!!」

もう怒り鬼が復活した!!急げ!!

探れ!集中しろ!どこだ、団扇の鬼が風を使ったおかげで、温泉の硫黄の匂いが飛んでる

あれは…!!

いた!!いた!!いた!!見つけた…!!

「玄弥…っ!!!北東に真っ直ぐだ!!五体めは低い位置に身を隠してる!向かってくれ!援護する」

「禰豆子!!玄弥を助けろ!!鬼に玄弥の邪魔をさせるな!!」

「ぐわっ」

飛ばされるな!!

絶対にこの場から離れるな
まずい雷の攻撃もくる!!

禰豆子…!!

「がはっ」

斬った、だが、

「このガキ!!」

「玄弥ーっ!!右側だ!南に移動してる、探してくれ!!西だもつと右!!近くにいる低い!!玄弥!!」

玄弥が…!!!

「玄弥ーっ!!!諦めるな!!もう一度狙え!!もう一度頸を斬るんだ!絶対に諦めるな!!次は斬れる!!俺が守るから!!頸を斬ることだけ考えろ!!」

そうだ…!玄弥は確か!

「柱になるんじゃないのか!!不死川玄弥!!」

しまった後ろ…!!

まずい食らった!!もろに…:…つ、あれっ?

「行け」

「玄弥!!」

あんな体になっても動けるのか…!いや違う、玄弥は俺たちとは違う特殊能力を持っているんだ!!

「俺じゃ斬れない、お前が斬れ、今回だけはお前に譲る」

柱になりたい玄弥が譲った。

斬らなければ…絶対に!!

いた!!小さい…!!

よし!!いける…!!

「ギャアアアアア!!」

なんて声だ、耳が…!!

でもいける…!?

頸を斬れ…

何だ!?俺の後ろに何かいる!!

喜怒哀楽のどの鬼とも違う匂いだ

何が来た!?どうする？

まずい…判断を誤った

この位置じゃ俺にも当たるから、玄弥も鉄砲を撃てない!!

ドン

まずい攻撃がくる…!!

バキヤツ

「禰豆子…!!禰豆子大丈夫か!!」

「弱き者をいたぶる鬼畜、不快、不愉快、極まれり、極悪人共めが」

六体め…!!

さらに出てきた!もういい加減にしてくれ!!いや…あれは六体めじゃないのか?喜怒哀楽…他の鬼の気配が消えている

しまった、本体が囲まれている!!

「待てー!」

ピリッ

ドツ

強い…!強い威圧感…!これが上弦…!!

「何ぞ?貴様、儂のすることに何か不満でもあるのか、のう、悪人共めら」

何だ…?この鬼は?

俺たちが悪人?

少なくとも上弦にまで上り詰めた鬼に言われる筋合いはない。

「どうして、どうして俺たちが悪人…なんだ?」

「弱き者をいたぶるからよ、のう先程貴様らは、手の平に乗るような『小さく弱き者』を斬ろうとした。何という極悪非道、これはもう鬼畜の所業だ。」

何だ?なんなんだ?この鬼は…!!!

「ふぎけるな、お前たちのこの匂い…血の匂い!!喰った人間の数は百や二百じゃないだろう!!」

これまで俺が、俺たちが会った鬼は基本的にどこか人の面影が残っていた。だが、この鬼は違う。

「その人たちがお前に何をした?その全員が、命をもって償わなけれ

ばならないことをしたのか!?

大勢の人を殺して喰ってにおいて、被害者ぶるのはやめろ!!
ねじ曲がった性根だ、絶対に許さない、悪鬼め:!!
お前の頸は俺が斬る!!」

木の龍の頭は5本!!

伸びる範囲はおよそ66尺(20m)だ!!

よし、一つわかつたぞ

ヒノカミ神楽 碧羅の

ギャイン

「ガッ:」

まただ、また落とされた。

ダン

「オエツ」

こ、鼓膜が破れた

目が回る

立てない

だめだ!!

早く立て!!早く!!

攻撃が来るぞ!!

「ぐああっ!!」

喜怒哀楽の鬼の力も使える、しかも攻撃力があがってる:!

呼吸の暇もない、回復できない!!攻撃予知で攻撃が来ると分かって
も対処できなくなってきた、息が続かない:!!

でも、66尺以上離ればなんとか:よしここなら

伸びっ:技を出せ!!斬っ:

禰豆子!玄弥!

だめだ!!押しつぶされっ

「げうっ:」

ズバババツ

「キヤーツすごいお化けなあにアレ!!」

場違いな華やかな声、この声は、

「大丈夫!?ごめんね遅れちゃって!!ギリギリだったね」

「かつ、甘露寺さん!!」

なんて、速さだ!

「休んでていいよ!!頑張ったね、えらいぞ!」

「待って、ゲホツ上弦です、上弦の肆で…」

教えないと、

「知ってるわ…大丈夫よ」

先ほどのふわっとした言動とは違う。固くて覚悟を決めた音がする。

「上弦の肆、半天狗ね、禰豆子ちゃんと玄弥君を返してもらってからね」

名前…?上弦の名前を知っているのか?

一度も名乗られたことはなかったのに…?

「黙れあばずれが、儂に命令して良いのはこの世で御一方のみぞ」

木の龍がまた波動を出した!

「甘露寺さん!!」

だが、俺の心配なんて必要なかった。だって、

「私怒ってるから!見た目が子供でも許さないわよ」

呼吸で攻撃を斬りつけたから。

その後も見た事がない血鬼術での攻撃が続いたが、その全てを甘露寺さんは呼吸で対処した。

すごい…!これが柱と呼ばれる人の実力。

早い、でもダメだ、この鬼は本体ではない!!

言わないと…!

だが、俺が言う前に甘露寺さんは後方に下がった。

「炭治郎君!炭治郎君なら本体の位置がわかるわよね!私はこの鬼の相手をするから、炭治郎君たちは本体を探して!!」

任せといて、みんな私が守るからね!!」

甘露寺さん…!俺も動かないと!甘露寺さんの体力切れが来る前に!!

「炭治郎本体の入っている玉は何処だ、わかるか」
「わかる!!こつちだ」

甘露寺さんが、あの子供の鬼を何とかしてくれている間に、一刻も早く本体の鬼を斬らなければ!

「ぐあああ!!振り落とされるな!!頑張れ頑張れ!!木の：アレ!!へビトカゲ竜みたいのが、こつちへ来ない内に!!甘露寺さんが止めてくれる内に!!」

「ううう!!!」

バキヤツバキヤツポリポリ

うわああ噛んでる!?凄い硬い歯だ

「でもお腹壊さないか!玄弥大丈夫なのか!」

バキヤア

玄弥のお陰で木の龍の一部が千切れた!

倒れた、今だ!!

「うっ…ぐあっ…」

枝の鞭が…!!禰豆子?

ゴオオオオオ

ボツ

あの時の爆血刀!

ヒノカミ神楽 炎舞

「やれ!」

もう少し…!いない!!

また逃げた!!どこだ!!どこだ!!近い…

「ヒイイ」

ああ?

「貴様アアアア!!逃げるなアア!!!責任から逃げるなアアお前が今まで犯した罪、悪業、その全ての責任は必ず取らせる、絶対に逃がさない!!」

「いい加減にしろこの、バカタレエエエ!!」

ドガアアン

夜明けが近づいてきてる

甘露寺さんは大技連発で体力も長く持たないだろう。

そして夜が明けたら鬼は逃げる、急がなければ

「ガアアアクソがアアいい加減死んだけお前っ…空気を読めえええ!!」

木…ぶん投げたー!!

ドゴゴゴゴ

「ギヤアア」

彌豆子!

「ヒイヒイ」

避けられた!?

「ヒイヒイ」

「足速エエ!!何なんだアイツ、クソがアア!!追いつけねえ!!」

速い!くそっ!!延々と逃げ続ける気だな、夜が明ける前に

甘露寺さんが潰れるまで

そんなことさせない!!俺たちがお前には勝たせない

ズキツ

「ぐあっ…」

まずい、左足が限界に近い!踏ん張りがきかない!

左足がやられていなければ…!!

《雷の呼吸つて一番足に意識を集中させるんだよな、自分のさ、体の寸法とか、筋肉の一つ一つの形つてき、「それら全てを認識してこそ本物の『全集中』なり」って俺の育手のじいちゃんがよく言ってたなあ》

筋肉の繊維、一本一本、血管の一筋一筋まで空気を巡らせる

力を足だけに溜めて、溜めて、

ミシツ

一息に爆発させる。空気を切り裂く雷鳴みたいに

速い…!!善逸ほどではないけど、動く…!!

ガキユイン

ミシツ

いけ!いけ!!今度こそ渾身の力で…

「お前はああ濃がああああ可哀想だとは思わんのかアア!!」

まさか、ここに来て巨大化するとは…!!

「弱い者いじめをオするなあああ!!」

「まずい…!潰され…!」

「テメエの理屈は全部クソなんだよボケ野郎がアアア」

ギギギギ

本当に限界が来てしまう…!!

ボツゴオオオオオ

「うおおおお」

玄弥と彌豆子のおかげで離れた!今だ!!

崖!まずい落ちる!!

頸に刃が入った!だが、まだ斬れてない

「待て、逃がさないぞ…地獄の果てまで逃げても追いかけて、頸を、斬るからな…!!」

鬼が人のところに移動した、急げ、早くしろ、もう一度だ、

もう一度地面を全集中で蹴れ!!!

ドス

!?刀…

「使え」

この声は!

「と…」

「炭治郎それを使え!!夜明けが近い!!逃げられるぞ!!」

時透君ありがとう!!

円舞一閃

本体の頸を斬れた、

夜が明ける!!

この開けた場所はまずい

彌豆子

逃げろ!!

「ゲホツカハッ」

声が出ない

「違う!!彌豆子こっちに来なくていい、お前だ、お前なんだ、危ないの

は、陽が射すから

「禰豆子逃げる…!!日陰になる所へ」

「ううっ!!ううう!!」

「うわああああ逃げろ!!逃げろ!!死んでない!!頸を斬られたのに」

「なっ…」

ちゃんと斬れていたのに???

頸を確認しないと!

舌に「恨み」!?

本体は「怯え」だったはず…舌の文字が違う!!

「しくじった!!止めなければ…アイツに止めを」

陽光!?

ジュツ

「ギャツ」

ジュウウ

「禰豆子!!縮めろ!!体を小さくするんだ!!縮め!!」

「ううっ…」

まだ陽が昇り切ってなくても、これほど…!!

「わあああ」

まずい!!誰か…!玄弥!!時透君…

無理に決まっている。崖の上からここまでなんて、そうだあの鬼も

朝日で…禰豆子を抱えての移動じゃ間に合わない…ああ…ああ!!

駄目だ決断できない決断…

《仮に…民間人と自分の妹、どちらかしか守れないとしたら炭治郎君、

君はどちらを取りますか?》

ああ…!レディさんが言っていた懸念が、現実になった。でもダメ

だ、俺は禰豆子を切り捨てられない!

ドガッ

「っ…!!」

禰豆子が…笑ってる。

分かった…兄ちゃんも覚悟を決めるよ

嗅ぎ分ける

遠くには逃げてない

本体がいきなり遠くへ離れたなら、匂いで気づいたはず、近くに
いる

どこだ、匂いで捉えろ、形を色を

そこか、まだ鬼の中にいるな、そうか、もつともつと鮮明にもつと、
見つけた、心臓の中、

今度こそお終いだ卑怯者、悪鬼!!

「命をもって罪を償え!!!」

バラ：

「ハアハアハア」

勝った…彌豆子を犠牲にして…

日の光に焼かれて彌豆子は骨も残らない…

「ううっ、ううっ、うっ」

覚悟はしていたと思っていた。だけど、俺は本当は何も考えてい
なかった。

「竈門殿…」

里の人が指差す方に目を向けると、

「お、お、おはよう」

【炭治郎さん、十二鬼月と彌豆子さんの血と陽光を克服した鬼の血を
提供し、研究に協力してくださってありがとうございます。】

浅草で無惨に鬼化させられた男性が自我を取り戻しました。

彌豆子さんの血のお陰です。無惨の支配から解放され少量の血で
生きていられる。彌豆子さんの血の変化には驚いています。

この短期間で血の成分が何度も何度も変化している。
私はずっと考えていました。

彌豆子さんが未だに自我を取り戻さず、幼子のような状態にいる理
由を。恐らく彌豆子さんの中では、自我を取り戻すよりも重要で、優
先すべきことがあるのではないか。

炭治郎さん、これは完全な私の憶測ですが、

彌豆子さんは近いうちに太陽を克服すると思います。

あと、太陽を克服した…】

「禰豆子…よかった、大丈夫か？お前…人間に…」

「よ、よかった、だい…だいじようぶ、よかったねえ、ねえ」

喋ってる…！だけど目も牙もそのままだ…人間に戻ったわけじゃない…

「いや…ほんとによかった、ち、塵になって消えたりしなくて」

禰豆子が生きてる!!

「うわあああよかった…!!よかったああ禰豆子無事でよかったああ!!」

「よかったねえ」

あつ……

よかった…

「炭治郎大丈夫？」

あれ？…こんな澄んだ瞳だったっけ？

「あ…と…時透君…良かった…無事で…刀…ありがとう…」

「こつちこそありがとう、君のお陰で大切なものを取り戻した。」

「え…そんな何もしないよ俺…」

「それにしても禰豆子はどうなってるの？」

「いや、それが」

ダダダ

「みんなああ、うわああ勝った勝ったあ！みんなで勝ったよ凄いよおお!!生きてるよおお、良かったああ!!」

「よかったねえ」

そして、俺は気づいたら7日間意識を失った。

ハリス・ベネットという名の男

ダンッ

『この国はウィーン条約すら守れないのか!!』

『御息女への襲撃事件に関しては、申し開きのしようもございません。』

ローズマリーを：「他国の大使の娘」個人を狙った襲撃事件があり、預けている教会のシスターから、日本人女性に襲撃されたという緊急連絡があった。

この件を受けて、私は即座に大日本帝国政府を抗議

現在真夜中でありながら、こうして外務省の代表が、アメリカ大使館内にいるという事態だ。

いずれこのような事態がくるとは思っていたが、まさか昼間の往来が盛んな街で行うとは。

産屋敷という一族が、こうも軽率な行動に出るとは思わなかった。どうやら私は「先見の明」という能力を、過大評価していたようだ。だが、まだ油断はできない。

コレが囮である可能性もある。

『ローズマリーの身辺警護は、全て我が国で賄います。』

『そ、それは……』

お前たちは信用できない。

実際、養子であり療養中とはいえ「大使の娘」が首を締め付けられる前に対処できなかつたのは、日本側だ。

日本の警護レベルは低い。

この事件は、他国の大使館にも流しておいた。

日本が信用回復するまで、かなりの時間を有するだろう。

『養子とはいえ我が子、ウィーン条約で守られるべき対象者です。一般人、しかも女性相手に怖気付くような警備員は邪魔です。それとも何ですか？』

軍人をダース単位で娘に付けるとでも？』

無理難題を押し付けても問題ないくらい、今回の件で日本はやらか

した。とはいえ…、日本軍人の程度も知りたいというこちら側の事情も含まれているが。

『いえ、療養中の御息女にそのような無骨な者は不要です。この度の失態は我が国の汚点。元特別高等警察、現外務省職員の方が、御息女の警護にあたります。国を挙げて貴殿の御息女を御守り致します。』
まあ、及第点か。そして何より…国を挙げて守ると言質が取れた。今回の事件で、警視総監が辞任、特別高等警察のトップも辞任したと新聞にも載っていたな。

『そうですか、二度目はありませんよ』

『ご安心ください、今の私には特例措置がとられています。御息女を守る為の行動に関しては、越権行為を認められました。』

越権行為ねえ…どこまで認められているのやら。

まあ、ローズマリーが人間ではないという事実に勘づかれても、私の娘を殺そうとはしないだろう。

なら、表向きの日本人警護は彼一人でいいか。

どうせ、こちらからも付けるし。

『ハリス大使、夫人と御息女が参りました』

もうそんな時間か、ローズマリーに新しい護衛の事も説明しないと
な。

『それでは私はこれにて失礼します。』

ボタン

▽▽▽

『無事で良かった！ローズマリー!!』

ああ…ちゃんと暖かい。

『たい…！お父様!!』

『今日は大変だったな、さあ、食事にしようか。今夜は新しい野菜を使ったテリーヌだぞ。いっぱい食べなさい。』

『はい！』

『一皿だけでは足りないでしょう、人参のスープもあるわ。』

『ありがとうございます、お母様』

公務で時間が取れない私と違って、リリーとは仲良くなっているな。

『うぷ…すみません…吐きます』

『まあ！油が駄目だったのかしら？』

本当に野菜しか食べられないのだな。

『食事が終わったら簡易だが、部屋を用意した。しばらくは大使館に泊まりなさい。襲撃者が1人とは限らない。』

『はい、お父様』

『もちろん、リリーの部屋もある』

『まあ！大使館に泊まるなんてドキドキするわ！』

『おやすみなさい、良い夢を』

『おやすみなさい、お父様、お母様』

ささて…仕事に戻るか。

▽▽▽

『クッククック…あつH A H A H A！』

まさか…！まさか…！こんなに上手くいくなんて！

そう…、あの子にこれまで通りの教会滞在を許したのは、善意ではない。

日本側が付ける警備を薄くさせる為だ。

市街地で生活をさせる、その上頻繁な外出を繰り返させれば、警

護の人間とはいえ、注意力は低くなる。大使である私には、ガチガチの警備を行うが、その家族ともなると狙われる確率の低さから、警備人数や資質が低くなりがちだ。

誘拐程度の被害でも出れば…と思っていたけど、まさか、本人を意図的に狙った犯行を行うなんて…！

『あの子は期待を裏切らないな！』

あの子は【オニ】だ。キサツタイでなければ誰でもよかったが、できれば【男】がよかったなあ。

一般人女性だと、インパクトに欠ける。

とはいえ、二度目を起こさせると今度はこちら側が不利になるからな。今は、まだ…溜め込む時期だ。

『さて…大統領府には今回の件は送った。料理は向こう側が行うだろう。私は自分の仕事をするか。』

――
親愛なる大統領閣下

前回送った動画から、日本には【オニ】と呼ばれる吸血鬼もどきが存在することは認知して頂けた事でしょう。

この度の事件において、大使館並びに領事館の警護レベルの引き上げが認められました。

これまで以上に、日系人の諜報員を複数人派遣して頂きたく存じます。

日本人は排他的な性格ゆえ、我々のような見た目はかなり目立ち、都市部の捜査でさえ支障をきたす程です。

できるならば、日系人は見た目もアジア寄りの顔を求めます。身長も低い方が都合が悪くないかと。

これまでの調査で、戦争の幻覚として扱われていた話の中にオニを含むような話も出てきました。

【鬼の軍人】が存在する確率が高まり、また鬼の軍人が実在するならば、裏で手を引いているのは確実に産屋敷耀哉という名の、日本人貴族です。

産屋敷一族は警戒心が高く、またカラスを使役して情報を独占して

おります。末端とはいえ潜入させるのは困難だと認識しました。

我が娘個人を狙った襲撃事件では、使い捨ての推定実母が襲いました。他人の精神を揺さぶり、汚れ仕事をさせるのに躊躇いがありません。直接、産屋敷を揺さぶるのではなく、産屋敷と関連がある機関に圧力をかけるべきです。

彼らが経営している組織、鬼殺隊は政府非公認。

国家との癒着はありますが、認められていない以上産屋敷一族は鬼の存在は否定的にとらえています。また、鬼殺隊は《剣で首を切り落とす》という原始的な戦略しかなく、鉄砲は1人しか使っていないという時代錯誤な組織です。娘が言うには「遠距離攻撃手段が少なく、その結果犠牲者を量産している」という評価があり、正直な話、鬼殺隊だけで鬼を絶滅させられるかと問われれば、確実に不可能でしょう。

産屋敷の目標は「鬼の絶滅」我が国も、日本がこれ以上アジアで覇権を握られたら国益に影響します。日本を弱体化させるためにも、我が国は鬼殺隊に武器提供を行うべきです。

その為に我が国の技術力で太陽と同じ光を作れないでしょうか。

鬼は特殊な鉱山で作られた武器でしか殺せません。

故に武器の量産ができないそうです。

そして確実な殺し方は「太陽光を浴びせる」これだけです。

鬼と呼ばれる生き物は、基本的に不老不死、故に確実に滅ぼすためには太陽が必要です。

我が国の国益、並びにいずれ起こる戦争への準備の一環として、大統領に協力を仰ぎます。

日本駐在全権大使 ハリス・ベネット

ホワイト・ハウス

『これはまた…良いネタをもらったな』

『大統領、ハリス大使からはどのような内容が?』

『読んでみたまえ』

数ヶ月前、ハリス大使が日本から送った報告書には、「養女を迎え入れたこと」とある動画が送られてきた。

秘匿性が最上位の動画を大統領府に直接送り込むなど、並大抵のことではない。

しかも、相手は破竹の勢いでアジアで覇権を広げる国、大日本帝国の駐日大使。

私はごく一部の信頼できる口が固い議員を複数人呼んで、動画を見た。今も思い出す。あの…ありえない内容を。

カラカラカラ

《とりあえず、グサつとすればいいのですか?》

資料に色塗りの写真で送られた養女が映った動画。

《ええ、あのレンズに向けて思いつきりやってください》

《わかりました…うぐっ…!!!》

自分で自分の腕を切り裂いた!?

『ひい!!』

『oh!!』

『おえ…!!』

集まった一部が、筋肉が丸出しになったグロ映像に反応する中、カラカラ

《はい、治癒してください》

《わかりました…》

動画内は顔色一つ変えずに淡々と進んで、

『えっ!!』

『oh…!!』

『Noー!!』

『なっ…!!』

傷がゆつくりとだが、癒えている…？

《何度も見ますが、相変わらず…凄い回復力ですね。》

《私はこれでも遅い方ですよ、だって…人間を喰べないから。》

《ちなみに、早いオニほどの程度で回復するのですか？》

《そうですね…例えるならば、瞬きをする間に…でしょうか。》

《確かにそれに比べれば、ローズマリーは遅い方ですね。》

オニ？人をタベル？瞬きをする間に回復？

なんだ…？この映像は…!!

《よし、全回復完了！それでは、初めまして大統領並びに各貴人方、私はこの度ハリス・ベネット大使の養子に迎えられましたローズマリー・ベネットと申します。

先ほどの映像から分かるように、私は人ではありません。

一緒に送られた資料をご覧ください。》

—————

オニ

日本版 vampire

太陽光を浴びると骨すら残らず灰になり、死亡する生き物

食糧は人間の血並びに人肉

人間の血や肉も何でも良い訳ではなく、特に美味しい血を稀血と呼び、栄養素が高く、普通の人間の10人分の栄養が詰まっている。

人肉以外を食べようとすると吐き戻してしまう。

基本的に不老不死であり、【太陽光を浴びること】【特殊な鉱山で作られた剣で首を切り落とす】以外では死なない。

元々は人であり、とある人間の血により強制的に身体を作り替えられた存在。

《私は日本では「オニ」と呼ばれる化け物です。キリスト圏国家から見れば vampire です。》

流れる映像、話される言葉。資料だけならハリス大使が狂っただけだと思いが、映像で証明されてしまったては嘘ではない。

だが、そんな化け物を仮にも鎖もなしに養子？

ハリス大使は何を考えている？

《映像と資料をご覧になった方ならば、なぜ私が大使と普通に会話が可能にしているのか気になるでしょう。私は》

《こちらから説明します大統領閣下、彼女は「オニ」ですが、人肉を食べられない特殊個体です。

基本食事は、太陽光と水、野菜は食べられますが栄養補助程度です。

動物性油も 1g だけで吐き出しました。

そして彼女は、太陽が弱点のオニでありながら「太陽光を克服した唯一のオニ」です。

本来ならば、このような会話など到底できない存在ですが、彼女は太陽を克服する代わりに、「オニ」としての戦闘能力を失いました。

人間の庇護下に入らねば生きていけなくなり、日本人に頼ったら殺されるので、大人しくしていれば「人の子」として扱ってくれる我が国を頼ったという訳です。

それでは話を戻します。オニの始祖の名はキブツジ・ムザン、資料をお読みください。》

オニの始祖、ムザン・キブツジ

千年以上前に産まれた貴族の子息であるが、人間時代は病弱で長生きできないと断言されていた。

だが、一人の医師は熱心に検査、治療薬を投与した。

その治療薬が「オニ」を創り出した。

原材料は不明だが、千年以上前に創られた治療薬なので、原材料そ

のものが絶滅している可能性が高い

彼がオニを増やす理由はただ一つ、「太陽を克服したオニ」を作り、それを吸収することで、己が【完璧な生き物】となるため。

基本的に配下のオニに関しては「増やしたくもない同類」としか思っておらず、陽光を克服するのは自分だけで後はいらないうと思っている。

認識としては、見た目は大人、中身は赤ちゃんである。

『随分と酷い評価だな』

ハリス大使が化け物を養子に迎えた理由は分かったが、その化け物の始祖情報は酷評もいとこだった。

見た目は大人、中身は赤ちゃんって。

だが、こういうプライドもない存在ほど、敵に回ると厄介なのも事実。

『プハッ！中身、赤ちゃんって！』

『自己中心の塊だな、赤ちゃん扱いも無理はあるまい。』

『だが、この資料からわかるのは、【生きる為】になら何でもする存在だ。不利になれば逃げる一択、不老不死者相手にソレをやられると痛手だ。』

『敵前逃亡できないように細工するしかない…か。』

《資料からわかる通り、キブツジ・ムザンは生きること至高とし、死ぬことを極端に恐れます。故に敵前逃亡や配下の切り捨てにも躊躇いがありません。始祖の鬼である彼は、首を切り落とすことで死ぬことはありません。唯一殺せる手段は太陽光のみです。そして、体液全てが人間にとっては猛毒です。なので…改めて要求します。』

科学と自由の国であるアメリカの力を、大日本帝国に突きつける！キサツタイなんて傷の舐め合いをする組織に属する、貴族の私兵如き

が【オニを殲滅させる】なんて不可能です。》

キサツタイ？

貴族の私兵？

一体、大日本帝国とは何時代を生きているのだ？

だが、分かったことはただ一つ。

あの国が短期間で清に勝てたのは、まだ理解できた。

同じアジアの国だ。戦争に対しての向き合い方や熱量が違えば勝

つのは不可能な話ではない。

だが、ロシアは違う。

仮にも当時から落ち目に向かっていたとはいえ、列強国の一員がアジアの国に全体評価で見れば【負け】を突きつけられた理由は、コレだったのか。

不老不死の兵士…こんな存在を量産させられるならば、一定の勝ちを引き寄せるのも当然の結果か。

『大統領…？』

『閣下？』

『大日本帝国がこれ以上覇権を握れば、我が国の危機になる。全力で

この【オニ】を…潰しにかかるぞ!!』

『『『イエッサー!!!』』』

▽▽▽

過去を振り返っていたところ、公式文書を読み終えた報道官は、

『使えますね…このネタは。』

ニヤリと笑った。

そういえば、彼は真面目で低賃金でよく働く日系人を嫌う、白人労働者層と懇意にしていたな。

『ラジオ、新聞の一面になるでしょう、早速調理しても?』
『勿論だ』

▽▽▽

『号外!号外だよ!』

『駐日大使の娘さんが日本人に殺されかけたよ!!』

『買った!!買ったあー!!』

『一枚もらおうか』

『まいど!』

一人の紳士が新聞を買い、それに釣られて、

『まあ、物騒な話ね。』

『そうですね』

『あの国は、ウィーン条約を守る気がなかったのか?』

『10歳の女の子相手に首を絞めるなんて…なんと野蛮な』

『ロシアを撃ち破っても、所詮はアジアの国だからな』

【駐日米国大使の養女、日本人一般女性に殺されかける!】

【背後には貴族の影が!】

【大統領、日本政府に『宣戦布告か?』と発言】

▽▽▽

「なぜ、あなたの妻は大使の娘を襲ったんだ?」

ところ変わり、場所は東京府霞ヶ関。

特高による【取り押さえた者】への事情聴取が行われていた。

「……」

何といえれば良いのだ?あの親子連れについて話そうとは思ったが、私たちは平民、相手は所作から華族の可能性がある。そんな相手の話をしたら、口封じされてしまうかもしれない:!!

「はあ…、黙秘は良策とは思えませんが、あなたは一応、【取り押さえた者】です。例えば大使の娘を襲ったのがあなたの妻だったとしても、あなた自身を裁くことは出来ません。目撃者も多いですからね。」

特高は怖い存在だと認識している。

確かに私自身は問題ない。目撃者も多い中で、殺人未遂犯を取り押さえ警察に受け渡したのを、大勢に目撃されている。

だが、妻は、妻は今、どうなっている?

拷問されていてもおかしくない:!!

そのくらい大変な相手を気が動転していたとはいえ、殺そうとしたんだ……!

「知っている限りのことを話します。しかし、そちらが先に答えて下さい……!妻は……!妻は無事ですか?」

「……本来ならば、外交官関係者を殺そうとした罪人にかける情けなどない。内乱罪が適応され、秘密裏に死刑になるのが普通だが……」

「だが……?」

否定が入ったということは……!

「米国大使、あなたの妻が殺そうとした娘の父親が、罪人の受け渡しを求めた。曰く『日本人に任せて隠蔽されたらたまったものではない』とな。」

外務省は今回の襲撃事件でかなりの泥を被った形だ。無論、私たち特高も…だが。少しでも信頼を回復したいのだろうな、平民の襲撃者ということもあり、今は大使館に拘束されている形だ。」

「よかつ…た…」

少なくとも拷問されることはないだろう。

大事な証言者だ。

「こちらは質問に答えた。そちらの事情を聞かせてもらおうか」

「はい、まず信じられないでしょうが、『鬼』をご存じで？」

「【鬼】？物語のか？」

「いえ、現実存在する不老不死者のことです。」

特高では調べられているでしょうが、私たちの娘は現在行方不明になっております。そこに【産屋敷】と名乗る者が現れ「待て」

「はい？」

「要するに…娘が鬼に喰われたと産屋敷…今の当主は耀哉か？に言われたのか？」

「いえ、産屋敷当主ではなく…、やっぱりその反応…華族だったのでね…」

予想はしていたが、やっぱり華族の奥方と御子息だったか。

「恐らくは警察官さんの言う産屋敷で間違いありません。その産屋敷家時期当主とその母親が、我が家に迷い込んできて、一時的に保護していた時に言われたのです。」

『娘が鬼に喰われた』と。実際に遺品として妻が作った手作りの、薔薇の髪飾りを渡され、その髪飾りと全く同じものを持っている異人がいると聞き、私と妻はその【緑髪の異人】を探しに、横浜まで来たのです。そして…」

「あなたの奥方が、大使の娘の首を絞める姿を目撃した…と。」

「はい…。やはり…華族の言葉があったのが遠因の一つですが、行動を起こしたのは妻。この証言が意味を成す日は来るの…：警察官さ

ん！どうしたのですか!!」

真つ青な顔をした特高の警察官さん。

手が震え、足は貧乏ゆすりが止まらない。

「な…何という…事態だ。こ、これでは…【個人の攻撃】から…【国の攻撃】と…みなされてしまう…。」

「け、警察官さん？」

ボタン

「失礼します！」

「まだ、終わっていないぞ!!」

「それよりも一大事です!! 今回の襲撃事件を米国大統領が」

「何だ？大使館と領事館の警備増築の許可は出したぞ、謝罪文も出した。何があつたんだ」

「宣戦布告なのか？と日本政府に問い詰めたそうです!!」

「襲撃者の証言が届いたのか…、産屋敷め…!!」

異常な速さで届く、私が知ってはならない情報の数々。

特高もあまりの事態に私がいた事すら忘れていたらしく、気づいた時には、

「関係のないあなたには不憫な話ですが、機密情報を知ってしまったので、特高で匿います。」

特高の施設で、それなりの生活をさせられるようになった。

牢屋じゃないだけマシか。

【鬼の音】

『よくぞ…無事で…!!』

歓喜に震える院長シスターに、

『ただいま戻りました！院長先生にウィリアム神父さま！』

日本人の護衛と共に、教会に戻ってきたローズマリーが挨拶とキスをした。

『おかえり…ローズマリー』

ローズマリーの本当の事情を知った人が、彼女を家族として迎え入れた。

それに関しては、孤児院院長の彼女が荒れたけど、養子縁組自体は上手くいき、ローズマリーは【大使の娘】になった。とはいえ、ローズマリーは教会に留まっているけど…。少しだけ変わった事といえ
ば、

『また届きましたね』

『招待状…こんなに多いとは。』

そう、あの子は養女とはいえ、アメリカの全権大使の娘。社交界からの招待状が多く教会に届くようになった。

『うわあ、また産屋敷関連の企業名です。』

あからさまに嫌な顔をした彼女に前々から思っていた事、

『それだけ、産屋敷が手広くやっていると言うことでしょう。とはいえ多いですね、ハリス大使に対策をしてもらえばいいのでは？』

あの子が教会に留まる表向きの理由は《病弱な娘の療養兼、体力づくりの為》だからだ。ハリス大使はローズマリーの父親、病弱な娘のために各企業に通達したところで、おかしな話ではない。

『いえ、私とハリス大使は表向きは親子でも、実態は利害関係ありきの関係です。このような些事に【一国の大使】を巻き込みたくありません』

ん。』

『とはいえ、一度ならず二度目、三度目と続くのは明らかに故意です。どの道、対策は必要ですよ。』

そう…最初こそ今よりも招待状が多かった時期もあった。

だが、本人が『教会に滞在する理由』を返信の中に書き込んだことにより、ほとんどの企業は引き下がった。

だが、未だに招待状を送るのは、産屋敷が筆頭株主をしている大手企業や、産屋敷が運営している小さな企業だ。稀に何も知らない個人事業主も含むが。

企業名や個人名を変えたりしているから、最初は気付かなかったが、日本政府がつけた護衛が、

「しつこいようでしたら、こちらから産屋敷に苦言を付けますが？」

と、言ったことにより判明した。

だが、ローズマリーは、産屋敷が暴走するのを防ぎたかったのか、

『いえ、必要はないです。』

と、断った。

もちろん、親子になったのだからベネット家で、ささやかな歓迎会はしてもらったようだが、あの子が人ではないと知っている彼女は、当初は反対していたな。

▽▽▽

『ハリス大使はローズが人の子ではないと知って、養女に迎えたいと言いう事ですか？ウィリアム司祭。』

そう言ったのは、孤児院の院長シスターだった。

『はい、院長。しかしローズマリーは大使を信じていますし、何より彼

女は自分で決断したのです。人間ではないと話してでも、自分の身が危険になると判断しても：。「人と共に生きたい」と。』

『とはいえ、相手は外交官、国益の為に動く立場です。ローズマリーを守るために動く人ではありません。』

この院長の名はマリア、名前通り慈悲深い性格の女性で、早々にローズマリーが人間ではないと感じていながらも、さりげなく人目につきにくい個室を用意し、警戒しながらもローズマリーを我が子のよう愛している人だ。

『あの子もそれを承知の上で養子になりたがっているのです。ローズマリーは言っていました、

『どの道、私の命は短いです、異端な私を人として受け入れてくれた人たちのためになら、喜んで短い命を捧げます。それが：化け物に出来る唯一の恩返しなのだから。』と。』

本当は私も反対しなかった。

でも、出来ない。シスターは知らないが、私はウブヤシキを知ってしまった。資産家な上に貴族、欠点は日本人である事だが、それ以外は表向きは完璧だ。その人達に渡すくらいなら、利用価値がある内は危害を加えないハリス大使の方がまだ安全だ。

『化け物：ねえ：、わたしには：唯の子どもにしか見えないのに。』

『シスターのその御心が、ローズマリーを救ったのでしょね。』

『あら？私よりもあなたの方が救っているわよ？人間ではないと知っていたながらも、あの子の為に国籍まで準備したじゃない。正直に言いますが、人ではないと確信した時は《なんて厄介な存在を受け入れさせたの！》と思ったし、あの子がヘマをして追放される展開を望んだわ。』

本人はそう言っているが、実際は、

『でも：【人ではない】と周囲に気づかせるつもりなら、途中から部屋を大部屋にしたり、食事に肉を取り込ませようと思えますよね。でも、あなたはそんな事をしなかった。』

そう：、あの子が【人ではない】とバラそうと思えば、いつでもできる立場にいる。

このシスターは孤児院の院長だ。

孤児のローズマリーの周辺に関して言えば、彼女の裁量次第でどうとでもできる。

『最初は…他の子供たちに危害を加えられないようにするためでした。しかし、視界に入る内に思ったのです。』

《この子…人を守るべき対象として見ている》とね。

オニに関しては、「人を食べる人に似たナニカ」と聞きました。

でも、あの子は人を【食糧】とは見ていなかった。

なら、話は別です。

教会はもとより、助けを求める者の味方です

例え相手が…人でなくともね。』

『そうですか…』

ローズマリーの秘密を知った人が、この人で良かった。

『それはそれとして…』

微笑んだ顔をしたまま、シスターは

『はい？』

『ローズマリーの命は長くないというのは、本当ですか？』

『はい、それは間違いようのない事実です。』

そう、ローズマリーは【前世の記憶】を元に「鬼は大正時代、この代で滅びる」と言っていた。本人は「あくまでも確率が最も高い結果であって、未来予知や予言とは異なる」とは言っていたが、【確率が高い】ならまず間違いはないだろう。

『なぜ…他ならぬ貴方がこの養子縁組に反対しなかったのか疑問でしたが…そういう理由だったのですね』

シスターマリアは、私がローズマリーの名付け親であり、最初に保護を求めたことを知っている関係者の一人。

『司祭は基本どの信者相手であらうと公平です。』

そして鼻唄は絶対にしない。

だからこそ私は驚きました。

【人ではない】と知りながらも、あの子に名前を与えて、国籍を所得させるために本部に虚偽の申請書を出すなんて…。ですが、そうですね

…司祭と初めて会った日から、あの子の運命は決まっていたのですね。』

『あの子は長生きを望んでいません。』

それは初めて会った日からそうでした。「オニ」と呼ばれ政府非公認の武装組織に命を狙われ続け、また人としての倫理が邪魔をして人間を喰べることができないので「オニのテリトリー」にも入れない。あの子が自ら望んでオニになった訳ではないのは、明白でした。

そして…奇妙なことにあの子を見て、何か懐かしく思えてしまったのです。理由は分かりません。

ですが、去りゆく後ろ姿を見て、『守らねば』と思いました。』

院長の言う通り、私はこれまでどのような事情と後ろ盾があろうとも、平等に接していたし、務めてそうあろうとした。

司祭たる者、信者の立場で対応を変えたら不誠実だからだ。

だけど、あの子に関しては違った。

初めて会ったあの日、自傷傷が癒えていく様を見た私に、「ありがとう」と言った時、誰かはわからないけど…『おんがえしを…』と聴こえた気がした。

気付いたら、あの子を呼び止めていた。

その後、交流会話で「ウブヤシキ」の裏の顔を知り、あまりにも非人道的な試験内容に憤りを感じ、あの子に名前を与えたい自分の気持ちと、人道的な理由もあった事もあり、年齢以外は本当の事を本部に送り、あの子は「ローズマリー・ベネット」の名を正式に得ることができた。

身元を保証できれば十分だったのに、まさか…本人が人体実験も覚悟の上で自国大使にカミングアウトをするなんて…。

だが「オニの存在」が認知された以上、権力者は彼女を放つてはおかない。

ならば、「キサツタイ」から一時的にでも守ってくれて人道的に扱ってくれる権力者の庇護下に入るのが、一番幸せな道だ。

『養子縁組の件は、シスターにお任せします。』

『はい、ちゃんと見極めますよ』

▽▽▽

そして、養子縁組は円満にまとまりローズマリーは教会に留まりながらも、教会の家族から、お客様になった。

少しのゴタゴタがあったが、それも元々ローズマリーは養子に行く事が前提だったのもあり、早々に周囲は慣れて、日常に戻った。

『ウイリアム司祭、次の日曜日の礼拝は交代します。ハリス大使が「最初の保護者と食事をとりたい」と言われましたので。』

別の司祭から唐突に言われた内容。

『大使が…私を呼んだ？』

それが言葉通りの意味ではない事を、私は知っている。

『分かりました、次の日曜日の礼拝をお願いします』

▽▽▽

そして、日曜日の朝、

『あれ…？あの車は』

『大使館の車かしら？』

居住区に見慣れない車が止まっていた。

『お待ちしております。ウイリアム司祭で間違いないでしょうか？』

大使館の者です。お乗りください。』

『これは、随分と贅沢な迎えだな』

『全権大使御息女の最初の保護者なので、当然の対応かと。それよりも早くお乗りを』

『そうですね、では、お願いしますね。』

ブロロ

▽▽▽

『ようこそおいでくださいました、ウィリアム司祭。』

着いた先はハリス夫妻邸だった。そして、本来ならメイドの1人や2人いるはずなのに今日は奥方と大使が出迎えてくれた。

『本日は急に呼び出してしまつて悪かった。だが、彼女の正体を知っている者同士、話をしたかった。仕事を休める日が今日以外だとかなり先になつてしまふからな。』

『ハリスがごめんなさいね、ウィリアム司祭。でも私たちもあの子に關しての情報は、どんなに些細なものでも欲しいのよ。』

大方予想していた展開だった。

それに、ローズマリーに出来た現状唯一の味方。

人らしいところを教えて少しでも、理解してもらわねば。

『あの子に關して知っている情報は全て話します。今からでもよろしいですか？大使、夫人』

ペンとノートを持って、

『はい、お願いします』

『では、まずローズマリーが食べれる物は』

私が知っているローズマリーの特性は全て教えた。

『まあ…油も動物から採ったものでもダメなの？』

『植物から採られた油なら大丈夫ですよ』

『野菜しか食べれないのか？ならフルーツはどうなんだ？』

『植物系統なら大丈夫かと、小麦も普通に食べていましたし』

『それは…栄養になるのか?』

『さあ…?本人は太陽光が一番の栄養ですからね。』

『食べれるけど栄養として摂取できているかは不明か。』

そんな質問と応答を繰り返している中、

ジリリ

『あら?珍しいわね、司祭様、ハリス少し失礼するわ』

『では、次に気になるのは…』

『えっ…それは…!…直ぐに向かいます!!ハリス!!ローズマリーが!!!』

『夫人?』

『ローズマリーがどうしたんだ?』

電話が終わってから夫人は慌てていた。なんだろう?嫌な予感がする?。

まさか…!

『ローズマリーが…!ローズマリーが…!日本人に殺されかけたですって!!』

『はっ…?仮にも私の娘だぞ…?』

『ローズマリーが!?!』

予感が当たった…!今のローズマリーは全権大使の娘だぞ、ウブヤシキは何を企んでいるのだ?

『ハリス!!私は今すぐ警察署に向かうわ!公用車は残っていたわよね!借りるわ!!』

ボタン

こういう時の女性の行動力はすごい。あっという間に車を走らせた。

『ローズマリー…は他国大使の娘だぞ…この国は何をしているのだ…!!』

『たい…!』

笑っ…て…いる?…そういえば、話す内容が内容とはいえ、昼から夜まで会話を成立させる事は難しい。

『ハリス大使』

お願いだから、ただの錯覚だと確信させてくれ

『なんででしょうか？私はこれから大日本帝国政府に抗議をしに』

この目は…、

『仕込みましたね』

『さて？何のことやら？』

最初からこういう意味合いであの子を養子にしたと分かっていたのに、ローズマリーが哀れでならない。

『いえ、私も教会に戻らせて頂きます。』

さあ…【あの日誌】の解読をしなれば。

▽▽▽

ローズマリーは大使館で保護されていると聞いた。

ハリス大使がわざと仕込んだ事件だとしても、あの子の利用価値がある内は殺したりしない。だから、

『もし…これを読んでいる人が…いるとしたら』

随分と古い文字で書かれているが、文章はラテン語読みだったのもあり、何とか解読が出来た。

—————

もし、この日誌を読む人が数十年、下手すれば数百年後かもしれないが、この文章を書いている俺と、俺の人生を説明しよう。

俺は俺の生まれた時期は知らない。

俺についての出生はこの話では特段重要ではない。

ただ、農家の次男坊に生まれ、跡継ぎでもないことから早々に奉公に出された。だが、気づいたら刀を持ったお侍さんに追いかけて回され、とんでもなく臭い森の中に閉じ込められたことだった。

今、微かに残った記憶では、「人を」「食ったか」「斬ろう」この程度しか思い出せない。

そんな森の牢獄に閉じ込められて、数ヶ月、いや数年経ったかも分からないなか、何とか生き残っていた中、またお侍さんに追いかけて、今では分かるが、とんでもなく臭い十字架に鉄で磔にされ、血が止まらないようにされた。

その作業が終わったお侍さんは、直ぐに何処かに去り、俺は茶髪に緑の目をした異人と2人つきりにされた。

その異人もまあ、臭い臭い。

不快な匂いを身につけて来るから、流石に覚えちまってよ、最初俺が言った言葉は何だっけな、そうそう思い出した、「血でも飲むのか？」だったな。んで、その言葉を聞いた異人も言葉は分からなかったが、否定していたな。それで、結構驚いていたな。

俺が言葉を話せると分かったら、次からソイツは俺について聞いてきやがったな。

「何が欲しい」

「どこの生まれだ」

「なぜオニになったのか、分かるか？」

だったな、ここで俺が自分が【一人の粹】から外れちまったからお侍さんに追いかけて回されていたんだと納得できたもんだ。

俺も日が経つ事に、何か縛られていたモノが外された感覚になつてよ、だいたいその、センキョウシ？とかいう奴らの話も聞くことができた。

俺の血を際限なく流させているのも、シヤケツ？とかいう治療の一环だってよ。

何ヶ月、下手したら何年かもわからねえ時間が過ぎた。

センキョウシも毎日くるわけでもねえから、暇な時は自分の過去を思い出そうとしていたっけ。

だが、覚えている暦は【享徳】だったこと、異国の暦で1453年だと言うこと。後は先に話した大雑把なところだけだった。

俺の名前は何で、どこの農家だったのか、友は、家族は、それらを

思い出そうと考えても無駄だった。

そして、久しぶりかもしれないセンキョウシは何を思ったんだが、木の管を足に刺してドロっとした血を俺の体に入れ始めた。

臭い、痛い、まずい、俺が思い出せる範囲はそれだけだ。

だが、それが終わった後、センキョウシは俺が釘付けられている十字架を太陽の下に出した。

俺は死を覚悟した。

だが、予想に反して俺は、太陽の暖かさを思い出した。

センキョウシは太陽を浴びる俺を見て泣き出し、顔を黒い頭巾で隠した奴らは、信じられないものを見たかのような顔をしていた。

そうして俺は水に移る自分を見て理解した。

俺は人間に戻ったのだと。

足は治療で刺されたのを抜くことはできたが、歩くのに不自由になった。他人の血を入れた結果なのか、俺は明らかにあの異人と同じ目の色になり、髪の色が薄くなった。

思い出せないが、心ばかりか顔の彫りも深くなったかのように感じた。

それよりも重要なのは、俺は、元々話していた言葉が分からなくなった。

センキョウシと話していたから気づかなかったが、頭巾で顔を隠している奴らに話しかけたら、言葉が分からなくなった。

センキョウシの言葉は分かるのに、馴染み深い奴らの言葉を理解できないこと、理由は早々に察した。

【異人の血】を入れたことだ。

そして価値基準もその異人寄りになっちまった。

日の本の国の奴らが全員子どもに見えちまった。

このままでは、俺は結婚なんざできねえ、それと外の世界では、俺を人に戻したセンキョウシとかいう奴らが帰国を命じられたとか何とか。

どの道俺は、この容姿もあり、このまま日の本では暮らせない。センキョウシもそれを理解していた。

だから俺の《異国に渡りたい》という願いが叶った。
ついでに名前が思い出せない俺のために名付けまでしてくれた。
今お前が読んでいる日誌は、明で書いている。

あのセンキョウシの影響を受けたのか、俺は明よりもっと遠い場所
に行きたいと思っている。とはいえ、俺はもはやこつちを拠点とし
て、商売をしている。だから俺ではなく、俺の子供たちに旅をさせよ
うと思う。

もしかしたら、俺の子孫がセンキョウシになったりしてな？

まあ、俺の人生録はここまでだ。

これを読んでいるお前たちが、オニのいない世界で幸せに過ごして
いるのを願うよ。

藤 正樹

『私の…先祖がオニ…だったのか。』

何という因果関係だ。道理でローズマリーに私が肩入れをするわ
けだ。

先祖は宣教師によって、オニから人に戻り子孫を残した。

そして、その子孫である私は宣教師となり、オニとなってしまった
ローズマリーに、あの時の宣教師のように名前を与え、居場所を与え
ている。

『道理で…懐かしく感じたわけだ』

初対面のローズマリーの表情に、妙な既視感を感じたが、その正
体はこれだったのか。

だが、これで一つだけ確信が持てた。

私は、

私は【オニの血が濃ゆく出ている】

隔世遺伝だろう。私は人の子として生まれ、ローズマリーのように
太陽を嫌がった過去などない。

タンジローが言っていた【オニの音】の正体、それは、

『私の血が…』

半分ほどオニと同じような物だったのか。

疑問は解けた。ふああ…流石に遅くなってしまった。
寝よう。

《…!!!》

ここは？

臭い、臭い、なんだこの匂いは？

《Vou trazer—lo de volta para uma
criança humana, não importa o
que aconteça!》

これは…ポルトガル語？

それに服装がかなり古めかしい。

十字架に磔にされている人は血が流れている？

あの宣教師は止めないのか？

《俺の血…でも…飲む…つもり…か…》

「俺の血を飲むつもりか」この言葉、もはや！

《A ordem é o sangue, a ferocidade
de foice curada. Mas por que voc
· não volta a ser uma pessoa?》

単語だけなら、聞き取れる。

血、抜く、人、やっぱりこの宣教師は、

《Se arrisque, vale a pena tenta
r. Se voc· não sabe meu nome, p
or favor, tenha paciência comig
o.》

《うぐ…!!!》

足に管を刺した!?まさか!

《うぐ…!!あつ…ガア!!ヴヴヴ!!》

ガタン

ガジャン

量が多すぎる!少し止めてくれ!

スカッ

触れない!?いや、これは夢だ。干渉できるわけがない。

大丈夫だ、だってこの人が人に戻れたからこそ、私たちは産まれたのだから。

《ヴヴヴ、ヴヴヴ…ヴヴ…》

治った…?

《…Se·voc·n·o·fizer·uma·confir
ma·o·final,·v·sob·o·sol.》

ズリズリ

ズー

ザッ

《あ…あ…た…た…か…い…》

こんな粗治療で人に戻ったのか、今の代まで継承されないわけだ。

ガタン

場面が変わった?

《神父さんよ、分かってるだろうが、俺は》

寺に見えるが、これは教会だ。

《日の本の国の言葉を忘れてしまったのは、私の血が原因です。とりあえず明まで行きませんか? 私たちも退去命令が出てきています。途中までなら君の今の見た目なら紛れ込んでも違和感がないですよ。》

《ありがてえ、もうこの国では暮らしていけねえんだ。》

こんな足だしなど言っつて、先祖は穴が空いた状態の太腿を見せた。

《名前も新たに与えましょう、君と会った場所をとって、家名は藤、正

しい樹とかいて、マサキと名乗りなさい。》

《ありがとうございます》

《貴方は私が唯一、オニから人に戻すことが出来た成功例。感謝を言われる筋合いはないですよ》

《だが、あのままだったら俺は殺されていた。救ってくれたのはあんなだよ、神父さん》

《ふふ、ありがとうございます…、これで心置きなくポルトガルまで帰国できる。

どうか…君の道にも幸多かれ、アーメン》

シユン

また変わった？

ここは、この文字は…明か。

《旦那様、お客様です》

《ああ、入れてくれ》

無事に到着して、成功を収めたのか。よかった。

《新大陸…ですか？》

《ええ、まだまだ未開の土地が残っている土地です。豪商である藤殿に資金援助を頂けるならば…と思いましたが、その顔は無理そうですね、失礼を》

《待ってください》

《何でしょうか？》

《資金援助は遠すぎてできませんが、人を送り込みたいです。》

《ほう…誰をですか？》

《息子の1人をその、新大陸とやらへ。》

《危険な場所も残っています、ご息子への修行ならば別の場所にすれば良いのでは？》

《違います、修行ではない…、そこに血を残させるために行かせるのです。》

《はあ…まあ人はいくらいても足りないくらいですし、構いませんが、ではそのように致します。》

《この血は貴重だ、鬼が減びていない以上、絶やすわけにはいかぬ》

ガバツ

『はあ……はあ……はあ……！』

何だあの夢は？

【あの日誌】を読んだ影響か……。

だけど、妙にリアルな夢だった。

『血を絶やさぬために各地に行かせた子供たちの生き残り……か。』

子供時代に思い出したら、特別な血を喜ぶかもしれないが、この歳になって、先祖の後を追うかのように宣教師となり、オニの子供を拾って、鼻肩している自分には、この血は重すぎる。

『400年越しの恩返し……か。』

産屋敷の罪と罰

「外務省職員の内鬼大和です。産屋敷耀哉伯爵、

この度の件いかように責任を取るおつもりか？」

政府は米国大統領からの矢継ぎ早に来る国際通信に「産屋敷耀哉と政府は結託していない」と返答し、だが仮にも「伯爵位」を持つ貴族が裏で画策していた証言を返され、「これでも結託していないとでも？」と全く信用してもらえず、外務省には全権大使からの「産屋敷一族はどのような刑罰を受けるので？」と言った内容の公式文書の返信に悩み、政府に聞き出そうとしてもはつきりとした返答がこないから書けず、

【返答がこない⇨産屋敷一族は無罪放免】と誤解した米国大使館は、「こんな野蛮国家に自国民置けるか！」と日本にいる米国人観光客に帰国を促したりと……。

【列強の大日本帝国】の名に致命傷を負わせた。

軍部や政府は当然の話だが、そこそこ穏健派が多い外務省や今回の件では関連性がなかった他の省庁も、流石に事件が事件なので元凶の産屋敷一族への制裁に嬉々として加わった。

産屋敷家は普通の華族なら持つ本邸がない。

県を跨いで似たような屋敷を複数持ち、数ヶ月、早ければ数日で移動する一族だ。

だが、日本国内にある以上【政府】が本気を出せば華族としての特権と責任がある産屋敷家を見つかることは容易い。

農林省現在の農林水産省が産屋敷が私有している土地の中で、ある程度の広さと大きな屋敷を持つ土地を調べ尽くしたのも大きかった。

しかも今回の件で、派閥関係なく共闘関係になったのだから尚更だった。

「これまでの鬼殺隊関連の騒動は黙認していたが、それは国益に反しない行いだっただからだ。だが…今回の騒動により、我が帝国の【一流

国家】としての矜持に傷どころか、致命傷を負わせた。それどころか、アメリカ側に【鬼の存在】が明らかになった。」

そう…もはや、政府内では『産屋敷死すべし、慈悲はない。』な空気どころか、時代が時代なら熱血な男衆が討ち入りに入っけていてもおかしくない荒れ具合だ。

「外国に知られた、しかも相手国は最近移民問題で反日家も徐々に増え始めている、文字通りの一流国家アメリカだ。

大使の娘を殺そうなどと…脳まで溶けたのか？産屋敷殿？」

「ゴボツ…言い返す言葉も…ない…です…ね…」

本来なら、曲がりなりにも華族であり伯爵位を授与された千年以上の歴史を持つ、名家中の名家である産屋敷家の当主。

たかが【外務省職員】がこのような口を聞けば、社会的に死んでもおかしくない。だが、今回の件で【黙認していた政府】は米国側に鬼殺隊を乗っ取られる前に、自国の監視下に置くことにした。

つまり…今の鬼殺隊のトップは公式記録上は【総理大臣】であり、【産屋敷耀哉】はいつでも当主の座を追い払える状態なのだ。

「いきなり当主を変えたら、末端は混乱するでしょう、総理からの伝言です。」

【産屋敷耀哉の代までは鬼殺隊当主であることを認める。米国が本格的な介入を始める前に、鬼舞辻無惨を討伐せよ。そのかわり資金援助、武器提供、技術付与に糸目はかけない。】

陸軍の軍人も入りますが、彼らの行動を制限することは認めません。

またそちらの隊律？ですか、それを守る義務もありません。彼らには軍規を守ってもらいます。

問題ないですよ？隊律と軍規に大きな差があるとは思えません。」

疑問系で聞いてはいるが、実際は産屋敷が否定しても、これまでもみ消してきた騒動を盾に押し付ける予定だった。

それを読み取れない産屋敷ではない。

「もちろん…ゴボツ…です。」

「では、話し終えましたのでこちらは失礼します。」

産屋敷当主の呪い：最初はただの遺伝病の一つとしか思っていなかったが：アレはそんな生温いモノではない。だが、あのような状態でも意識がはつきりとしているとは：執念深いという言葉とはこのことなのか。

▽▽▽

耀哉 side

私の代までは鬼殺隊当主であると認める…か。

確か：あの九鬼大和と呼ばれる男。

上弦の月に見逃されたと報告があつたな、

「ゴホッ…九鬼大和を…鴉で見張りなさい。」

カア！

▽▽▽

カアカア

鴉…、やはりか。

「諦めが悪いなあ…」

私の弱みを握ったとしても、もはや上層部に産屋敷に加勢する味方はいない。

産屋敷家に味方していた政府高官関係者は、大別して2つの理由がある。莫大な賄賂か、それとも産屋敷との姻戚関係か…だ。

だが、今回の「米国大使の御息女襲撃殺人未遂事件」により、賄賂で騒動をもみ消していた警視庁官、特高の上層部は一新された。

産屋敷も想定していなかった人事異動により、じわじわと囲い込む

工程ができなくなった。

だから、今のトップは産屋敷とは関連のないホワイトカラー。

当然、特高が徹底的に産屋敷との姻戚関係がないかを調べた上で：だ。

今回の事件で、軍も警察官の規律の乱れに怒り浸透元々仲が良くなかった上に、事件で国に泥を塗ったのだ。

本来なら軍人と警察官、お互いの領域に文句があれど、立ち位置を弁えて言わないのだ、通常は。

だが、『国に泥を塗る』ことは『陛下の顔に泥を塗る』も同然。軍の統帥権は陛下にある。

国会にも軍閥とも言える組織が小さいながらも存在するのだ。

国会議員が「警察の腐敗」を正すことが、「一流国家」の地位を盤石にすることだ！」と叫ぶのは当然の流れだった。発言も正論だったので誰も反論者はいなかった。

その影響もあって、ほぼ家柄で決まっていた椅子は関連性がなく、むしろこれまでの上層部の敵とも言える人員で埋まることになった。

この流れは警察だけではなかった。

国会議員はもとより、外務省の官僚、揉み消すように言われた事件に不満を抱いていた末端の警察官や、特高も加わった産屋敷の粗探し過程の間で、あろう事か死刑囚が本名で産屋敷耀哉の私兵になっていたことも発覚した。

これで「司法権の腐敗」も明白だった。

警察組織と同じく、こちらも上層部の腐敗の証拠を見つけ出しては、逮捕や罷免、軽いものは罰金で降格といった有様だった。

懲戒処分の中には「産屋敷家との姻戚関係者」も多数含まれていた。ここまで産屋敷の手による腐敗が目立てば、『軍も腐敗していないか?』と言われる。

陸海軍も思うところがあったのか、第三者であり範囲外の特高にあえて調査を依頼。

『ほぼ、あるだろうな』と確信されていたが、無かった。

いや、身内間による庇い合いの痕跡はあったが、一銭も見逃さずに

調査した結果、「賄賂の形跡はなし」だった。

軍としては意図せずに、「陸海軍の高潔さ」を見せつけた結果だったことに、普段は仲が悪い陸軍兵と海軍兵の笑い合う姿を各地で見るところとなった。

今回の騒動で唯一、「陸海軍がお互い妥協案を出して協力する様になった」という良い影響をもたらした騒動だった。

まあ、それはさておき、これからどうしようか？

とりあえず、ローズマリー令嬢に挨拶をしに大使館に行くか。

「赤坂の米国大使館前まで」

「はい」

『この度の事件は、我が国の不始末で御座います。総理大臣に代わり、改めてお詫び致します。ローズマリーお嬢様の護衛に任命されました、元警察官であり現在は外務省職員ヤマト・クキと申します。』
『そ、ソウデスカ…ハリス・ベネットの娘、ローズマリーです。よろしくお願いします。』

鬼殺隊の当主が狙ったのだから想定はしていたが、なるほど…鬼だったのか。

『どうか固くならないでくださいませ、こちら側が信用できないのは当然の話です。しかし私は鬼殺隊のやり方に不満を持っている者なので鬼殺隊に加担することは、死んでもありえませんが。ローズマリー令嬢が何者であれ、私は私の責務を行う、それだけです。』

『やはり…意図的に見逃していたのですね。』

この子の自身は10歳ではない。下手な誤魔化しが効かないならば、国の恥であれ、正直に答える方が印象は良くなる。

『ヤマト殿、ならば…』

隣に黙って座っていたハリス大使が持ち込んだ取引内容は、衝撃的な内容だった。

『米軍と我が軍が…帝都で合同軍事演習!?!』

本気で日本から【鬼】を駆逐するのか。

緊急!! 柱合会議

「あーあア、羨ましいことだぜえ、なんで俺は上弦に遭遇しねえのかねえ」

「この度の柱合会議は、普段の場所とは異なり、柱は全員室内に入つて畳の上での会議だった。」

「こればかりはな、遭わない者はとんとない。甘露寺と時透その後、体の方はどうだ、後なぜお前までいる宇髓?」

「あつ、うん、ありがとう随分とよくなつたよ」

「僕も…まだ本調子じゃないですけど…」

「冷たいなあ、あまね様に呼ばれたから来たんだよ」

「これ以上柱が欠ければ鬼殺隊が危うい…死なずに上弦二体を倒したのは尊いことだ」

「今回のお二人ですが傷の治りが異常に早い、何があつたんですか?」

「その件も含めてお館様からお話があるだろう」

「大変お待たせ致しました。」

鈴のような声を持つ人、この人の名は、

「本日の柱合会議、産屋敷耀哉の代理を産屋敷あまねが務めさせていただきます。」

産屋敷あまね、産屋敷当主の妻である。その後ろには、

「そして、こちらの方は、」

「特別高等警察所属、階級は警視。そして外務省職員として特例で2つの役職を持つことが許可された、鬼殺隊の監視役の1人、九鬼大和です。」

スーツの左胸には黄色に輝く中に一本の黒い線が入った特有の桜が3つ彫られたバッチ。

所謂、階級章だ。

「警察?あまね様一体どういうことですか?」

「甘露寺さんに同意します。そして、何故鬼殺隊に監視役がついたのですか?」

「私からも、説明を求めます」

柱の甘露寺、胡蝶、悲鳴嶼の3名が場違いな警察官の存在に疑問を問いかける中、

「それは甘露寺様、時透様に現れた【痣】の説明を終えてからお話いたします。そして、当主の耀哉が症状の悪化により、今後皆様の前へ出る事が不可能になった旨、心よりお詫び申し上げます。」

この言葉を皮切りに、本来いてはならない警察官の存在は一時的にだが、忘れられた。

「承知…お館様が一日でも長く、その命の灯火燃やしてくださいを祈り申し上げる…あまね様も御心強く持たれますよう…」

「柱の皆様には心より感謝申し上げます。」

その後は、戦国の時代まで遡って【痣】の効果と、【例外なく25で死ぬ】というデメリットも説明された。



九鬼大和 side

強すぎる感情なら、こちらでも試せる可能性があるが…

【心拍数200以上】

【体温39度以上】

この状態で動き回れる者が、痣を発動できる…か。

徴兵逃れが多く、身体検査の不正も相次ぐ軍部で試すほどメリットがない。

一応、報告はするが、現実的ではないし、25で死ぬメカニズムが解明されない限り、実戦で使われることはないだろう。

「それでは、次はこちらの方について説明いたします。」

「初めまして、この度政府の命により、鬼殺隊の監視役並びに人員補助要員に任命されました九鬼大和です。」

「おい…待てヤア」

「特高の御仁、説明を願います。」

さて、本題の話が終わったとなると、次の話題に移る。

「あまね様、何故、政府非公認である鬼殺隊に特高の奴が監視役なんざあついたのですかねえ」

特高所属であるクキヤマトと呼ばれる男を睨みつけつつ、なるべく丁寧な言葉を話す不死川実弥。それを気にもしない男は、

「説明します、まずこの中にいる方で「米国全権大使の御息女襲撃殺人未遂事件」をご存知の方はいらつしやいますか？」

「えつと…その事件って、7日前くらいに起こった事件でしたっけ？」
「確か新聞の端の方に載っていたような？」

「南無…私は新聞が読めない故、知らぬ。」

7日前と言えば、上弦戦の最中だった。

新聞を読む暇がある人員がいなかった上に、元々鬼殺隊は教育の差が激しい組織なのもあり、そもそも文字が読める人が少数派であった。

そのフォローは組織がしているのもあり、鬼殺隊士はあまり気にしていなかった。

だが、今回の質問に関して言えばこの答えは不正解だった。

「世間を騒がせないために情報統制はしていましたが…：…仮にも、当事者の関係者でありながら、反応が…それとは。」

「当事者？」

「関係者？」

「しかし、新聞では襲ったのは【一般人女性】としか書かれていませんでしたか？」

「しかもその女性は確保済みで、特高で管理していると」

「表向きはそのようになっていますが、実際は異なります。」

スウと空気が凍ったかのような声色になり、

「襲撃者が【一般人女性】であること、

これは間違つてはいません。」

ただ、現在その襲撃者は米国大使館に保留されている状態であること。その襲撃者に襲撃を唆した黒幕がいることにより、現在の米国には我が国に宣戦布告なしで攻め込む事が可能であること、そして：【米国大使の御息女】が襲われた元凶が【産屋敷耀哉伯爵】であること。」

「お館様が？」

「本当なのですか、九鬼さん」

「特高の人やあ、嘘もほどほどにせえやあ」

「そうか…」

「南無：それが事実ならば、特高が来るのもわかる」

「お館様が、そのようなことを仕出かすとは思えません」

「派手な話だな」

「特高つて、何？」

柱の面々は、お館様の実績と【先見の明】という能力の効果を一番実感している。だからこそ、いくら特高警察の言葉とはいえ信じることはなかった。

平時ならば、この鉄の結束とも言うべき団結力は賞賛されていただろう。

だが、今の産屋敷は戦犯。このような発言は、

「君たちが…いや、鬼殺隊がなぜ政府公認にならないのか不思議でしたが、現状がここまで酷いならば、当然の判断ですね。」

特高や外務省どころではない。大日本帝国という名の一つの国を敵に回した。

「あん？」

「そうか…」

「どのような点で…でしょうか？」

「えっ！何でそう思ったの？」

「鬼殺隊を公認組織にしなかったのは政府の判断じゃねえか。」

「公認でなければならぬ理由でもあるのか？」

「甘露寺を困らせるな、特高といえども容赦はしない」

「特高って何？」

急に関係のない《鬼殺隊が公認組織にならない理由》を唐突に話した特高に目が点になっている中、まるで川のせせらぎのように静かに話し始めた。

「我が国の約250年に及ぶ、徳川の支配を終えた後遅れを取り戻すために臣民は文字通り、血反吐を吐く勢いで【一流国家】に近づいた。その過程にはこれまでのこの国の伝統を崩し、破壊する行為も含まれていた。だが、それよりも近代化を推し進めた結果が、清との戦争で勝ち利権を獲得し、ロシアとの戦争ではギリギリの攻防戦だったとはいえ、総合評価では勝ちを得ることが出来た。

それにより我が国はアジアで唯一【一流国家】の仲間入りを果たした。

「ここまでではご存じですよね。」

「ええ、」

「だから？」

「南無」

（ネチネチ）

「常識だろ」

「：」

「？」

「？」

「なぜ…我が国がそこまで【一流国家】であることに拘ったのか分かりますか？」

それは、国を守ることができれば、そこに住む人々を守ることができるところですよ。そして、【未開な蛮族が住む土地】ならいくら侵略しようとも問題がないというのが、大日本帝国以外の【列強国】の常識です。

つまり…【国を守ること】が引いては【臣民を守ること】になるのです。

だから、この国は【一流国家】であり続けなければならなかった。」

「かった？」

「過去形？」

「？」

「？」

「南無」

(ネチネチ)

「だから？」

「ねえ、いい加減特高って何？」

「今の我が国の評価がどうなっているかご存じですか？ないでしょう？」

【無抵抗の10歳の少女を殺しにかかる野蛮国家】ですよ。」

「「「「はっ？」「「「「「」」」」」」

「米国全権大使の御息女は10歳、しかも襲われた場所が昼間の往来が盛んな場所だったのもあり目撃者が多数。その上その少女は元はこの国の臣民の1人でしたが、『日本人による迫害』により米国に国籍を移さなければならぬ人でした。」

そこで教会の神父が職場の伝手を使って、イタリア国籍にした後、神父の母国である米国国籍にして、教会所属の孤児にしたという経歴があります。その後、その数奇な道のりを歩み、それでも信仰と善性を失わなかった話を聞いた米国大使が、少女の「不屈の精神」を気に入り、養女として迎え入れたという経緯があり、米国に派遣している諜報員からの情報によれば、この経歴を米国政府は異常なまでの早さで宣伝しているとか。」

「政治的工作…か」

宇髄天元は元は忍である。情報に関する使い方を一番熟知していた。

「そうです、向こうの言葉ではプロパガンダ。

ただでさえ、大使の身内となれば国際条約により、守らなければならない義務が生じます。これを守れなかった我が国はこの時点で列強国から責め立てられる理由がある。ましてや相手が一般人ともなれば、警備の質が低いと言われ、自国民を守る為という名目で増員を

求められても断る口実がありません。

その上、大使の娘から見れば「迫害から逃れてようやく掴んだ幸せをまた日本人に潰された」事になります。

これは相手国の民衆から見れば、我が国の民衆は「10歳の少女が不幸の道から逃れた所を執拗に潰しにかかる野蛮な民族」と印象付けるのに時間はかからない。」

「そこまでの話は理解したが、何故それで鬼殺隊に監視役がつくんだあ？」

不死川実弥の言葉に、

「何故、米国政府が国を挙げて、この話を宣伝すると思いか。この襲撃事件の黒幕が日本の貴族、即ち産屋敷耀哉伯爵であることが理由です。」

「「「「はあ?」「」「」」」」

柱全員（元柱も含む）の息のあった驚愕の言葉に、

「襲撃者の女性には、行方不明の娘がいました。」

あなた方ならお分かりでしょう?」

「鬼に喰われたのね」

「ええ、ですが問題はその後です。産屋敷の子息とここにいる奥方がそれを教えて、かつ偽物の形見を渡したことにより、襲撃者は同じ形見を持つ「緑髪の異人」を探しに横浜まで来て、そして：今回の事件です。あなた方が慕うオヤカタサマが、余計な茶々を入れた結果、曲がりなりにも貴族が裏で手引きした情報が米国に知られたのです。これで最早、一庶民の犯行ではなく、国家絡みの陰謀と見做されました。」

「待て：：お館様が動いたという事は、その外交官の娘は：：」

不死川実弥の言葉に特高は、

「鬼です。ただし、太陽を克服する代わりに鬼としての戦闘能力と肉類を摂取できなくなった鬼：：ですが。」

「鬼であると分かっていた上で守るのですか?」

胡蝶の質問に、

「当然です。例えば【人喰い鬼】であったとしても、【他国外交官の娘】で

ある以上、守る義務が生じます。私たちが護るのは【国】です。

例え民間人が数100人程度犠牲になろうとも、それよりも優先するのは【国家の安泰】です。」

「例え、人喰いなんかしてなくてもよお、鬼だぜ、喰われる可能性を残している奴を【護る】なんて正気じゃねえな。」

不死川実弥の正気か確かめるような質問には、

「正気じゃないのは君たちのほうでしょう、鬼の被害は年間でも精々数100人程度ですが、戦争ともなれば戦死者は簡単に一万人を超えます。」

例えば清との戦争では、戦鬪による死者は軍属の戦死 1,132、戦傷死 285、病死 11,894、戦傷病 3,758、合計13,488人、服役免除（疾病、刑罰等）3794人軍人・軍属の戦死、戦傷死、病死の合計死者数は13,311人です。ロシアとの戦争では更に増えて、戦死者8万8,429人。

どちらも大体一年の戦争による死者数です。

鬼なんて、こちら側から見れば《存在は困るけど、すぐ様全滅させる必要性があるほどの脅威》とは認識されていません。

だからこそ、鬼殺隊がこの時代まで生き残れたのですよ。

ですが：それももう終わりです。

他国にましてや列強国に【鬼の存在】を知らされた上に、国家の安泰を犯す危険分子を放置する事は出来ません。」

鬼殺隊士になる者は大別して2ついる。

一番多いのは、鬼に親族を殺されたから

2つめは、給与が高く浮浪児でも真つ当に稼ぐことが出来るから

2つめの「真つ当な金か？」と言われればグレーゾンだが、少なくとも盗んでいないので、真つ当ともいえる。内容はアウトだが。

例外枠で、煉獄杏寿郎などの家業枠もいるが、基本一代限りで終わるのが通例だ。

「それで…どうするつもりだ？これまでの千年、幕府や政府は鬼を放置していた。そんな組織が千年かけて鬼を狩り続けた鬼殺隊を率いることができるってもっ。」

宇髄天元の言葉に柱は続いた。

「そうだなあ、日輪刀で首を斬る以外では死なない鬼をどうやって狩ると?」

「毒もありますが、それは弱い鬼限定ですからね」

「ふ、普通の人がどうこうできる相手ではないわよ」

「南無…鬼は…強い…」

「そもそも鬼を放置していたのは国だ、今更対策できるとでも?」

不死川、胡蝶、甘露寺、悲鳴嶼、伊黒の順で反論が続く中、政府関係者代表は、

「君たちは今日をもって【産屋敷家の私兵】ではない。この組織はもはや、国公認の傭兵部隊です。」

「へっ?」

「傭兵部隊…ですか?」

「今更、急に国軍に加えると」

宇髄、胡蝶、伊黒が反応する中、

「正確には国軍ではありません。今回の件で一番怒り浸透なのは軍部ですからね、なんと言っても自分達が命をかけて闘い、守った結果を、米国は『鬼の軍人を量産できるなら勝って当然』と軍人の意地と矜持を潰した戦犯を身内に加えることに反対しましたから。」

「待て、鬼の軍人とはどういう意味だ!」

「鬼は団体行動が取れないの?」

「それよりも、実際にいるのか?鬼の軍人が。」

不死川、甘露寺、宇髄の順で続いた質問に、

「いるわけではないでしょう。」

一刀両断した。

「ならば、何故他国から鬼の軍人がいると思われているのだ?」

意外なことに、この場で最も冷静だった富岡義勇の言葉に、

「今回の騒動における中心人物である大使の娘は、鬼です。」

ですが、彼女は協調性が高く、穏やかで基本的には従順な性格です。

人を喰べるどころか、肉類を受け付けられなくなったのと、太陽を

苦手としてはいますが浴びる事ができます。

【米国から見た鬼】とは、そんな存在なのです。

こちら側がいくら【鬼】について本当の事を語ろうとも初めて会った鬼がアレでは、米国が信じないのも当然のこと。

そして、皮肉な話ですが、我が国があまりにも強い事が【鬼の軍人】がいる。と確信させる原因になりました。

たった数十年で【列強国】の仲間入りを果たした我が国の強さを恐れる国が多い中での【不老不死者の実在】。

穏やかで従順で話を通じる不老不死者、その存在を国が放置するのは誰も思わない。軍事大国として急成長した裏に【鬼】がいると思われるのも当然の話です。

だからこそ、我が国が鬼と結託していないと証明するために鬼殺隊を公認組織にしなければならぬのです。」

「理由は分かった。だが、相手側にはどう対応するつもりだ？」

鬼殺隊を放置していたのは事実、急に国営にしたところで疑惑が消えるとは思えない。」

宇髓の言葉に対して、特高は、

「ええ、だから向こうの要求を受け入れる事になりました…。」

苦々しい顔で言った特高に柱の面子は、

「「「「向こうの要求？」」「」「」」」」

ザワザワ

「なんだあ？外が騒がしいなあ」

「人の気配が増えましたね」

「なんか…ピリピリするな」

「隠さん達どうしたのかしら？」

「俺は帰らせてもらう…」

「この状況で帰るだど？お前はいつも」

「少し…匂いが違う？」

「南無」

「向こう側の要求…まさか」

柱が嫌な予感にざわつく中、外から外国語が聞こえた。

「I'm Rosemary Bennett, who has been appointed as a liaison officer to report to the embassy about the demon slayer.」大使館に鬼殺隊について報告する連絡係に任命されました、ローズマリー・ベネツトです。

日が当たる場所で、複数の護衛に守られ、白い日傘をさし、動きやすい洋服を着た少女がいた。

それだけならば誰も気にしなかっただろう、

その少女が…縦長の瞳でなければ。

「なっ…!」

「鬼が何故…!」

「いや、日傘を横取りすれば…!」

そんな隠の反応をよそに、特高は声高々に言った。

「お待ちしておりました、ローズマリーお嬢様」

ローズマリー特命連絡員 役目を果たせ

私が日本人に襲撃された事件以降、襲撃者の女性の身元がアメリカ側に渡った事により（詳しくは教えられなかったけど身元受け渡しは完了したらしい）私は教会に帰ることが出来た。

とはいえ、以前のように教会暮らしを主軸とした暮らしには戻れず、平日は教会、休日は両親の元を車で往復する毎日となった。

私としては、この時代ではまだ高価で珍しい車で頻繁に移動する姿は、何だか金持ち自慢に見えて拒否したかったけど、日本政府から派遣された護衛の九鬼さんが『御身の安全の為に必要な措置です。車に抵抗があるならば、他の移動手段が見つかるまでは大使館か、ご両親の元に身を寄せていただければ、我が国との関係性が悪化しかねません。』

と：遠回しに《車以外での移動手段だと護衛しきれない》と言われた。

まあ、そういう事があったので、私の安全を守る義務がある日本政府の意向を尊重しようと、お父様が言ったので私の車移動は継続することになった。

そして、今日は【家】に戻る日だ。

『お待ちしております、ローズマリーお嬢様』

まさか、鬼となってしまった私が国に守られる立場になるなんて、今でも夢をみているようだ。

ガタン

『そういえば、九鬼さんは何故鬼殺隊が嫌いなのですか？』

ちょうど車の中で、2人つきり。この時代には盗聴器の類はまだ開

発されていないから、ある程度の秘密保持は可能だ。

『鬼殺隊の構造を誰よりもご存知なのは、ローズマリーお嬢様です。ならば、何故政府公認の組織にならなかつたのか、ご存知なのでは？』

この人…かなり聡い人だ。

元特高とは聞いたけど、私が鬼であることを前提で背中を見せることに躊躇いが無い。

それにしても…鬼殺隊が公認組織にならなかつた理由…か。

ある程度の憶測はできるけど、当たっているかはわからない。

『試験段階で死人を量産するような形態の組織…そして、近代国家を目指すこの国と、あくまでも自分達一族だけで鬼を滅ぼそうとする産屋敷一族…意見が合うとは思えません。』

本来の意味で産屋敷一族が他者を頼らなかつたのかは分からない。

でも、戦争続きの時代とはいえ、ある程度時勢が安定している大正時代でありながら、隊士が徴兵に行っている描写がないのもおかしな話だ。

『ご名答ですお嬢様、近代国家を目指し【列強国】の仲間入りを目指していた我が国に置いて、鬼殺隊士は最高の軍人候補です。なので徴兵を受ける事を何度も求めましたが、歴代の産屋敷当主は「鬼を倒す人材を渡せない」と拒否。最初はよかつたのです財政難の新政府に莫大な資産を寄付する事と引き換えに徴兵を拒否していたのですから。

問題はその後、産屋敷の支援なくとも財源が確保できてからが問題でした。』

初期の徴兵令は免除項目が多く、結果徴兵に参加していたのは、貧しい農家の次男三男が主だつた。

だから産屋敷はまだ問題なかつたということか。

『財源の確保と、相次ぐ徴兵拒否者による虚偽申請が続き、初期の徴兵令における免除項目が大幅に見直され、今の形となりました。「金を出せば徴兵免除」「長男免除」は無くなり、今までは金で徴兵を逃れていた鬼殺隊士も当然、徴兵を受ける義務が生じました。しかし…今度はどうな手を使ったのやら、上層部のコネを使い、鬼殺隊士と呼ばれる男子の戸籍が抹消されていました。』

道理で公式設定で20歳の煉獄杏寿郎が徴兵に行かずに、鬼殺隊士を続けられたわけか。この分なら徴兵前の身体検査も受けていないだろうな。

『そして産屋敷は明治の世までは公的に政府支援をしていましたが、政府側の財源が安定すると今度はコネ作りの為に賄賂を使い出すようになりました。相変わらず鬼殺隊士の徴兵義務を受けずに…です。』

『権利ばかり利用して、義務を果たさない組織ですか…、嫌って当然です。あなたのような公僕ならば。』

何も徴兵は全ての男子が必ず受けるものではない。

何のために事前の身体検査があるのか、そして身体検査の結果が【甲】でも、何年も徴兵されるわけではないのに。

『そんなわけで私たちのような者や、有能な者を鬼に殺されるならまだしも、試験段階で殺しにかかる鬼殺隊は軍部からは嫌われているのが実情です。恥ずかしい話ですが、政府の上層部は賄賂や姻戚者が蔓延っていたので、こちら側は手出し出来ませんでした。今回の事件の被害者であるローズマリー様には申し訳ない話ですが、あなたが襲われた事により、産屋敷との縁切りを進める事が出来ました。』

政府代表としてお礼を申し上げます。』
ここまで嫌われていたとは…だが、確かに鬼殺隊には不要でも軍人として雇いたい人が試験で同時期に死んだら、こういう反応になるな。

『いえ…産屋敷一族が嫌いなのは私も同じこと、お礼を言われる筋合いはありません。むしろ…国際条約があるとはいえ、仮にも鬼に背を向ける事に躊躇いがない、あなたのような人が日本にもいる事に希望を持ってました。』

日本人は特にこの時代なら異端を排除する民族だ。それを否定はしないし、かつての私もそうだったから文句を言える立場ではない。でも…寂しかったのは確かだ。

どんなに見た目が変わろうとも、心なしか顔の彫りが深くなっただけで、どうも私の本質は【日本人】だ。

桜を見て美しいと思ひ、スプーンとフォークの食事よりも箸で器を持って食べる方が慣れている。

とはいえ、この時代の外国人の方が私に優しかったし、私の異端を受け入れてくれたのも外国人。今の私は「アメリカ人」であり、日本の国益よりもアメリカの国益を優先する事に躊躇いはない。

でも：もしも、先に「鬼と話し合おう」と行動してくれる日本人がいたら、天秤は「大日本帝国」に傾いていただろうと確信できるほどには愛着がある。

『：お恥ずかしい話です。』

何かを感じ取ったのか、九鬼さんは小声でそう言った。そして、『この国の不始末はこの国の臣民が責任を取ることです。お嬢様はアメリカ人、アメリカを優先するのは当然の権利であり、そして：義務です。』

私が元日本人である事を知っているはずだ。

なのに裏切り者扱いしないとは、何と器の広い人なのか。

『着きました、どうぞお手を』

『ありがとうございます、九鬼さんにもどうか神のご加護を』

▽▽▽

『ただいま戻りました。』

自宅に帰って、大使館で食べる夕食よりかは素朴だが美味しい食事を食べ終わり、お母様が片付けに入った後、

『教会はどうだ？不自由はしていないか？』

『いいえ、皆さまお優しく私には勿体ない人々です。』

『そうか…』

本物の親子のような会話をしている中、

『後で執務室へ』

『はい』

鬼殺隊に関する情報を話す際は、いつも父の部屋もとい、執務室で話している。貴重な書類も多い事から扉は重くて厚いので声が外部に漏れる心配がないからだ。

『さて：ローズマリー、君にこれが届いている。』

食事が終わり、お母様が退場してしばらく経った頃合いをみて、お父様と共に執務室に入り、鍵付きの机から取り出したのは、

『書類：ですか？』

『大統領府からだ。』

『大統領府？』

なぜ一大使の娘相手に大統領が書類を？

手元に置かれ、そして、開かれた書類の中身は、

任命

ハリス駐日全権大使の息女である、ローズマリー・ベネットをキサツタイに派遣する。

キサツタイに関するあらゆる情報を大使館に提供せよ

貴殿がオニである事も考慮し、事情を説明し終えた軍人を二名派遣する。軍人が到着次第、日本の護衛と共にキサツタイ本拠地へ乗り込め。

合衆国大統領

ついに私の役目が回ってきた。

ここからは原作と乖離する。慎重にいかなければ…

『護衛の軍人が到着次第、ヤマト殿とキサツタイに乗り込みます。とはいえ、君の名目は連絡係という名の広告塔、ローズマリー…君は、とにかく目立ちなさい。そうすれば隙が生まれる。』

広告塔、目立つ…日本政府は私を守る義務がある。そして、鬼殺隊に所属する者は鬼に恨みがある者が多い。

あわよくば…という事か。

『分かりました、目立てば良いのですね？』

『ええ、存分に振る舞いなさい。ローズマリーはキサツタイでは何をやってもいいと許可が下りています。』

なら…初対面は印象を強くしないとな。

『なら…大使館の車を使わせてください。万が一襲われても車に攻撃をすることは禁じられていましたでしょう?』

国際条約が私の知っている内容と同じであれば、

『もとより、大使館の車に乗せるつもりでしたから問題ありませんよ、他には?』

確か…場違いな服も印象を悪くするよな。

『軽いホームパーティで着るような服をください。』

最終決戦で気が立っている中で、敵地にいるにも関わらず、1人だけ観光気分でちゃらちゃらした鬼がいれば、気が短い隊士なら襲いかかるだろう。

『なるほど…なるべく動きやすく、綺麗な服を用意します。』

▽▽▽

そして時間が経ち、

『日系二世のリアム・オニツカです。』

『イーサン・クラークです。ローズマリー様の主治医を担当します。』

リアムさんは彫りが深いが、血統が日本だとわかる顔だった。

でもこの顔なら日本人の中に混ざっても、服装さえ変えれば目立たない。本命はこちらか。

イーサンは金髪碧眼の見るからに外国人であり、お父様がいうには私の鬼としての能力に関する情報は、この人の元に送られていたそう
だ。

『お国で説明はされていますが、改めて…【オニ】であり今は全権大使

の娘であるローズマリー・ベネットです。よろしくお願いします。』
『はっ!!』

そして軽い自己紹介と事前に説明されていた鬼殺隊情報における質問を答えながら、公用車で九鬼さん率いる日本政府の車の後ろを追いかけている内に、鬼殺隊本部の近くに止まった。

トントン

『何ですか?』

『これより私たちは先に鬼殺隊の本拠地に取り込みます。この場所は事前に政府公用車が停まることを知らせているので、私たちは徒歩で向かいます。そちらの公用車にあるベルが鳴ったら、あなた方は車で乗り込んで下さい。ないとは思いますが、公用車を止めようとする者は最悪、轢き殺しても構いません。』

『ウィーン条約を破るような人間を政府は雇っているのか?』

『これからはそうなりますが、今日までは「貴族の私兵」ですからね、国際条約を知らない無法者もいる可能性があります。私たち日本政府はローズマリー令嬢を守るために全力を尽くしますが、今日は間に合わない可能性が高いです。』

『…了解した、戦場の感覚で乗り込もう…』

『では、合図が鳴るまではこちらでごゆるりと。』

日本政府も大変だな。

『はあ、これから戦場なのに何が「ごゆるりと」だ。』

イーサンさんは溜息をつき、

『本当にそうですね、ローズマリー様、トランプでもしましょうか?』
リアムさんはポケットからトランプを取り出した。

『ええ、しましょう、少なくとも1時間はかかるはずですよ。』

九鬼さんがいなくなった後、イーサンさんとリアムさんによる軽い愚痴と、私についての雑談と、トランプ遊びに熱が入り出した時、

《《リリリリー!!》》

『ようやく…か。』

『長かったですねー』

目つきが変わり、文字通り戦場の目をした2人は、

『乗り込みます』

ギャルルルル

そこかしらに止まっていたカラスが鳴き出し、それに連なり隠たちが動き出したが、どんなに鍛えても所詮は人間の足と全てにおいて最高品質を使つて作られた大使館の公用車、速さは負けなかった。

そして…

『ローズマリー様、お手を』

イーサンさんは日傘を片手にゆつくりと扉を開け、

『私の斜め後ろに控えて下さい』

声色がピリツとしたリアムさんの後ろに控えた。

準備は整った。

私の一世一代の表舞台における最初のセリフ、

「I, m Rosemary Bennett, who has been appointed as a liaison officer to report to the embassy about the demon slayer.」大使館に鬼殺隊について報告する連絡係に任命されました、ローズマリー・ベネツトです。

私はついに表舞台に立った。

「なっ…!」

「鬼が何故…!」

「いや、日傘を横取りすれば…!」

日傘をさしているとはいえ、鬼が陽の光を恐れないのだ、長年戦っている者ほど信じられない光景になる。

「お待ちしておりました、ローズマリーお嬢様」

九鬼さんが外に出てきて私に近づいた。

事前にセリフ合わせはしていた。

さあ、茶番劇を始めようか。

バツ

私の前に近づく九鬼さん相手に、芝居がかった所作で体を動かし

た。
「アメリカ大使館より派遣されました、通訳を担当します、米軍所属のリアム・オニヅカです。貴殿の身分と役職を教えてください。」

「これは失礼しました。私は外務省に所属しております九鬼大和と申します。」

「ああ、あなたが日本側が用意した通訳ですか。
少しお待ちを」

『この人が日本側が派遣した護衛で間違いはないでしょうか？ローズマリーお嬢様』

『ええ、この人です。』

この台詞も予め決めていた。英語の会話なら問題ないかと思つたが、鬼殺隊士の中に英語ができる人がいる可能性を考え、多少のアドリブは入れても、演技を続けることになった。こう問いかけているが、実際の所イーサンさんとリアムさんも九鬼さんの顔は知っている。

「日本政府代表であり、外務省職員の九鬼大和と申します。年末の合同軍事演習の件でこのような所に呼び出してしまう事となりました。大日本帝国政府を代表してお詫び致します。」

「政府代表…？」

「外国人がなぜ鬼殺隊本拠地に？」

「いや、それよりも合同軍事演習？」

「鬼が…お嬢様？」

よし計画通り、通訳を介して英語に翻訳してもらい本物の外国人である事を視界から理解してもらおうという作戦は、効果があったようだ。

そして、九鬼さんが政府代表であることを特に誇張して話したことで、隠たちの反応が鈍りだした。

今の流れで畳み掛けようか。

「このような傭兵部隊の本拠地など本来なら政府が招いた客人に相応しい場所ではありませんが、お嬢様にも関連がある組織なので、致し

方なくこのような場所で滞在をお願いすることになりました。護衛はお任せ下さい、国を挙げてローズマリーお嬢様をお守りいたします。」

ザワツ

『と、日本外務省職員が申ししております。』

周りの動揺など知らぬふりをし、あくまでも【日本政府の役人】と【招かれた客人】の会話であると見せしめる。

役人との会話で聡明な人なら、今の鬼殺隊の現状が分かったのだろう。隠の少数が、まだ刀に手をかけている隠や剣士を止めに入っていた。

「おい、この鬼は敵ではない。刀から手を離せ」

「あつ？」

「刀から手を離してください」

「一体：何がおきているのだ？」

「傭兵部隊：：客人？」

『大使館との連絡係も兼ねての滞在です。そちらの為すことを邪魔する意図はございません。護衛は最小限で結構です。』

「と、ローズマリー様はそのように申ししておりますが：我々がここに来る道中、車を妨害されました。顔を隠したあのような者です。」

ギシリツと睨みつけられた隠はビクツと震えていた。

正直に言うとは他国の公用車に石を投げつけるなんて、されるとは思わなかった。精々追いかけて「止まれ！」というのが関の山と大使館で話していた分、あまりの無知さと愚かさにイーサンさんもリアムさんも分かりやすく軽蔑した目で見ていた。

「国際条約も守れないような組織に、アメリカ国民を無防備に滞在させるなど、大使館として許可できません。滞在するならば私たちのような者を交代で入れ替えさせます。その許可が降りない限り、ローズマリー令嬢の鬼殺隊滞在は安全面の問題で出来ません。大使館に引き帰らせます。」

「我が国が信用できないのは【産屋敷による迫害】を放置していたので

当然のことです。しかし、鬼であれ、我ら政府は「他国の客人」の安全を確保しない理由にはなりません。

どの道、合同軍事演習でこの施設を使うので、これからはあのような無知者は法律に則り処罰してゆきます。

令嬢の安全確保のために米兵の滞在を国会が認めました。

また、ローズマリー令嬢の自由は保障されています。

鬼殺隊で嫌な目にあつたら即座に対応致しますので……」

途中で言葉を区切り、私の手を取り、

「Can you give me another chance?
? Miss Rosemary, please.」もう一度チャンスを与えてくださらないでしょうか?ローズマリーお嬢様

日本語の訛りが一切ないアメリカ英語

演技だと分かっていても所作に目がゆく。

当然の事だが、答えは、

「Of course」

「それではローズマリー令嬢が滞在する場所を案内致します。どうぞこちらへ」

移動の中で刺さる柱を中心とした殺意の瞳、好奇心、僅かばかりの不思議な生き物を観察するかのような視線を尻目に、イーサン&リアムさんと共に、歩いた。

▽▽▽

『政府予算で建てた別邸です』

と、案内されたのは見た目は和風、中身は大使館と変わらないような施設だった。

『見た目を合わせるために表向きは木造建築ですが、実際は鉄筋コンクリート構造です。本当はもっと広い土地を使いたかったのですが、鬼殺隊本拠地との距離を考えて、手狭になってしまいました。』

『合同軍事演習で来日する軍人の施設と兼任となると、狭すぎるのでは?』

確かに私や場合によつては大使であるお父様が一時的に滞在する場所と考えれば広いが、イーサンさんの言う通りこれから来日する軍人の施設も兼任するとなると手狭すぎる。

『ご安心を、このような場所だけに押し込めるつもりはありません。軍人の施設は表向きは陸軍の施設ですが、そちらの国の基準に合わせて建設済みです。【今回の合同軍事演習で使う米兵の滞在場所】として表向きの理由は公表してしますので、堂々と滞在できます。こちらはいくまでも休憩室と緊急避難場所です。』

『なるほど…では、このこと【軍人用の施設】内が治外法権となるのですね』

えっ? 治外法権?

『はい、この別邸は鬼が滅びるまでは特例で【大使館】という形になります。また、陸軍の土地に建てられた米兵滞在施設も合同軍事演習が終わるまではアメリカの法律が適応されます。』

『では、この別邸に攻撃をした者は?』

『貴殿の祖国の法が適応されます。こちらが説明してもなお、攻め込むならば、情状酌量の余地はありません。』

国公認で『好きに裁いていいよ、目障りなら殺しても問題ないよ』と言うも同然な発言だ。九鬼さんがそれを理解していないわけではない。

本気で好きにしても構わないのか。

それほどまでに、この国は追い詰められているのか?

気になるけど、これは私の仕事ではない。

『あつ…そうでした、ローズマリー様、あなたが面会を求めている鬼をこちらにお連れしましょうか?』

面会…もうできるのか?

『ええ、お願いします。』

『お待ちくださいローズマリーお嬢様、安全の確保も出来ない中で会

うのは危険です』

『大使に聞きました。仮にも人の味を知った獣です。主治医としても反対します。』

リアムさんとイーサンさんは真っ先に反対した。

ある程度予想内の意見だ。

今回の訪問の際も、【外交官ナンバーのついた公用車に石を投げつける】【他国の客人相手に武器を片手に取り囲む】というウィーン条約に喧嘩を売っているのか？と問いかけたくなるような無法者の集まりだと認識されてしまった。

私のようなある程度、相手側のバックボーンを知っているとかの事前情報がなければ、当然の反応だ。だが、彼女に会わなければ始まらない。

この2人の反応から【鬼殺隊の全体評価】が理解できたのか、九鬼さんは、

『そのままお連れしましょうか？それとも：縛り付けて連行しましょうか？お二人の言う通り相手は今でこそ人を喰べないとはいえ、仮にも【人喰い鬼】です。縛り付けようとも問題は生じません。』

このまま会うと言え、私を徹底的に排除した上でこの場に連行するのは目に見えていた。だから、

『藤の毒で弱らせてから連行してください。死なないように加減はしてくださいよ』

『はい、もちろんそのつもりです。お前、』

『はっ！』

後ろに控えていた日本軍人に、

『珠世をこの場に連行しろ』

『承知しました！』

「お待たせしました、ローズマリー様、こちらが珠世と呼ばれる人喰い鬼です。」

まるで罪人のように手錠をかけられ、藤の毒で弱らせているから顔色は悪い、だけど、この縦長で紫の瞳を持つ者は1人。

「通訳は不要です。リアムさんはその場で待機を」

「はい、お嬢様」

正直、鬼ならば数の暴力だけでは勝てないと頭では理解しているけど、実際に会おうと別だった。

1人では心細い。

「はじめまして、【太陽を克服した鬼】であるローズマリー・ベネットです。医師の珠世で間違いはないでしょうか？」

「ええ…私が…珠世です。」

珠世との対談

「ええ…私が…珠世です。」

見た目は病人のようだが、鬼舞辻無惨から何百年も逃げ切っているという実績を考えれば、耐毒性質も付けているだろう。

じきに回復するはずだからこのまま話そう。

「このように面と向かって会話するのは初めてですね、使い魔の猫はこちらには来ないのですか？」

茶々丸は鬼舞辻戦で功績を上げている。もし展開が変わりすぎたせいで茶々丸が鬼殺隊に滞在できないとなると問題が生じる。

「使い魔？ああ、茶々丸のことですか。あの子は猫ですから昼間は寝ていることが多いのでこの場にはいません。」

「意識がはつきりしましたね、やはりそれなりの耐毒性質があるのですか？」

「ええ、鬼舞辻の呪いから外れるために体を改造する過程で耐毒性質もつきました。そのかわり、回復力は落ちましたが、人を喰べるよりかはましです。」

「そうですか…」

シンツ

しばしの沈黙が続いた。

私は、私以外の鬼に会ったことがない。

「ただど分かるのは、この鬼…もとい珠世にこびりついている血の匂い。」

ただの錯覚なのかもしれないけど、鬼となったからこそ分かる、第六感とも言えるような鋭利な刀を向けられているようなヒリヒリとした感覚がする。【人喰い鬼】とはこのような存在なのか？それとも珠世だけの特殊体質なのか？

「あの…わざわざ私を連れてきた理由は？」

「単刀直入に聞きます。私の細胞はどのようなモノですか？」

「細胞…ですか？」

前から気になっていた事だった。

私は竈門彌豆子のように初期から《眠る事で体力温存》をせずとも早々に太陽光を克服していた。

たしか彌豆子は、《言語と知性を引き換えに徐々に鬼舞辻細胞を追い詰めていた》といった内容だった気がする。

そうになると、私も何かしらの代償を払っていないといけない。

なのに、記憶の混濁や、この体の正当な持ち主の記憶をほぼ無くしているとはいえ、彌豆子のように生活に支障をきたさずに太陽を克服する…

「聞きますが、私は本当に鬼なのでしょうか？」

鬼でありながら大した代償もなく、人と生きることができている。

いつその事、「鬼によく似た特性を持つ別種族」と言われた方がまだ納得がいく。

「鬼であるのは事実です。しかし同じく太陽を克服した鬼とは細胞の変異が異なっています。」

『具体的には？』

「イーサン軍医？」

私が質問する前に主治医のイーサン軍医が、割り込んできた。

『あつ…これは失礼しましたローズマリー様、しかし主治医と致しましても聞かなければならない話です。ご一緒しても？』

ちようどいい、アメリカにいるときから私の細胞を知っている主治医と情報交換した方が得策だ。

『勿論です』

「では珠世さんどう違うのですか？」

「ローズマリー・ベネットさんの細胞は、そもそも人の細胞ではありません。」

植物寄りになっていると自覚があった。だからこの回答自体には驚きもしなかった。だが、

「正確には【植物の細胞】が身体を満たそうと動けば、それに対抗する【鬼舞辻細胞】が動き、両者による身体の支配権を争っている…といった内容です。もう1人の太陽を克服した鬼は【人間の細胞で鬼の細胞を抑えている】のに対し、あなたの場合は、逆に【鬼舞辻の細胞】が

あなたのその人の形と思考を守っています。予想ですが…もし、鬼舞辻無惨が死ねば、貴方は完全な植物となるでしょう。

貴方に現在開発中である人間化薬は使えません。」

『つまり、ローズマリー様はオニに守られていると』

「結果的にはそのような形です。これまで様々な鬼の細胞を研究してきましたが、このような結果論だけで見れば鬼の細胞に守られている例など前代未聞です。」

「そうですね、ではこれからも私の血を提供しますので、存分に研究に回してください。」

疑問は解決した。

どの道私は人に戻る気などなかったから、大した障害でもない。

とりあえず、この内容を大使館に報告しなければ。

「大和殿、話は終わりま」

『ローズマリー様、このタマヨと呼ばれるオニに医師として聞きたいことがあります。私がリアムさんを借りてもよろしいでしょうか？』
「知りたかった内容は聞き終えたから、さつさと珠世を研究室？に戻したかったが、イーサン軍医はまだ話し足りないようだ。」

『勿論です。今日は大使館の外に出る予定もありませんので、ごゆっくりどうぞ』

『ありがとうございます』

『もう1人の鬼について…』

『それは…』

長くなりそうだ。

「九鬼さん、通信室はどちらですか？」

「ご案内します、こちらへ」

基本的に、私はついている護衛から離れて行動するのは禁じられている。だけど、ここは特例とはいえ【大使館】

他国の人間（用は鬼殺隊士）が入るには事前の審査とこちら側の許

可があつて初めて入れる。

だから、九鬼さんと2人で移動することが認められた。

ガチャ

『随分と小型化されている電話ですね』

『大使館にしか通じませんがね。』

この時代の電話は、番号を入力する装置がない。

一度交換手に繋がって、その人に電話番号を言って繋げてもらうという仕組みだ。

だが、仮にもこの施設は大使館。機密情報関連の話もするかもしれない中で、盗聴の危険がある交換手の存在は排除したい。

と、言うわけで《特例大使館↓アメリカ大使館》にのみ限定することで交換手なしで直通電話ができるようになったのだ。

今回の案件である「日米合同軍事演習」の真相を知っている少数に連絡を入れるのが目的なので、出てくる相手も決まっている。

1人は当然、今の私の父であり全権大使である

ハリス・ベネット

そして2人目は、

《ローズマリー！》

《神父さん！》

私の最初の保護者であり、私が鬼であると知っているウィリアム・ヤコブ・ウイステイリア司祭。

今回の案件で、少しでも協力者が欲しいアメリカ政府の方が根回しをしたらしく、イエズス会宣教師のウィリアムさんが何をどうしたのか、「日米合同軍事演習における軍人専属のカウンセラー」という役職が与えられていた。

《キサツタイに入ったとハリス大使から聞きました。怪我はないですか？》

《大丈夫です、炭治郎君とは状況が違いますから…。私に攻撃をすることの意味を知っている政府の代表が常についています。

私の心配よりも神父さんは教会側にどう説明したのですか？》

いくら神父さんがアメリカ人とはいえ、所属はイタリアローマに本部を置くイエズス会所属の司祭。

アメリカの圧力で誤魔化せる組織ではない。

《実は本部側からも割とあっさり許可が下りてしまい、寧ろ「行け」と言わんばかりの公式文書を貰いました。詳しい経緯は不明ですが、イエズス会もオニ討伐に関わっている可能性が高いです。》

《イエズス会が?》

宗教組織も関わっているとすると、鬼の存在を教会側が信じるに値するモノがないといけない。神父さん達宣教師組は一応鬼の存在については認知はしているけど、あくまでも【過去の御伽噺】レベルの認知度だ。でも神父さんに届いた文書の内容からすれば、私の映像をアメリカ側が送ったのか?

それとも、ただ単に司祭の仕事の一環として認められただけ:か?

《詳しい話は後日します。ハリス大使ですね、あ、ちようど会議が終わったようです。代わりますよ》

《ローズマリー、鬼殺隊訪問時に問題が起こったと報告を聞きました。詳しく教えてください。》

《はい、簡単に言いますと、鬼殺隊は国際条約を理解していません。外交ナンバーのついた車に石を投げつけられました。》

《はっ?》

予想通りの反応だ。だがまだあるんだよなあ…。

《それと後一つが、車から降りた際にカクシと呼ばれる後方支援部隊所属の者たちに武器を片手に取り囲まれたことです。》

しばしの沈黙の後、

《……ヤマト殿に代わりなさい。》

《はい、お父様》

『説明を頼みますよ、ヤマト警視』

と、いつても怒りが収まるとは思えないけど。

『はい…』

《こちらヤマトです。……はい、その件は後々…増兵?…内閣との相談の上で…はい、では後の話は……》

九鬼大和 side

《こちらヤマトです。》

《今日までは貴族私兵の仕業だと思って見逃しましょう。》

妙に静かな声色に、逆に恐怖心が駆られる。

《寛大な処分、ありがとうございます。処分の件は後々》

これだけで終わるとは思えない、案の定、

《名ばかりとはいえ、特命連絡員相手に殺気を隠そうともしない日本人武装集団の中に、我が国の役人であり、我が子をたつた2人の軍人だけに守らせるのは心細い。あと10名ほど増兵してもよろしいか？》

最初からこれが目的だったのか。

密約を交わした時からローズマリー令嬢につけるアメリカ人護衛人数が少なすぎるのは指摘していた。だが、『日本軍人も守るのでしよう？』と言われてしまえば、こちらは何も言い返せない。

特命連絡員でなくとも、守る義務があるからだ。

だが、数名ならまだしも10名以上自国兵を付けると最初から言い出せば、現地国である我が国からの^{ひんしゅく}輿^{いんしゅく}をかう。

だが、我が国の人材に明らかな問題があり、それが原因で日本人が信用できないと言われれば、こちらは強く言い返せない。

《他国兵の増員を認める権限は私にはありません。内閣との相談の上で決めます。》

《それは承知の上です。日本政府にはこちらから公文書を送ります。それと…できれば、これ以上の増兵はしたくはありません。私たちは【合同軍事演習】をしに日本に来るのですからね。》

《はい、我が国も事態を大きくしたくはありません。》

【特命連絡員】などという10歳の少女相手に大層な肩書きをつける

理由を与えたのは、間違いなく産屋敷だ。

あの国は民主主義国家、いくら大統領令とはいえ、表向きはただの《迫害から逃れた少女》であり【全権大使の娘】という基本的には守られる立場に更の上書きするかのような人事が認められるはずがない。

だが、表には出ないとはいえ、認められた。

それは、《日本人による迫害》が根強いからだ。

【他国大使の娘】という肩書きだけでは守られない。

現にローズマリー・ベネットと呼ばれる少女は襲われた。

国際条約では守られなければならない立場でありながら…だ。その前例が知れ渡っている上で、人道的に必要な措置であり、あくまでも日本に駐留している期間限定で、肩書きはつけど、給与が発生しない文字通り名ばかりの官職…特例で認められるのも無理な話ではない。

はあ…

「全く…余計なことを。」

あの一族が騒ぎを起こした結果、我が国の人材の質が低いと認識された。このままでは駄目だ。

鬼殺隊士を武力だけではなく、教養と一般常識を身につけさせなければ。

「ローズマリー特命連絡員を見張り、怪しい動きがあれば報告を。」

「はい、九鬼警視」

「それと、車を出してください、帝大に訪問します。」

「はっ！」

「これは…急なご訪問には驚きました。政府代表の御方、何の御用でしょうか？」

「単刀直入に言います。帝大に所属する大学教師に【外交に関する

ウイーン条約」特に外交特権を主軸として纏めた冊子と、試験問題を
作って頂きます。最優先で。」

ローズマリー特命連絡員に危害を加える、拘束することは如何なる
理由があろうともあつてはならない。

現実を見てもらいましょう。

ここは鬼殺隊本部にある、お館様の屋敷。
パン！

「それでは授業を始めます。」

（傭兵の質を上げるために、まずは上からの意識改革が必要だ。）

「なんでこんな事を…」

不死川のため息を機に、

「お館様の命令とはいえ…時間が惜しい」

柱稽古前の準備を前に開かれた、強制学習会に不満はないものの、柱稽古の時間をとりたい悲鳴嶼、

「正確にはお国の命令ですけどね。」

公認組織故の縛りをさっそく感じた胡蝶、

「でも勉強なんて久しぶりだわ、女学校に戻ったみたい」

「甘露寺が喜ぶなら…勉強も悪くはない」

元々裕福な家庭に育って、両親兄弟が健在なので勉強にわくわくしている甘露寺、

甘露寺の笑顔を見て、それに満足げな顔をする伊黒、

「僕は楽しみ、学校行っていないから…」

「俺も似たようなものだ。」

「まあ、俺たちに常識がないのは確かだ。ここいらで試験をしたい気持ちも分かる」

家業で学校経験の少ない時透、

幼い時から鬼殺に走っていた故に同じく一般的な青春を送れなかった富岡、

忍という一般社会から隔離された世界で育ったので、常識がないと自覚している宇髄、

それぞれが反応を見せる中、急遽作られた寺小屋風の学校には、教師役の九鬼大和が立っていた。

「稽古の時間が惜しい気持ちばかりです。」

しかし、君達鬼殺隊はもはや国家公認の武装組織。国際社会の常識

を理解していない集団のままでは、年末に予定している米軍との合同軍事演習に支障をきたします。そして、その支障の程度によっては、そのまま戦争に繋がります。鬼よりも優先して勉強に励み、常識を身につけてもらいます。常識を身につけないというならば、そちらの言う【最終決戦】に参加する資格を剥奪します。」

「はあ!!」

「不死川実弥、特に君は要注意人物としています。大使館経由で聞きましたよ、鬼を連れた鬼狩りの裁判について。」

「あれは隊律違反したアイツが悪いだろお!」

「はて、隊律違反? 鬼殺隊を公認組織にする前にそちらの隊律を全文読みましたが、「鬼殺隊に所属する者が鬼を連れて鬼狩りをしてはならない」とはありませんでしたか?」

「当たり前だろお! そんな馬鹿の前例がなかったんだからよお!」

「隊律はこちらでいう法律と変わらない存在ですよね、ならば隊律違反という表現は間違いです。」

そして、何より鬼殺隊のトップが認めた存在であるならば、組織公認の剣士として認められたということ。これが公認組織になった後なら報告義務違反とできますが、前時代組織である鬼殺隊ならトップの許可を得た上で鬼殺隊入りをしている竈門炭治郎に非はありません。

それを隊律違反と責めるなら、まず最初に竈門炭治郎を認めたあなた方が尊敬するお館様もまた、隊律違反として責め立てなければ道理に合わない。」

「ウグウ……!」

そう、鬼を連れた剣士の裁判は、本職側から見れば全く裁判の形をしていない。もちろん、裁判所内でないことも理由の一つだが、何より鬼殺隊はその時点では非公認組織。そして、被告である竈門炭治郎が集団リンチされたという時点で、裁判という名の私刑であるのは明白だった。

「竈門炭治郎君に話を聞きました。不死川実弥、

あなた5歳程度の見た目をした妹君を刀で刺した上に、自分の血を

押し付けたとか。」

まだリハビリ段階とはいえ、事前にあつた竈門炭治郎の受け答えはしっかりとしている。そして、リハビリ段階だからこそ、時間をたっぷりとり、とることができた。

「それは当然だろお！お前たちイ上級国民には分からねえだろうがあ、鬼は人を喰う存在だあ。確かめるのは当然のことだあ。」

その解答に九鬼大和は、

「あなた…お館様を慕っていると報告がありました、それはガセだったのですね。わかりました。」

対話の価値はありません、それでは授業の方に移りましょう。」

不死川実弥との対話を中断することにした。

「おい！テメエどういう意味だあ！」

このままでは不死川が政府代表に殴りかかると察した悲鳴嶼は、

ドゴツ

不死川を素手で気絶させ、

「隣にいる軍人さん」

「何の用だ？悲鳴嶼行冥殿」

万が一があつた際に、射殺できるように配備されていた日本兵を呼び出し、

「この者に睡眠導入剤を飲ませて、空部屋に放り込んでいただきたい。」

…授業の邪魔だ。」

「了解した。」

シン

「…政府代表の御方、授業を始めて下さい。」

「ええ、それでは授業を開始します。」

九鬼大和 side

不死川実弥…気が短く、産屋敷に忠実で、鬼を殺すためなら自分の肉体も利用する男。

別に教養がなくとも問題はない。これからつけていけばいいだけの話だ。鬼を殺すためなら珍しい血を活用することも戦略を考えれば当然のことだ。

気が短いのも、我慢ができない子どもではないのは初対面の時点で明白だ。

だが：産屋敷に忠誠を誓っているような存在は厄介だ。

と：思っていたが、炭治郎くんの妹の件では、そのお館様が認めたら人を否定したから、実際は何一つ信頼していないのかもな。

まあ、まだ確定させるには時間が足りない。

ゆつくりと監視して見極めよう。

この組織は出生や性別で差別されることはない。

あんな破廉恥な服を着た桃色髪の女が、出世できている時点で実力主義が名ばかりのものではないのは明白だ。

ある意味、軍隊よりも実力主義社会を形成できている。

軍隊も実力主義であるのは変わりないが、どうしても士官学校卒業生が優遇されるし、そういう人の家庭は基本的に裕福な商家や、士族、華族産まれで固まってしまふ。稀に、有能だが金がないので士官学校に行けない男子を見極め、軍部が支援して士官クラスに昇格する人もいるが、そういう事例は少ない。

誰だって、限られた椅子を競う相手を増やしたがるからだ。

癪な話だが、鬼殺隊は「人の能力を最大限発揮できるような環境」であるのは認めざるを得ない。

だからこそ、勿体ないと感じる。

もつと勉強にも力を入れていけば、今の軍部よりも優秀な人材を育成できるだろうに。

だからこそ、国の意向に逆らう可能性が高い、優秀な傭兵は排除しなければならぬ。

ああいう一見、野蛮な男は一度忠誠を誓うと基本的に裏切ることはない。不死川実弥の経歴を見るに、《唯一生き残った弟》という、いざとなれば人質に取れる存在がいるのも、鬼殺隊を離れる可能性を低くしている。

あの男は死ぬまで【鬼殺隊のお館様】に尽くす。それが本物の忠義なのか、それとも弟がいるからなのかは不明だが。

あまりこちら側の情報を与えることはできない。

だが、仮にも柱と呼ばれる上級幹部。失うには惜しい存在だ。

悲鳴嶼行冥、甘露寺蜜璃、宇髄天元、この3人はかなり真つ当な倫理観と常識を身につけている。

この3人を積極的に教育しよう。

そうすれば、甘露寺蜜璃を恋い慕う伊黒小芭内も釣れる。

そして…この悲鳴嶼行冥…油断ならない人物だ。

「君たちには特に外交特権について理解してもらいます。大まかには6つです。」

カツカツ

黒板に文字が書かれていく。

外交官の身体の不可侵

刑事・民事・行政裁判権の免除

住居の不可侵権

接受国における関税を含む公租・公課及び社会保障負担の免除

被刑事裁判権、証人となる義務等の免除

接受国による保護義務

「これが、有名であり基礎的な特権です。質問はありますか？」

「はい、先生！あつ、間違いました、九鬼さん！」

甘露寺が早速手を上げた。

「先生で構いませんよ、はい甘露寺さん」

「接受国とは何なのでしょう？」

「良い質問ですね、この接受国とは【外交関係者を受け入れた国】のこ

とを指します。わかりやすく言えば【大日本帝国】の事を指します。黒板に付け足しますね。」

カツカツ

外交官の身体の不可侵

刑事・民事・行政裁判権の免除

住居の不可侵権

大日本帝国 接受国における関税を含む公租・公課及び社会保障負担の免除

被刑事裁判権、証人となる義務等の免除

大日本帝国 接受国による保護義務

「はい、他に質問は？」

「はい」

「時透君、質問は？」

「【外交官の身体の不可侵】とあるけど…そもそも外交官の定義は？」
「外交官と一言に言っても、仕事内容は多岐に渡ります。分かりやすい外交官は大使館にいる【大使】と呼ばれる方々です。そして大使館に勤めている外国人は基本的に全て外交官と認識しても問題はないかと。」

もちろん、大使館に勤めているからといって、全ての人が特権を持つているわけではないが、無闇矢鱈に外国人に喧嘩を売られたら困る九鬼大和はその言葉を言わなかった。

「南無…」

「悲鳴嶼さん、どうぞ」

「点字で書かれている特権の一つ、【刑事裁判権の免除、民事裁判権・行政裁判権の免除】とあるが…これは【この国にいる内はどんな犯罪を犯そうとも無罪】ということか？」

「ええ、その通りです。ですが、外交官の仕事の一つは、派遣された国と自国の友好を築くのが仕事です。」

確かに我が国で殺人を犯そうが、婦女暴行を犯そうが、被害者は泣き寝入りするしかありませんが、

そんなことをして国同士の友好にヒビを入れたら、

外交官自身が国元で裁かれる可能性が高いです。

軽犯罪は犯すかもしれませんが、重犯罪を犯すことはまずあり得ませんね。狙ってやっているのならともかく。」

「解説、ありがとうございます。」

「次は？」

「はい」

「伊黒さん、どうぞ」

「最後の特権である【接受国による保護義務】とあるが、これは家族も含まれるのか？」

「もちろん含まれています。君たちも見たでしょう、米兵と日本兵に囲まれて大使館に入るローズマリー特命連絡員の姿を。あの待遇は優遇措置ではなく、保護義務があるからしているのです。」

特にあの方は【米国全権大使の娘】としての保護義務、米国大統領が任命状を渡した【特命連絡員】としての役人という身分、二重の肩書きがあり、どちらも保護義務が適応させる立場です。」

当然、ここに記されている外交特権が適応されている立場です。」

「あの一、質問をしてもよろしいですか？」

「胡蝶さんですか、どうぞ」

「なぜ、保護義務が適応されている立場であるのに、役職などにつけたのでしょうか？」

「あつ、そうね！」

「確かに見たところ10代前半…役人にするには若すぎる」

「そうだな、（聡明な）胡蝶ならともかく」

「富岡さん、私が老けてみえると？」

「僕もいるし、おかしい話ではないでしょ？」

「南無…」

胡蝶の矛盾点をついた質問に対し、甘露寺、宇髄、富岡、時透、悲鳴嶼が反応をする中、

「そうです、本来なら10代の役人登用などありえません。ましてや正確な情報を求められる連絡員など、前代未聞の人事です。しかし何事にも例外があります。この度のローズマリー・ベネット令嬢の人事登用の理由は《人道的に必要な支援》の一環として認められたからで

す。」

「人道的に必要な支援？」

「すでに守られる立場でありながら？」

「わざわざ二重にする必要があるのか？」

「君たちがそういう感覚であるから《人道支援》として認められてしまったのです。産屋敷が起こした事件は彼女が【大使の娘】の時に起こった事件でした。」

ローズマリー様は現在の両親とお国元には「自分が鬼である」と明言した上で、養子となっています。

だからこそ、あの事件では産屋敷当主であり鬼殺隊当主の関与が確定とされてしまいました。

そんな国際条約をガン無視する私営組織に、貴重な【鬼の少女】をただの大使の娘という立場で鬼殺隊に置けるわけがない。

堂々と護衛を連れて歩ける立場を与えなければ、命が危ういと米国の上層部は思った。

だから…【特命連絡員】などという名ばかりとはいえ、外交官の一員に迎えたのですよ。」

「《誰かの子ども》から《一国の役人》か…。」

「重要度が段違いだ。」

「仕事の名目で、何処にでも行ける…。」

「はつきりと言います。アメリカ…米国は我が国と戦争をする大義名分を欲しています。」

「「「「戦争!」「「「「「」」」」」」

「なぜその様な事を？」

「えっ…!戦争をしたいの?何で?」

「南無…ああ、人とは愚かな」

「鬼…か…」

「鬼の存在が暴露されたから…か。」

「…せんそう…」

「なるほどなあ…だからあんな挑発的な…」

「正解ですよ…宇髄天元さん。そうです。」

ローズマリーお嬢様もとい、ローズマリー・ベネット特命連絡員は、わざと君たち鬼殺隊士を怒らせているのです。

ただでさえ、鬼であることから大体の鬼殺隊士からは憎しみの感情を向けられる。

彼女はそれを利用しているのです。

彼女の経歴だけを見れば【迫害から逃れてやっと幸せを掴んだ少女】です。そんな人が武装している日本人に襲われたらどうなるでしょうか。

しかも、国公認の傭兵に襲われたら？

更に表向きの滞在名目が【日米合同軍事演習時の連絡員】であるならば、それこそ宣戦布告と捉えられ、【軍事演習】から即【戦争】に切り替えられても、国際情勢や内容を考えれば、米国が批判される理由はありません。」

「南無…九鬼殿が柱稽古よりも優先した理由は分かりました。」

「どの時代でも、国が派遣した正式な使者にもしもの事があれば、戦争になる…。」

「ましてや…友好国ならば、大惨事です…ね。」

「やはり、この3人の理解は早い、だが残りは…」

「…「？」…」

（…ここまで大分噛み砕いて話したぞ。まだ6歳の娘でさえ、「何か大変な事になる」程度には理解を示したのに、いくらまだ10代とはいえ娘以下の知識しかないのか？切り捨てるべき…か？だが、戦力がなあ…胡蝶しのぶは薬学方面だから最悪、米国部隊とローズマリー嬢に会わせなければ問題はないが…後の4人は…）

と、心の中で模索していた九鬼大和に、

「九鬼殿」

「何ででしょうか悲鳴嶼さん？」

「無言の4人は、世間知らず故、九鬼殿の話す危険性を理解していない模様…、他の仕事もある政府代表を…これ以上我ら鬼殺隊如きに拘束させては、

公務に支障がでましよう。

理解できていない4人と、この授業に参加していない不死川実弥には、私から理解できるまで説明します。」

(やはり…この人…。だがありがたい提案だ。)

「そうですか、では次に来る時は筆記試験を行います。それに合格できなければ、後方支援に回します。では、これで授業を終了します。」

九鬼大和 side

とりあえず、「傭兵」として使えそうな上級幹部が3人いたのを確認できたことだけで、この授業の収穫はあったな。

「九鬼警視、あの者を生かすのですか？」

強制授業の際に、要注意人物である不死川に銃口を向けた軍人に聞かれた。

「これからの彼の行動次第です。戦力減少は好ましくない…」

「同意します。」

私の意図を察したのか、先ほどの質問時よりも引き締まった顔をした。

「それで次はどちらへ？」

「蝶屋敷に。竈門炭治郎と話します。」

「はっ！」

「アオイ殿、竈門炭治郎君はどちらにいますか？」

「九鬼さん、確か…竈門君は…えつと…」

「あー、九鬼さんですね！炭治郎さんなら今日は、大使館に呼ばれてそちらにいますよ。呼び戻しますか？」

「君はすみさん…でしたか？」

「はい！すみです！」

「そうですか…大使館なら問題はないでしょう。急な案件ではないので呼び戻す必要はありません。」

「ありがとうございます、すみさん。」

「いえ…褒められるほどではありません。」

「では、アオイ殿、私たちはここで失礼します」

娘ほどの歳の子が、こんなところで働くとは、だがここでなければ花街に売られたかもしれないと思うと…、複雑だ。

「お待ちください、九鬼殿。」

「悲鳴嶼さんですか、どうしてこんなところに？」

「何の用だ？」

「あまり…不死川を挑発しないでいただきたい。」

やはり、分かっていたのだな。

「それは、彼次第です。教育をお願いしますね。」

「ええ…次に会う日をお待ちしております。」

「帰るぞ…」

「はっ！」

私も外交官ですから。

特例アメリカ大使館

『♪…♪ふんふんふん』

『随分とご機嫌ですね、ローズマリー様』

リアムさんにそう言われて、始めて自分が鼻歌を歌っていたことに気づいた。でも、それも気にならない。

『ふふ、だって今日は』

『ローズマリー様の名付け親である司祭が、ハリス大使の代理で来ますからね。』

そう、今回の【合同軍事演習】の真の目的を知っている少数の1人であるウィリアム神父が、お父様の代理で鬼殺隊の情報並びに、私の生存確認をしにやってくる。

『お昼に来るから、食事はこちらでももらいます。シェフに伝えましょう』

『その程度でしたら、こちらがします。ローズマリー様は仕事の方に移ってください。』

『仕事…日光を浴びてきます。』

『はい、お気をつけて』

私は知らなかったが、お父様が追加した10名の追加要員は、

『アレが例の…』

『あんな子どもが一応上司…か。』

『目だけ縦長だけで、あとは普通の子供だよな』

『あんな子どもを殺すのに躍起になるとは』

『日本側の説明ではオニとは人を喰べる存在だと言われたが…アレを見て…それは…ねえ』

『不老不死の實在と言われても…ピンとこない』

『ほぼ人ではないか』

『調べたところ、キサツタイと呼ばれる傭兵部隊は無法者が多いとか』

『外交ナンバーのついた車に石を投げつける集団ともなれば、ハリス大使が追加要請をするのも無理はない』

『本当に暇があれば、大使館内で日向ぼっこか。名ばかりの連絡員とは説明通りなのだな。』

私の仕事…それは、

《随分とご機嫌なのね、ローズマリー》

《やっぱりそう見えるのですか?》

《ウイリアム神父のいる場所でも教えましょうか?》
情報収集だ。

ここは大使館の中にある桜がある中庭。

特例大使館を造るにあたって、私が唯一口出した事がある。それは、【桜の木を、特にソメイヨシノを中心に植えてほしい】と。

表向きの理由は、【桜が好きだから】

実際は、【ソメイヨシノさん達に頼んで、大使館内で情報収集をする為】だ。

《ウイリアム神父は今日来る予定なので、それは後でお願いします。今は外部勢力が乱入してきたことによる鬼殺隊士や柱の反応が知りたいです。》

《鬼殺隊士の反応…ね、桜の情報網を使って集めた結果、鬼殺隊士の中でも賛否両論…といった感じね

鬼に恨みがある人の子は大体「反対」の姿勢を示すけど、中には「時代を考えれば妥当」と言っている人の子もいるわ。同じ【鬼殺隊以外の勢力が加わることへの反対派】でも意見が割れているのが現状

逆に【賛成派】の意見は、「多少の不自由は強いられるが、国家公認の方が職業として安定する」

「鬼がいなくなれば俺たちはお払い箱、次の仕事を与えてくれることが確実な国の方がいい」

といった感じね。【賛成派】の多くは鬼に対して個人的な恨みは無く、流れで入った形だったり、お金欲しさに高収入な鬼殺隊に所属していたり、現実主義者が多いのもあり、むしろ国家公認の組織になっ

たのを、柱に隠れて喜ぶ人の子も多いわ。》

《柱に隠れて…やはり、個人的な恨みがない人は受け入れるのが早い
ですね…》

賛否両論…ということは、少なくとも半分は鬼殺隊の在り方に疑問
を持つていたということか…。

なら、隠や末端の剣士なら引き抜けるかもしれない。

《柱の反応は？》

半々と言つてはいるけど、それは末端の剣士や隠などの反応。

柱の多くは鬼に対して尋常じゃない程の恨みと憎しみを抱えてい
る。簡単に受け入れるわけがない。

《【反対派】の筆頭は不死川実弥、次点で胡蝶しのぶ、伊黒小芭内は実
家が実家だったのもあり複雑な心境よ。

【賛成派】は甘露寺蜜璃、悲鳴嶼行冥、宇髄天元ね

他には【中立派】で富岡義勇、時透無一郎。

時透無一郎は「鬼をこれまで通りに狩れるならどちらでも構わな
い」という姿勢で、富岡義勇は「人を喰わない鬼なら受け入れる」と
いった感じね。義勇と呼ばれる人の子は、竈門禰豆子と呼ばれる同じ
く人を喰わない鬼を仲間に引き入れた立場だから妥当な理由です
ね。》

《兄を鬼に殺された時透無一郎が中立派…ですか。》

意外な結果だ。彼は良くも悪くも正直者だ。

鬼に恨みがある人物でありながら、中立派になるとは。

富岡義勇は想定内だったが、中立派が彼一人でなかったのは大き
い。あの口下手で私たちを擁護する話をされては、不死川実弥と伊黒
小芭内、そして胡蝶しのぶを敵に回しかねない。

富岡義勇：彼は最終戦で大きな功績を残している…。

猗窩座戦では炭治郎のフォロウに回り、結果【首の弱点を克服した
猗窩座】を【狛治】に戻すキツカケを作った。

そして、鬼化した炭治郎を殺せと言つて、炭治郎が抗体を持たない
人を喰べる前に、被害を収めた。

彼がいなければ、無惨は倒せても、無惨の意志を受け継いだ最強の

鬼が世に解き放たれていた。

何としても：彼は最終戦に参戦させなければならぬ。

《中立派は鬼殺隊士の中では階級はどのくらいですか？》

《それは：あら？ウイリアム神父がきたわね、迎えに行ったほうがいいわよ。》

えっ！もうお昼?!早い、でも助かった。

《それでは後で》

《ええ、待っているわ。》

▽▽▽

『お久しぶりです、ローズマリー特命連絡員』

『神父さん！』

大使館で任命状をもらってからは、教会に通うことが出来ず、当然ウイリアム神父とも会えなかった。

『とりあえずお昼にしますか？』

『ええ、そうしましょう、詳しい情報は後でゆつくりと。それにしても：間違えましたね、元気そうで何よりです。』

『神父さんはお変わりなく、嬉しい限りです。』

その後は、護衛のリアムさんとイーサン軍医には席を外してもらい、2人で食事を楽しんだ。

▽▽▽

『ところで：以前電話で言っていた「イエズス会が関わっている可能性」についてをお聞かせください。』

『それは、イエズス会から送られた書類の中にあつたこれを見てください』

書類の内容は特に変わり映えのない事務報告だったが、神父さんがトントンと指した先には、小さくギリシヤ文字で、

【H Π α υ δ ο ρ α δ ε υ χ ρ ε ι λ ε τ α λ δ ο .】
と書かれていた。ラテン語の書類にギリシヤ文字？どんな意味なんだ？

『意味は…お調べください。直ぐに組織の意志が分かりますよ』
直ぐにわかるということとは、比喩表現ではないと言うことか。

『分かりました。ところで今回のご訪問の理由はこれだけではありませんよね？』

書類の内容確認だけなら、それこそ電話で済ませればいいだけの話。

お父様の代理で来たということは、

『勿論です。ハリス大使からローズマリーへの伝言は、《仲間を増やせ、血を残せ》です。』

『承知しました。と、ハリス大使にお伝えください。』

『はい、確かに承りました。それでは私はこれで』

『お気をつけて！』

さて、このギリシヤ文字の意味を調べないと。

▽▽▽

ギリシヤ文字…ギリシヤ語…と。

『H Π α υ δ ο ρ α …パンドラ？後の文は… 2つも必要ない…つまり、直訳で、《パンドラは2つもいらない》…か。』

パンドラ…ギリシヤ神話で有名な箱。パンドラの箱、全ての厄災を封じた箱。2つもいらない…確かにイエズス会が関わっている。

わざわざ公用語のラテン語ではなく、ギリシャ語で分かる人にしか意味が読み取れない文だ。

お父様含む、政府の高官職、大統領が私をここまで優遇する理由は分かっている。

私が【鬼】だからだ。

ただの人喰い鬼ではない、【人に従順な鬼】でアメリカ以外には居場所がない不老不死者。

私は例の動画での説明で、鬼を人工的に増やされた元人間と明言している。

人工的に増やせるなら、権力者は求める。

その【鬼の原材料】を。

勿論、私という前例があるから日本の権力者が鬼を軍事利用している…という疑惑も含まれている。

いや…疑惑も何も、私がいるせいでほぼ確信されているだろう。

そのせいで、アメリカは日本以上に鬼を舐めている。【軍事演習】と言っているのは、鬼の本性を知らないからだ。

それなりの脅威と捉えているが、あくまでもそれは【不老不死の兵士】という意味での脅威だ。

間違っても、【喰われる】という意味での脅威とは捉えていない。

この認識の差が、私が本当の切り札を切れない理由だった。

『Blue Rose…』

今は不可能という花言葉…これを奇跡に出来る可能性が出てきた。

奇跡を起こす為には、まずは、

《《ジリリリー》》

《昼間に電話なんて珍しいですね、どうしたのですか？ローズマリー》
《お父様、雲取山という山の歴代の所有者を調べてください。》

《山の所有者？あなたが昼間に電話をするということは、緊急ですね、すぐに調べます。》

《ありがとうございます、お願いします。》

さて…次は、

『リアムさん、鬼殺隊にある療養施設に行ってください。面会したい

人がいます。』

『どなたをですか?』

『竈門炭治郎、妹を鬼にされた少年です。そして…この手紙を政府代表者に渡してください。』

『承知しました。』

パンドラの箱は、開けさせない。

▽▽▽

竈門炭治郎 side

俺は上弦戦から帰還して、昏睡状態に陥った。

だが、呼吸のお陰で目覚めた。

そこからは寝ている間に失くした体力を回復するための訓練に励んでいた、もちろん伊之助と善逸も一緒に。そんな日常を取り戻したと思っていた時、

カツ

「ん?革靴の音?」

「どうしたんだ善逸?」

善逸がベッドで休んでいた時に、不意に言った言葉。

カツカツカツ

「な、なんか…!すげえ人が集まっているぜ!」

俺たちにも音が聞こえはじめ、伊之助が興奮しだした。そんな中で、

《バン!》

「帝国軍だ。竈門炭治郎はどこだ」

帝国軍?あの服は遠目で見たことがある。手の部分に刺繍が入っている軍服は確か…礼装…だったはずだ。

「た、炭治郎…お前…何やらかしたの？」

「強そうじゃねえか！おいその緑の奴！勝負しろ！」

善逸に聞かれたが、本当に軍人に名指しされる事をした覚えはない。

「政府代表である大和警視がお前との面会を求めている。」

「警視？憲兵の方が…ですか？」

本当に名指しで呼び出されるんだ？それよりも、政府代表者？鬼殺隊は政府非公式だというのに、そもそも何故、軍人が堂々入れるんだ？

「お待ちください軍人さん、彼は昏睡状態からようやく脱したばかりの人です。ベッドから出して、また昏睡に入られては困ります。」

「そうなのか？だが…相手は…」

アオイさんは何も疑問に思わずに、会話をしだした。

俺の顔を見て察したアオイさんは、

「炭治郎さん達は、まだ今回の件を知りません。それを説明し終えてからでは遅いですか？」

「いや、緊急の案件ではない。だが大和警視は柱の次に優先すると言っている。早めに回復させてくれ。こちらも強硬手段には出たくない。」

「分かりました。7日後には歩けるでしょう、それまでお待ちを」

「ああ、了解した。おい、帰るぞ」

「はっ！」

カツカツカツ

「な、何だったんだ？」

「ムキー！あの緑の服の男！俺に目線すら合わせねえなんていい度胸じゃねえか！」

「おい…本当に何をやらかしたんだよお…炭治郎お」

▽▽▽

そして、リハビリを始めて7日後、

「動いているな、よし行くぞ」

と、あの時の軍人さんに連れられ、軍用車に放り込まれて陸軍の施設の中にある客室？へ入った。

室内には、

「はじめまして、君が竈門炭治郎君ですね」

「は、はい！」

警察官の服？だと思っけど…紐や金色の桜を胸元につけた服を着込んだ、生真面目な顔の人がいた。

「改めて、説明は聞いたと事前の連絡で知ってはいるが、もう一度確認しましょう。鬼殺隊は？」

「国の傭兵部隊になったと聞きました。」

俺たちがリハビリの段階に入る前に教えてもらった。

とある事件を機に、外国に鬼の存在が知られてしまい、政府と鬼が結託していない証明の為に、「一貴族の私営組織」から【国の傭兵部隊】にしたと。

その際に、政府の人間と軍人が監視役を務め、さらに鬼の滅亡を見るまでは信用できないと外国の連絡員や護衛が集まっていると。

「君はあの事件の被害者であり、今の状況における中心人物と関わりがある。車内で説明されただろう、ローズマリー・ベネットお嬢様のことを。」

ローズマリー・ベネット…お嬢様か。

高位の立場である人がお嬢様と呼ぶ人にまで、俺たち以上の努力を重ねていたんだなあ。

「俺が会ったときはレディさんと呼んでいました。しかし会ったのはその一回だけです。俺も任務でその後の交流はありませんでした。」

「だが君は知っている。彼女が【ローズマリー】と呼ばれる前、【大使の娘】になる前の姿と性格を。」

特に君の場合は、妹がローズマリー様と同じく【太陽を克服した鬼】だ。必ず向こう側が面会を求め。」

「とはいえ…それにどう対処しろと？」

今更の話だが、俺はレディさん、ウイステイリアさん以外との外国人との交流はない。そもそもレディさん、今はローズマリーさんだけ、性格が急変するとは思えない。

「九鬼警視、料理はこちらに。」

料理？あのお皿は、確か異人街で見た

「ああ、運んでくれ。」

「あ、あの？…これは？」

明らかに俺の身分では食べれない料理だ。

「恐らく、向こう側は料理を振る舞ってから会話を始めるはずだ。向こうの常識では国同士の対話では食事も立派な外交の場、そこで無様な食べ方をすれば、いかに子どもとはいえ日本人の品性を下に見られる。」

だから…」

「だから？」

「世界基準、フランス料理のマナーを実践で勉強します。」

そこからは、

「背筋を伸ばして、だけどゆったりとしなさい。」

「ナイフとフォークは外側から使っていくきます。」

始めてのご馳走にガチガチになっている俺に向かって言った言葉。

そして、食事を始めれば直ぐに、

「皿から音を出さない！」

「ナプキンを使いなさい」

「食器を落としても絶対に自分で拾ってはいけません！」

汁物がきたので、つい食器を持ち上げたら、

「食器を持ち上げない！こうスプーンで掬って流し込む、少なくなったら食器をこう持ち上げて、残りを掬う。」

ズツ

「音をたてない！飲み込むのではなく、流し込む！」

「は、はい！」

特に指摘されたのはスープだった。

「パンはどの時機に食べてもいいけど、出来るなら主役の肉料理か魚料理の際に周りについているソースをつけて食べると、料理人に『とても美味しかったです』という意味になるから、マナー違反ですが、出来るならそう食べるのが良いです。」

「パンは角から千切るとパン屑が飛び散らないです。」

肉料理と魚料理の際は、特に指摘されることはなく、寧ろ、

「綺麗に食べてますね、そうです。どちらの料理も筋に沿って切ると綺麗に切れます。一口だいに切るのも実に紳士的な食べ方です。その感覚を忘れずにいてください。」

スープの次に大変だったのはデザートだった。

「デザートは特に食べる順番は決まったはいません。今回は一般的なものを提供しますが、大使館ではどのようなものが出るのかは不明なので…」

「あ、あの？デザートだけ皿数多くないですか？」

「10皿はある。まさか…！」

「デザートのお食べ方、全てを身につけてもらいます。」

「ケーキに付いている果物は最後まで残す。邪魔でしょうけど、先に食べてしまつては見栄えが悪くなります。」

「アイスクリンなどの溶けやすいものは先に食べる」

「数種類のお菓子が出た場合は、薄い味のものから食べる」

「疲れているのは分かりますが、優雅に食べなさい。」

「食事が終わってからが本番ですよ」

いつもは使わない頭をここでは常に使っているせいで、集中力が切れてしまい、マナー違反をすれば直ぐに指摘される。

ある意味…上弦戦よりも疲れた…。

「最後は今までの勉強の中では簡単なものです。コーヒーと紅茶の飲み方です。まずはコーヒーですが」

「合格です。これで大使館に呼ばれた際の食事に関しては問題ないでしょう。」

「あ…ありがとうございます…ございました…」

滅茶苦茶疲れた。

「では、本題に入ります。」

「えっ?」

「これが本題ではなかったのか。」

「君が大使館に呼ばれる理由の検討はついています。それについてを…」

《九鬼さんによる試験を合格してから数日後》

蝶屋敷にリアム・オニツカと名乗る他国の使者が、日本兵も率いた形で俺のいる大部屋に乗り込んだ。

そして、その使者から言われた言葉は、

『ローズマリー特命連絡員が竈門炭治郎を指名している。』

護る者と衛る者

俺は今…とんでもない所に招かれている。

「I apologize for calling you all of a sudden, but welcome to the U.S. Embassy!」

「はじめまして、通訳を担当します。リアム・オニヅカと言います。こちらの方が我が国の特命連絡員であるローズマリー・ベネット様です。」

「は、はじめまして…」

車に乗せられて、軍人さんにはそれは丁寧に説明をされたが、今のレディさんの姿は、白いワンピースだが、首飾りには宝石がつけられて、膝下のスカートは金銀の糸で縫われたレースをふんだんに使っている。まるで…貴族令嬢だ。

「あ、あの、レディさん…じゃなくて、ローズマリーさんは何と?」

「ああ、通訳をしていませんでしたね。先ほどの言葉は『急に呼び出してしまったことには謝罪しますが、ようこそ、米国大使館へ!』とっております。」

「そ…そうですか…」

「Nice to meet you, I'm Rosemary Bennett, who was dispatched from the U.S. Embassy.」

「それでは翻訳します。『はじめまして、アメリカ大使館より派遣されました、ローズマリー・ベネットです。』」

「There's been a rumor, Tanjiro Kamado, isn't it?」

「お噂はかねがね、竈門炭治郎君ですね。』と。」

「はい!竈門炭治郎です。お招きいただきありがとうございます!」

俺の言葉もまた、

「Yes! I'm Tanjiro Kamado. Thank

k you for inviting me!"

翻訳をされていた。あれ？でもこの人は、

「リアムさん、ローズマリーさんは日本語…話せましたよね？」

まさか、日本語も忘れてしまったのか？

「ええ、内容を理解していますし、話すことも出来ますが、【日本人と日本語で話す機会】がないに等しかったので、日本語で会話するよりも、英語で会話をした方が伝えやすいそうです。」

「そうですか」

確かに…俺と最後に会ってから時間は経っている。

その間に会話の相手になったのは、外国人しかいない。

向こうの言葉に慣れてしまったら、語彙力が上がるのは英語の方になるだろう。

「では、翻訳をお願いします。」

今日は何の御用ですか、ローズマリー様。」

「How can I help you today? Ms. Rosemary」

「It will be a long time when you get down to business. So, let's eat first.」

「本題に入ると長くなります。なので、食事を先にしましょう。」

九鬼さんの予想通り、本題に入る前に食事を摂ることになった

「It's an unfamiliar meal, isn't it? Some courtesy violations will be overlooked.」

「慣れない食事でしょう？多少の礼儀違反は見逃します。と仰っています。ローズマリー様のように食事をしてください」

「はい」

そこから出てきたのは、九鬼さんに教えてもらいながらも、悪戦苦闘した【フランス料理】だった。

実践練習をしていなければ、この食事だけで気力を使い果たしてい

ただろう。俺が慣れた手つきで食事をするのが予想外だったらしく、
「I'm very good at it. I didn't expect to be able to eat so elegantly with just a mercenary.」
「すぐくお上手です。ただの傭兵とここまで優雅に食事が出来るとは思ってもいませんでした。」

ただの傭兵：九鬼さんが言っていた、食事も外交の場だという話。確かに：あの時のレディさんではない。

レディさんなら、俺のことをただの傭兵とは言わない。

この人は、もう：本物の：外交官なんだ。

「お褒めに預かり光栄です。ローズマリー様の手本が美しいからです。」

「It's an honor to receive your compliments. Because Rosemary's example is beautiful.」
「You've gotten better at flattery.」

「お世辞も上手くなりましたね」

「ローズマリー様ほどではありませんよ」

「Not as much as Rosemary」

会話はトントン拍子に進んだ。だが、いくら料理が美味しくても会話に温度を感じることはなかった。

表面上は煌びやかで優雅でありながら、中身は空っぽだ。

こんな食事なら、蝶屋敷で食べるおにぎりの方がよっぽど美味しい。
い。

そして、食事はつつがなく終わり、ローズマリーさんが食後の祈りを終えた後、

「Let's get down to business.」

「それでは本題に入ります。」

車の中で、軍人さんに最初に言われた言葉は、

《例えかつて、どんな関係だったとしても、相手は一国の役人、たかが一傭兵如きが気安く話しかければ、ローズマリー令嬢は許しても、護衛のアメリカ人は許さない。敬語で話せ、いいな、絶対だぞ。》

《あの…具体的にどのくらい偉いのですか？》

《例を出すか…お前は平民、相手は貴族令嬢。どうだ？分かりやすい身分差だろ》

《えっ！でもあの国には貴族はいないと聞きましたが？》

《確かに米国には日本のような身分制度はない。

だが、人が集まれば似たような階級差は出てくる。

ローズマリー令嬢は「米国が派遣した使節団の1人」だ。

とにかく、敬語で話さない。君は名指しで他国大使館に招かれている立場だが、危険人物と思われたら殺される。

大使館内の法律は米国だ。私たちが庇える場所ではない。》

《君たちの当主、産屋敷耀哉のせいで、この国は窮地に立たされている。これ以上の失態を重ねたら…お前の妹を殺す。》

あの発言をした別の軍人さんの匂いは本気だった。

俺がローズマリーさん相手に、無礼な態度で挑めば禰豆子を殺すという確固たる意志があった。

傭兵…鬼殺隊士はこれから先は傭兵だと言われた。

軍人よりも格下の戦闘員だと。

俺たちよりも格上の軍人さんが、ローズマリー令嬢と呼ぶ相手。身分が高い立場になったのだと実感した。

だから、これからの話が、ただの雑談ではないのだと、軍人さんの匂いでわかった。

ブルル

「着いた…な。俺たちはここで待っている。帰ってこいよ、竈門炭治

郎君」

特例大使館

《竈門炭治郎君：君を令嬢が名指して呼び出した理由には、いくつかの検討はついている。

まず、第一に…【妹が鬼であること】》

「The reason why I called you is that my sister, like me, is a demon who doesn't eat people」, and there, something I want to ask you who inherited that blood.」

「あなたを呼び出した理由は妹君が私と同じく、【人を喰わない鬼】であること、その血を受け継いだあなたに聞きたいことがあるのです。」「聞きたいこと？何でしょうか」

「Is there something you want to ask? What is it?」

俺の言葉も即座に翻訳される。最初に会ったときは2人とも日本語での会話だったから、この翻訳を挟むやり方は不便に思う。

「Personally, I think the reason why your sister was able to overcome the sun is because of the special bloodline she was born with. However,」

「私個人としては、君の妹が【太陽を克服】できた理由は《生まれ持った特別な血筋》にあると思います。ですが、」

「ですが？」

「Then why could only your sister endure it? There will be a contradiction. That's why our country wants to investigate another possibility.」

「それだと、何故君の妹一人しか耐えられなかったのか?という矛盾が生じます。なので我が国はもう一つの可能性を調べたいのです。」「もう一つの可能性?」

「禰豆子が太陽を克服できた理由は《竈門家の血筋だから》という考えなのか。確かにそれは俺としても考えていた。

「禰豆子だけなんだ、鬼となつてからも、本能に飲み込まれなかったのは。」

ローズマリーさんも「太陽を克服した鬼」だけど、彼女は《人を喰うことが原因の病》を知っていたという前提条件がある。

「だけど、禰豆子にはそんな知識を身に付ける時間がなかった。

他の鬼と前提条件は同じなのに、禰豆子だけが「太陽を克服」できた。その理由に血筋を挙げるのは当然のことだ。

「だけど…もう一つの可能性?」

「It is possible that your family was unconsciously ingesting antibodies against the blood of the demon, 'chiflain'.」

「君たち一族が無意識に【鬼の頭領の血に対する抗体】を摂取していた可能性です。」

「摂取?」

「俺たちは確かに山で採れた山菜をよく食べていた。」

「山菜を売りに出すほどの余裕はなかったから、家族みんなで食べ終えていたけど、その中に【鬼舞辻の血】に対する抗体を持つ山菜がある?」

「If the reason why your sister

was able to maintain reason even though she was an ogre was congenital and unchangeable, such as blindness, if it was acquired ability, she would be able to mass-produce [the ogre who overcame the sun].」

何を言っているのかは分からないが、一気に声色が変わった。

「もし、妹さんが鬼でありながらも理性を保つことができた理由が、血筋などの先天的で変えられないものならまだしも、後天的に付けた能力だった場合、『太陽を克服した鬼』を量産できることになります。」

「…あつ！」

「そうか、九鬼さんが禰豆子や珠世さんを隠す理由はそれだったのか！」

「If it is acquired and an ability that everyone can wear, the power balance of the country will collapse all at once. It's not a story that can be overlooked as a diplomat in a country.」

「もし、後天的で誰もが付けれる能力だった場合、国の勢力均衡が一気に崩れます。一国の外交官として見過ごせる話ではありません。」

食事の時のような表向きとはいえ、和やかな雰囲気から一変し、鬼とは違う疎外感を感じた。この特例大使館と呼ばれる施設は、藤の香りが強く、俺と目線を合わせる人は全て香水を振りかけていた。

俺の鼻を使えない場所だ。

「Therefore,」

「なので、」

「I would like to get permission to enter Mt. Kumotori, the mou

tain where you are from.」

「君の出身山である雲取山への入山許可をいただきたい。」

「入山許可?」

なんで山に入る許可を俺に取るんだ? そういうのは普通、大人に求めるものではないのか?

「The day we first met, I was wondering after I heard about your family structure and life.」

「初めて会った日、君の家族構成と生活を聞いてから不思議に思っていたのです。」

「There's no way your parents wouldn't know that electricity is spreading, the son of a charcoal grilling hut, a family business that will be tapered considering the coming era. However, aside from you, the eldest son and heir and the eldest daughter Nezukō, it's strange that the mother didn't urge other brothers to find a place to serve.」

「炭焼き小屋の息子という、これからの時代を考えれば先細りする家業、電気が普及していることを貴方の両親が知らないわけがない。なのに、長男で跡継ぎで家長のあなたと、長女の禰豆子さんはともかく、他の兄弟に奉公先を探すように、母親が促さなかったのがおかしい話なのです。」

奉公先…。確かに俺たちは裕福な家庭ではない。

だが、飢えるほど貧しい家庭ではなかった。

でも、確かに言われてみれば、他の兄弟持ちの中には、奉公に行っている兄弟がいると聞いたことはある。

食い扶持を減らす為でもあるが、真つ当な教育を受けさせてくれる奉公先の方が、子どもの将来も安泰だからという理由がある。

そう考えれば：母さんが奉公先を探さないのは、確かにおかしい話だ。

「Some families don't serve the children, but that's because the house is wealthy. What do you think is the reason why you don't find the servant of your second son and third son in a poor family that is in trouble with what to wear?」

「子どもを奉公に出さない家庭もありますが、それは家が裕福だからです。着る物にも困るような貧困家庭で、次男三男の奉公先を探さない理由は何だと思えますか？」

「理由：」

俺たちは山菜などを取ったり、炭を売って食事を確保していた：、
だけど、それだけで賄えるほどではなかった。

奉公先なら、町に降りて炭を買ってくれる常連さんなどに頼めば、
伝を使って探してくれるはずだ。

情に深い人が多いのだから。

なのに、母さんや父さんが奉公先を探さなかった訳。

雲取山の入山許可を俺に求めた：まさか！

「炭焼き以外にも、収入源があり、貯蓄があるから：ですか。」

「In addition to charcoal grilling, there is a source of income and savings...?」

「That's correct. Please see this document. He is the successful owner of Mt. Kumotori and this is the water bill for the

successive owners of Mt. Kumot
ori and the water provided to
the field.

「正解です。こちらの書類をご覧ください。雲取山の歴代所有者と、畑に水を提供した分の水道料金です。炭治郎さん、米国大使が日本政府に要請して提供してもらった、雲取山の所有者兼管理者の名簿と、戸籍謄本です。」

通訳のリアムさんに渡された書類には、おじいちゃんの名前や、父さんの名前が記されていた。今は母さんの名前だ。そして、

「君たち竈門家と長い付き合いがある、サブロウと呼ばれる男性に話を聞きました。500年に及ぶ間、雲取山は竈門一族が所有していた固定資産だそうです。元はどこかの権力者の土地だったそうですが、何かしらの事情により、所有権が竈門家に移り、以降竈門一族が代々受け継いで、守っていた土地だそうです。」

「えっ…でも、父さんも母さんもそんな事は一度も…」

家が貧しいなら、それこそ土地を一部売る話があってもおかしくない。なのに、跡継ぎの俺は一度もそんな話は聞いていない。

でも、リアムさんの話は嘘ではない。

この書類には、明治以前の古びた紙からずっと竈門家の名前が記されている。

「恐らくは…君が真正正銘、大人の仲間入りを果たした時に所有権を移すつもりだったのでしょう。歴代の所有者は、その時代ごとに成人と認定される歳に土地の継承をしています。」

君たち一族が代々受け継いできた「ヒノカミカグラ」？と呼ばれる神事を完璧に出来た男子に継承権があると考えると…貧しいのに、次男以下を追い出さない不可解な理由に説明がつかずいます。」

通訳のリアムさんはそう言った。

確かに…雲取山の歴代の所有者は長男で統一されてはいない。

次男や三男が受け継いでいる時もある。

戸籍謄本を見て、「長男が亡くなったから次男に」という話ではない

のは事実だ。

俺が一通り書類に目を通したのを確認してから、

ローズマリーさんは、

「I'd like to get permission to enter Mt. Kumotori, but you're still a minor. Even if you give permission, you need adult permission anyway. Please decide after consulting with Kuki-dono. Mt. Kumotori is a Japanese territory, and people from other countries cannot enter with out permission.」

「雲取山の入山許可を頂きたいですが、∴君はまだ未成年。君が許可を出しても、どちらにしろ大人の許可も必要とします。九鬼殿に相談をした上で決めてください。雲取山は日本の領地、私たち他国の人間が無許可で入ることはできません。」

《第2の目的は恐らく、君たち家族が住んでいた雲取山の調査をするためだ。調査許可を求められたら、君はこう言えばいい。

「それは所有者に言ってください。」と。》

九鬼さん、所有権が俺に移っている場合はどうすればいいのですか？

だが、ローズマリーさんの話ぶりを考えると、今のところ俺が仮に許可を出さなかったところで、大きな亀裂を生むほどではない。

「ローズマリー様、それは俺1人では決められません。九鬼さんと∴政府代表の九鬼大和警視と相談の上で連絡します。」

「Rosemary, I can't decide that by myself. I will contact you after consulting with Mr. Kuki and Superintendent Kuki Yamamoto, the representative of the go

vernment.」

「I understand. Then, I will transfer this material. Please give it to the representative of the Japanese government」

『分かりました。では、こちらの資料を譲渡します。日本政府代表にお渡しください。』と仰っています。」

「はい、確かに受け取りました。」

「Yes, I certainly received it.」

話はこれで終わったと思い、少しほっとしていたところ、

「Tanjiro Kamado, you, no, it's a terrible story for your brothers, but there's something you need to listen to. This time... this is the biggest reason I called you.」

『竈門炭治郎君、君、いや君たち兄弟には酷な話だが、聞いてもらうべき話がある。今回：君を呼んだ最大の理由だ。』炭治郎さん、我々が君をわざわざ大使館に呼んだ理由を聞いてください。」

「えっ……！」

大使館にわざわざ呼んだ？まさか、禰豆子の血や雲取山への入山許可は前座に過ぎなかったのか。

「I and my father, Ambassador Harris, have the same idea, but it is almost certain that the biggest reason your sister was able to overcome the sun is [blodline]. In other words... the a

ct of your brothers having children and connecting ofspring is only a threat from the United States, standpoint. Let me get straight to the point. We, the consensus of the country of America, want the Kamado family to be discontinued in your brother's generation."

「私や私の父であるハリス大使も同じ考えですが、君の妹が【太陽を克服】できた最大の理由は【血筋】であるのは、ほぼ確定です。つまり……君たち兄弟が子を持ち、子孫を繋げる行為は、アメリカから見れば脅威ではありません。単刀直入に言います。我々、アメリカという国の総意は、竈門家の血筋を君たち兄弟の代で、途絶えさせたい」

「……は？」

彌豆子が太陽を克服できた理由が血筋であることはまだいい。俺もそんな予想をしていたのだから……でも、それを理由に【一人に戻っても子孫を残すな】……と。

(ふざけるな！)

手を出しそうになった。でも、

《最後に1つ……君がこれから行くであろう大使館について説明しましょう》

九鬼さんに言われた《一番大事な心得》を思い出した。

《大使館に入るには、相手側の許可が必要です。政府代表と任命されている私はもちろん、呼ばれる側は等しく【交渉相手】と認識されま

す。そして、外交に慈悲の心などありません。

例え相手が身内であれ、交渉相手となった暁には【敵対関係】になります。

外交とは：優雅に振る舞いながら、自分の主張を押し通すものです。

外交の要は【言葉】です。

基本は表向きの心地よい甘言を、言いながらそつと毒や罠に嵌めるか。

あるいは相手側を怒らせて、被害者として主張を受け入れさせるか。の2つの方法があり、時と場合にに応じて使い分けるものです。

君の場合は、妹が【太陽を克服した鬼】です。

向こう側が一番欲するのは、君の妹。

この国に【太陽を克服した鬼】を置き続けるのは、向こう側からすれば首元に小刀が突くような危機感があるはずです。

だから、絶対に【君の妹を自分達のそばで管理したい】と考えている。

君を呼んだ理由は、十中八九罠に嵌める為です。

どんな甘言を言われても、挑発されても、決して：感情のままに動いてはなりません。》

そうだ：。このまま動けば向こうの意のままにされてしまう。

禰豆子の為を思うなら、動いてはいけない。

グツと堪えろ：！

怒りを鎮めろ！

「ふう…」

「What's the matter?」

「どうされましたか?」

【子孫を残すな】と言った同じ口で、俺を心配する言葉を使う。

「何でもありません。」

「It's nothing」

冷たく、虚しい、空っぽの言葉。

「ところで【一番大切な話】とはそれだけなのですか?」

「By the way, is that all [the most important story]?」

平静を装え、笑え、穏やかな言葉を使え、

「That's right, no matter how you move, please do whatever you want. All we can do is give you advice. Most . . . if you act to leave your descendants behind, I think you will be missing for some reason in a world without demons.」

「そうですよ、君たちがどう動こうとも勝手にどうぞ。私たちに出来るのは忠告だけですからね。最も：子孫を残そうと行動すれば、鬼なき世界で、何故か行方不明になるとは思います。が。」

遠回しに【子孫を残したら殺す】と宣言してきた。とても微笑みながら言う言葉ではない。

だが、今回の件ではつきりと分かった。

この人は、もうこの国に未練はない。

九鬼さんの言っていた通り、これからは【米国の為に動く】鬼殺の協力者だが、仲間ではない。

それが分かった時点で、俺の中で区切りもついた。

これから先、俺がやるべき事は決まった。

「昼食：美味しかったです。ローズマリー様もどうかお元気にお過ごしくださいませ。」

「Lunch . . . it was delicious. I hope Rosemary is doing well.」
「I had a good meal today for thank you, too. Please give my regards to Superintendent Yamato.」

「今日は久々に楽しい食事をとれました。こちらこそ、ありがとうございます。大和警視にもよろしく』だそうです。」

「帰りはこちらから送りましょう、車の準備を致します。」
「はい、お願いします。」

大使館から帰ってきて、早速九鬼さんと話し合いをし始めたら、
「はあ！雲取山の所有者は竈門葵枝ではなかったのか!？」

「えっ……！母さんは鬼舞辻に殺されて、今は妹と俺だけですよ！」

「君……まさか、家族分の死亡届を出していなかったのか!？」

「えっ？死亡届?」

「そういえば……おばあちゃんが亡くなった時、母さんが役所に行つて
いたような?」

「はあ……いいか、竈門炭治郎君、書類上、君の御母堂と兄弟は全て生き
ている。役所に死亡届を提出し、受理されない限り、雲取山の所有者
は、君が成人するまでは、【竈門葵枝】だ。」

鬼の事、富岡さんとの出会い、そして鱗滝さんとの修行の日々で、
すっかり忘れていた。

「今回の案件は、柱の身辺調査に力を入れて、君の身辺調査を怠った私
たちの責任だ。御母堂と兄弟の死亡届はこちらが何とかしよう。」

そして、雲取山の所有権を君に移す。

後見人はこちらが指名すれば、すんなりと所有権譲渡は出来る。」

「何から何まで……申し訳ありません……。」

ただでさえ忙しい人に、さらに負担をかけてしまった。不甲斐な
い。

(もし……竈門禰豆子が太陽を克服できた理由が、ベネット親子の予想
の一つ、後天的な能力だった場合、竈門炭治郎亡き後、後見人が土地
を相続できるからな。米国人に土地を買われる可能性を消さなけれ
ば。)

《舞台裏》

ニコニコ

スン

『はあ…疲れた』

普段から、あんなフォーマルな場で着る服なんて着ていない。

何でお父様は、ネックレスに本物の宝石なんて付けたんだ？要らな
いでしょ、表向きの私は10歳だぞ。

一体誰に会うことを想定していたんだ？

それにあのフリルもだ、動きづらい。

料理中、うっかり落とさないように普段より精神を使った。

だが、それがあつたからこそ、炭治郎君相手に冷淡に扱う事ができ
た。それは、これからの事を考えればいい結果だと思う。

計画は成功だ。

完璧に嫌われた。

自分でそう仕向ける予定だったし、実際に竈門炭治郎対策を事前に
通達していたから、嘘だとは思われなかったはずだ。

『それにしても…見事な演技でしたね、ローズマリー様』

通訳のリアムさんには、事前に「全て正確に翻訳するように」と言っ
ていた。彼は私とは違い、炭治郎君を懐柔する事を提案していたの
で、心配だったが、職務には忠実だった。

『彼は鬼を滅ぼす要であると同時に…鬼としての適応能力が最も高
い。私たち外部者は、鬼殺隊内では評判が悪い。』

今のところ、鬼殺に貢献する物を提供していませんからね。』

そう、今のところ鬼殺隊から見れば、私たちは

【勝手にやってきて偉そうにふんぞり返っている存在】だ。

『しかし、大使館からは「太陽光の再現機械」が出来たと報告がありました。流れは変わるのでは？』

出来てしまったのだ、【ブラックライト】が。

最初聞いた時は耳を疑った。だが、詳しく聞けばまだまだ発展途上段階の試験品、最終的には鬼舞辻に当てることを想定しているが、長時間の発光ができていない。最終決戦の最初の場合は、無限城だ。

出来れば、鬼舞辻が産屋敷邸に来た時に殺したいが、到底今の光量ではできない。

ブラックライトの無駄打ちをして、鬼舞辻に逃げられては意味がない。

とはいえ、仰々しい機械があれば疑われてしまう。

小型化を推し進める必要がある。

そして、電池の容量を上げなければ、

『本国に伝えてください。ブラックライトの発光時間の長期化と、電池の小型化を同時並行で進めてください。目標は、刀のように持ち歩けるまでの小型化と軽さ、電池の容量を上げて光量の倍増。大型のブラックライトも少なくとも10機は持ち込んでください。』

『ハリス大使にお伝えします。ところで、客人が帰られたので、この強い香水を落としてもよろしいでしょうか？』

『もちろんです』

事前に特例大使館内の職員に【竈門炭治郎対策】の最重要事項に、【鼻で人の感情を読み取れる人が大使館にやってくるので、大使館員全て《藤の香水》を通常時より強くかける事】

とお父様経由で通達していたのもあり、皆キツイ匂いをしている。

そして、追加で増員された護衛は、今日は全て休暇として、本家の大使館に移動してもらっている。

私はその人達の正確な場所は知らない。

知る必要がない情報だから…、とはいえ、ある程度の場所は予想がつくが。

『みんな、落とす許可降りたぞー!』

『シャワー浴びれる〜!』

『匂いキツイ』

ざわざわと揃って、シャワー室に人が移動していった。

『みんな…ありがとう』

いくら大使の命令とはいえ、キツイ匂いの香水を一日中つけてるなんて、嫌にきまっている。

ましてや、《ハリス大使の娘》の客人が来るからなんて理由なら、権力の私的利用に見えても仕方ない。

それなのに、《お飾りの特命連絡員》の客人相手に、完璧に対応してくれた。

だからこそ…ちゃんと死なないと…ね。

『さて…あの書類を見て、九鬼さんはどう対応するのかな』

九鬼大和 side

「ローズマリー様からの書類です。」

「ああ、置いておけ」

これから優先的にする事は、まず【竈門炭治郎の後見人】にこちら側の人間を入れて、雲取山の所有権を得なければ。

ローズマリー様は、【血筋】による克服と言っていたと炭治郎君からは説明されたが、それはあり得ないと一番理解しているのは、ローズマリー様だ。

本当に太陽を克服する条件が【血筋】ならば、ローズマリー様が克服する条件を満たしていないのだから。

彼女は10歳と表向きはそうなっているが、思考回路は20代前半程度にはあると、護衛期間の会話から推測できる。

【太陽を克服する条件】を【血筋】と言ったのは、ひとえに我が国が戦火に巻き込まれないためだ。

【不老不死の妙薬】の原材料をこの国が独占しているとなれば、戦争は確実。そうなれば一番に被害を被るのは、兵士ではない。女子供だ。

鬼による二次被害を最低限に収めるには、【太陽を克服した日本人の鬼】は、【特別な血を引いているから克服できた】と公表すれば、その鬼と兄が子孫を残さねば、この国は【脅威の存在を匿っている】という疑惑を逸らすことができる。

彼女は、外交官だ。

いざ、戦争になれば、アメリカが勝つのは確実。

だけど、戦争は相互少なからずの経済的被害を被る。

ヨーロッパとの戦争で、動乱の足音がする国内を乱す真似は、例えば本国の命令であつても拒否する。

彼女からは…そういう覚悟を感じた。

「だから…かね」

君が提供する出どころが分からない情報を信じているのは、

.....

日本政府代表 九鬼大和警視

鬼殺隊内における反対派の多くは、階級は低い、もしくは鬼殺経験が3年未満の者が多く…

.....

「柱稽古の前に末端の教育を受けさせねばならないな。」

無駄吠えする駄犬を飼うほどの余裕は、ないのだから。

試験結果と柱の評価

強制学習会（不死川は不参加）から三週間後。
ついに、

「それでは…試験を始めます。制限時間は1時間、【外交特権】についての基礎知識です。教科書を読んでいたら普通に合格点には届きません。また、全盲の悲鳴嶼行冥さんは、別室での口頭質問による解答です。では…始め！」

この試験の結果で、最終決戦における前線配置か、後方配置かが確定する。

それもあり、柱の面子も全て真剣に取り組んでいる。

（雲取山の後見人を探すのには、あつさりと候補は絞れたが、そこに更に、口が固く、不老不死の妙薬を私的利用しない人格者を探すのに、時間がかかり過ぎた。柱の国際条約への理解度が心配だったが…この反応なら、問題はなさそうだ。）

心の中で試験内容に取り組む柱たちの様子に、安心感を覚えていた九鬼警視は、思考に余裕を持てたことで別のことを考えていた。

（問題は竈門兄弟の処遇だ。最終決戦の時までは、今の立場でいい。鬼殺隊は傭兵部隊だ。鬼舞辻無惨を殺すまでは、鬼殺隊士で固定してもらった方が、管理も楽だ。それに彼の鼻の能力を使わせてもらえば、反対派の心情を理解できるからな。）

雲取山の件があった日から、少ない人員を何とか確保して、再度《竈門炭治郎》について調べ直したのだ。

その中で発覚した特殊能力《嗅覚が異常に優れている》《人の感情が分かる》ということ。

（反対派の筆頭不死川実弥に対する対抗策はあるが、胡蝶しのぶの上弦の式へ対する殺意と策略に抜かりがない。

そして、これと言った弱みがないのも厄介だ。

栗花落と呼ばれる少女は、炭治郎君と親しいから、あの子を利用したら、炭治郎君がこちらに非協力的になってしまう。それに…炭治郎君案件で身辺調査をした結果、我妻善逸、嘴平伊之助の能力も最終戦

後の世界でこそ、脅威となる。敵に回して、他国に取られた方が厄介だ。

ローズマリー様はそれを理解していたから、炭治郎君を勧誘しなかったのかもしれない。」

試験に取り組む柱を監視しながらも、そんな事を考えていた。

そして、時間は進み、

「終了！筆を下ろしてください。」

「終わったわー」

「ふう、中々に疲れますねえ。」

「喉…乾いた」

「ちい！ちまちました問題ばかりだ。」

「問題ない、問題ない」

「派手に解けたぜ！」

「……」

甘露寺、胡蝶、時透、不死川、伊黒、宇髄、富岡の順で、緊張の糸が溶けたのか、試験問題の回収中に会話が始まっていた。

「これで試験は終了です。明日、結果を渡しますので、後は柱稽古に移ってください。」

「それに関して質問なんだが？」

「何でしょうか、宇髄さん？」

「政府代表さんよお、鬼殺歴3年未満の鬼殺隊士を集めて、なぜ軍隊教育をしているんだ？俺たちは【傭兵】だって最初に言っていただろう。」

「それは…あなたなら理由をお分かりでは？」

「まあ、わかっちゃいるが、【傭兵】の最大の利点は【縛られない】だからなあ。軍人のように【動きを固定】されると困る。」

「それについては問題ありません。指示が通らない場所では各々の行動を黙認すると言っていますから。質問はそれだけですか？」

「そうだ、それと…柱稽古を始めてもいいのか？」

「ええ、問題ありません。私たちに對して、偏見を持たせなければ」

「そうか…なら、俺は稽古があるから帰るぜ」

「なら：私たちも帰りましょうか。」

「そうね、しのぶちゃん」

「帰らせてもらう」

「チィ」

「帰る」

「準備しないと」

パラパラ

「凄い：：な」

今回の結果で、点数が悪ければ、強制で後方支援に回すと言っていたのもあるが、宇髄天元、甘露寺蜜璃、悲鳴嶼行冥の解答は予想内だったが、話下手な富岡義勇、反対派寄りの中立派な時透無一郎も、模範解答から更に一步乗り出している。それと、

「不死川実弥：知性も理性も全くなさそうだったのに、全て模範解答にできるような完璧な答えだ。」

あの男：帝大の模範解答を盗んできたんじゃないかと、疑うくらいには完璧な解答で提出している。

鬼殺隊への評価を少し変更しなければならないな。

甘露寺蜜璃 85点

胡蝶しのぶ 80点

宇髄天元 100点

悲鳴嶼行冥 100点

富岡義勇 92点

不死川実弥 100点

時透無一郎 92点

伊黒小芭内 79点

「70点以下を不合格とする：：としていたから、全員合格だ。」

（そして：：1番試さないといけない事があるが、内容が内容だからな。許可を得る手段を考えよう）

▽▽▽

柱への試験結果の報告をしに、特例大使館に移動した。

『ごきげんよう、ローズマリー様』

『ごきげんよう、大和さん。ところで今日は何の御用でしょうか？』

鬼については、最終選別とかいう狂った試験会場で【本来の鬼】を見たから知っている。本来はアレが普通の存在だということ。

理性ある鬼に会ったこともあるが、アレはアレで《番を亡くした狼》のようで、いつまでも飢えが満たされない目をしていたな。

「鬼になれ！」という割には、本人？は戦いに快楽を見出している目ではなかった。それに私の

『大和さん？』

『あつ…これは失礼しました。』

しまった、客人の前でボーとするなど、警戒心が散乱している。

本題に移らないと。

『ローズマリー様、リアムさん、イーサン軍医、こちらをご覧ください。英文に翻訳したハシラと呼ばれる、鬼殺隊上級幹部の試験結果です。』

『これは、ウィーン条約ですか。』

『内容は外交特権ですか、模範的な解答です。』

『しのぶと呼ばれる少女が、私を睨みつけてきた理由はこれですか。』

胡蝶しのぶ…本当に何をしているのだ！

感情一つ隠せないのに、幹部だと？医療班だったのが幸いだが、これは後で詳しく聞かなければ。

『はい、皆さまご覧の通り、幹部の全員が外交特権の七割を理解しています。ですが、それはあくまでも理解です。行動に移せるかは不明です。』

『つまり…私を鬼殺隊の本拠地で、柱に面と向かって会え…と？』

『…はい』

『あんな無法者の本拠地だと！』

『大使のお嬢様相手に何という要望を！』

護衛2人の反応は当然だ。リアム氏は基本的に、特例大使館に滞在しているローズマリー様の通訳兼護衛だから、鬼殺隊本拠地に行ったのは、公用車に石を投げつけられたあの日しかなかったし、イーサン氏は、ローズマリー様の血と検査結果を聞きに珠世と愈史郎、胡蝶しのぶを匿っている研究室によく行っているが、通路の隠や、剣士からの視線がキツイし、何より反対派の胡蝶しのぶがいる研究室だ。

危害こそ加えないが、雰囲気が悪いとの報告がある。

『皆様がご覧のテスト結果のように、鬼殺隊への教育は万全の対応です。初対面のように石を投げつけたり、武器を向けたりするような不始末は、もうおこさせません。』

だからこそ、上級幹部と顔を合わせてほしいのです。

もちろん、護衛は置きます。殺意を向けたら即刻威嚇射撃をします。

お嬢様…いえ、ローズマリー特命連絡員にも、利益になる話です。

このままの評価では、とても合同軍事演習などできません。』

最初こそ【お飾りの特命連絡員】と認識して、護衛の方に監視をつけていたが、彼女の行動力はお飾りで収められる範囲を超えている。父親の指示通りに動いているだけ…とするには、あまりにも言動がはつきりとしすぎている。

護衛も諜報員の役割を担ってやってきているのは事実だが、だとしても、ローズマリー様が【日本】にとって有益な情報を渡す理由はない。

そんな事を、他国大使が命じる理由がないのだから…。

つまり、私に来る情報は全て、彼女が国元に知らせずに、独断で横流ししている。そして、特例大使館内に留まりながら、鬼殺隊士の勢力図を知っているのにも関わらず、国が派遣した護衛に、その情報が渡っていない。彼女は自力で情報を得る手段を持ちながら、それを誰にも言っていない。

炭治郎君の話で、私も認識を改めた。

彼女は……お飾りでもなければ、罨の一つでもない。

本物の1人の外交官だ。

だからこそ、この提案は断れないはずだ。

『分かりました、私たちがここに留まる最大の理由は、【合同軍事演習】と【鬼の消滅】を確認するためです。

鬼殺隊本拠地へ向かいます。この解答用紙を返却すればよいのですね?』

『はい、お願いします』

▽▽▽

「おい…憲兵さんよお、これは一体どういう意味だあ?」

「試験結果の返却ですよね、なぜ鬼が待っているのですか?」

「変な雰囲気でしたが、これか。」

「南無」

「まあ!可愛い服!」

「そうだな…甘露寺」

「セーラー服」

「どうでもいい」

「ええ、普通に試験問題の返却ですよ。手渡す相手が私ではないというだけの話です。試験の内容を理解したあなた方ならお分かりでしょう?最適な行動というものが。」

一種の賭けだ。万が一の事があれば、日米関係に致命傷を負わせるが、どの道試さないといけない。先延ばしにできる案件ではないのだ、どの道合同軍事演習でこの国にやってくる米兵は、お飾りとはいえない【大統領が任命した連絡員】に挨拶にくる。その際に、逆上されては困る。

『ローズマリー様、お願いします。』

『ええ、では、甘露寺蜜璃さん』

『私ね、はい!』

『宇髄天元さん』

『おう、』

賛成派の2人は、全く心配していない。だが、これからが本題だ。

『富岡義勇さん』

『ああ…』

『時透無一郎さん』

『…!』

中立派の2人は合格…か。次は、

『伊黒小芭内さん』

『チツ…はい…』

『胡蝶しのぶさん』

『はい。』

目の前で危害を加えなかった。舌打ちはしたが、甘露寺蜜璃の手前、野蛮な姿は見せられないという感じか。

胡蝶しのぶは言動は問題ないが、殺意を隠しきれていない。

そして、1番の問題児は、

『不死川実弥さん』

『チィ!』

シューー

この音は、確か《呼吸》と呼ばれるもの…!

『ローズマリー様!総員、構え!』

ガタガタ

私も銃のセーフティを抜いて構えていたのを、気にせず、

「あ…ありがとうございます…御座い…ます…チィ」

腕には血管が浮かび、顔はまさに鬼のようなどという比喻が似合う状態だが、腕を震えさせながらも、

お礼を言った。

評価を改める、不死川実弥は、学べば実践に移せる。

唯一、口頭だった為、解答用紙がない悲鳴嶼行冥は、今回の試しは出来なかったが、彼は元々賛成派の筆頭、今回殺気すらなかったから合格だ。

「で？もう終わりだな。帰らせてもらおうぞ。」

「いえ、この後君たちには政府代表として話すべき事があります。」

『ローズマリー様、ありがとうございます。』

『いえ、確かに変わりましたね、お父様にもお伝えします。』

『ローズマリー様、車が到着しました。指定場所まで移動しましょう』

カツンカツン

▽▽▽

「九鬼警視、アメリカの護衛は全て特例大使館内へ移動を終えました。」

「ご苦労様でした、では外の監視に移ってください」

「はっ！」

「それでえ？俺たちにあんな茶番をさせておいて、まだ用があるってか？」

反対派の筆頭である不死川実弥は、見るからにイラついている。

「まさか、鬼に解答用紙を渡させるなんて、思いもありませんでした。」

「鬼相手に返事をしなければならぬとは…嘆かわしい」

2人も反応は似ている。特に胡蝶しのぶは顔だけは笑顔なのが、逆に怖い。それに比べて、

「白いセーラー服可愛かったわー」

「南無」

「わざわざ初対面時の服を着るとは…随分となあ。」

甘露寺蜜璃、悲鳴嶼行冥、宇髄天元は冷静な状態だ。

特に鬼に対して個人的な感情がない甘露寺蜜璃は、鬼よりも服の方に意識が向いている。

宇髄天元は、さすがだ…。服の意図に気づいたか。

「驚いた」

「よく呼べたね」

中立派はどちらかと言うと、【他国の要人】を呼び出す事が出来たことの方に驚いている。

7人中、5人は落ち着いている。なら、これからの映像を見せても問題ないだろう。胡蝶しのぶと不死川実弥が心配だが、いざ暴れても今ならいるのは私たち日本人だけだ。隠し通せる。

「今から君たちには、【米国から見た鬼】を見せます。落差がありますが、それが他国の人間から見た鬼です。覚悟して見てください。まあ…胡蝶しのぶさんにとっては理想が叶った形ですが。」

「「「「はっ?」「「「「」」

「映像を回します」

さあ、ここからが本番だ。

同じ単語で、意味が違うのはよくある事です。

カラカラ

《とりあえず、グサつとすればいいのですか?》

大使の自宅の背景だが、映像に映る少女が座る椅子は、木で作られた安価な物だ。これだけでもかなり浮いて見える。

《ええ、あのレンズに向けて思いつきりやってください》

《わかりました…うぐつ…!!!》

「何をしているんだア?」

「そもそも言葉が分からないわ」

「同じくです。しかしこの映像は、」

「自決の練習?」

「南無…この声は男性だ。父親なのか?」

「背景が都心だ、あの鬼の父親か。」

「間違いないな、あれはハリス全権大使、ローズマリー・ベネットの父親だ。」

《はい、治療してください》

《わかりました…》

動画内は顔色一つ変えずに淡々と進んで、

《何度も見ますが、相変わらず…凄い回復力ですね。》

《私はこれでも遅い方ですよ、だって…人間を喰べないから。》

《ちなみに、早いオニほどの程度で回復するのですか?》

《そうですね…例えるならば、瞬きをする間に…でしょうか。》

《確かにそれに比べれば、ローズマリーは遅い方ですね。》

「養女とはいえ、顔色一つ変えないなんて!」

「あの目は観察者の目です。父親としての心はないのでしょうか」

「鬼が死なないとはいえ、自決の練習などするのか。」

「むしろアレを命じているのは、父親だろう。」

「南無…」

「回復力を示すためとはいえ、随分と派手にやってるなあ」

「白い服を多く与えている理由はこれか。」

そう：ローズマリー様の服は、先ほどの白いセーラー服に加えて、礼服も白を基調とした物が多い。肌が白く、緑の髪だ。他の色が加えられた服だと色がごちゃごちゃして、見栄えが悪いという理由もあるが、1番の理由は、怪我をした際に分かりやすいからだ。

《よし、全回復完了！それでは、初めまして大統領並びに各貴人方、私はこの度ハリス・ベネット大使の養子に迎えられましたローズマリー・ベネットと申します。

先ほどの映像から分かるように、私は人ではありません。

一緒に送られた資料をご覧ください。》

「誰に話しかけているのかしら？」

「所作が丁寧ですね、少なくとも格上の存在宛の映像ですか。」

「目に注目するような撮り方だな。」

「随分と綺麗な画質だ、こりやあ、縦長の瞳もよく見える」

「映像に音が入るのもすごい…な。」

「何かを訴えている声だ。」

「何を話しているんだろう？」

胡蝶しのぶ、宇髄天元、不死川実弥は映像の撮り方が、意図的な物だと気づいたのか。勘が鋭い。

対して、甘露寺蜜璃、時透無一郎、富岡義勇は、どちらかという映像を撮った機種の方に向いているな。元々、「人を喰べない鬼」なら問題ないと、竈門兄弟を庇っていた人たちだ。ローズマリー様には興味がないから当然の事か。

《私は日本では「オニ」と呼ばれる化け物です。キリスト圏国家から見ればvampireです。》

《映像と資料をご覧になった方ならば、なぜ私が大使と普通に会話が成立しているのか気になるでしょう。私は》

《こちらから説明します大統領閣下、彼女は「オニ」ですが、人肉を食べられない特殊個体です。

基本食事は、太陽光と水、野菜は食べられますが栄養補助程度です。

動物性油も1gだけで吐き出しました。

そして彼女は、太陽が弱点のオニでありながら「太陽光を克服した唯一のオニ」です。

本来ならば、このような会話など到底できない存在ですが、彼女は太陽を克服する代わりに、「オニ」としての戦闘能力を失いました。

人間の庇護下に入らねば生きていけなくなり、日本人に頼つたら殺されるので、大人しくしていれば「人の子」として扱ってくれる我が国を頼つたという訳です。

それでは話を戻します。オニの始祖の名はキブツジ・ムザン、資料をお読みください。》

《資料からわかる通り、キブツジ・ムザンは生きることを至高とし、死ぬことを極端に恐れます。故に敵前逃亡や配下の切り捨てにも躊躇いがありません。始祖の鬼である彼は、首を切り落とすことで死ぬことはありません。唯一殺せる手段は太陽光のみです。そして、体液全てが人間にとっては猛毒です。なので：改めて要・求・し・ま・す・。

科学と自由の国であるアメリカの力を、大日本帝国に突きつけろ！キサツタイなんて傷の舐め合いをする組織に属する、貴族の私兵如きが「オニを殲滅させる」なんて不可能です。》

言語は当然英語だ。柱の中には簡単な会話ならできる人もいるそうだが、この話は難易度が高い。誰も理解できていないから、後が大変だろうな。

「さて…この映像は、ローズマリー様が自分の存在を現在の自国である、米国の上層部に送った物です。」

賛成派の悲鳴嶼行冥と宇髄天元、そして甘露寺蜜璃は、

「南無…人と共に生き、人の指示に従う不老不死者…」

「俺たちとは全く違う生き物に見えてるのか。道理で誰もが、あの鬼を子ども扱いするわけか。」

「人と共に生きれる鬼は、禰豆子ちゃんの前例があるから、この映像も間違いではないけど…鬼が全て順従で穏やかと誤認されてしまった

のね。」

映像がもたらす【鬼の印象】のズレを認識し、これまでの違和感の存在を確認していた。

「見た目だけなら、鬼と人は…大差ない。（それを、利用しているのか、随分と）賢いな。」

「人の形を保てる鬼は強いのに」

ただの事実確認だけで終わった中立派の2人。

そして…

「人の言葉に従っている映像…か。」

「言葉は分かりませんが、とても…侮辱されたように感じました。」

「最後に何言ってるのかは分からねえが、胸糞悪い気がしたぜ」

反対派の3人は、本能が強いのか、ローズマリー様の言葉の中にある意味を察してしまっていた。

「こちらが、ローズマリー様とハリス大使の会話の翻訳です。」

「はあ!?だが…間違っちゃいねえ」

「南無…厳しい言葉だ。だが、事実でもある。」

「確かに、私たちは千年かけても元凶を見つけられなかったもの。当然と言えば、当然の評価ね」

賛成派の3人は、鬼殺隊の評価は当然のことだと認識した。

やはり、鬼が直接の死因にならなかった人は、理解が早い。

だが、問題はここからだ。鬼が直接の死因になった人の反応は、

「鬼殺隊が鬼舞辻無惨を見つけられないのは、事実。（あからさまに低く評価されているが）間違っではない。」

「ムカつくけど…千年掛けても見つけられていないなら、仕方ないのかな?」

富岡義勇、時透無一郎は、ただの事実として【鬼殺隊が千年かけても、鬼の頭領を見つけられない】のは間違っていない、と認識したか。

ローズマリー様も事実としての、【鬼殺隊の評価】だからか、そこまで怒ってはいない。

「貴族の私兵…傷の舐め合い…随分と…俺たちを軟弱者扱いするの

か、あの鬼は…！」シャー

伊黒小芭内と飼蛇は、心が通じ合っているのだろう。どちらも目が殺意に溢れていた。

「イーサン軍医と話が合わない理由はコレでしたか。」

顔は笑顔だが、翻訳文を纏めた物を握り潰しながらの発言だ。

鬼に恨みがある人なら当然の反応だが、姉の件があるにしろ「鬼と人が仲良く生きる世界」を望んでいる人ならば、この光景はむしろ喜ばしい可能性だ。

なのに、実際はコレ…か。

期待はしていなかったとはいえ…少しだけ虚しいな。

「……」

「不死川さん？」

「おい？どうしたんだ不死川」

「不死川？」

1番の問題児は、暴れる事を想定して、麻醉銃まで持ち込んだが、反応がない。

「キエエー!!」

グサツグサツ

「何をやっている!!不死川実弥！」

暴れる事を想定していたから、救護方面の設備を整えていない…!

だが、まだ終わってはいない。

「不死川実弥！映像はまだ終わっていない！自傷はいくらでもして構わないが、最後まで見届けろ！」

「えっ？まだあるのですか？」

「不死川！チツ！玄弥呼ぶぞ！」

宇髄天元のこの言葉で、不死川実弥は即座に、

「あいつは俺の弟じゃねえ!!」

正気に戻った。

思いがけない騒動があったが、無事不死川実弥が正気を取り戻し、無駄に飛び散った血痕を一通り、拭き終えた。

「では、映像を変えます。次は最初の映像のような、【国元に送る公的

映像」ではなく、「私的な家族映像」なので、先ほどのような意見はありません。なので、翻訳文は出しません。」

カラカラカラ

《お父様！お母様！》

《ローズマリー、お帰り》

《ローズ、よく頑張っていますね。》

映像に映っているのは、ローズマリー様とハリス夫妻、先ほどの映像同様、最新のトーキー映像映像と音声と同時に流れる動画のこと。大正時代までは映像に音が入っていない、サイレント映画が主流だった。トーキー映画が最初に上映されたのは、1900年のパリなので、言葉もしっかりと入っている。

ハリス大使なら、鬼の事を公表する際には、鬼の能力だけでなく、感情の起伏や細かい動作も保存するはずだと思い、問い掛け、鬼殺隊への印象操作の一つとして貸し出しを申し出れば、あっさりとした承を得ることができた。勿論、複写物だが。

まだ、特命連絡員に任命される前、「大使の娘」として、自宅の中庭で両親と共に、アフタヌーンティーをしている映像だ。1人だけ土を食べているという点を除けば、普通の和気藹々とした穏やかな親子の会話、言葉が分からずとも、敵だと認識していない事は誰の目から見ても明らかだ。

「…姉さん」

「穏やかな会話だ」

「鬼と人が同じ目線だと？」

「南無…音から恐怖の感情を感じない」

「優雅な昼食ね」

「これが…向こうからみた現実」

「鬼が、人をあんな目で見えるのか」

胡蝶しのぶ…危険人物だが、「姉さん」と呼ぶ声は切なげだ。

鬼と人が同じ立場で、いや、鬼が人に甘える映像などそれこそ前代未聞のことなのだろう。

映像は進む。

《新しい服を着てちょうだい》

《お母様、また服を買ったのですか？お金は大丈夫なのですか？》

《あら、外交官の妻を舐めてもらっては困るわ。

ほら、着て》

ハリス夫人が娘に服を着せ替えさせている映像に映る。

ローズマリー様も困りながらも、満更でもない反応だ。

「この服は、先ほどのセーラー服ですね。」

「母親からの贈り物だったのか。」

「服の量がすごいな」

「財力が垣間見える…」

「鬼を着飾り、それに喜ぶなど…」

「(服が) 綺麗だな」

「服が多すぎるのでは？」

たしか…伊黒小芭内の実家は鬼を奉り、それによって得た金品で生計を立てて、贅沢な生活を享受していたとあった。

鬼を着飾り、それに喜ぶ夫人をよく思わないか。

《シスター！百合の花の準備終わりましたー！》

《あら？早いわね、ありがとうローズマリー》

教会に移り、自宅よりも簡素で着替えやすい洋服になったローズマリー様は、教会で祭儀の準備に勤しんでいた。

「シスター？」

「確か西洋の宗教で、日本語だと修道女のことです」

「一応…要人の娘だよな、こんな風は無防備になって大丈夫なのか？」

「対応がお客様だ。」

「両親はまだ理解を示せるが…仮にも鬼を相手に、随分と呑気だな」

「全く警戒していない。」

「これって…知っていないんじゃない？」

「目が穏やかだ。」

宇髄天元：やはり彼は見方が異なる。

警備の質を確認するのは、元々の職業柄：といったところか。

《鬼の身体能力の調査？》

《ええ、ローズマリー様は「人を喰べない体質」にする上で、「身体能力の低下」があつたと言っていましたよね。》

《はい、回復力も他の鬼に比べたら、遅いですね》

《でも、我々から見れば、あの映像の回復力は充分早い。他の能力も人間より優れているのは明白です。だから、身体検査を詳しくしたいのです。》

《主には？》

《持久力、継続力、瞬発力、視力、主に五感を含めた、大まかな身体能力検査と、その映像を保存すること。》

《問題ない範囲です。では始めますか？》

《ええ、では最初はテニスでもしましょうか。大人と子ども、どちらが先に体力切れをおこすのか試みましょう。言っておきますが、本気の試合を行います。》

《はい！》

「これは…？」

「向こうの球技、【てにす】と呼ばれる遊びだ。」

「体力検査のようなものでしょうね」

「子どものお遊びにしちゃあ、あの軍医は本気でやってるな」

「あの鬼もそれについて知っている…。やはり弱ったとはいえども、鬼は鬼だな。」

「太陽を克服した鬼：が、大使の娘か。」

《ローズマリー特命連絡員の護衛として、追加で増援してもらった人々です。》

映像は、【特命連絡員】としての仕事方面に移った。

《はじめまして、ローズマリー・ベネットです。私は大使館から基本的には出ないので、その間はそれぞれの仕事に就いてください。》

《こちらこそ、よろしくお願ひします。ローズマリー特命連絡員》

イーサン軍医が説明し、10名、それぞれが挨拶をし、握手をしている映像が流れる。

「鬼の手を取るとは…」

「命知らずにも程がある」

「でも、穏やかな普通の挨拶よね」

悲鳴嶼行冥、宇髄天元、富岡義勇、時透無一郎は最早無言で、映像を見ている。

さて…1番の荒れる内容はここからだな。

▽▽▽

「次の映像は、私たちが撮ったものです。翻訳文は後で渡します。」

《ローズマリー様についてはどのような印象でしょうか?》

「あら?九鬼さんが映っているわ」

「あの人たちは、護衛ですね」

《君たち日本人は、ローズマリー様を脅威と見做しているようだが、私たちはそうは思わない。》

最初に派遣された諜報員の1人、リアム・オニツカはそう言い、それに伴って他の護衛も次々と、

《ええ、確かに瞳は縦長、緑の髪で光合成をする人型の生き物を「人間」だとは、認識していないが、》

《だからといってMonsterとは違う存在だ。》

《何より、ローズマリー様は私たちを食糧とは見ていないのは、明らかです。》

《職務上守るべき相手であるので、守ってはいるが、正直に言えば鬼の脅威よりも、人間の脅威の方が強いとしか思えない。》

《あんな子供を殺すのに躍起になる、日本の傭兵の方がよほどMonsterなのでは?。》

《イーサン軍医に聞いたところ、私たちの増員理由は、外交ナンバーの

ついた車を攻撃したからとか。》

《ローズマリー様が人間ではないとはいえ、この時点ではローズマリー様が、人間に脅威をもたらす存在ではないのは明らか。》

《国際条約一つ理解できていない武装組織の方が怖い》

《今は大使の御息女という身分があるから、哀れむ程の人ではないが：ただ【人ではない】という理由だけで、常に闇討ちの危険を抱える生活は異常だ。》

《食べ物が変わうだけで、何をそこまで躍起になるのか？》

そして、最後は口を揃えて同じ言葉を紡ぐ。

『これではどちらがMonsterなのか、分からない。』

そう、新たに派遣された【要人警護で追加された日本派遣組】の知っている【鬼】はローズマリー特命連絡員だけなのだ。彼らの知っている鬼とは、

【主に日光を浴びてエネルギーを補給し、日光が出ない時期は、土やミズを（普通の食品も含むが）補助食品として食べ、肉類が食べられない存在】だ。

だから、鬼殺隊が躍起になって憎しみを向けて、鬼を殺しにかかるのか理解できない。

そして、ローズマリー・ベネットという例外がいるとすれば、

《カニバリズムの歴史は長い、人間が人間を喰べる行為事態は、古今東西ありふれた話だ。》

《鬼殺隊と呼ばれる傭兵は、憎しみが強いあまりに、気づかなかつたのではないか？》

《鬼と一口に言っても、人間だって【肉を好む人】もいれば、【ベジタリアン】もいる。》

《一部の【人喰い鬼】のせいで、ローズマリー様のような存在が、人間と話し合おうにも取り合って貰えず、殺されたから【ベジタリアンな鬼】が【人喰い鬼】に成らずを得なかつたのでは？》

《そうになると、鬼による被害者とやらを量産しているのは、鬼殺隊の責任では？》

あちらから見た鬼は、

【喜怒哀楽があり、危機感もしっかりしていて、策略を練るくらい知能が高い生き物】

しかも、「鬼」が「元人間」とも知らされているならば、そう考察するのも当然の流れだった。

鬼殺隊が起こした不祥事の内容が内容だったのもあり、あちらの間から見れば、被害者は寧ろ鬼の方だった。

プツン

「あつ、終わったわ」

「南無…」

「なんとなくだが…嫌な予感がするな」

「同感ダア、宇髓」

「あまり良く思われていないのは確実ですね」

「連中の目は軽蔑だった。」

「（俺は柱じゃないから）どうでもいい」

「とりあえず翻訳文を見てからにしたら？」

甘露寺蜜璃、悲鳴嶼行冥、宇髓天元、不死川実弥、胡蝶しのぶ、伊黒小芭内、富岡義勇、時透無一郎は各々の感想を言い合っていた。

「さて…全ての映像を見終わった君たちなら理解できたでしょう？米国がローズマリー特命連絡員に対して、何も思わない理由が。」

「鬼に対する価値観が…全く違う…！」

「アレを鬼の基準にされるとは…！」

「間違っではないけど…当たってもいないわ」

「南無…ああ、本物を知らずに鬼討伐など…なんと哀れな。」

「アイツらの顔…むかついた」

「（何も知らずに）お気楽な立場だな」

「今回に関してはお前に同意する。」

「オイイ、さつさと翻訳文だせよオ」

「随分とせっかちですね、はいどうぞ。後はご勝手に」

スナイパーも設置したし、不死川実弥が発狂しようとも、映像が終

わった今は私の管轄ではない。

念のために、今日はローズマリー特命連絡員には外出を自粛してもらおうように要請したし、彼女は賢い。今日は外には出ないだろう。

ガタンガタン

「不死川！落ち着け！」

「キエエー！」

麻醉銃…効くのか？

▽▽▽

「ただいま戻りました」

ああ…やつと家に帰れた。

「おかえりなさい、あなた」

「お父様！お帰りなさい！」

「ただいま、湖雪と、我が家の小さな子雪」

私はね、妻と娘の平穏を守るためになら、
密裏に殺せる立場なんだよ。
君たちも産屋敷一族も秘

第三者から見た我妻善逸

俺が大使館に呼ばれて、ローズマリー様と対談したり、九鬼さんが紹介した帝大の教授が身元保証人となって、雲取山の所有権を俺に移したりしていたのもあり、俺はかなり遅れて柱稽古に入ることになつた。

「あれ？炭治郎たちはアレを受けないのかい？」

機能回復訓練も終わり、ちようど見舞いに来てくれた村田さんに、柱稽古の内容を聞いていたところだった。

「アレとは？」

「あれ？」

「柱稽古の前にする事でもあるのか？」

「知らないのか？鬼殺隊歴3年未満の隊士は階級に関わらず、先に軍人による勉強と訓練を合格しないと、柱稽古に移れない仕組みになつたんだよ。」

「何でまた、そんな面倒な手続きを？」

稽古の時間が減るばかりだ。それに訓練？何をするんだ？
隊士になつた時点で基礎的な技は覚えているはずなのに？

「基礎的な体力がない奴が多いとか、音柱の宇髄様からの苦情があつたのと、公認組織になつたからには教養も必須とか何とかで、とりあえず基礎体力がない鬼殺隊士歴3年未満の隊士を中心に、軍式の訓練と教養を合格した者以外、柱は稽古しないと決まつたんだって。」

「そうなんだ」

間違いない、九鬼さんとローズマリー様、どちらかが言い出した内容だ。

「じゃあ、俺も行ってくるよ」

「おう！頑張れよな！」

▽▽▽

俺と伊之助、ビクビクしながら後ろをついてくる善逸を2人でひっぱりながら、時折怒声が聞こえる森の中を歩いてきたら、

「軍事訓練をしたい？聞いていないのか？竈門炭治郎、我妻善逸、嘴平伊之助の訓練は免除だ。国際条約の基礎さえ合格すれば、宇髄天元の元に行つてよし！と、いう訳で室内に移れ！」

その場で隊士の扱きをしていた軍人さんに言われた言葉だった。

「えー！何ですか！」

1人の倒れている隊士の叫びを浴びたが、すかさず、

「痴れ者！鼻肩しているとでも思っているのか！3人の訓練を免除したのは、この3人は上弦の討伐に貢献しているからだ！文句があるならお前たちも上弦を討伐しろ！」

「こいつらが…!?!」

「あの噂、ホントだったのか?!」

見た事がない顔の隊士だった。最近入ったのか？

「さっさと移動しろ」

「はいー」

俺たちは扱かれて、地面に転がっている隊士を尻目に室内に移動した。

室内には少数の隊士が机で唸って本を読み込んでいた。そして、

「例の3人ですか、はじめまして教師役をしている佐藤と申します。では机に移動してください。」

室内には、黒板の前で座っている、先ほどの軍人とは異なり、最低限の筋肉しかもたない、温和な声をした人がいた。

「では、新しく人が加わったので、もう一度説明します。ここにいる君たちは【傭兵】です。兵士ではありませんが、それに準ずる戦闘員として認知されます。それに相応しい立ち居振る舞いと教養を身につけて頂きます。」

そして俺たちに渡された本の中には、

「外交特権について」と書かれていた。

「年末に米国との合同軍事演習を予定しています。表向きは日本軍と米軍の帝都を舞台とした合同軍事演習ですが、実際は《鬼の存在》を知った米国が鬼が本当に滅びたのかを確認するために作られた嘘です。」

米国の目的は鬼殺隊の実態調査と、あわよくば我が国との戦争。」

「戦争!？」

鬼の存在か確認されたのは、まだいい。鬼殺隊を知りたいのも納得だ。なのに戦争？

「予想通りの反応ですね、ですが突拍子もない内容ではありません。」
俺たち以前の隊士も同じ反応を返したのだろう。何事もなかったかのように話を続けた。

「君たちが尊敬しているお館様こと、産屋敷耀哉伯爵が、他国大使、君達にも分かりやすく説明すると、他国代表の御息女を襲いかかるように指示した証拠を突きつけられました。この教科書に載っている特権が適応される立場でありながら……です。」

他国代表の御息女：間違いない、ローズマリー様だ。

確かに彼女は、禰豆子の前に太陽を克服した鬼だ

確保を望んでもおかしくない立場。でも、こんな特権を認められている相手にも関わらず襲った？もしかしてお館様って、

「馬鹿な華族当主の巻き添えを食らった君たちには同情しますが、理由はどうあれ、この近代国家に置いて【貴族の私兵】は違法です。君たちが処罰されないのは、元凶は馬鹿で愚かな産屋敷一族だからです。とはいえ、だからといって君たちを【無罪放免】にすることは出来ません。どの道、君たちには徴兵が待っています。その時に臣民としての義務を果たして、国に貢献する事が君たちに課せられた処罰です。」

この際はつきりと言い切ります、君たち鬼殺隊士は【無惨を殺す事】を最重要事項としていますが、私たち政府側は【米国の戦争回避】を最重要事項としています。鬼を滅する事は二の次です。」

「無惨を放置することですか？」

鬼舞辻無惨の起こした悪行は知られているはずだ。

なのに鬼舞辻無惨を放置しても構わない？

「もちろん、鬼の元凶は叩きます。しかし仮に討伐出来なかったとしても、米国に誤魔化しができるならば、表向きは「鬼討伐成功」と公表します。そして、鬼殺隊を解散させます。」

「でもよお！それだと鬼は残り続けるんじゃないやねえか？」

伊之助の質問に対し、

「政府の管轄で鬼の討伐は秘密裏に進めます。そもそも一族で討伐しようなど、初めから不可能な話なのです。現に千年に渡り、鬼の元凶を見つけることも、できていないではありませんか。」

確かにそこを突かれるとそうだとしか言えない。

俺が柱集会議で、鬼舞辻を見たとお館様が柱の面々に言った際の追及の激しさを思えば、俺以前では目撃情報さえ無かったはずだ。

「だからこそ……です。早く柱の稽古を受けたくとうずうずしている君たちを止める理由は、君たちが余りにも短気で大局を見れないからです。」

年末に予定している帝都を舞台とした合同軍事演習では、米軍、日本軍、鬼殺隊が入り混じって鬼舞辻無惨を殺します。

特に米軍には、今回の事件もあり、次に鬼殺隊が問題を起こせば、戦争に移られても文句のつけようがありません。

不穏分子を表に出せば、鬼よりも厄介な人間に、この国を焼き尽くされます！君たちの行動で、この国の未来が決まるのです！

鬼を滅したければ……世界の常識を理解し、行動に移せ!!」

外の軍人さんとは違う迫力があつた。

（あの軍人……！静かだが、とんでもなく強い、肌がピリピリするぜえ！）

（怖っ！声は川のせせらぎのようなのに、音はマグマだ。）

俺たちも教科書を開いたが、俺はあることに気づいた。

（これ……九鬼さんに教えてもらった「ローズマリー様との面会における最低限の礼儀作法」と全く同じ中身だ。）

ローズマリー様関連の情報は、特に重点的に教えられていた。

だから、俺は今すぐ試験を受けても、合格できる。

「だけど、この内容は就学経験のない伊之助や善逸には難しいのでは？」

「ムキーン！俺は字は読めねえー!!」

「そうですか、なら口頭での質疑応答に入りましょう」

「難しいよー!」

「君は文字の読み書きはできるのですね？」

「あつ、うん…」

「なら、君が読み聞かせてこの子に教えなさい。教えることで理解が早くなります。」

「え…俺が教師役？」

「こちらとしては、ここで躓いてそちらの言う【最終戦】に間に合わなくとも問題ありませんよ。君は怖がりなのでしよう？好き好んで鬼殺隊に入隊した人なら兎も角、君は事実上の人身売買による被害者でしょう。私たちとしても、君のような戦闘奴隷の存在は隠したいです。」

「どうですか、鬼殺隊を辞めて帝国軍に入隊しませんか？」

「そうすれば、音を聞き分ける君のような特殊能力者を、前線に押し出すほどこちらは愚かでも、人員不足でもありません。」

「後方支援に配置されますよ、君にはぴったりの人事では？」

「お、俺が…戦闘奴隷？」

「善逸は鬼殺隊に志願したわけではないけど、だからといって、【戦闘奴隷】？」

「そうでしょう？借金のカタで刀を学ばされたと調査書にはありましたが、君は孤児、師範である桑島慈悟郎と養子縁組もしていない以上、君たちは他人。本人の志願でもないのに、無理矢理刀を握らせて、嫌がる子供を戦闘員に仕立て上げ、今の立場です。」

「君は、奉公に出ているもおかしくない歳の子供ですが、問答無用で戦闘員にさせられるほどの人ではありません。」

「借金も既に返し終わっています。君は自由です。」

「だからこそ、聞きます。君は本当に今の立場に満足しているのです。」

か？」

「お、俺は……！」

善逸から言葉は出てこなかった。

それを見た佐藤さんは、

「この山は陸軍の所有ですので、軍人の比率が高いです。彼らを見て、君の世界がどれほど狭く、歪であるかを確かめてみなさい。

それを知っても尚、「鬼殺隊を続けたい」と望むなら、それこそが【君が選んだ君の選択】です。臣民としての義務は果たしてもらいます。が、君の人生を振り回すことはしないと、約束をします。」

匂いがとても真剣で真摯だった。

そういえば、九鬼さんも同じようなことを言っていたな。

『君の意志はどこにある？』と。

それからの俺たちは、勉学に励んだ。

「外交特権を持つ者は、基本的には」

「へー、車も建物と同じ括りに入るのか」

「俺はもう理解できたぜ！」

「なら質問していくからな、えっと」

俺は試験には早々に合格判定をもらったが、善逸と伊之助、他の躰いている隊士の補助をするために、ここに残っている。

「炭治郎！教えてほしいところがあるのだが、」

「お袋！教えてくれよ！」

飯炊きもしていたせいか、俺のあだ名はお袋になった。

そんな日常で、善逸は佐藤先生に言われた言葉を受けて、勉学の合間に軍人の所を覗き込んだり、陸軍の軍服を着てみたりしながら過ごし、

無事に、

「我妻善逸さん、嘴平伊之助さん、両名、合格です。」

「やったー！」

「まあ、当然だな！フリー！」

2人も合格した。そして俺たちは、山を降りて宇髓さんの所有地に移動することになった。

一方、俺たちとは入れ違いに、

「覚悟が決まったようですね」

「はい！よろしくお願いします！」

「帝国軍は君を歓迎します。ようこそ、新しい士官候補生、不死川玄弥君」

不死川実弥が玄弥を弟と認めなかった本当の理由

不死川玄弥、不死川実弥の唯一生き残った弟…か。

「私が言っておいてなんですが…本当に、決別の意志を固めたのですか？兄弟喧嘩に巻き込む気なら、鬼殺隊に残ってもらいますよ。」
ここに至るまでの話は少しだけ遡る。

▽▽▽

不死川玄弥 side

ドカーン

ピュン

いつものように、いや…柱稽古が始まってからは、更に時間を割いて俺が唯一できる銃射撃の練習をしていた。そこに、

パチパチ

「お見事です。」

「お前は？」

作りが良い背広を着た異人の血が混じったような見た目をした男が、立っていた。射撃に集中していたとはいえ、背後を取られるなんて…！こんなドジだから俺は兄貴に認められないのか…。

「不死川玄弥、不死川実弥の弟さんですね、会いたかったですよ。私の名は九鬼大和、外務省職員であり…警察官…特高です。」

「特高？」

警察官？確か…特高って、国の治安維持の為に動く組織だったはず。なぜ、鬼殺隊の敷地内に警察が入れているんだ？

「柱稽古の前に、悲鳴嶼殿から説明がありましたでしょう。」

「ああ、鬼殺隊が国公認の組織になったって…」

他国の要人に襲いかかった元凶がお館様だったからって理由だっ

た気が。

「ええ、ですから私たちのような者が入れるようになった…とはいえ、元々この土地も、国の物ですからね、今までが異常だったのが、正常に戻っただけの話です。さて、そんな些事はさておき、不死川玄弥さん、あなた…呼吸とか呼ばれる基礎ができないとか？」

「それが何だよ、」

特高…憲兵でこの態度なら、こいつはかなりの高官だ。もしかしたら柱と同等の立場なのか？でも、なぜわざわざ俺を？

「こちらとして優先的に求めるのは、呼吸が使える人材ではなく、指示通りに従う人です。」

特に君のような中遠距離専門の狙撃手は、近距離戦専門の隊士よりも希少性が高い。武器はいくらでも作れますからね、刀一筋の恨み辛みで隊士になり、私情で動きかねない味方の方が厄介です。」

「何が言いたい…」

俺だつて鬼を滅する為に鬼殺隊に入隊した。この人が言う「私情で動きかねない味方」と変わらない。

「君の狙撃能力は高い。君としては呼吸が使えないことに劣等感を抱いているようですが、我々のような公僕から見れば、寿命を縮める呼吸よりも、これからの戦争に使える君のような狙撃手の方が何倍も価値がある。」

どうでしょう？上弦戦でも戦況に影響を与えた、その狙撃能力…。国に使うのは如何かな。」

鬼殺の上で呼吸は基礎中の基礎。

だけど、この憲兵は呼吸よりも、俺の狙撃手としての能力の方が上だと言った。

「それで俺に利点はあるのか？」

鬼殺隊が政府によく思われていないこと、それは悲鳴嶼さんから教えられた。俺たちの存在そのものが違法なのだ。

「そうですね…」

にっこりと笑つて…だけど目はどこまでも真剣に俺を貫いていた。「君に給金や、社会的地位などは利点にはならないでしょう。しかし

国に仕える軍人になれば、君を弟だと認めない不死川実弥を、弟だと認めさせることができますよ。」

「…はっ?」

軍人になれば、俺は兄貴に弟だと認められる?

「何でそうなるんだよ」

俺は普段の口調に戻ってしまったが、相手の憲兵は気にすることなく、話を続けた。

「そもそも、君の兄君が君を弟だと認めない理由は、君の言動にあります。鬼殺隊は完全実力主義。出生が代々鬼殺隊に仕える炎柱の家系でさえ、あくまでも実力による登用です。縁故採用などないのです。これには驚きましたよ。」

当たり前前の事をつらつらと話していたが、

「さて…そんな組織において…〔柱の兄がいる呼吸も使えない雑魚隊士〕が、鬼殺隊最強と呼ばれる岩柱の弟子をやっている事実を、側から見れば、どう判断すると思います?」

確かに、俺と悲鳴嶼さんは特異な師弟関係だ。だけど、何でそこに兄貴が出てくるんだ?

「教えますよ…他人から、特に鬼殺隊と縁がない家系から鬼殺隊士になった者からの君への陰口は、

『兄貴が柱なら、岩柱が面倒を見るのは当然』

『実力主義を語っていても、やっぱり身内贔屓はするのか』

『道理で呼吸も技一つも使えない雑魚が、何年も生き残っていたんだな。』

『あいつの功績も、どうせ風柱が援護でもしていたんじゃないのか?』
と、少なく調べただけでもこのくらいは出てきましたよ。」

「…はっ?」

俺はちゃんと最終選抜を突破して、隊士になっている。

悲鳴嶼さんの師弟関係だって、兄貴は関係していない。

「何故?」と言う顔をしていますね。むしろ、こちらとしては、何故そんな簡単なことも分からなかったのですか?

確かに見る人が見れば、君と不死川実弥の血縁関係は明らかです。

しかし、それ以前に、君は組織の人間です。私的に兄君に甘えるなり、謝るなり、それは君たち兄弟の問題です。ですが、それを職場で、ましてや、不特定多数がいる公然の場とする事ではありません。

軍隊で例えるならば、君は「一兵士」そして、兄君は「中将」立場が違いすぎます。そして立場だけでなく、不死川実弥には人事権がある事も、他の一般隊士に「縁故採用」を疑われる理由です。

継子でもない、呼吸を使えない、なのにそこその功績、噂によれば上弦を倒すキツカケを作ったとか？

こんな噂が流れれば、不死川実弥が弟可愛さに、鬼殺隊に入隊させて、1番安全な岩柱の屋敷に居候させていると、思われても何らおかしくない話なのです。

少なくとも、実力で突破して鬼殺隊に入隊し、頼み込んで岩柱に稽古をつけてもらっている…という、事実よりも、よっぽど真実味がありますし、君の調査をし始めた当初は、私もそう思いました。」

つまり…俺が、風柱を兄貴と呼べば呼ぶほど、兄貴の立場は悪くなっていた…と言う事か。だから、兄貴は俺を鬼殺隊から追い出そうとして…!

「鬼殺隊を辞めることは出来ません。俺だって鬼に恨みがあります。でも…」

鬼殺隊を辞めちまえば、この憲兵の言う通り、兄貴が俺を弟として認めてくれる…いや、話を聞くに確実に認めてもらえる。でも、それでも…!

「何か誤解していませんか？」

「へっ…?」

「鬼を殺す戦闘員は1人でも多い方がいい。最終決戦までは、表向きの立場は鬼殺隊士にしておけば問題ない。」

経歴を書き換えれば良いだけの話です。表向きは「鬼殺隊士」。だが、実際の所属は「陸軍の士官候補生」。そうすれば…君は最終決戦に参加できる上、君の入隊に兄君が関わっていないことの証明になる。だって君は最初から「軍人」ですからね。」

「つまり…」

「国公認の経歴詐称です。幸いなことに君は鬼殺隊に関わる前までの、経歴はありませんから、いくらでも誤魔化しが効きます。」

「私たち政府も鬼殺隊の行動は、ある程度把握していましたから【密偵】を送り込んだとすれば、違和感はなくなります。」

「年齢もローズマリ―特命連絡員のようには、特例措置も珍しいですが、ないわけでもない。子どもの密偵も歴史を考えれば可笑しい話でもない。」

「さて…では、こちらが君に出せる最低限の利点は【風柱の職権濫用疑惑の払拭】と、【風柱に弟と認めさせるだけの経歴】です。」

「どうしますか?」

「正直に言えば…かなり俺に優位すぎる条件だ。」

「俺は親なしのただの傭兵、相手は憲兵で、政府代表…。」

「あの…なぜ俺を勧誘したのですか?俺は…呼吸も使えなければ…大した地位にもついていないのに…。」

「これが兄貴だったなら、納得できた。柱は一騎当千の戦力だ。俺には強みもなければ、唯一持っているのは【風柱の弟】だけで、それも兄貴に認められていないから、意味もないのに…。」

「君の、いいえ、名前を言います。不死川玄弥さん…政府代表として、君のその射撃能力は勧誘すべき人材と認識しました。だから勧誘しました。」

「それだけの理由では納得しませんか?」

「俺の…射撃能力…!」

「俺が認められた…!今までは【呼吸も使えない雑魚隊士】【風柱のお荷物】【半端鬼】なんて言われていたのに…!」

「この山は陸軍の所有。君が軍人になるか、ならないかは、玄弥くんのお意思決定に任せます。ですが…もし、こちら側に加担する決断があったら…鬼殺隊士に睨まれる事と、兄君との決別も覚悟してください。」

「兄貴との決別?」

「鬼殺隊士に睨まれる事は分かる、だって軍人になると俺はもれなく

【国が派遣した密偵】だ。でも、それが兄貴との決別?」

「風柱に弟と認めさせる事はできます。しかし、それは同時に兄君と

敵対関係になる事です。不死川実弥は、最終決戦に外部者が入ることに反対している、反対派の筆頭です。君がこちらにすれば、もれなく君は「外部者」になります。今よりもひどい扱いを受ける可能性も高いです。これが…政府に加担する事への欠点です。」

「…」

今よりもひどい扱いを受ける…。

「考えさせてください」

「勿論です。大いに悩んで決めてください」

ここで会話は終わり、憲兵は車に乗って去っていった。

でも、この人が信頼できる相手だと確信できた。

利点だけ言って終わらせる事もできた、なのに、あの人は政府側になる事への欠点も、ちゃんと説明してくれた。

軍の山…

「あ、あの…！軍の階級を教えてください！」

「ああ…？構わないが？」

俺は知らないといけない、兄貴を苦しめた理由を、

▽▽▽

「陸軍の階級は下から、二等兵、一等兵、上等兵、主に【兵士】と呼ばれる階級だな。そして次は伍長、軍曹、曹長、【下士官】と呼ばれる階級だ。一般家庭出身者は、よくて准尉が1番上と言った感じだな。少尉から上は所謂、エリートと呼ばれる奴らだ。基本的に裕福な家柄のボンボンが多いな。後の階級は、中尉、大尉、少佐、中佐、大佐、少将、中将、大将だな。ちなみに俺は少尉な！」

「俺は准尉だが、近々少尉に上がる予定だ。それは今回の鬼騒動が終わってからと聞いている。」

俺が話しかけた2人は、良いとこの次男、三男だそうだ。家を継げ

ないから軍に入ったと言っていたけど、家族を守るといふ確固たる意志があった。

「あの、鬼殺隊の柱は、政府代表の人は【中将】と言っていましたけど、仮にですよ…？その中将の弟が…職場で、中将を兄貴と呼ぶのはどうなるのですか？」

「はっ？駄目に決まっているだろ？」

「実の弟でも？」

「当然だ、むしろ実の弟の方が厄介だろ」

「中将の上は、鬼殺隊のお館様とか呼ばれる華族だろ？事実上の大将じゃないか、職場で公然と呼ぶなんて、その弟は馬鹿としか思えないな。」

この2人は、俺が風柱の弟だと知らない。なのに、例え話で、口調が変わった。

「どこの馬鹿なんだ？佐藤教官に伝えよう」

「規律を乱す馬鹿を戦場に出せば、足を引っ張るからな。」

「教えてくれ、不死川玄弥」

言えそうにない…だけど、どの道俺の発言は近々ばれる。なら、

「俺です…」

それから俺は、なぜ鬼殺隊に入隊したのか、兄との確執、謝罪の気持ちを持ちを偽りなく話した。

「理由はわかった…だがなあ」

「よりにもよって…職場でするなよ」

「うん、君は」

「正直者の馬鹿だな」

「気持ちは理解できるが、やり方が駄目だ。」

「立場を弁えろ、相手は【指揮官】で、人事権を持っているんだ。九鬼警視の仰るとおり、縁故採用が真っ先に出てくる。」

「軍ならおかしくないが、貴族の私兵で超実力主義の集団で、身内の指揮官を公然と言いきり、初期は華族のお嬢様に暴力を振るったあ？」

「お前…よく生き残れたな」

「少なくとも、国公認となった以上、これまで通りに振る舞ったら、不

穏分子として、殺されても仕方ないぞ」

そこから始まった怒涛の、俺が起こした軽率な行動の批判と、身内の権威を振り回したという事実への指摘。

「不死川実弥って、評価が悪かったけど、お前のような弟がいるなら、さぞかし疲労が溜まったんだろうな」

「異常者だと言われていたが、お前の軽率な行動への対処を考えれば、弟と認められないのは当然だ。」

「絶縁宣言されなかっただけ、随分と優しい人だ。」

耳が痛い、実際に俺の発言で、兄貴の評価が落ちたのは事実。ちゃんと受け入れないと。

「話を切り替えるぞ、お前は《兄貴に謝りたい》から鬼殺隊に入った。だが、お前の発言や行動からすれば、当の兄貴はお前が鬼殺隊に入隊している事実は、ともかく、仕事の邪魔になる弟を立場上、認めるわけにはいかない。」

「はい…何度も、《才能がない》《鬼殺隊を辞めろ》と…」

「立場上、認められないが、鬼殺隊を辞めればお前を弟と認める事ができるわけだ。」

少尉が手を顎に乗せて考えていた所を、准尉は、

「不死川玄弥…お前は何を優先させたい？」

「何を？ですか…」

俺の優先、兄貴に謝り、鬼を殲滅させること…

「【兄上に謝りたい】なら、軍に移籍した方が早い。最初から軍人になって終えば、立場は事実上対等だからな。九鬼警視が持ち込んだ取引内容なら、士官候補生はエリートだ。将来が約束されているし、鬼殺隊所属ではないから、弟と認められる。」

だが、【鬼を殲滅する】のを優先とするなら、鬼殺隊にこのまま所属した方がいい。どの道、武器の支給をする事は決定している。我々は皇軍ゆえに、縛りも多い。その点、鬼殺隊はギリギリ私兵だ。違法だが、その分縛りもなく動ける。」

兄貴に謝りたい、鬼を殲滅したい、どちらも俺の本心だ。だけど、俺が鬼殺隊を求めた理由は？散々、「才能がない」と言われても鬼殺隊に

拘った理由は？

「……兄貴」

俺は…兄貴に謝りたい。そして…

「俺は…兄貴の弟だ。」

決めた…。俺が、俺の為に選んだ道だ。

▽▽▽

「覚悟が決まったようですね」

先に山にいる佐藤教官に伝えた。

その数日後の事だった。この人が再び現れたのは、

「はい！よろしくお願いします！」

「帝国軍は君を歓迎します。ようこそ、新しい士官候補生、不死川玄弥君。では早速ですが、制服の採寸でもしましょうか、車に乗りなさい」

「いいのか！」

「言葉遣いも矯正が必要か…まあ、今回は見逃します。陸軍省へ」

「はい」

ブルル

大人の世界

アメリカ大使館

『Blue Rose?』

『はい、ローズマリー様が、1番信頼している司祭、ウィリアム神父と面会した日に、自室で小さな声で呟いた言葉です。』

日本との合同軍事演習の表向き理由をまとめて、帝国議会と矛盾が生じないように予定を合わせた日

ローズマリー特命連絡員の通訳の1人、リアム・オニツカが、かつてローズマリーが大使の娘になる前に掘り、大使館が秘密裏に繋げた地下通路を使い、初めて大使館に侵入した。(許可は下りています)

なぜ、正規法で入らないかって?理由は、

『ローズマリーの侵入経路を、塞がずに秘密裏に繋げたのは正解だったな…』

『教会の井戸から、大使館に侵入できるなど、日本人が知る由はありません。密会には最適なルートですね。』

日本側に悟られないようにする為だ。

『それはさておき…間違いないのだな?』

『はい、確かにローズマリー様は【青い薔薇】と呟きました。それはそうと、なぜわざわざ私を御息女に付けたのですか?仮にも娘、日本への帰属意識もなく、聞けば答えてくれるはずでは?』

リアム氏は、護衛兼通訳という名目があり、常にローズマリーと行動を共にしている。故に彼女が日本を庇う理由がない事を1番知っている。

『ああ、大体の事は真摯に答えてくれるし、基本的に従順だ。』

『では、何故?従順で穏やかな人ですし、その姿が嘘ではないと、誰が見ても分かります。』

日本への帰属意識もない、ターゲットは従順で演技は短時間しか出さない。それを身をもって知っているリアム氏からすれば、密会はまだしも、密会の主な理由が【ローズマリーの情報】だというのは不可解だった。

『ローズマリーは従順だ。だが…何一つ隠し事がない…という訳ではない。』

大使の発言はいつになく、重い言葉だった。

だが、リアム氏はそれに、

『確かに元は他人、何一つ秘密がない方が異常です。しかし、それを踏まえてみても、彼女が最重要しているのは、我が国の国益です。彼女に監視を付けるよりも、キサツタイシと呼ばれる日本人にターゲットを変更すべきでは？』

表情一つ変えずに返答した。

そもそもリアム・オニツカの所属上、潜入捜査も珍しくない部署だ。早ければ2歳で嘘をつく人間、という生き物の本質を知っている。

嘘をつかない人の方が、よっぽど異常であるという認識だ。

だからこそ、大した嘘をつかない子どもの情報に、執着する大使の心情が理解できない。

『君はローズマリーを甘く見ているな。私が監視を命じる理由はそういう所だ。』

一般論で考えれば、いくら人ではないとはいえ、大した実力もない子どもに諜報員をつけて、四六時中監視させる大使の方が効率が悪い。

ターゲットを現地の戦闘員に変更したがるリアム氏の意見は正論だ。

だが、大使は「娘」としての顔を知っているからこそ、違和感に気づいた。

『ローズマリーは人ではない。そして…不老不死者だ。イーサン軍医の定期診断結果では、日光浴時間が短くなって、健康に陰りが見えているとあるが…、言い方を変えれば、「日光がある内は戦い続けられる」と言うことだ。

戦争は何も前線で完結する物ではない。後方支援があればこそ、戦争継続ができる。

どんな危険地帯でも、物資を配給できる存在の重さは、君のような者ならば理解しているはずだ。

それなのに：君はローズマリーを従順で穏やか、監視を外すべきと言う。その印象を、特例大使館に派遣された諜報員が皆思っている。……あの映像を見せた時、君たちの抱いた【恐怖】【生物としての本能】は何処にいったのですか？』

ローズマリーに関わる人には、ある共通点がある。

今でこそ、【ただの子供】として友好的に接しているアメリカの面々も、当初は【日本生まれの未知なモンスター】として接していた。

が：、本人は時間があれば太陽を浴びに外でのびのびと過ごし、【特命連絡員】としての仕事は、鬼の活動が活発になる夜中にやっていた。

自然と、アメリカから派遣された諜報員が見るローズマリーは、

【日光浴で1日の大半を使い切り、医師の指示に従い、護衛にも敬意を表す礼儀正しい子ども】になった。

厄介なのは、本人は1つも意図してやっていない事だ。

仕事を夜中にするのは、書類を整理するのは静かな方が効率がいいから。

護衛に敬意を表すのは、普通に大人で尊敬に値する人たちだから。諜報員は嘘を見抜くのは得意だ。

だが、言い方を変えれば、嘘でも誤魔化しでもない本心を、嘘だと認められない。だって、嘘を見抜く教育をされているから。

ローズマリーの言葉を否定する事は、自分の勘を否定する事と道理だから、誰も彼もが、ローズマリーを無害な生き物だと認識した。

『あの子は、自分を弱く、無害に見せる事が上手い。現に君のような諜報員すらも騙せている。あの子は水と太陽があれば、永遠に生きられるのだ。』

弱い訳がないだろう。

それを踏まえての質問だ。諜報に最も重要な要素は何だと思う？』

特例大使館で、仮初とはいえ、平和な日常を謳歌しているローズマリーに、一月近く付き合っていたせいで、リアム氏は忘れていた。

『……いかに：自分を弱く見せるか……です……』

（大使の言う通りだ……！私はいつの間に、こんな基本を忘れるほど腑抜けたのか……！）

『そうです。ローズマリーは【従順で穏やかな性格】：間違つてはいない。だけど：それだけの性格ではないのも確か。』

『あの空間は、妙に優しく：穏やかでした…。仮にも敵地になりかねない領土で。』

（そう：あの空間からローズマリー様は、基本離れない。たまの来客もあるが、相手は日本軍の士官や、【オニ】に友好的なタンジローと呼ばれる少年。その少年とは少しの駆け引きはあったが：所詮、子供通しのもの、国元にいる時のような、命をかけた取引でもない。）

『刺激がなければ、腑抜けるのも仕方ありません。如何に経験豊富な諜報員と言えども、人間。』

私はローズマリーの義父という立場と、養子縁組は契約だと割り切れているからこそ、ローズマリーを【娘】ではなく、【不老不死者】として見れるのです。気にやむ時間があるなら、もっと時間をかけて、ローズマリーの発言、Blue Roseの意味を調べなさい。』

『はっ！しかし、青い薔薇など見つかるとは思えません？』

『見つける必要はありません。司祭にあった後ならば、比喩表現です。ですが：、こちらもキブツジムザンに巻き餌をばら撒きましよう。』

ニヤリと笑った顔に、リアム氏は

（大掛かりな餌になりそうだ。）

と、身震いしていた。

『そういえば：本国から新しいブラックライトの試作品が届きました。ローズマリーに試させなさい。あの子なら健康になる可能性があります。』

机から取り出したのは、警棒のような大きさの機械だった。

『以前、ローズマリーに渡した試作機は【重い】【持続時間が少ない】【電池の充電率が悪い】と酷評だったからな。以前よりは大型化してしまつたが、電池の開発にも進展があり、電池の小型化、充電率の増加がある。その分継続時間や、光量も高い。また、使用時の感想を報告するように通達を。』

『確かに承りました。』

▽▽▽

『ローズマリー様、本国から郵便で届きました、新しいブラックライトの試作機です。お試しを』

『ええ、それにしても届くのも早いですね。』

ブン

『以前の物より重いけど、剣士になれる人たちなら持つても問題なさそうです。電池の継続時間を測りたいので、私の部屋は全てブラックライトに変更を』

『はい、ローズマリーお嬢様』

(そういえば、夜目がきく生き物だったな……。敵に回ったら厄介だ)

同じ頃、日本政府では、

「総理！米国大使館からです！」

「何だ？」

(このような時間帯で電報だと?)

「読み上げます、《合同軍事演習の始まりの合図は、【不可能】の花言葉を持つ【青い薔薇】を手渡した時とする。届け人は現在、米国大使館に拘留されている【襲撃事件の犯人】《です。》」

「青い薔薇を届けるとは、随分と雅な宣戦布告だな」

(だが…)

「届け人に対する悪意が…」

「届け人をもう一度利用して、戦争をするつもりでは？」

「これが本場の皮肉という物なのか」

総理以外の面々は、届け人をわざわざ【犯罪者】にする事で、『全く許していないけど?』という本音がダダ漏れな事への不満が、ぽつぽつと出ていた。

だが、仮にも議員、わかっているのだ。

自分達の臣民がやらかした不祥事の重さを。

だから、誰も抗議の言葉を出さなかった。

「仕方あるまい…抗議をだせば、常識知らずと馬鹿にされるのは我が国。その届け人は確保次第、特高に移送せよ。」

そして、都市の機能を維持する為に用意した、発電所の移送は完了したのか、郵政大臣郵政省は電気通信、電波・放送に関する行政を行っていた。?’」

「もちろんです。大型の発電所の設置はできませんでしたが、災害対策も兼ねて、小型化した発電所を各都市の外れに設置しました。」

また、化石燃料だけでなく、自然大国の我が国の長所を生かした実験発電所も設置しました。今回の実験でうまく発電可能であると証明されれば、全国展開も視野に入れています。」

「うむ…我が国の資源のほとんどは輸入品だ。今回は演習でも、万が一があれば、真っ先に止められる。自国で発電できるならば、そちらに移行も考慮せねばな。」

「外務省です。では、こちらの者から大使への返答を返します。」

「よろしく頼むぞ」

(それにしても…、なぜ青い薔薇?)

一方、その頃、

「竈門禰豆子はまだ見つからぬのか!」

ここは無限城、無惨と上弦の壱、弐、参、新上弦の鳴女、猱岳は力を付ける為に欠席だが、生き残った上弦が集結していた。

「申し訳ありません…無惨様」

「いやー!俺の信者にも探させていますが、見つかりませぬ無惨様!」
「…申し訳ありません、無惨様」

「鳴女は、鬼殺隊本拠地を探らせているから、まだ良い。だが、お前たちは何をしている?特に猱窩座!青い彼岸花の搜索命令をだして何百年になった!竈門禰豆子が見つからぬのなら、青い彼岸花の搜索くらい進展があっても良さそうだが!猱窩座!猱窩座!」

ピシッ

「ゴホッ…もうしわけ…ゴホッ」

「恐れながら無惨様、ここで猱窩座ほどの実力者を消すのは、不手かと…」

「お前もだ黒死牟!上弦の壱の称号に相応しい働きを、この数年しておらぬ!信者を使い、資金提供をしている童磨の方が功績が高いぞ!」

「やったー!嬉しいです!無惨様」

「面目次第ありません…」

顔だけ喜びを表した童磨と、眉を顰めている黒死牟は対照的だ。

「童磨、お前にも言いたい事があるぞ。」

「はいはい、無惨様、何なりと」

「上弦の中で唯一、人間を利用する立場であり、最も竈門禰豆子に近づける立場なのは、お前だ童磨。なのに何故見つからない。他の鬼はまだしも、お前まで報告なしとはどういう事だ!」

童磨の実力を知っているからこそその言葉だった。

私情で【嫌い】なのもあるが。

「そこは申し訳なく思っています。相手は仮にも産屋敷ですよ。千年かけて鬼殺隊を隠し通せる一族が、本気で鬼を隠したら見つめるのが、難儀になるのも当然では？」

童磨には感情がない。だからこそ、他の鬼と異なり、無惨に口答えできるのだ。童磨の厄介な所は、実力があり如何に無惨と言えども、下弦のように簡単に処分できない立場、相手の怒りボルテージのギリを見抜き、殺されないラインを超えないことだった。

本人は全く理解していないが、無惨と相性が悪すぎる立場であった。

そして、無惨は猗窩座と異なり、童磨は嫌いである。

「お前には期待しない。黒死牟、猗窩座」

「はっ！」

「しばらくは、食糧庫に保管されている物を中心に喰べよ。猗窩座は青い彼岸花の搜索に集中、黒死牟は産屋敷邸の搜索に集中せよ。」

「はっ!!」

「上弦会議は以上だ。鳴女！」

ベベン

「全く、どいつもこいつも役に立たぬ。久方ぶりに人間界に出て行く、鳴女！」

ベベン

大人の暗躍

炭治郎一向が宇髄天元の修行を受け終わり、甘露寺蜜璃の屋敷に移動していた時期、

無惨は浮かれていた。

千年にも渡る長い時の中で、ようやく現れた【太陽を克服した鬼】の出現。

無論、鬼舞辻無惨の配下、上弦の月、妓夫太郎墮姫兄弟、半天狗、玉壺という戦力の半数を失ったが、それを踏まえても尚、【竈門禰豆子の覚醒】は、無惨にとっては、上弦の半数程度の犠牲を些事だと、言い切れるほどの重大情報だった。

鬼舞辻無惨にとっては、上弦だろうが、そこらの鬼だろうが、自分の目的を果たすために、嫌々作った同族だ。

目的を果たせる目処が立てば、

（上弦の半数を失ったが、竈門禰豆子を喰えば私の目標は果たせる！この時期に死んだのは寧ろ喜ばしい！）

普段の無惨ならば、不変を好み、変化を嫌う。

上弦の月が討伐されたとなれば、生きている上弦に八つ当たりしていただろう。だが、状況は変わった。

元より彼は、太陽を克服するのは自分だけで、他の鬼を生かす気はなかった、切り捨てる気満々である。

そんな訳で、今の無惨にとっては、最重要事項は【竈門禰豆子の確保】並びに、【鬼殺隊の絶滅】だ。

（だが、念のために確認してみるか）

「鳴女、例の店に」

「はい」

ベベン

▽▽▽

おほほ、

ほほほ、

「いや、芸者は会社の接待でよく来るから、飽きてきたと思つたが、君のような端麗な芸者は別格だなあ。」

「まあ、ほほほ、お上手ですこと。」

（この男の会社情報は手に入れたし、用済みだな。油っぽい身体だが、鳴女に渡す分にはいいだろう。）

そんな事を考えながら、表向きは客人をよいしょしていた時、

「そういえば：そろそろ米国の戦艦がやってくるなあ」

「戦艦？ですか？」

（戦争するなど聞いていないが？）

「知り合いの軍人に聞いたところ、最近の我が国は戦争で負け知らず、だからか、軍人の質が下がっている事があり、それを問題視した上層部が、米国に依頼したそうだ。」

『侵略される恐怖を戦争を知らない世代に味わせたい』とな。

米国側から見ても、演習だが負け知らずの帝国軍の観察ができる。お互いの利害が一致したことから、帝都を侵略する演習を年末に予定しているそうだ。」

「まあ、随分と大きな影響を受けそうですね。」

舞妓の1人がそう言った。

「ああ、そうだ。演習とはいえ、戦艦派遣をし、陸上上陸を予定しているそうだから、私たちのような一般人は、年末は帝都中心には入れないようになっている。病院も別で作り、そこに移転する予定だそうだ。」

「そんな事をなさっては国の経済にも打撃がくるのでは？」

（帝都の人口だけで何万人いると思っっているのだ？国の中枢をガラ空きにするなど考えられない。）

「知り合いの官僚の話によると、帝都に政治・経済・文化を集結させた

ことによる、地域格差の問題が上がってきていたそうさ。

今回の軍事演習を理由に、経済と文化を他地域に分散させる計画があるようだ。今回はその件の練習台にする目的も含まれているからこそ、軍事演習に積極的だと聞いた。

まあ：言われてみれば、帝都に全てを集中させてしまえば、いざ戦争になった時に、敵軍に潰されたら、詰みだからな。」

「そのような理由もありましたの…」

（軍事演習…資産家の家庭を先に潰したのかは、正解だった…。拠点の変更で家族遊びに時間をかけられるほど、私も暇ではない。）

「それでは、私はここで…」

「ああ、そう言えば、君が欲しいと言っていた

【青い彼岸花】とは異なるが、【青い薔薇】を米国が持ち込むそうさぞ。」

「青い…薔薇」

（薔薇に青は存在しなかったはず…作れないからこそ、花言葉は【不可能】だが。）

「気になりますわ、もう少しこちらに座っていても？」

「勿論だ。」

「それで…【青い薔薇】とは？」

（もしや、彼岸花は比喻表現だったのでは？）

「これまでは、薔薇に青は存在せず、これほど科学が発達した時代になっても、人工的に青い薔薇を作ることとは出来なかった。

だが、米国で発見されたそうさ。

演習とはいえ、米国の名目は侵略戦争。【不可能】の花言葉を持つ【青い薔薇】を日本側に送りつけ、【絶対に勝つ】という雅な宣戦布告をするそうさ。それが軍事演習の始まりの合図になると聞いた。」

「まあ、その青い薔薇是非とも見たいですわ。」

（可能性がある以上、帝国議会に送られる前に手に入れたい。）

「演習が終わった後なら見れるだろうが、演習前に見るのは無理だと思うぞ。米国が青い薔薇を発見してから日が浅く、栽培までの試行錯誤の時期だ。貴重な薔薇を送る事は外交面での対応だ。一般人の見せ物ではないからな。」

「そうですか…残念です。」

(帝国議會?それとも軍部か?送り先に鬼を配置するべきか?だが、国に鬼の存在を公表してまで、手に入れる価値があるのか?)

無惨は保身の面では一流である。

【青い薔薇】と【国を敵に回す】を天秤に掛けた結果、国を敵に回してまで、青い薔薇を手に入れる必要性はないと考えた。

「ささ、もう一杯いかが?」

「もらおう」

(やはり、確実な竈門禰豆子に絞ろう。軍事演習が終わった後に青い薔薇を手に入れるとするか。もっともその時の私は、太陽を克服しているだろうか)

「では、私はここで失礼しますわ。」

「ああ!また…グサ…な?」

「ギャ…きやー!お客様!お前!何を…!」

「五月蠅い…貴様らはもう必要ない。だが、【青い薔薇】の情報提供は大義であった。」

▽▽▽

無惨が自分の偽りの姿を知る者を殺戮していた

一方、警察庁では、

「やはり、あの武器商人は行方不明になりましたか。」

九鬼警視は書類を片手に、報告を聞いていた。

「米国がわざわざ【青い薔薇】を送ると明言していたので、妙だとは思っていましたが、九鬼警視の仰る通り、標的を絞る為の罠だったようです。」

「相手は保身第一の男だ。確実な餌竈門禰豆子を発見した以上、人間社会に溶け込む時間は必要ない。」

「【不定期にやってくる美人な芸妓】を調べ上げるのは、簡単でしたが、これで最早、例の最終決戦以外では見つかりませんね。鬼殺隊に頑張ってもらいますか。」

「資産家一族皆殺し事件、そして今回の事件、鬼舞辻無惨はこちらの予想通り、利用している人間の切り捨てに掛かっています。」

「どうするおつもりですか？」

「何一つ問題ない。鬼舞辻に情報を提供させていたのは、共産主義者に秘密裏に援助している不穏分子だ。あの男ならば、一族郎党殺しにかかる。精々、こちらの仕事を肩代わりしてもらおう。」

「淡々と鬼の頭領を利用して、仕事を減らしている上司に、部下は、(何と効率良く、人道を外すのか)。万一敵だと思おうと身震いする」

「それと…ああ、そうだった。この手紙を添えて、琵琶の花をウイリアム司祭に渡しなさい。ローズマリー特命連絡員が、中々会えない教会の人に健康だと伝えたいと言っていたからな。」

「はい、明日にでも渡してきます。」

バタン

「明日にでも炭治郎君に聞いてみるか、【青い薔薇】についてを。」

(日本で採れるとしたら、あの山しかない)

▽▽▽

一方その頃、アメリカ大使館はというと、

『ローズマリーの体調悪化?』

前回の密会とは異なり、今回は正規ルートで入場したイーサン軍医

が、娘であり、大統領が直接任命した特命連絡員の父親、ハリス・ベネット大使に、定期健康診断の報告をしていた。

『はい、大使。ローズマリーお嬢様は日照時間が少なくなる程、栄養失調に似た症状が出ております。』

『食事で補充できないのか？土もよく食べていたぞ？』

彼の知っているローズマリーとは、夏の時期で止まっていた。

『補助にはなっております。しかし…どれほど摂取させても、あくまでも補助食品です。主食にはなり得ないとしか…』

『これから冬がくるのだぞ。合同軍事演習の時期は年末だ。近々やってくる、名目しか知らない軍人たちとの面会ができなくなってしまう。』

『そうだ…！ブラックライトの効果はどうだ？』

『補助食品や土を食べさせるよりかはマシですが、やはり本物の太陽光に比べると、弱々しく、上手く光合成ができていたとはいえませんが。』

『やはり、出力は太陽レベルまで上げないと駄目か。』

『ウラン？でしたっけ？それを使った爆弾を投下する計画はどうなったのですか？』

『初期はそれを投下する計画があったが…、威力が強すぎるそう。』

現在の予想調査だと、一発で一つの都市を壊滅させるほどの威力…。とても、戦争状態でもない、表向きは友好国の首都に落とせるものではない。』

『手榴弾程度の範囲だったら、キブツジに投げる手もありましたが…、そこまでの威力…ですか。不可能ですね。』

医師は医師でもイーサン・クラークは軍医。戦争における武器の質が戦況に与える影響も知っている。

『場所が問題だ。人がいない、もしくは退去させられる土地だったら、誘き寄せる手もあるが…』

『今回の真の目的を知る者は、ほんの一握り。ほとんどの軍人は、日本軍との合同軍事演習しか知りません。それは日本側も同じこと。』

キシツタイシのみの犠牲者なら兎も角、日本の軍人に死者が出れ

ば、それこそ、外交問題です。』

軍事演習で怪我することはまだしも、演習でどちらにしろ、軍人の死者が出て終えば、民衆相手に表沙汰になってしまう。

少なくとも、鬼が滅びる証拠がない内に、戦争に発展すると困るのが、アメリカの本音である。

『今は、ローズマリーの事件があり、こちら側が有利だが、【鬼の軍人】が日本側にいる可能性がある内に、日本側が優勢になられると困る。』
『同意します。』

『はあ…とりあえず、ウラン爆弾の投下はしない。だが、持ち込む可能性はある。そうなると、やはり場所は…ここだな。』

【南鳥島】

『一応、行政の扱いはTOKYOの村ですね。』

『ああ…民間人の立ち入りが禁じられている上、位置は東京から1800Kmも離れている。そして、日の出が日本一早いという話だ。仮に開発中の爆弾を投下したとしても、苦情はくるが、わざわざ外交問題にするほど騒ぎ立てるとは思えない。外交問題にするつもりなら、こちら側も切り札を出す』

南鳥島は現在でも、観光客の受け入れをしておらず、海上自衛隊、気象庁、関東地方整備局の人員が常駐している。

そして、アメリカが使える切り札は1つ。

『ローズマリーお嬢様を殺すのですね。』

『冷静ですね、仮にも医師、反対すると思っただけですか？』

『大使…私は軍医ですよ。死が必ずしも絶望ではないことを、散々…思い知らされました。お嬢様の望みが【消滅】であることくらい、これまでの行いを見れば、嫌でも理解してしまいます。』

『ローズマリーに限らず、《オニと呼ばれる生き物は、本来ならば死人です。全てキブツジムの操り人形》…と、ローズマリーは最初に話した。オニとなった時点で、人間としての生は終わっている。だから、何百年と生きることが出来る。……本来あるべき形に戻すだけです。』

と、ハリス大使は言っているが、顔は分かりやすく歪んでいた。

『最初は大使の事を【情がない人】と思っていきましたが、少なからず思っているのですね。承知しました。なるべく長く保てるように延命処置をします』

利用するだけ利用して、最後は【特命連絡員が日本人に殺された】という情報を流して、戦争をする気だったら、さっさと病死にする予定だったが、親子ほどではなくとも、少なからず【化け物】とは見えないようだ。ギリギリまでの延命措置をしてもローズマリーお嬢様は傷つかないだろう。

『軍医が頼りです、必要なものは何でも要請してください。』

『はい、それでは…失礼します。』

カツカツ

(なんとしても、表向きは健康体に保たねば…)

今からその調子では利用価値が無くなってしまふ。そうなれば、国がローズマリーを守る意味がなくなる。【アメリカに輸送可能】…だからこそ、不老不死者を受け入れたんだ。アメリカまで持たないとなれば、別命令で、護衛に殺されてしまふ。)

ハリス・ベネット大使はローズマリーを娘としては見ていない。

だが、情がないわけではないのだ。

少なくとも、奪われて当然の命とは思ってはいない。

だからこそ、

.....

ローズマリー・ベネットの健康状態は、夏に比べれば低下があれど、良好。

合同軍事演習が終わり次第、帰国を要請します。

.....

(「キブツジムザンを殺せば、全ての鬼が死ぬ法則」は、誰も知らない。それにこれは全てが嘘ではないからな。自分が裁かれる道理はない) 『通信室にこれを渡してくれ』

『はい、大使』

(それとなく噂を流すか…)

優しい言葉には裏がある

《体調が悪そうね、ローズマリー》

『ええ、日光が出ている時間が減っているからですかね?』

特例大使館にある中庭、私は光合成をすること、鬼殺隊の内部情報を教えてもらう為に桜の木に寄りかかる。

《ローズマリーが気にかけていた3人は、宇髄天元の稽古を終えて、今は……時透無一郎の稽古ね。》

『時透無一郎……か。』

確か……もはや薄らとした記憶になってしまったけど、時透無一郎の稽古はあっさりと合格をもらっていたはずだ。そもそも柱稽古の順番はどうだったっけ?後半戦だったような気はするけど……?

《そういうえば昔、私がまだ自由に動き回っていた時期、ソメイヨシノさんは言いましたよね、「鬼殺隊に関しては私たちも不満があったからね。」と。あの時は協力を得られるなら細かいことは気にしていませんでしたが、鬼殺隊のどこに不満があるのですか?》

桜……主にソメイヨシノと呼ばれる品種は歴史が浅い、確か江戸時代中期から末期にかけて作られて、明治に普及した桜の品種。とはいえ付喪神がついているから、100年以上生きているのは確実な品種だけ。

末端とはいえ、神は神。鬼殺隊に所属する隊員や隠は高潔な人が多い。炭治郎や、嫌々言いながらも大切な人を守る善逸、記憶にはほぼない母親の為に、童磨と戦った伊之助とか、基本的に非の打ち所がないと思えないけど。

《私の品種の歴史自体は浅い、でも桜である以上、他の桜それぞれ数千年生きた桜とも話し合えるの。だから知っている……鬼殺隊のいえ、産屋敷の業というものを。》

あの鬼舞辻に「蛇のような」と言わしめた一族の当主だ。

下手したら鬼舞辻と同じくらいの業を背負っていてもおかしくはない。

それに時透無一郎……なーんか、入隊の話が余りにも出来すぎている。

んだよなあ。

《これは…私の魂に刻まれた記憶ですけど、時透無一郎の兄が鬼に襲われて死んだのは、出来過ぎていると思いました。》

そう、鬼に身内が襲われて死んだ事による復讐目的で、鬼殺隊に入隊する流れは、何一つおかしくない。炭治郎も「妹が鬼になつてしまったから」という特殊事情とはいえ、目的が鬼舞辻への復讐である事には変わりない。でも、時透無一郎は他の鬼殺隊関係者と違う。

大半は、鬼に襲われた後、鬼殺隊をを目指すのに対し、

時透無一郎は、鬼に襲われる前に、産屋敷家の奥方から直々に勧誘されていた。

産屋敷家が鬼殺隊に勧誘する例は、悲鳴嶼行冥、宇髄天元などの例もあるけど、前者は襲われた後、後者は生きるために選んだのであって、産屋敷家が直々に勧誘したか？と言われれば微妙なラインだ。

でも、時透家の双子は違う。

両親が揃って亡くなり、双子の兄弟で平穏な生活をしていた中、突然現れた華族の正室。「先祖がとてつもなく強い剣士だったから」という理由で、14：下手したら13の子どもを私兵として勧誘するという、外部から見れば狂っているとしか言いようがない。

《産屋敷当主には、代々【先見の明】とかいう予知能力を持って、財を築き上げています。そんな人なら、時透兄弟が鬼に襲われる可能性を考えないとは思えない。何か…意図的なものを感じます。》

特に…奥方に友好的で、年相応のヒーロー願望を持っていた双子の弟が生き残り、「先祖は先祖、俺たちは俺たち」という現実主義者で、鬼殺隊の本質を何処となく見抜いていた節がある、双子の兄が死んだ事。

あれほど、警戒していた双子の兄有一郎ならば、鬼よけのお守りや身につけないのは、当然だ。

問題はお守りではない。

問題は、何故産屋敷のお誘いがあるうちに、鬼が出てきたのか？だ。

時透兄弟が住む山は、原作の情報だけで見れば、時透一族の4人しか住んでいない。しかも、両親が亡くなり2人に減った。そして、そ

の2人は食いどころが少ない子ども。

2人が鬼に関する昔話を知らないなら、時透一族が所有する山は、竈門一族が所有する山と異なり、過去に鬼に襲われた人がいないという事だ。

そして、産屋敷一族が持っている資産の一つが、【藤襲山】。

鬼を生捕りにした、死人が出ること前提の試験会場。

《年相応の英雄願望があった双子の弟が…、素人が倒せる程度の鬼が、何故わざわざ人が少ない山に入った？ 確実に餌を食べる為と言われてれば最早真相は闇の中だけど…もし、私が産屋敷ならば…戦力はなるべく多くとりたい。鬼殺隊を拒絶する、逃亡の可能性が高い時透有一郎、唯一生き残った兄に依存気味の時透無一郎、2人に監視をつけます。》

そう…いくら血縁の先祖の血が濃くても、あの時の無一郎は刀を握ったこともない子ども。二ヶ月？で柱に上り詰めた天才とはいえ、そんな都合良く、ほどほどに絶望を与えられる鬼が現れるのか？

確実に隠が監視している中を？

《私には…時透無一郎の鬼殺隊入りは、産屋敷一族が、邪魔者であり、500年前の悲劇の可能性を排除させたようにしか見えないのです。》

千年前の陰陽師？ だったっけ？ の言葉を信じて、本気で血縁の鬼舞辻無惨を殺せば、短命の呪いは治ると信じている一族だ。

しかも、時透兄弟を勧誘した理由が【先祖が強いから】

馬鹿馬鹿しい…それが通用するなら、武田家、武田勝頼の血縁者が今でも無双していなければおかしいだろう。だが、現実ではそんなこととはない。【先祖が強かったけど、子孫が強い理由にはならない】

もちろん、遺伝的な要因がある以上、強い人の血縁は強く生まれやすいのはある。だが、それに500年前の先祖を当て嵌めるのは論外だ。

そんな、【遺伝】に重きを置いている一族なら、確実に過去の間違いを犯すとは思えない。

知っているはずだ。

【月柱の裏切り】を。

それに付随する【日柱の追放処分】も。

《真相を知りたいですか？意図的なものだったのか、事故だったのか》
ソメイヨシノさんにそう聞かれた。私も真相が気になりはする。

でも…

《いいえ、必要ありません。事故であれ、殺人であれ、それを知ったところで、私は私の利益の為に、時透無一郎を戦場に送るのですから。》
時透無一郎は本物の先祖、黒死牟と対話し、闘い、殺されなければならぬ。いくら私という異分子のせいでも、流れが変わったとはいえず、上弦に関して言えば、鬼殺隊の柱でなければ倒せない。

それほどまでに、理不尽に強くて圧倒的な実力者なのだから。

頭無惨な鬼舞辻無惨は、後半戦では数で押せる可能性が高いが、上弦は鬼殺隊でなければ倒せない。

《鬼が日本に留まっている内に、全ての片を日本人につけさせます。鬼は日本人なのですから》

私の大切な人達を傷つけさせる可能性を残すくらいなら、時透無一郎という名の、子どもの命は軽いくらいだ。

《ソメイヨシノさん、私は薄情者です。私の大切な人達の為ならば、喜んで日本人の命を生贄にします。》

《他人より身内が大切なのは、当然の事です。日本人はあなたを…いえ、鬼となってしまった人達と向き合う姿勢すらなかった。でも、ここにいる人達は、あなたが人を食糧として見ないからという事を踏まえても、【鬼】としてではなく、ただの【ローズマリー】として見た。情が湧くのも当然の話です。》

《ソメイヨシノさん…あなたは【日本の花】なのに。》

日本人を殺す…暗にそう言った私を責めないなんて。

決別をされることも、覚悟の上だったのに。

《日本の花だからこそ、日本人を知っている。良い面を知れば知るほど、悪い面も知る。この国の人の子は、千年も時間があつた。

人を利用する鬼もいれば、人に利用されてしまう鬼もいる。

前者ばかり見て【鬼は悪】だと決めつけて、後者の鬼は殺すばかり

で、人を裁くこともしなかった。

後者の鬼は、人間の被害者です。ある意味、人間を利用する鬼よりも鬼畜です。そんな鬼も知っているのに、現状維持に甘えた日本人の落ち度が、今回の件で判明しただけのこと。同情の余地はありません。》

《公平なのですね》

さすがは、警察のシンボルマークになる花だ。

《私たちは人間の世界に直接干渉する事ができない。そういう意味では、あなた方外部者と立場は同じなのです。

そして、鬼殺隊をよく知っている、だから君たちが鬼殺隊を批判する理由が分かる。私たちもまた、外からのやつかみですから。》

姿も、生きた年数も全く違う。だけど、ソメイヨシノさんもまた【外部者】なのか。

《ずっと…疑問でした》

《何がですか？》

人の声とは異なる風の音を含んだ声。

《いくら私の元は、こちら側に産まれた民の1人でも、今の私は外から来た余所者。日本人のことよりも、私を受け入れてくれた人達の為に動きます。なのに、そんな不穏分子を静観するなら兎も角、協力するメリツトが不明だった。

でも、それが形は異なれど、鬼に本当の意味で、害される立場ではないからならば、納得ができるのです。》

ソメイヨシノ含めて、桜は植物だ。人肉を主食とする鬼が害する事はない。鬼がわざわざ少数派であり、お客様である、私たち外国人に手を出さないように。

《その通りです。確かにお気に入りの人の子を害され、何も思わないわけではない。だけど、私たちは無力です。でも、欠けた子であるアナタは違う。直接鬼と関われる。アナタを通して私たちは、これまで溜め込んだ恨みを晴らしてほしい。だから協力しているのです。

その為なら、少ない犠牲は目を瞑りましょう。》

《ありがとうございます》

少ない犠牲…か。仕方あるまい、鬼と全面戦争をするなら死者が出ない方がおかしいのだから。

サアアー

《風が冷たくなってきましたね、太陽が出ているうちに光合成をなさい。》

『はい』

寝よう…太陽が出ている時間帯は。

そういえば、今日は健康診断をするんだった…z z z

▽▽▽

『……！ローズ…様！』

『ローズマリー様！』

ハッ

『おはようございます、ローズマリー様。』

中庭には、簡易検査具を持ち込んだイーサン軍医がいた。

『イーサン軍医、おはようございます』

『さて…検査を始めます』

『よろしく願います。』

秋になり、冬が近づいてくる中、私の体調は、

『脈を…』

聴診器で心臓の音を聴いてもらい、そして、

『やはり…徐脈…ですね。脈の心拍数が50まで下がっています。人間だったら、即入院案件です。』

悪い方向に進んでいた。イーサン軍医は私に現れた不調を、【栄養失調】と診断した。

『体重は変わらず…ですか。そこは【オニ】だからとしか思えません
が、季節が変わり始めてからは、睡眠時間が増え、貧血の症状、うた

た寝の頻度も、日を追う毎に増えています。』

私の主食は太陽光と水を合わせて作る【光合成】だ。

一見、太陽と水さえあれば、無敵な存在だと思うが、実際の所は違う。

『体重の減少はなくとも、体調の変化が激しいです。太陽光以外で栄養素の補充はできないのですか？』

『野菜、果物、水…摂れそうな物を食べるようにしていますが、あくまでも補助にしかなくていいようです。1番吸収率が高いのは、おそらく土だとしか…』

そう、太陽が出なければ、私は栄養素が摂れない。

冬の足音が聞こえ、日照時間が短くなるほど、私は栄養が摂れなくなる。勿論、他の食べ物で補助出来ないかは、現在進行形で進めている。イーサン軍医の科学的根拠を元に作られたレシピをもとに作られた料理を食べているが、進展は今のところない。

『そうですか…ならば、土を他所から持ち込むしかありません。ところで、国から送られたブラックライトの調子はどうですか？』

そう、郵便で送られてきた新作のブラックライトは、全て私の部屋で稼働している。だが、

『本物の太陽に比べると…光合成が弱く、ないよりはマシ程度と…しか』

駄目だ、また眠くなってきた。

『どうぞお眠りに…後は私たちが…』

眠い…



イーサン軍医 side

『眠った…か。』

脈は遅く、髪を広げて光合成をしているが、顔色が心なしか悪い。なるべく長く生かさないといけないのに、冬でもない今の時期からこの調子では、先が思いやられる。

だが、何としても最後まで待たせないと…。

『イーサン軍医、どちらに？』

『鬼殺隊の薬剤実験室に行きます』

本当は行きたくない場所だが、あの少女と珠世がいなければ、鬼殺隊士のみでキブツジを滅ぼせるとは思えん。

▽▽▽

「お待ちしておりました。」

「……ようこそ」

少しだけ血の匂いがする隔離された実験室。

何を考えているのか、相変わらず理解できないタマヨと呼ばれる元人喰いオニと、最小限しか話そうとしない、目線を合わせれば感じる殺意を含んだ瞳をした、キサツタイの幹部しのぶ。

『ローズマリーお嬢様が、藤の花を欲しています。料理で直ぐに無くなるので、いい加減フジカサネ山の出入り口くらい、入山する許可を頂きたい。』

ローズマリー様が、オニとなって最初に口に含んだのが【藤の花】だったせいか、今のところ1番吸収率が高いのが【藤】の成分を含んだ料理だ。だが藤の花の開花時期4月から5月、12月に差し掛かる今の時期には取れない。だが、予め教えられたオニを閉じ込めて行う非効率で狂った儀式、【最終選別】を行う山は、年中藤の花が咲き乱れている。

だが、私たち外国人はその山の場所を教えられていない。

【藤の花】はキサツタイに要請するしかないのだ。

「それは、お館様に言つてください。私はあくまでも鬼を毒殺する事が専門です。藤襲山の管轄はお館様、私に言われても困ります。」

あくまでも平坦な声だったが、この少女は毎回こうだ。

私が「ローズマリーお嬢様」の話をすると、分かりやすく不機嫌になる。こんな駄々っ子が仮にも【医師】を名乗るのか。

キサツタイを日本政府が認めなかった理由も今なら分かる。

ハイリスク・ハイリターン所か、ハイリスク・ローリターンだ。

大使はローズマリー様に関する事は、何でも要請して良いと仰つていたし、【年中咲き乱れる藤の木】を一本、取り寄せるように要請でもするか。

『そうですか、では毒物に関してですが』

軍事演習が近づく中で、仲間意識が芽生えない今の状態ならば、いつそ鬼殺隊はガン無視して、(どうせ、オニと戦うだろう)米軍と日本軍の連携だけでもいいような気がしてきたな。

そういえば…この少女、身体を藤の毒にして、姉の仇を討つとか聞いたな。

『そういえば…ローズマリーお嬢様は藤の花を好んで食されるので、強い鬼は藤の毒が効かない可能性も高いですね。頸を斬れないアナタはその場合、どう戦うので?』

藤襲山にいるオニは、弱いオニが集められた烏合の衆。本物のオニに藤の毒が効く保証がない中で、前線に出たところで役立たずだ。それならば、私のような軍医的立ち位置の方がよほど役に立つ。

「上弦の鬼に藤の毒が効かない可能性…ですか?」

『ローズマリーお嬢様も、アナタ方から見れば【忌々しいオニ】でしょう?そのオニの1人が、藤の毒を好み、太陽を浴びる。

とつくに強いオニは藤の毒を克服していて、君たちが気づいていないだけでは?』

とはいえ、私たち外部者は【本物のオニ】を見たことがないから、予想が杞憂である可能性もあるが。

「それはないですね、下弦…そこそこ強い鬼には、藤の毒が効いていました。耐性はあるにしろ、完全に克服している可能性は0

でしょう。」

『それなら良いのですが』

今更、後には引けない立場の人の予想だ。

藤の毒は効かない前提で毒を作り出すことに専念しよう。

『鬼舞辻に盛る人間化薬の詳細は？』

「鬼舞辻に盛る薬の詳細は、主に3つ。

人間返り、老化、分裂阻害：そして、3つの薬が弱った所に、細胞破壊の薬が効くように使っています。」

人間返りは当然として、老化：千年も生きている化け物でも、一応まだ【人間】の範疇内だったのか。

『分裂阻害とは？』

「鬼舞辻無惨はかつて、とある剣士により死の手前まで追い込まれました。しかし、無惨は自らの細胞をバラバラにすることにより、難を逃れた。あの男は生きることと食欲な小心者です。鬼殺隊に追い込まれれば、真っ先に逃げます。最終手段を使えなくすることによる精神的負担は、隙を作り出すことが出来る。」

『さすが、元人喰いオニですね、経験に則った法則は下手な科学よりも正しい。』

つい、このタマヨと呼ばれる女には冷たくなってしまいが、ここまですべて詳細にムザンを知っているとと言う事は、いくらでも自殺の機会があったのにできなかつた小心者だからだろう。

「貴様！他国の人間だからと！」

「愈史郎！やめなさい！」

私はタマヨには、同情できない。

このユシロウと呼ばれるオニは、タマヨが作ったオニだ。

つまりこの女もまた、キブツジ・ムザンと同じ【オニを創れる支配者】だ。

大使館で対談した時に、タマヨは言った。

「鬼は大切な人を優先的に喰らう」と。

家族にどれほどの愛情を持っていても、血縁を優先的に喰らう生き物だと知った上で、病気で死を迎えるばかりの人を狙って、【鬼に勧誘

している」

タマヨは「死にたくない」「子どもの成長を見届けたい」から、鬼のデメリットも聞かずに鬼になっている。

死を迎えるばかりの人の心情を実感して、それで後悔しているのに、自らキブツジと同じ事をしている。

結局、この女がキブツジを恨む根本的な理由は、「同族嫌悪」だ。

特にこの女は、キブツジよりも厄介者だ。

キブツジにカリスマ性がないのは、この女を見ていれば分かる。だが、タマヨはユシロウという配下を、見事に墮としていく。

この女：「被害者のふり」をするのが、とても上手い。

ユシロウへの見事な洗脳術も相まって、この女が生き残ったら本格的に日本と鬼が結びつきかねない。

それだけは、どんな手段を使っても阻止しなければ…キブツジの討伐よりも、タマヨは確実に殺さないで。

任命式と嘘

「軍服一式を揃え終わりましたか？」

「はい、九鬼政府代表任命官」

「では…参りましょう。」

後から聞いた話。この九鬼大和と呼ばれる男は、鬼殺隊に関する引き抜きにおいては、大臣と同等の権限…、事実上の宰相なんだってさ。

だから、俺はあつさりと軍隊に移動できたと言われた。

だが、そうは言っても俺の軍移動には不満の声もあつた。

「華族の私兵を、栄光ある我々帝国軍に入れるなど…」

「そもそも階級の件はふざけているとしか思えん。」

「いくら、政府代表だとしても、これは越権行為が過ぎる！」

明らかに高い身分のオツサン達から、睨まれている。

まあ、それも当然か…、オツサン達は正式な手順で、今の立場にいるんだ。俺なんかの平民が急にそこそこの立場を与えられるなんて、もし立場が逆なら俺だってオツサン達と同じことを言っていたらうな。

「ご不満ですか？はて、事前に説明したはずでは？」

「白々しい！今の君に逆らえない事くらい知っているだろう！」

「今の貴殿はそこらの華族より強い立場ですからな。」

「大君の任命状を持つ者に逆らうことなど、それこそ軍の恥だ。」

この人…権力でゴリ押ししたんだ。

道理であつさりと経歴詐称できたわけか。

「では、任命式の前に彼の功績を上げます。」

俺が今いる場所は、陸軍省内、本来任命式をするような場所ではないそうだが、特例で許可が降りたそうだ。

「不死川玄弥は華族産屋敷一族が抱える私兵集団、通称【鬼殺隊】に潜入調査をし、狙撃手として【上弦】と呼ばれる【国家の不穏分子】を始末する事に多大なる功績を上げ、鬼殺隊内で一度も素性を疑われる事なく、丁（ひのと）と呼ばれる陸軍における事実上の准尉階級まで自力で這い上がりました。」

「むう…准尉階級か。」

「だが、所詮は私兵集団。質が低ければ無理な話ではない。」

「だが、前例がないな」

「これまで軍や、我々特高が送り込んだ諜報員の結果を見れば、この者の有能さがお分かりになれましょう。」

前例のない任命式ですので、抵抗があるのは承知の上ですが、彼ほどの人材を、不穩組織に残し続けることの方が国家の損失。」

「確かに…九鬼政府代表任免官の仰る通り、この者は刀を使わない。」

「これからは銃の時代になるのは、前の戦で確実だ。」

「講師になるのならば、士官の階級である方が望ましい。」

「ここにいる御仁方は、彼の本当の経歴を知っています。この者は、正式に手順を踏んだ陸軍士官学校本科の生徒ではありませんが、実績と功績を踏まえれば、十分妥当な階級だと思います。」

他に質問がある人は挙手を。」

「ないな。」

「鬼と前線で戦うならば、戦時特例措置も当然だ。」

「私兵集団に寝返られるくらいなら、階級はそちらの命令を受けつけよう。」

「ご理解の程ありがとうございます。では、正式に任命式を始めます。」

不死川玄弥」

「はー。」

ここからの流れは、教えられている。絶対にこのオッサン達に俺の印象を崩してはならない。

「貴殿は鬼殺隊への潜入調査において、《子どもであること》《兄上が鬼殺隊で上位階級であること》を利用し、かつて孤児達の養父をしていた岩柱、悲鳴嶼、行冥に弟子入りを志願し、弱点である《呼吸が使えない》を逆手にとり、見事弟子の座を手に入れる事に成功。その後、これまでの諜報員が脱落した【最終選別】を程々の実力で突破し、疑いの目を向けさせないように誘導。」

入団後は、連絡手段をあえて遮断することにより、より疑われなくし、そして、今回の事件を機に、鬼殺隊内における特命連絡員が動く

ことに反対する勢力の、過激派の報告。

それにより、我々が更に活動しやすい環境を構築するのに一役をかきました。

その功績と実力を認め、貴殿、不死川玄弥を、【陸軍憲兵中尉】に任命します。」

「謹んで…お受け致します。」

憲兵…九鬼さんの本来の立場と同じになったのか。

「それでは、これにて任命式を終えます。ご証人の皆様、お忙しい中ありがとうございました。」

「あ…ありがとうございます!!」

「認めたものだから仕方ない」

「確かに…認めました。」

「十分な働きを期待しています。」

結局最後までいい顔はされなかったけど、仕方ないか。本当なら俺のような平民が顔を拝めるだけありがたいものだしな。

「ふう…相変わらず固い頭だ。それでは、次は特訓ですね。」

「何を？」

オッサン達が退場した後、愚痴を言った九鬼さんは、俺にそう言った。

「とりあえず、言葉遣いと、富岡会話を練習します。」

「富岡会話?」

▽▽▽

「不死川中尉、君はこれからそのように呼ばれます。」

場所を移動され、陸軍省の客室に案内されて椅子に座ったところに、そう言われた。

「はい、ですがそれが何か？」

「君の今の口調は、かなり一般人寄り、そして将来を約束されたエリート軍人の言葉遣いではありません。」

君の表向きの経歴は見たでしょう、君は兄との決別後、陸軍に拾われて、狙撃の腕を見込まれ陸軍士官学校本科に通っていたが、兄が鬼殺隊に所属しているのを知った教官が、君を諜報員として鬼殺隊に潜入する命令を下した。

君は見事に誰にも疑われることなく、功績を上げ、鬼殺隊が正式に政府公認となったことにより、本来の所属を公にできるようになった。…と。」

「はい…」

改めて聞かされると、本当に誰の過去話かと？聞きたくなる。

だけど、これが今の俺の過去になるんだ。

「言葉遣いを軍人らしい口調に矯正です。」

現時点で私は君の上官に値するので、『はい』ではなく、『はっ！』

一人称の俺…はまだしも、公の場では『私』。

最後の『です』『ます』『は』『○○』であります』に統一しなさい。

君の場合は鬼殺隊への潜入歴の長さを理由にすれば、ある程度は誤魔化しが効きますが、最初から軍人だと騙し通すのは、鬼殺隊だけではない。ほぼ全ての軍人も君の表の経歴を本物だと思えます。

バレたら、それこそ君の【縁故採用説】が確実視されます。

全てを騙し通すための訓練を始めます。返事は！」

「はっ…はい!!」

「違う！返事は！」

「はっ！九鬼警視！」

「よしー！」

「ところで九鬼警視、富岡会話の練習とは？」

「『ところで九鬼警視、富岡会話とはどのようなものでありますか。』言葉は最後まで言い切りなさい。細かいでしょうが、そのような点は、

聞く人が聞けば、君の素性を勘ぐります。」

「はっ！承知しました！」

「今のは正解です。では説明します。君の同期である竈門炭治郎、我妻善逸、嘴平伊之助、3名はそれぞれ、匂い、音、勘により嘘を見抜ける特殊能力者です。不死川中尉が嘘をついた所で、交流頻度が高い3名には嘘がバレます。」

「はい」

「なので、できる限り嘘はつかない方面で事を進めたい。君は文字の読み書きはできますよね？」

「はっ！」

悲鳴嶼さんに教えられたことがこんな所で役に立つなんて。

「富岡会話とは、水柱富岡義勇の会話を真似ることです。水柱は他の柱に嫌われています。時に風柱などは顕著です。」

「はっ！」

確かに兄貴は水柱とは、犬猿の仲だと悲鳴嶼さんから聞いた事がある。

「ですが、彼は悪口を言う気などないのです。話し言葉が少ないせいで誤解されがちですが、実際に悲鳴嶼行冥や宇髄天元、今は亡き煉獄杏寿郎などは、彼を嫌ってはいません。富岡会話の例として、

『俺はお前達とは違う』と言うのがあります。仮に不死川中尉が水柱からこのように言われて、素気なく対応されたらどのように思いますか？」

『実力がない奴と関わるほど俺は暇ではない』と言われたも同然ではないでしょうか？」

「ええ、普通の人はそのように解釈しますし、それは間違っではないかもしれません。しかし、当の本人が言いたかった言葉の真意は、」

そうして紙に文字を書き出した九鬼さんが渡したのは、

『俺は（最終選別を本当の意味で突破していないから）お前たちとは違う』

「はっ……っ？」

省略なんて話ではないだろ？略しすぎて最早内容が成立していな

い。

「富岡義勇の人との交流不足にも程があります。それと、もう一つ風柱を怒らせている言葉は、『俺は柱ではない』です。」

「九鬼警視…この流れだともしやそれは、『俺はお前たちほど立派ではないから柱ではない。』ですか?」

「かなり近いですね。富岡義勇は最終選別において、同期の鯖鬼と呼ばれる男子に守られて、最終選別を鬼を1人も殺さずに生き残ったそうです。なので、他の柱のように正規の手段で上り詰めた人たちと、同列扱いされるのを嫌がるのです。」

「なんか…随分と贅沢な話だな。」

最終選別はあくまでも、隊士になるための試験だ。鬼を殺そうが、殺すまいが生き残った時点で合格だ。問題はその後の功績だ。水柱は柱に任命されるだけの實力を持っていた。他の柱とどこが違うんだ?

「口調!」

「はっ!」

ヤベ、つい、いつもの話し方に戻っちゃう。

「とにかく、富岡会話の意味は理解したでしょう。不死川中尉には、意図的に重大な部分を外して会話を成立させる訓練を行います。」

「はっ!」

「では、早速行きますよ、『不死川さんはいっから軍人になったのですか?』」

これは、蝶屋敷の女の子たちからの質問か。

「えつと…実は俺(表向きの経歴上)鬼殺隊に入る前から軍人だったんだ。」

「『なあ玄弥、中尉って結構高い地位だよな。実は名家の生まれだったのか?』」

これは善逸か。

「違うよ、俺は兄貴と別れた後、帰る場所がなくなって、食い扶持欲しさに年齢を偽って、陸軍の下働きをしていたんだ。そこで俺の狙撃の腕を見込んだ軍人に、特例で陸軍士官学校本科に入学させられたん

だ。俺も当時は兄貴がどこにいるかも分からないし、通えば必ず食事と寝床を提供される立場は、将来も考えれば都合が良くて通っていたんだ。んで、兄貴が鬼殺隊に所属している事を知った教官が、俺を鬼殺隊に潜入させる事にしたわけ。俺が風柱の弟だと言い続けた理由はそこなんだ。(という設定になっている)」

『おい玄米！お前ずっと嘘をついていたのか！俺の子分のくせして！』

伊之助か、それにしても九鬼さんもよく見ているな。

「俺は嘘はついていないよ(経歴そのものが嘘だからな)兄貴に会いたくて鬼殺隊を目指したのは事実だし、鬼を殺したいと思ったのも事実だ。そこに加えて(今の)上官の命令にも従っていただけの事。(結果的に)悲鳴嶼さんに騙し討ちするような事をしてしまったのは、反省している。」

『玄弥は、ずっと会いたかったお兄さんに、こんな形で会うことになってよかったのか？』

炭治郎か、あいつならマジでこう言い出すだろうな。

「俺も本当はもつと穏やかな関係で会いたかったけど、俺の所属が国側である以上、兄貴との敵対は避けられないし(俺が自分で選んだ道だから)仕方ないよ」

「ふむ…呼吸も使えねえ雑魚がいるだけでも不愉快だったのに、よりもよってアイツらのお仲間だったあ!?!いい度胸してんじやねえか！』

「あ、兄貴…俺は！」

「はい、失格。」

「九鬼警視！今の声はどこから？」

『九鬼警視、今の声はどこからでありますか。』です。口調の矯正も必要ですが、やはり不死川中尉の大敵は実の兄ですね。この声は、レコードで本人の声を録らせてもらいました。なるべく怒りに任せた声を録らせましたが、声だけでここまで狼狽えるなら、直接会ってしまえば、軍人の顔など簡単に取れます。」

「申し訳…ないです。」

そうだ、全てを騙し通すとは、俺の兄貴も含まれるんだ。

「不死川中尉、その名で呼ばれる本当の意味を理解していないうちに、鬼殺隊に戻ることは認められません。今の私には、貴殿だけに時間をかけるほどの暇はないのです。」

「はい…」

「幸い、この件のカラクリを知っている人が1人、悲鳴嶼行冥氏がいますが、彼は根っからの鬼殺隊側です。援護を期待してはなりません。」

「はい、仰る通りです」

悲鳴嶼さんには、流石に今回の件は九鬼さんが説明した。

九鬼さんとの相談で、俺については何も知らなかった体で、突き通すそうだと、なれば俺の援護に回る事はない。

「実兄の声に押されず、冷静に対応できると証明できるまでは、陸軍士官学校本科の教官による教育を受けてもらいます。では、私は仕事が残っているので、ここで失礼する。」

「はっ！お疲れ様でした！」

カツカツ

「本科教養部門の佐藤と申します。不死川中尉、中尉の階級は主に【将校】に分類されます。過去にも鬼殺隊に所属していた者が、軍に移籍する事がありました。なのに、なぜ今回はあのように反対されたかと思えますか？」

「えっ？俺以外にもいたのですか？」

前例がないとか、九鬼さんが権力で押し通したと言っていたし、てつきり俺が始めだとはばかり思っていたけど…。前例があるのなら何故？

「これまで鬼殺隊から軍に移籍する場合は、ノンキャリア…どんなに功績を上げてても、軍曹が限界でした。理由は単純です。」

軍曹は時として分隊長として、部下を率いて戦場で作戦を取ります。その場合、率いる兵員は10名から20名程度です。そして、軍曹は新兵の教育にも携わります。正直に言いますと…産屋敷という

【個人】に忠誠を誓っている可能性が高い人間を、発言力の高い立場にしたいくないのです。

しかし、鬼殺隊士の戦闘能力の高さを放置するわけにもいかない。だから、あくまでも【戦闘員】の立場から出さないように人事を調節しているのです。」

「俺とは、どう違うのですか?」

俺も前線に出る立場だ。軍曹とどう違うんだ?

「軍曹までは【戦闘員】として、中尉からは【教官】としての立場です。

【将校】は正確には一般的に言われる【兵隊さん】とは違います。

兵隊さん、もしくは、兵士さん、軍人さんと呼ばれる人は、【戦場で戦う人】を指しますが、将校と呼ばれる立場は、直接戦場で戦うわけではなく、戦争における作戦、策略を考える人、教官を主に指します。」

「表に出てこない人…ですか?」

「一応、中尉階級はギリギリの範囲では【戦闘員】ともいえますが、少なくとも、中尉が最前線で戦うのが平常になってしまったら、国が終わっていると言えるほどに、平時なら中尉が最前線に出ることはまずありません。将校はよくて前線、主に後方支援や、軍医などがなる立場だと考えてください。」

と…なれば、いくら実力主義を謳っていても、上の立場に求められるのは腕力ではなく、学歴と知略です。

今の君には、とても学識もなければ、思慮深くもない。

そんな君を将校にするなど、平時ならばあり得ない話です。

しかし、此度の鬼退治は他国外交官も見ると正式な戦争と扱われます。なので、軍事特例として、一時的に階級を上げることが認められたのです。」

一時的に階級を上げる…つまり、

「鬼舞辻無惨を殺し終えれば、俺の階級は外されることですか?」

「ええ、一応そのようになってはいますが、その鬼舞辻?とやらの戦場で功績を上げれば、本物の中尉階級に収まることも出来ます。今は戦時扱いなので、教養は程々に、兵士としての実践と、中尉としての心得と常識を学んでもらいます。」

「はい！」

兵士としての実践は兎も角、少尉としての心得？

「鬼殺隊も実力主義ですが、帝国軍と違う点は2つほどあります。

まず、上の階級は出生や学歴が物を言います。

そして2つ目は、【階級絶対遵守】という物です。」

「階級絶対遵守…でありますか？」

遵守、決められたことに従うこと…という意味だったはず。

「軍隊では平時も戦時でも階級が高い方の言い分が通ります。不死川中尉が中尉になれたのも、この階級絶対遵守が関係しています。

実際に、露西亞との戦争（日露戦争）でも、「20代の中尉が30代の軍曹を怒鳴りつける」事もありました。当然、軍人としての実力は軍曹の方が上です。なのに、甥ほどの少年に怒鳴られてやり返さない理由は、階級が上の人間だからです。」

「では、もしやり返したらどうなるのでしょうか？」

鬼殺隊に置き換えれば、兄貴が最年長の悲鳴嶼さんに怒鳴りつけるという事か。鬼殺隊ではあり得ない話だな。

「戦場で上官の意向に逆らえば、抗命罪が適応される可能性が高いです。そうなれば、最も、重いので死刑、または無期で10年以上の禁固刑ですね。とはいえ、その上官の命令があまりにも不条理なものだったら、適応はされませんので、時と場合によるものとしか言えませんが。」

「階級に重きを置いているからこそ、俺が下層とはいえ将校になれた…と。」

「もちろん、階級が全てとは言えません。例えば、いくら階級が下でも、戦場で料理を作る人には喧嘩は売れないでしょう。」

「なるほど、俺はそういう得意分野がないからですか？」

料理人や、専門職ではない俺が、帝国軍で認められるには【階級】しかないのか。

「それもあります。ですが、君に求めるのは戦闘員としての技能よりも、教官としての役割です。」

鬼殺隊で身につけた【狙撃能力】を、刀に適正がない鬼殺隊関係者

や、鬼殺隊に潜入した軍人に教育することです。

誰だって接近戦で敵と戦うのは怖い。

ましてや、人間相手のように急所の狙い撃ちができない存在ならば、尚更の話です。帝国軍人も今回の件には参加しますが、彼らの本職は鬼と戦うことではない。これからの戦争の形では接近戦は、極限られた場所、状況下でしかできなくなる。帝国軍人にも剣豪はいますが、それが実戦で活躍する確率は低い。

なら、確率が高い方を優先的に身につけさせます。

不死川中尉は此度の戦では最前線で参加ですが、書類上は後方支援かつ、狙撃者の教官として登録しています。」

「俺が…教える側?」

「それと、最終戦まで鬼食いを禁じます。」

「えっ!ですが、そうになると俺は銃を使えなくな」

「現在、不死川中尉が使用している拳銃は、こちら側の技術部で更なる改造をしております。中尉が利用している現在の拳銃は、中尉以外だと利用できません。それでは教える意味がありません。」

「確かに…反動はどうにかしたいと思っていました。」

俺は鬼食いで拳銃を使えるけど、それでも鬼狩りをしているからといって、常に鬼を喰るわけではなかった。その時は短刀も使っているけど、どうしても、首を斬れる形状ではない。

「鍛えた軍人なら使用可能な程度に、拳銃の反動を抑える改良、大量生産可能な部品への移行、拳銃の弾も改良をし、より遠距離狙撃が可能な形状に変えます。モデルは現在陸軍で使われている拳銃、コルトM1903に近づけます。なので、」

ガチャ

「これが現在陸軍で使用されているコルトM1903の拳銃です。改良版が完成する前までは、これで部下の訓練をなささい。」

「はい、佐藤教官。」

弾数は8…9か。俺が普段使う拳銃よりも細い。しばらく使わないと慣れないかも。

「狙撃施設があります。言葉遣いの矯正授業が一通り終わった後な

ら、好きな時間に利用しても良いです。許可は得ました。」

「はい！ありがとうございますー！」

これは本当に助かる！

「では…始めますよ。」

「はいー！」

▽▽▽

『呼吸も使えねえ雑魚がいるだけでも不愉快だったのに、よりにもよってアイツらのお仲間だったあ?!いい度胸してんじゃねえか!』

「利用したことは謝罪します。しかし(対等な立場になれたことには)後悔はしておりません。」

『おい！待ちやがれ!』

「兄上、私は(仮初だけど)中尉です。そちらの指示に従う道理はありません。(って九鬼警視が言ってた) それでは失礼します。」

「判定をお願いします。九鬼警視と佐藤教官」

「合格だ。新たに録音したレコードにも対応できていたな」

「感情の乱れも、顔に出ていません。」

「よく頑張りましたね、合格です。」

「ありがとうございますー！」

やっと、鬼殺隊に帰れる！

▽▽▽▽

「玄弥！」

「あれ玄弥じゃん！」

「玄米の服変わってるな！」

騙し合い

「やあ、炭治郎、善逸、伊之助。」

心を落ち着かせる……俺は不死川中尉だ。

「げ、玄弥……その服は?」

「玄弥のそれって、帝国陸軍の服!」

「アイツらと同じ服じゃねえか!」

「不死川中尉! 次の指示を!」

「中尉?」

「中尉イ!」

「ちゆうい?」

「腕立て伏せ100回!」

「はっ!」

鬼殺隊にいる軍人の多くは、俺の経歴と同じ中尉や少尉と呼ばれる階級で占められている。だから同年代で同じ階級が多い。

よかった……佐藤教官の出した例のような、歳上の部下がいなくて。

「お久しぶりです、お元気そうで何よりであります。」

「げ、玄弥……その口調は?」

善逸が恐る恐る聞いている。まあ、俺の元々の人格を知っている面子は面食らうだろうな。

「ようやく、本当の所属(と言うことになっている)に戻ることができたので、今までの無教養な口調を直すことができます。改めてご挨拶を、陸軍憲兵中尉、不死川玄弥であります。」

「陸軍憲兵中尉?」

「えっ! お前そんな凄い身分だったのか!!」

「けんぺーって、あの九鬼とかいう目つき悪い男と同じか?」

「はい、私は元々【鬼殺隊に潜入調査していた者】。分かりやすくいいますと、【間者】最近の言葉では【スパイ】です。(と言うことになっている)」

「えっ……じゃあ兄貴に会いたいというのも……嘘?」

「風柱の弟なのは、本当のこと……なのか?」

「けんぺーって何だ？」

「私が風柱の弟であるのは事実です。しかし鬼殺隊に入隊した理由はそれだけではない。(と言うことになっている)士官学校に通っていた時期に、その時の教官が私の実兄が鬼殺隊の上級幹部になっていると知ったので、血縁を理由に特例措置で潜入調査する事となったのです。

【鬼喰い】の能力は、その時点では判明していなかったのですが、剣士の基本である【呼吸】が使えない代わりに、鬼喰い能力が判明したのは、偶然の産物ですが…今となつてはそれも含めて(鬼喰いがなければ俺が国軍に勧誘されることもないから)幸運だったと思えてなりません。」

よし、綺麗な言葉で言い切れた！あとは3人の反応だな。

「うそ…ではない？」

「音が安定している」

「ピリピリするけどなあ！ウギヤア！」

「伊之助落ち着け」

「うわっ！暴れないでよー！」

よし！匂い、音、勘を突破した！この3人に信じてもらえるなら他の隊士も騙し通せる！

「説明は以上です。こちらも指導が残っておりますので、これにて。」

早く切り上げないと、不審な点を見抜かれる恐れがある。

「ちよつと待ってくれ玄弥！」

「玄弥！」

「玄米！」

聞くな、振り向くな、俺は…【不死川中尉】だ。

▽▽▽

炭治郎 side

カツカツ

「玄弥…」

結局玄弥は俺たちに振り返る事はなかった。

玄弥の話に嘘はない。だけど、何か腑に落ちない。

「善逸、伊之助、玄弥の話は本当の事だと思うか？」

俺の能力である【匂い】は、香水や化粧品の匂いで体臭が分からなくなったりするから、玄弥が本当の事を言った結果なのかが判別しづらい。今の玄弥は香水とかしていないから、完全に匂いが効かないわけではないけど、玄弥の性格からすれば、違和感がある。

「少なくとも…嘘はついていないよ。音も嘘特有の音ではなかったし。」

「プシューー！肌がピリピリするけどなあ！嘘ではないなあ」

「そうだよな…」

そう…分かってはいるんだ。遊郭潜入の時のような、独特のひん曲がった匂いに包まれた街ではないし、玄弥が体臭を誤魔化していないのだから。

でも…玄弥の鬼殺隊入隊が、命令による物が主な理由とは思えない。

嘘ではない。だけど…今の玄弥があるべき姿だと断じるには、違和感がある。

「炭治郎…玄弥の言葉が事実であれ、虚偽であれ、俺たちはまだ修行の途中だよ。今はそれよりも訓練しないと…嫌だけど。」

「よしー修行ー修行だあ!!」

嫌々ながらも岩柱の修行に向かおうとする善逸。

嬉々として滝にあたりに行く伊之助。

そうだよな…俺たちには時間がないんだ。

「そうだね、行こうか2人とも」

岩柱は玄弥の師匠、暇な時間きに行こう。

▽▽▽

不死川玄弥 side

後方支援をする軍人や、呼吸に適性がない剣士や隠を、刀以外の手段で鬼に対して時間稼ぎをする部隊。正式名称【銃器中隊】

俺が中尉となって、初めて与えられた仕事だ。

軍人の指導だけならまだしも、剣士や隠からの評価は良くない。

理由は単純だけど、だからこそ指導がしづらい。

軍人の指導は良かった。俺の表向きの立場と、今は鬼殺隊に関する特権を与えられた九鬼さんの任命状を理由にすれば、大人しく年下の俺の命令に従うから。

でも、鬼殺隊の剣士や、剣士を辞めざるを得なかった隠は違う。

カン

「やってられるか！俺たちは鬼を殺す為に鬼殺隊に入ったんだ！なのに、【鬼から時間稼ぎをするための訓練】など！」

鬼殺隊所属組は、俺が呼吸を使えず、なのに剣士の立ち位置であること、岩柱の唯一の弟子であることを知っている奴が多い。当然、鬼殺隊時代から俺のことを妬む奴らもいる。

特に剣士の才能がない故に、隠にならざるを得なかった奴らからは、嫌がらせを受けた事もあったし、隠だけでなく、俺を見下す剣士もいた。

なのに、その一部は、九鬼さんの命令で俺が隊長を勤める部隊に配属にされた。

幸いな事といえば、鬼殺隊組は俺の今の所属や階級に怖気付いて、手元にある銃を乱射しない事。

俺の部隊は軍人率の方が高いから、今のような態度を取れば…

「貴様、部隊長の訓練を拒否するのか、そうか、そうか、ならば…」

「不死川中尉！この者を連行します。」

軍人が軍法に従い、正しい場所に連行することだ。

はあ…これで10人目かあ…。

九鬼さんは、『不穏分子は容赦なく間引くように』との命令を出しているから、俺もそれに従っている。

「部隊長として、許可を出します。」

俺が言っている言葉ではないけど、ここまで血気盛んだと、九鬼さんの懸念である『命令違反による鬼側が有利になる可能性』が捨てきれないんだよなあ。九鬼さんも鬼殺隊組は、俺に対して敵対心を持っている奴らを意図的に集めている節があるし。

とはいえ、

「二つだけ言っておきます。鬼殺隊に戻りたければ戻っても良いです。」

ザワツ

「ただし、君たちをこの部隊に配置した人が政府の人間であることを、知った上で命令違反する気概のある者だけです。この部隊の目的は【鬼を滅すること】ではない。万が一：鬼舞辻を倒しきれない時に、新鮮な情報を提供し、次に活かす為に創られた部隊である事をお忘れなきよう。」

俺が利用されている事は、悲鳴嶼さんからも聞かされているし、俺も利用されている自覚はある。

でも：ただで【利用される立場】に甘んじているわけではない。

俺はもう手段は選ばない、【鬼喰い体質】であり【風柱の弟】という俺の立ち位置は、さぞかし利用価値があるように見えるだろうなあ。

九鬼大和が、いや佐藤教官が俺を勧誘した理由も、本当は分かっていた。

だが、言い換えれば、【鬼喰い体質】は一生変わらない。

つまり、九鬼大和は鬼が蔓延る今の世界では、俺を無視できる立場ではないという事だ。今の時期なら、多少の我儘を押し通せる立場に俺はいる。これは：軍の階級という枠組みよりも大きい。

だから、俺は、

「テメエ玄弥！何だそのふざけた格好は!!」

「お久しゅうございます。兄上」

俺の鬼殺隊入りの原点、兄貴と対等な立場で会う。

一方その頃、

『ローズマリーからの伝言ですか?』

夕方に訪れた日本人。ローズマリーの通訳。

『はい、教会に戻れそうにないので、こちらの手紙とこれを教会にと。』

『ロークワット…日本語では確か【ビワ】ですか?』

『健康です。とお伝えしたい。とのご希望でしたので、花はローズマリー特命連絡員が【健康を意味する花を】との事でご用意しました。日本での花言葉は【治癒】です。』

『それはまた…随分とご足労をおかけしました。こちらの伝言も伝えていただいても?』

『もちろんです。』

『近々、また会いましょう。と…お願いします。』

『承りました。それでは、よい夜を』

『さようなら』

ガタン

(ロークワット…花言葉は【治癒】の他は、【あなたに打ち明ける】【密かな告白】…)

『シスター、近々ローズマリーに会うので、お土産にW i n t e r h e r r yのジャムを持ち込んでもいいですか？』

『はい、問題ありません。ローズマリーは？』

『この手紙通り、元気に過ごしているようです。』

『それは良かった。』

話をしましょう。

不死川実弥 side

「銃器中隊い？何だそれ？」

お館様の起こした事件をきっかけに、これまで俺たちの存在を無視し続けていたお国様が正式に動いた。それにより、他国の外交官への牽制も兼ねて国軍が鬼殺隊内で大きな顔をしている。

だが、実際に鬼と戦うのは俺たち鬼殺隊だ。

向こうもそれを理解しているから、牽制はすれど、柱稽古の邪魔はしてこない。なのに、国軍が引き込んだ元鬼殺隊士を集めて、柱稽古とは別に稽古をしている？

「お前は柱の中で唯一、身内が鬼殺隊士として所属しているから警告していたよな。《さつきと弟と和解しろ》と。」

「だから何だ？」

いっそのこと、今回の件で鬼殺隊を抜ければいいんだ。

アイツは大した実力もない雑魚隊士、確かに上弦の月を追い詰める役割を果たしていたが、結局決定打をつけたのは、竈門炭治郎、我妻善逸、嘴平伊之助だ。

「やっぱお前…聞いていなかったみたいだな…。」

ため息をついた宇髄は、そのまま菓子を食べた後、

「んじゃ！俺様は帰るぞ。」

シュツ

「何だったんだアイツ？」

カア

「ん？どうしたあ蒼菜？」

「『ジユウキチュウタイ』 タイチヨウ！アスハウモンヨテイ！カア！」

「銃器中隊の隊長が明日…か、分かった。おい！客間の準備を頼む！」

「はい！風柱様！」

相手は軍人、俺は傭兵。一方的な訪問とはいえ、それなりにおもて

なしをしないと、また苦情を言われる。

「会いたくねえなあ…」

どうせ訪問理由は、その銃器中隊の訓練に俺の土地を使いたいだけだろうし、土地利用は手短かに許可して、終わらせるか。

カツカツ

(独特な規則正しい音程…来たか)

「あー…ようこそ、いらっしやいますし…お前!!」

こいつが何故こんなところに!

いや、代理で来たのか!だが、

「テメエ玄弥!何だそのふざけた格好は!!」

きつちりと着込まれた軍服、明らかに正規の物だ。

まさか…!こいつ!

「帝国陸軍、憲兵中尉!不死川玄弥であります!」

「テメエが憲兵中尉だとお!」

憲兵…あのイケ好かねえ政府代表と同じだとお!

「お久しゆうございます。兄上」

お久しゆうございます?兄上?

粗暴な玄弥に、一体何があった?だが、まずは、

「とりあえず上がれよ、憲兵中尉殿。」

コイツの身に何が起こったのか確かめないといけない。

招かれざる客の為に用意した菓子と茶には、一切手をつけずに玄弥は、

「さて…鬼殺隊の風柱殿。要点を話してもよろしいか?」

この口調…あの男の話し方にそっくりだ。

宇髄が言っていたこと、このことだったのか。

「いいぜえ…」

今の玄弥が言った言葉が事実なら、玄弥の方が立場が上になる。それに階級がおかしい…。中尉は確か、学校を出ていないとなれない立場だ。

「私が指揮しております銃器中隊は、基本的に後方支援の軍人を集めて構成された中隊です。しかし少なからず鬼殺隊士が入隊しております。」

最後に見かけてから、まだ2ヶ月も経っていない。

その時の言葉遣いは俺と暮らしていた時と変わっていないかった。

この2ヶ月の中で、コイツの身に何があったら、中隊の隊長なんて立場におさまるのか？

「ああ、知っている。お前たち政府の人間が直接戦闘に関わらない立場の鬼殺隊士を集めて、秘密裏に何かをしているとな。んで？それがどうしたあ？鬼殺隊士が面倒だから引き取れと。」

「半分正解です。こちらに入隊した鬼殺隊士は、熱量だけは一丁前ですが、猪のように前に進むしか能がない肉弾は、人間との戦争ならまだしも、人間を食べれば食べる程強くなる鬼との戦闘では、逆にこちらの足を引っ張ります。なので、私の指示に反発する鬼殺隊士を、風柱殿には扱き倒していただきたい。」

《ダン》

「それは構わねえよ、俺も最近の鬼殺隊士の質の低さには辟易していたくらいだからヨオ！」

だが、テメエも同じ【能がない肉弾】のくせによく言えるなあ!!」
玄弥はもつと感情的な性格だ。

なのに、今の玄弥は政府役人の九鬼大和と同じように、俺たち鬼殺隊士を【使いづらい駒】としか見ていない。

少しだけ目を離れた隙に、あの男…！俺の唯一を誑かしやがって！「否定はしません。しかし、こちらが預かっています鬼殺隊士の扱いづらさと言ったら、目も当てられない。私は銃器中隊の隊長ですよ、上官の命令に従えないなんて、鬼殺隊は一体どのような教育を施していたのですか？」

「テメエも鬼殺隊士だっただろうがよ！」

ムカつく、ムカつく、コイツの動き、言葉、あの男の影が見える。

「私は最初から鬼殺隊士ではありません。」

「…はっ？」

鬼殺隊士ではない、最初から？

コイツは学校に行ったことがないのはお館様から聞いている。

だが…この目…。嘘ではない。

「どういうことだ、玄弥。」

俺は…何か…大きな思い違いをしていたのか？

「兄上…いえ、兄貴…俺は、兄貴と別れた後…食事欲しさに年齢を偽って、陸軍の雑用係をしていたんだ。そこで俺は暇潰しでパチンコを打っていた所を見かけた軍人によって、特例で陸軍士官学校に通うことが認められた。俺はそこで士官候補生…狙撃手としての才能を上げることが求められた。あの時の俺は、兄貴の居場所も知らなかったし、士官学校に通えば、衣食住は保証されていたから、このまま軍人になるのも悪くないと思いながら、過ごしていた。」

玄弥は俺の目を見ながらそう言った。

「なら何故、鬼殺隊になんざ入ったあ？少なくともお前は軍人の立場に不満があつたわけじゃねえだろお？」

なるほどなあ、だから中尉になれたわけかあ。

「兄貴だよ…」

玄弥は俺の目を逸らして、小さな声でそう言った。

「俺か？」

「その時の教官が、俺の兄貴が鬼殺隊の柱であることを知ってしまったんだ。そして、軍は過去に何度も鬼殺隊に密偵を送り込んでいたけど、毎回最終選別で死んでしまう。成人してから剣士を目指して弟子入りしても、最初から警戒されてしまい、幼子を送り込んで、逆に産屋敷一族に飲み込まれてしまう…。幼すぎず、そこそこの年齢で、自我を保ち、帰るべき場所を間違えない密偵を求めていた軍にとつて、実の兄が鬼殺隊の上級幹部であり、俺も鬼を憎む理由がある。」

特に【兄が鬼殺隊の柱】であることが大きかった。

…たとえば、どんなに怪しい素振りを見せてしまっても、俺を殺せば兄貴は、鬼殺隊に対して不信感を抱く。

そうなれば…強い味方である兄貴が、大きな障害として鬼殺隊に歯向かいかねない。」

「ッ……！」

否定できなかった。玄弥が鬼殺隊に所属して死んだら、それが人為的に行われた形跡が残っていたら…お館様を疑うだろう。

「だから俺は命令された…。〔産屋敷に消されないように、風柱が実の兄であることを公言しながら、鬼殺隊に潜入調査せよ。〕とね。」

玄弥の目は何も映していなかった。

「なので…改めて謝罪致します。」

兄上の地位を、権力を利用したこと、何より騙していたことを…でも、俺は…！」

バン

「そこまです。不死川中尉。」

「テメエ！」

「九鬼様?!」

いつの間に俺の屋敷に入り込んだ!?

「不死川中尉、部下を岩柱邸から風柱邸に移したいので、許可をもらいたかったのですね。しかし、立場を忘れては困ります。いくら風柱個人が強くともたかが一傭兵ごときに、未来ある憲兵中尉が直接訪問するとは、何かあったらどうするのですか。君は肉弾戦では不利なのは身をもって知っているでしょう。」

「はっ！申し訳ありません！九鬼警視！」

玄弥は、この男を上官として見ているのか。

だが、この男の目は、

「銃器中隊の移動許可は？」

「はっ！許可取り完了しました！」

「ならば、今は用はありませんね。銃器中隊の活動の視察をします、案内なさい。」

「はっ！ではこちらに。風柱殿、稽古の件は頼みました、失礼します。」

「玄弥！行くな！アイツは、お前を生かしておくつもりなどないぞ！！
玄弥！！」

シン

「あは…ははは…！」

バン

「風柱様！どうされましたか！」

「隠がきたが、今はどうだっというい。

「九鬼大和…！俺の唯一さえ奪うのか！！」

不死川玄弥 side

嘘で塗り固めた虚像の経歴を、兄貴に話した。

激昂して暴力に走ると思っていたけど、兄貴は俺が思うよりずっと大人だった。

最後の言葉は、身にしみてわかっている。

「不死川中尉、立場を弁えた行動をしなさい。血縁であろうとも、君は軍人、相手は傭兵です。中尉が直接訪問する理由はありません。手紙や部下を送り込むことに慣れなさい。」

「はい…九鬼警視」

そう、俺は一応、中隊の隊長でもあるから、部下に伝言を頼めば済む話だったんだ。でも、俺が直接訪問をした理由は、

「あの時…兄上に謝罪した君は、何を言おうとしていた。」

ああ…分かっているんだな。それである都合のいい時機に割り込めたんだ。

「はあ…大方検討はついていますますが、ソレは全てが終わった後に言ってもらいます。少なくとも、今言う理由はない。」

軍に移籍する前に言いましたよね、『演技を嘘を貫き通せ』と。」

「はい…私が軽率でした。」

「君のそういう【狡猾さ】も含めて、軍人に相応しいと思っています。お願いですから、私を失望…させないで下さいね。」

釘を刺された、もう同じ手は使えない。

「君の望みは、しっかりと果たします。安心なさい、未来ある憲兵中尉殿。」

「はっ…!」

でも、これが俺の選んだ道なんだ。

不思議なお茶会

『ローズマリー様、おはようございます。』

私の部屋にはカーテンはない、必要ないからだ。

本当は野外生活でもよかったけど、立场上出来ないから仕方なく太陽が一番入る南向きの部屋を自室としている。

『おはようございます、イーサン軍医。』

この所は、イーサン軍医が開発した藤の花を入れ込んだ食事を食べているからなのか、うたた寝の頻度が下がってきている。

これなら、12月にやってくる【合同軍事演習の指揮官】と問題なく会えそうだ。

今は11月…、横浜の教会と何度も予定合わせをしてもらった。今日は、

『ウイリアム神父が昼にこちらにやってくるそうです。珍しいですね、あの方は根っからの聖職者だというのに』

『はい、お恥ずかしい話ですが、両親と会えないなら、神父さんと久しぶりに談笑したいのです。』

『ローズマリー様は10歳です。親が恋しいのは当たり前です。確かに、ローズマリー様の最初の保護者はあの方でしたね。そう言うことでしたら…ランチはサンドウィッチなどの軽い物の方が良さそうですね。コックに連絡を入れましょう。』

『ありがとうございます』

『では、今日の検査を開始します。』

数時間後…

『終わりました。それでは私はこちらで失礼します。』

『お疲れ様でした。イーサン軍医』

『さて…お茶会の準備をしようかな。』

▽▽▽

数時間後…

『ローズマリー特命連絡員、お久しぶりです。』

前回の面会では、司祭の正装であったが、今回はスーツを着込んでやって来た。

『お久しぶりです。さあウィリアム神父様、こちらに。』

軽い食事、アフタヌーンティーを置いた南向きの部屋に案内した。

そして、席についたウィリアム神父は、

『今日はローズマリー特命連絡員にお土産を持って来ました。』

机には布で包まれた物を置かれた。

『教会で作ったジャムです。Winter Cherry…日本名では、【ほおずき】。今年収穫して直ぐに瓶詰めをした新鮮なジャムです。』

『ありがとうございます。』

これ…瓶の蓋が下になっている。

それに、ウィリアム神父は日本語に堪能。

ジャムの原材料をわざわざ英語で言ったあとに、日本語に訂正するのは少しおかしい。

…食用のホオズキ…。

私が九鬼さんに頼んでウィリアム神父宛に送った花は、【ピワ】。手紙に直接書き込めない内容だから花言葉を利用し…同じ手か!!

ホオズキの花言葉は、【ごまかし】

そして、瓶詰めは反対。

つまり…【これからの会話は全て反対の意味で説明しろ】と言うことか。

『お土産…ありがとうございます。』

瓶をそのまま反対に手元で置く。これがおそらくは暗号になっている。

『大使館の食事には敵わないですが、我々が出せる精一杯の気持ちです。』

『食事…』

ここから不自然にならないように、青い彼岸花に繋げる？

！
そういえば、青い彼岸花は大きなツクシのような形状だった…はず

『食事で思い出しました。ウイリアム神父、私と交流を進めていた時期の事を、覚えておいででしょうか？』

『もちろん、忘れることなどできるはずもない。』

『覚えておいでですか？私が春に「タンポポ」を持ち込んで、軽く外で揚げたのを。』（7話）

性格に言えば、タンポポを持ち込んだのは本当のことだが、揚げた事はない。

『ええ…覚えています。懐かしい思い出ですね。』

間があつた。嘘を混ぜ込んだことに気づいたんだ。

手元のお土産を回転させながら話す。

『今度は私が、神父様をお願いしたいのです。あの時、私が神父様に渡したのは、タンポポでした。同じ揚げ物で美味しい山菜はもう一つ：「ツクシ」です。私はタンポポを森で取ってきた。今度は、神父様が私に「ツクシ」を持ってきて欲しいのです。』

『森…ですか？しかし私は宣教師、森に入るには日本人所有者の許可が必要です。早々に許可がおりるとは思えません。』

『竈門炭治郎、彼は雲取山という山の所有者です。神父様は彼とはそこそこの仲だと、聞きました。森でツクシを取るだけならば、今日中にでも許可がおりるはずです。』

ウイリアム神父は立場が立場だから、公で非公認組織の傭兵と、仲良く振る舞うことは出来ないが、ただの子どもと交流する程度ならば、問題ない。

『彼が…ですか？分かりました。ハリス大使も「娘の希望を叶えて欲しい」と仰っていましたので、炭治郎君の許可を得たい、教会の植物に詳しい者と共に、山でツクシを持ってきましょう。』

確か…青い彼岸花が咲いていない時は、「大きなツクシ」のような見た目だったはず。

コトシ

『ツクシの季節は春。冬が近づいている今の時期には、見つかつても小さなツクシしかないでしょうが、できる限り多く、私の手元に欲しいです。また一緒に、素揚げして食べましょう。』

『はい、できる限り多くのツクシを、ローズマリーの手元に持つてきましょう。お元氣そうで良かった。私はここで失礼します。またお会いしましょう、ローズマリー特命連絡員。』

『またお会いする時を楽しみに待っています。』

バタン

私の意図を読み取ってくれただろうか…。大丈夫…：会話に不自然なところはなかったもの。

『ローズマリー様、ジャムはどうしますか？』

『リアムさん、そうですね…：折角の教会の味です。今から食べます。』

『ならば、パンを数枚持ち込みます。お待ちくださいませ。』

パタン

油断も隙もない。騙し通さなければ…：不老不死の源を。

▽▽▽

ウイリアム・ヤコブ・ウイステイリア side

ローズマリーがわざわざ、日本人に頼んで教会宛に花を贈った時点で、何かを秘密裏に伝えたかったのは、明白だった。

でも…：まさか、それが「不老不死の花」だったとは。

Loquat (ロークワット) 日本名ではビワの花。

教会にある本は、何も聖書関連の物だけではない。

信徒から贈られた古本もある。

その中に、花言葉辞典があつたのは、彼女も知っている。
ロークワットの花言葉は、

【治癒】

【あなたに打ち明ける】

【密かな告白】

普通の人は、ロークワットの最初の花言葉を教会に伝えたいと思う。でも、私のような彼女の裏側を知っている者から見れば、彼女が本当に伝えたかったのは、国には公表できないオニの話だと察してしまふ。

あの子は本当の意味で、1人になれない。

だから、花言葉などという、複数の意味で捉えられて、かつ教会に渡すのに不自然ではない物に、言葉を託すしかないのだ。

だから、私もそれに倣つて、Winter Cherry:冬のサクランボという名の、ホオズキのジャムを贈つた。

ホオズキの花言葉は、「ごまかし」。

瓶を反対にして渡したから、会話は全て反対の意味で捉える。

竈門炭治郎

雲取山

季節外れのツクシ

竈門炭治郎と雲取山の時は、彼女は瓶詰めを正しい位置に置いていた。つまりコレは、そのままの意味で捉えていいものだ。

だけど、季節外れのツクシの時は、瓶詰めを反対に置いた。つまりは、

『覚えておいでですか？私が春に「タンポポ」を持ち込んで、軽く外で揚げたのを。』

タンポポを持ち込んだのは事実。でも、揚げた覚えはない。

植物の話では嘘をついた。

そして、

『今度は私が、神父様をお願いしたいのです。あの時、私が神父様に渡したのは、タンポポでした。同じ揚げ物で美味しい山菜はもう一つ：

「ツクシ」です。私はタンポポを森で取ってきた。今度は、神父様が私に「ツクシ」を持ってきて欲しいのです。』

ツクシ：食べられるが、好き好んで食べる人は余りいない。彼女の服装から元々は裕福な家柄だったはず。

思いつきの味でもない、ありふれた物を、大使のご息女となった今になって、私に求めるのは不自然すぎる。

『ツクシの季節は春。冬が近づいている今の時期には、見つかったも小さなツクシしかないでしょうが、できる限り多く、私の手元に欲しいです。また一緒に、素揚げして食べましょう。』

この時は、瓶詰めを反対の位置に固定してから話した。

「小さなツクシ」は、通常よりも大きなツクシ。

【できる限り多く手元に欲しい】は、全て破棄しろという意味。

素揚げして食べましょう。は、揚げる：一度火に通す。つまり、焼却処分：。

総じて、彼女の言いたかった告白は、

【大きなツクシ、もしくは通常見かけない花は全て焼却処分して欲しい。それが、オニという名の不老不死の元凶。】か。

竈門炭治郎君の妹さんが、人を喰べない理由は、その【大きなツクシ】を食用として食べていたから。

でも、彼女以外の例外が見られないという事は、その【大きなツクシ】は、クモトリヤマ以外には生息していない。

彼の住むヤマさえ、処分できれば2度とオニなどという化け物は生まれません。

いつそ：そのクモトリヤマを放火してしまえば、手っ取り早いし確実だけど、今となつてはキサツタイは正当な国家の部隊。

それに日本側も気づいているはず、例外が生まれた理由について。そこに、私が行動を起こせば、【大きなツクシ】が【不老不死の原料】だと気づかれてしまう。不自然にならないように、雲取山に入らないと。

「その君、聞きたいことがあるのだが。」

今のキサツタイは軍人もいる。日本兵なら私たちのようなお客様

には、丁寧に対応してくれる。

「九鬼警視からお話は伺っております。ご用命を。」

「キサツタイの竈門炭治郎君に会いたいのだが、今はどこにいるのかね?」

「竈門炭治郎ですか、今は岩柱の下で修行しております。呼び出しでしょうか?」

「いや…こちらが頼む側だ。そのイワハシラ?の場所に行きたい。」

「車の手配をします。少々お待ちくださいませ。」

外部者に対しての反応はそこそこ…か。

1000年も閉鎖空間に閉じこもっていた集団と考えれば、だいぶ国の指導が入ったのだろう。

「お待たせ致しました。どうぞ。」

「ありがとう」

ブルル

ガタン

ゴドン

「随分と山の中なのですね?」

この国はアメリカとは異なり、田舎道ほど道の整理が出来ていない。その分、車だと揺れる。

「もう直ぐ着きます。あっ! つきました!」

「何者だ!」

「銃器中隊の者だ。米国の軍人専属相談役カウンセラーの事が、竈門炭治郎への面会を求めている。早く連れ出せ!」

「はっ!!」

「とりあえず室内へ」

「はい。」

キサツタイシは血の気が多い。外国人への警戒心も強い中で、単独行動は出来まい。大人しく日本兵の指示に従うか。

「こちらは陸軍の休憩室です。しばしお待ちを。」

カタン

さて：…どうやって許可を得ようか。

あの件（22話）があつて以降、私たちの繋がりには切れたようなもの。今更、友好的に接しても白々しいだけだろう。ならば、権力で押ししかない。

「ウイステイリアさん、お待たせしました！何のご用ですか！」

最後に会った日から逞しく育っている。

「今日は君にお願い：…いえ、命令を伝えにきました。」

「命令？」

「ローズマリー特命連絡員の希望により、私と同伴者一名を、クモトリヤマへの入山許可を頂きます。」

「えっ：…？」

▽▽▽

竈門炭治郎 side

岩柱邸で修行に打ち込む日々を過ごしていた、今日もそんな普通の日だった。

「竈門炭治郎！竈門炭治郎！」

鬼殺隊士とは別行動をしている軍人は、基本的に俺たちに介入してこない。

「おい、炭治郎。お前何したんだよ」

「軍人に名前を呼ばれるなんて。」

善逸と村田さんの言葉には俺も驚いた。

「いたか、竈門炭治郎。今直ぐ陸軍の休憩室に出向け、客人だ。」

「客人？俺にですか？」

陸軍の軍人が俺を呼びに来ると言うことは、相手は国の役人か？

「あ、あの俺に会いたい人とは？」

「米国が派遣した軍人専属の相談役だ。ウィリアム・ウイステイリアと言いうらしい。どうやら、特命連絡員の伝言を兼ねてだそうだ。失礼のないようにな。」

「はい！」

米国の関係者…でも何故、宣教師のウイステイリアさんが？

「ウイステイリアさん、お待ちせしました！何のご用ですか？」
前に会った時のような緩やかな服装ではなかった。

スーツを着込み、背筋を伸ばす姿は、何かしらの圧を感じた。

「今日は君にお願い…いえ、命令を伝えにきました。」

「命令？」

俺は鬼殺隊士だ。九鬼さんのような立場の人からの命令ならともかく、外国人のウイステイリアさんが、命令？

「ローズマリー特命連絡員の希望により、私と同伴者一名を、クモトリヤマへの入山許可を頂きます。」

「えっ…？」

雲取山、俺の育った山に入る？特に産物もない山に、宣教師が？

「ウイステイリアさん、あの山には特に産物はないですよ。何故急に、ローズマリーお嬢様の名前が出てくるのですか？」

ローズマリーさんは、お飾りと言われても、一国の役人。

その人の名前を出すのは…、権力の行使…だ。

「君は知らないかもしれないが、ローズマリーは君の妹と違い、人間には戻れない。」

「ローズマリー…さんが？えっ！でも禰豆子と同じ【陽光を克服した鬼】なのにな？」

禰豆子は戻るのに、ローズマリーさんは戻れない？

人間化薬は珠世さん達が創っている。

他国大使のお嬢様なら、禰豆子よりも優先的に使われるはずなのに！

「やはり…知らなかったんですね。」

一瞬、俺に哀れみの目を向けたが、直ぐに九鬼さんのような目に戻した。

「詳しく…教えてください。何故、同じ鬼でありながら、妹は戻れて、ローズマリーお嬢様は戻れないのかを。」

「元より教えるつもりでした。そもそもこの話、【陽光を克服する】前提が違ったのです。君の妹は《人の細胞》を増やすことで限りなく、人に近づいた事により、陽光を克服できた。

でも…ローズマリーは違う。

ローズマリーはオニの細胞を《植物の細胞》で覆い尽くすことにより、陽光を克服したかのように見せかけたのです。ローズマリーは例に当てるならば、雨に濡れないように傘を差しただけで、人はそれをあたかも、【陽光を克服した】と思い込んでいるだけなのです。

はつきりと言います。植物の細胞で覆われた今の彼女が、人のように動くこと、思考することが出来るのは、鬼の細胞のお陰です。

つまり、鬼が滅びたら、彼女はただの植物になる。

それは、ローズマリー・ベネットという…一人の人間の死です。」
ウイステイリアさんの目には、僅かながら【怒り】の灯火が見えた。

「それと…俺の実家に足を入れることと、何か関係が？」

「ローズマリー特命連絡員の命は長くない。ローズマリーの父上もそれを前提に動いている。だからこそ…ローズマリーの我儘は、全て叶えようとしているし、国も貴重な不老不死者のご機嫌取りは、許可を出している。」

今回のローズマリーの我儘が【私に山でツクシを取ってきて欲しい】だったのです。

しかし、君なら分かると思いますが、ツクシの旬は春。今の季節では市販品はありません。しかも、ローズマリーの我儘は「山で取ったツクシ」です。だからこそ、一番入山許可が降りやすく、山特有の危険性が低い場所の所有者に、許可取りをしたかったのです。」

他国大使も積極的に、ローズマリーさんの願いを叶えると公言したと言うことは、俺が許可を出さなくても、九鬼さんが許可を出さずだろう。

「分かりました。俺の所有する山の入山許可を出します。」
「ありがとうございます。では炭治郎君、ごきげんよう。」
そう言い、ウイステイリアさんは久しぶりに微笑んで、隣の軍人に連れられて岩柱邸を後にした。

▽▽▽

ウイリアム・ヤコブ・ウイステイリア side

許可は取れた。日本政府が勘付く前に処分しなければ。

『あら？ウイリアム神父、早かったですね。』

『ローズマリーはお元気でしたか？』

シスターには、ローズマリーに会うだけとしか言っていない。

『ええ、^ご両親に愛されて、護衛にも大切にされています。』

良くも悪くも……1人の時間を持ってないほど、人に囲まれて暮らしている。最も、それが良い意味なのか、悪い意味なのかは、不明だが。

『そういうえば……植物に詳しい方は何処に？』

トントン

『イエズス会より派遣されました、リースです。本部より聞いております。出発しますか？』

植物学者と聞いていたが、想像よりもガタイが良い。

『ええ、ローズマリー特命連絡員だったの願いです。君の植物研究の一環もありますから、今直ぐ出発しましょう。』

シスター、私と彼は一週間ほど教会を離れます。』

『はい、分かりました。それではお気をつけて』

パタン

mission【大きなツクシ】を絶滅させよ！

「あら？異人さんかい。」

ほんわかとした老女

「大きなあ」

子どもたち

「失礼しましたあー！」

慣れていないのだろう、距離を取る若者。

『私たちの見た目は、やはりこの国では目立ちますね。』

『そうですね、リースさん。』

ローズマリーに会う前は、この対応に慣れていなかったが、ローズマリーが教えてくれた「日本人から見た外国人」への印象を知った今となつては、対応も慣れた。

「あの一、君、ちよつといいかい？」

「なんだよ、異人さん」

日本人には日本語で話す。少し間において日本語が話せる事を示す。そして、できるだけ14〜15歳に話しかけるのがポイントだ。

クモトリヤマは、山の中だ。普段から山の地形に詳しいのは、現地民の子ども。幼すぎると聞き取りできないし、大人だと街の住人に慕われている竈門一族の住処を、外国人が入り込むことに警戒してしまう。

下手したら警察に連絡をされてしまい、日本人の警護がついてしまう。

「クモトリヤマに入りたいのだが…カマドさんのヤマには、この時期にもツクシがあると聞いてね。差し入れしたいのだが、カマドさんの家に案内してくれるか？」

「異人があ？んじゃ俺よりも詳しい奴を紹介してやるよ。ついて来い！」

『どうされるので？』

『ついて行きましょう』

怪訝な顔をされてはいるが、万一があろうとも子ども1人に、私たちが負ける訳がない。

しばらく歩き、クモトリヤマの麓に着いた。

『ここが例の山ですか。』

リース氏は植物学者だ。外側の植物を見ている。

交渉は、私の仕事だな。

「三郎爺さん！お客さんを連れて来たよ!!」

ガラツ

小さい小屋のような所に、日本特有の傘を作っているお爺さんが中にはいた。

「なんだい太郎、こんな山に客なんざ：何のようだい、異人さん方。」

一瞬、固まったお爺さんだったが、すぐに私たちの目を見る：いや、睨みつけてきた。

「クモトリヤマに、正確に言えばタンジロー君の家への道のりを教えてください。できるならば地形も知りたいです。」

今日ここに来た目的は、大きなツクシの絶滅。

炭治郎一家が定期的に摂取できていたとすれば、場所は大人が1日で往復できる距離になる。

「何の目的だい？あの山はお前たち異人が、欲しがるような面白いモンなんざないが？」

疑っているな：それにこの山の麓に住んでいるならば、炭治郎君たちと親しい間柄。外国人と交流があると思わないだろう。

それにこの人は、炭治郎君の話からすれば、オニガリを知っている。

「あのヤマのシヨユーシャ（所有者）であるタンジロー君からの許可はもらってイマス。このヤマには、『大きなツクシ』があると聞きました。ソレの研究材料を採取しに来たのです。」

炭治郎君の名前を出すことは、正直かなりの賭けだ。

だが、疑われて警察に行かれるよりはマシだ。

「ツクシ：：かあ？こんな冬の時期にあるとは思えんが。だが、炭治郎

の名前を出す所からみれば、お前たちは嘘はついていないようだな。
：わかった。炭治郎の家に案内する。」

「ありがとうございます」

『リースさん、案内できるそうです。』

『では、早速行きましょう。』

「では、早速案内してください。タロー君、今日はありがとう、コレは君の好きなように使ってネ。」

財布には硬貨があったはず、流石にこの年の子供に紙幣はダメだ。
これでいいか。

「わあ！50銭硬貨?!いいの！ありがとうございます！異人さん！」

「大切に使えよ、太郎。」

「うん！三郎爺さん！じゃあね！」

よし！現地の案内人は大きい。

「では、よろしくお願いします。」

「ああ…」

あまり気乗りはしていないようだが、炭治郎君の客人である私たちを、危険に晒すような真似はしないだろう。

▽▽▽

ガシユ

ガシユ

「タンジロー君から聞いてはいましたが、ホントーにヤマの中なのですね。」

現在、3名で登山をしている。

先頭を三郎さん、植物学者で体力があるリースさんが二番手、普段は平地で過ごしている私が一番最後だ。炭治郎君、いつもこんな道を

通っていたのか。

『まだ昼間ですし、休憩を入れましようか？ウイリアム神父。』

『いえ、結構です。』

期限は今日を入れても一週間、ならば早く拠点地である炭治郎君の家に到着しなければ。

登山中は体力温存のために、会話は必要最低限だ。ある程度舗装されているとはいえ、ただ闇雲に見知らぬ土地を登り続ける事が、苦痛だとは思いつまなかつた。

「おい異人さん、着いたぞ。」

一気に視界が広がる。木がない開いた土地になった。

「ここが…炭治郎君が住んでいた場所か。」

「オジヤマシマース！」

ガラッ

埃かぶっていると思っていたが、

『思ったよりも綺麗です。掃除する必要がないのは嬉しい誤算ですね、ウイリアム神父。』

『そうですね、リースさん。』

随分と町の人に好かれているようだ。家主がいない山の家に、掃除に来る人がいるとは。

「ここを拠点にして、【大きなツクシ】を探すんだろ？ツクシはしらねえが、お前たち食材は持って来ているのか？」

「ええ、モチロンです。」

一週間分の食材とマツチを持ってきている。それに大人の足なら、町へ降りるのもそこまで時間はかからない。目印もたくさん付けた。「お前らの前にも《炭治郎の許可を得た》と言って、役人が来ていた。そいつらも、この山の植物や動物を採取していたな。」

「…そうですね。」

予想はしていたことだ。キサツタイが政府公認となった上、ネズコお嬢さんは、あり得ないイレギュラーになった。

となれば…血筋と同時に、後天的に克服の材料を採取していたと考えるのは当然だ。

「お前たちも前の役人共と同じ理由だろうし、炭治郎が許可を出しているのならば、俺たちが口出しできる話でもねえ。そこそこいい身分なお前たちが、警護の1人もつけずに来るなんざ、表には出せねえ案件なんだろう？お前のその、わざとらしい日本語も含めてな。」

ただの老人ではなかったようだ。バレたのなら誤魔化す必要もないか。

「私の演技に気づかれたとは、恐れ入ります。」

「やっぱりお前の本質はそれか。まあいいさ、お前たちは炭治郎に危害を加えるつもりではないのは、分かりきっているしな。」

はあ：役人と軍人共の緊迫した捜索に比べりゃあ、お前たちは穏やかな方だしな。」

「理由は聞かないのですね。」

普通の山に日本政府の役人と軍人がやって来て、この山の周囲にある植物、動物を採取して回る。その上、炭治郎君の家族は原因不明の殺害。異常事態だ。

「聞けば：答えるのか？答えないなら、役人も軍人も、そして：お前たちも。その上、俺は元の生活には戻れなくなる。」

俺は何も知らない。

知らされる事もない。

だから、お前たちが何をしようとも、俺は止めない。」

「ご配慮：ありがとうございます。」

「：何かあれば、俺の家を訪ねろ。」

そう言った《三郎爺さん》は山を下っていった。

『さて：私たちも探しますか。』

『はい、リースさん』

日本人がまた来る前に、処分をしなければ。



1日目

あたりの地形と、日本軍が調べた痕跡を地図に記した。

2日目

筋肉痛が痛い…だけど、1日目で分かった事がある。

『リースさん、日本人が調べた場所は、搜索範囲から外しましょう。』
『ええ、山菜の乱獲が激しい。それに、あそこまで調べているのなら、目的の物はないでしょう。』

そして、女性である母親が日帰りで帰れる場所を中心に、迷わないように注意しながら搜索した。

残念ながら、大きなツクシは見つからなかった。

3日目

そう言えば…炭治郎君…子どもも、山菜を取りに行っていたと聞いたな。

『リースさん、大人の足で往復できる距離だけでなく、子どもの足も基準に入れるべきでは？炭治郎君も山菜を取りに行っていたそうです。』

『なるほど、それならば子供の遊び場所も視野に入れるべきですね。とはいえ…』

『子どもが行きたがる場所なんて、私たちは知りませんよね。』

私たちは両方、裕福な家庭で不自由なく生きて来た。だからこそ、本当の意味では、炭治郎君たちの行動を把握できない。

『うーん、私たちは頻繁に服やおもちや、お菓子を与えられていましたよね。』

『確かに…幼少期の思い出といえば、おもちやとか、チョコレートとかです。』

私の実家は貿易商人だ。外国のおもちやもよく貰っていたな。

『ですが、服を新調するのも出来ないような家庭では、そんな思い出はあるわけがありませんからねえ。』

『山の中ですし…身近なお気に入りの場所とは…少し遠い秘密基地とか？』

自分で言うと思うが、食事にも困るような家庭で、遊び回れるか？

『秘密基地ですか、懐かしいですね。私も公園の木にハンモックをかけようとして、怒られたものです。』

『いい線はいつているはずです。うーん、あつ！女の子もいるなら綺麗な場所とか！』

結局、この日は「子どもが行きたがる場所」の話で盛り上がってしまい、搜索はできなかった。

4日目

時間が迫って来ている。さすがに今日は搜索に集中するべきだ。

『リースさん、「大きなツクシ」を見つけるのを最優先としますが、珍しい花とかも採取してください。土壤の問題かと思えます。』

『ええ、私も一番はこの山の土壤だと考えています。それと一つだけ気になったのですが、この国には火葬と土葬の文化が入り乱れていますよね、あの墓石も土葬の証です。もし、その特異な土壤が死体を埋めていたから普通の土では無くなったと仮定すれば…、過去を遡ると、その特異な土壤を見つける事が出来るのでは？』

特異な土壤は死体を埋めたから…。肯定は出来ないけど、否定する理由もない。

『そのような考えも出来ますね、そうすると…やはりこの拠点から1日で往復できる距離になります。炭治郎君に聞いたところ、数100年、この拠点は動いていないそうです。』

『なるほど…どうりで小さい子屋だと思いました。』

『探しましょう、私たちがこの山に来ていると、日本政府側にバレたら、あらぬ誤解をされてしまいます。』

『そうですね。』

範囲を再度確認できた。そうか…死体を埋めたから…か。

ネズコお嬢さんの状態を見ると、それも否定できないから、恐ろしい。

5日目

昨日も探したが、大きなツクシも、珍しい花も見つけられずに、半分以上過ぎてしまった。

後2日で、見つけ出さなくてはならない。

このリース氏よりも早く。

保存食で作った料理を食べていたところ、

『ウイリアム神父』

『何ででしょうかリースさん?』

『時間が迫って来ています。これまでは、遭難を避けるために2人1組で行動をしていましたが、ウイリアム神父もこの山に慣れてきましたので、別行動を取るべきです。』

ついに来たか…。相手は植物学者、山に慣れているからこそ、山の危険性を危惧して、効率よりも、安全性を配慮してくれたが、5日も山に入り込んで捜索していれば、嫌でも慣れてしまう。

その上、熊や鹿などの大型生物は、先に来ていた軍人が、あらかた狩ってしまったているのもあり、安全性も高い。

『えっ…。しかし、私の本職は『ウイリアム神父、確かに私も山慣れしていない人を、1人行動させる事はしたくはありません。しかし、時間が迫って来ている上、この山の安全性の高さを思えば、別行動するべきです。』

『わかりました…。探します。』

緊急案件だが、正直いうと別行動は避けなかった。

私は「大きなツクシ」を焼却処分するが、リース氏は根っからの学者だ。「不老不死の植物」をこっそり研究しないと保証できない中で、単独行動は避けたい。

しかし、確かにこの山の安全性が確保されている現状で、リース氏の言い分は正当だ。ぐすぐすと渋れば、疑われてしまう。

6日目

私は見つける事が叶わず、リース氏も表向きは見つからなかったと言っているが、別行動をした手前、それが真実である保証はない。

それとなく、リュックの中身を見たが、何もなかったとはいえ、油断はできない。

『私は山の中間に焦点を絞り込む事にしました。ウイリアム神父はどうしますか?』

『私は川の先に進む事にしました。子どもが好みそうな場所がありま

してね。昼食もそこで済ませよう。』
『では、今日も単独行動で進みましょう。』

ザツ

ザツ

洗濯に使っていたらう川の先に進む、もし、炭治郎君が「大きなツクシ」を見たとすれば、年齢は一桁。家族仲が良かったと聞いたし、そうなれば母親が同行するだろう。幼子と母が無理なく行ける距離かつ、万一、暗くなつたとしても、帰りやすい場所。つまりは、拠点地以外で、よく行く場所。

『やっぱり、この鈴付きの紐、最近の物ではない。』

最初こそ、先に来た軍人が張った物だと思っていたが。

山に詳しくなくても、知っている。

野生動物、特に肉食獣から身を守るために、棲家の境界線に音がなる罠を仕込む事があると聞いた事がある。

炭治郎君の父親は、病弱でありながら、熊を一撃で倒せたと聞いた。最初こそ、記憶違いの妄想と判断していたけど、今の炭治郎君の強さを思えば、本当のことだったのだろう。

と、なれば、この土地の周辺は、炭治郎君にとって馴染み深い場所になる。

炭治郎君が、父亡き後もよく来ていた場所だろう此処と、近場で山菜がとれる場所。

バツ

『うわっ！』

随分とひらけた場所になった。太陽に晒されて、冬の寒さが染み入るが、悪い感覚でもない。私もいつかこんな清々しい場所に墓を……ん？

『幼子と母の足で往復できる距離、かつ、山の中とは思えないほど、ひらけた場所、そして……墓を建てたいと思える場所……。』

まさか……!!

墓石はあるか？

なくても、何かしらの痕跡が残っているはずだ。石は数100年程度では、原型をなくさない。

幸いこの周辺には、草が多い。

ガツン

『痛!!』

つい、足元がおぼついでしまった。革靴だったからまだ良かった。これで柔らかい素材の靴を履いてたら大怪我をしてしまう所だった。

って！石い!!

この石を中心に半径1メートル、季節外れのツクシ。これが？

『よし、土壌だけ少し持って帰って…』

ツクシの外側に延焼しないように、少しだけ大きめの円形の穴を掘った。

『土壌があれば、復活する可能性もあるから、乾物の肉も一緒に混ぜ込もう』

専門家ではないから、不十分な対応だろうけど、スコップで内側のツクシごと掘り返して、肉を混ぜてぐちゃぐちゃにした。

『そして、此処で火を起こす。よかった、薪を1つだけとはいえ、持ち込んでいて。』

パチ

パチパチ

一応、疑われないように、保存食も口に入れるか。

このパンは、保存食だけに、味も風味もイマイチだ。水でふやかして食べるのが一般的だと、リース氏は言っていたが、水筒の水は火消しに使いたいから、残しておくか。土で火を消すそうだけど、外側とは言え、ツクシの近くの土を入れたら、復活する危険性もある。

水で消すのが一番確実だ。

『よし、燃え尽きたな。仕上げに』

バシヤ

バシヤ

此処にツクシが生えていたということは、この場所の下には遺体がある。理由があるにせよ、墓の上でジャーキーを土に混ぜ込んだの

だ。

謝罪はするべきだろう。

『名も知らない人よ、どうか貴方が来世でこそ、幸運を手に入れる事ができますように。：アーメン。』

この人が幸せに生涯を終える事が出来たのかは、わからない。けど、此処は日本。日本の考えに従うべきだろう。

『来世…か。本国にいたときは絶対に口にしなかつただろう。』

他にもツクシがないか調べたが、あの墓石周辺以外には発見できなかった。

7日目

今日は最終日だ。

ツクシの近くにある土は、とりあえず採取したが、本来なら、こんなパンドラの箱になりかねないモノは捨てたい。

だが、どこかでまた「ツクシ」が自生されたら、困る。

あまりしたくなかったが、私は昨日、帰りの道中、採取した土を自らの身体に入れた。

土だから当然、不味かった。

そして、やはり本来口に入れるべきではないモノを摂取したせいで、私は、

『ゴホ、ゴホ』

『ウィリアム神父、やはり、慣れない土地での生活は堪えてしまいましたか。』

『ゴホ！リースさん…私は大丈夫です。大きなツクシを探してください。』

白々しい嘘を言ってしまった。

だが、今の私は病人だ。送り出さないとそれはそれで不自然。

『はい、なるべく早く戻って来ます。』

『ゴホッ！』

硬いパンで誤魔化していたけど、土は食べるものではないな。

ゴホッ…！

最終日では、リース氏は「大きなツクシ」発見ならずで、滞在期間

を終えた。

とりあえず、ローズマリーの願いは叶った…かな？

『どうか、身体にはお気をつけてください。』

『ゴホッ！ありがとうございます。リースさん。』

▽▽▽

三郎爺さん side

秋に差し掛かった頃だった。

町が騒がしくなったのは。

小さな町に、明らかに高いスーツを着込んだ役人が1人、それを警護するような軍人が数十人。

役人は自動車で、軍人も軍用トラックに乗って町に押し寄せた。

当然、町人は混乱した。

「何があつたのか？」

「軍人はともかく、なぜ役人が来た？」

役人：九鬼大和と名乗った男は、雲取山を陸軍の新しい訓練場所にしたいから、竈門一族と良好な関係を築いていた俺を名指し、

「国としての命令です。雲取山の地形、生息動植物を余す事なく全て、報告並びに案内すること。」

山の麓にある寂れた俺の家に、銃口をちらつかせた軍人を侍らせながら、命令し、

「無論、あなたの生活を脅かすつもりはないです。雲取山を案内している時間帯は、ちゃんと給金を払います。では、案内を。」

どこまでも、高圧的であり、山に入れば山菜を中心に、根こそぎ採取をする始末。流石に、山菜全てを取られたら2度と同じモノが取れなくなるかと忠告すれば、

「山の掟…ですか。なるほど、理にかなった考えです。お前たち！必ず1つは残すように！」

「はっ!!」

高圧的ではあるが…、話を聞かない無礼者ではないようだ。

そんな流れで、雲取山を人海戦術の如く、山菜を、動物を狩った国の集団は、二週間程度で撤退した。

そして、冬がやってきた。

また、町が騒がしくなり、例の集団が来たのかと思っていたが、

「えっ！異人がこんな町に？」

「マジかよ、なあ！ちよつと見てこないか！」

「いいぜ！行こう行こう！」

嫌な予感はしていた。そして、

「三郎爺さん！お客さんを連れて来たよ!!」

町の子ども、太郎が連れて来たのは、その噂の異人だった。

「クモトリヤマに、正確にいえばタンジロー君の家への道のりを教えてください。できるならば地形も知りたいです。」

鬼殺隊が政府公認になったのは、前の役人の件で知ってはいた。だが、まさか異人まで関わり、炭治郎の名を出すとは。

「何の目的だい？あの山はお前たち異人が、欲しがるような面白いモンなんざないが？」

それにこの異人、話し言葉は完璧なのに、音程だけを外している。

「あのヤマのショユューシャ(所有者)であるタンジロー君からの許可はもらってイマス。このヤマには、『大きなツクシ』があると聞きました。ソレの研究材料を採取しに来たのです。」

炭治郎が許可を出した…か。隣の一言も話さない異人は学者なのか。

それにこいつら、服の質が高い。山に入るといふのに、革靴を履いているという事は、本来の立場なら、山とは無縁の身分か。

学者さんに至っては、ハンカチーフは絹製だ。

揃って上流階級。警護をつけないのは、日本人に知られたくない案件か。

「…わかった。炭治郎の家に案内する。」

そして登山をすれば、通訳の異人が山に慣れていないのが、丸わかりだ。普段は横浜あたりにいる商人といった感じか。

途中で、山に慣れている方の異人が話しかけていたが、そのまま登り続け、炭治郎の家に着いた。

2人はまた何かしらを話していたが、背中袋（リュック）に入れた食料をおろして、搜索の準備を始めていた。

この2人は、誤魔化してはいるが、一度も嘘をついていないからな。俺なりにお礼でもするか。

「お前たちも前の役人共と同じ理由だろうし、炭治郎が許可を出しているのならば、俺たちが口出しできる話でもねえ。そこそこいい身分なお前たちが、警護の1人もつけずに来るなんざ、表には出せねえ案件なんだろ？お前のその、わざとらしい日本語も含めてな。」

そう言えば、登山に慣れてない異人は、これまでの貼り付けた笑顔から真顔になり、

「私の演技に気づかれたとは、恐れ入ります。」

やはりか…、この男、初めて会った時から目が笑っていないかったからな。本来の性格は、冷静な現実主義者か。

「聞けば…答えるのか？答えないだろ、役人も軍人も、そして…お前たちも。その上、俺は元の生活には戻れなくなる。」

俺は何も知らない。

知らされる事もない。

だから、お前たちが何をしようとも、俺は止めない。」

俺は止められる地位も、立場でもない。

炭治郎と彌豆子が、今とんでもない立ち位置なのを察することはできても、無力だ。だから俺にできることは、あの兄弟に関心がない権力者に、兄弟に関心がある権力者よりも先に、「要らないもの」を処分してもらうことだ。

「ご配慮…ありがとうございます。」

「…何かあれば、俺の家を訪ねろ。」

俺にできることは、それだけなのだから。

近づく死への波音

12月に入った。

私は今、特例大使館から正式な大使館にいる。理由は、

『こちらが私の娘であり、特命連絡員である』

『ローズマリー・ベネットです。初めまして』

ビシッ

『大統領から話は聞いております。お会いできて光栄です。ハリス大使並びに、ローズマリー・ベネット特命連絡員。』

表向きの面会理由は、『日米合同軍事演習』の為に来日した本国の司令官との挨拶。だが、実態は、

『ローズマリー特命連絡員。』

そう言い、左手を出してきた。

『必ずや、この国にいるお嬢様以外の Monster を駆逐してみせましょう。』

私に目線を合わせ、握手をし、微笑みながらも物騒極まりない発言をする。

鬼の存在を予め教えられている少数の1人であり、部下がうっかり死地に巻き込まれないように、それとなく誘導する役割の人だ。

『頼もしいお言葉、安心します。』

握手をする…普通の挨拶だけど、私が鬼であると知った上で握手をする意味を考えると、やはりこの人もまた、覚悟を決めている。

『…さて、2人の挨拶も終わりましたし、ここからは私たちの領域です。リアム、ローズマリーを特例大使館に』

『はい、ハリス大使。ローズマリー様こちらに』

『先に失礼します。お父様、司令官』

当事者とはいえ、あくまでも私はお飾りだ。

真剣な話に口を挟める立場ではないのだと、この時ほど感じた事はないだろう。

『ローズマリーお嬢様、帰りましょう。』

『はい、リアムさん』

そう…どこまでいっても、私は【お嬢様】なんだ。

▽▽▽

ハリス・ベネット side
バタン

『お待ちしておりました、ルーカス・ホワード司令官。』

そう言うと、先程までの和やかな雰囲気から一転した。

『フルネームは長いので、肩書きだけで結構です。こちらこそ初めましてハリス大使。』

『では司令官、実物を観察した結果の心情は？』

ローズマリーと握手をして、目を見ていた。

ただの挨拶ではなく、相手の感情を推し量るための行動でしかない。

『国で観た映像と資料が無ければ、目が縦長な未確認人類種としか思えませんね。言葉が通じ、こちら側に敵意がなければ、問題はない。人を喰べなければ、是非とも引き抜きたいくらいです。』

オニとは、夢の存在だ。【不老不死の兵士】を創れるならば、国も予算は惜しまない。

『【人を喰べないオニ】を創る事は不可能です。』

ローズマリーが特異体質だったからこそ、今の形に収まっただけですが、その分…強靱な肉体を代償としています。とはいえ…権力者にとっては、それでも十分な価値なのではないでしょうか。』

不老不死の实在、ソレの生息地域が日本国内であるからこそ、反日議員の反対を押し切ってまで、本来ならメリットよりもデメリットが多い【合同軍事演習】を行うのだ。

権力者にとって一番の目的は、当然ながら真面目な軍事演習ではな

い。

『オニの絶滅』を見届けるのも2番目の目的でしかなく、1番大切な目的は【不老不死者の帰国】でしかない。

『不老不死…ね…。権力者と呼ばれる人間は何故こうも、永遠に拘るのでしようか。』

私としては名目だけとはいえ特命連絡員に子どもを指名する大統領は馬鹿としかみえませんが。』

『死なない兵士に魅力がないと？』

この人は、私の予想と違う考えのようだ。

『もちろん、軍人として見る分には【死なない兵士】は十分魅力的です。ですが統制の利かない烏合の衆が欲しい訳ではありません。』

オニは、個人プレーしか出来ないのでしょうか？

その上、人肉しか受け付けられない。

我々は部隊で動くのです。勝手に兵士数を減らされるくらいなら、最初からいない方が効率的なのです。』

共食いの習慣も知っているからこそ…か。

効率を優先するならば、確かにオニの部隊は現実的ではないな。

後ろから喰われる可能性の高さも考えれば、最初から造らない方がマシだ。

『なるほど…私も司令官と同じ考えです。』

未知の生物を…ましてや主食が人間の生物を、軍事転用は危険すぎます。では司令官も【絶滅】の方面で進むのですね。』

『はい、ハリス大使。大統領からは〈特命連絡員と予備のオニを数匹捕まえて持ち帰れ。〉と命令されておりますが、私以外の軍人は【オニの存在其の物を知りません。』

軍艦に入れて本国に持ち帰るのは非現実的、最初からローズマリーお嬢様以外、輸送する気はありません。』

『こちらとしても、その考えで動いてくれるのは、助かります。欲張って死亡者が出た方が不利です。』

ところで…作戦内容は？』

『はい、まず合同軍事演習において、我々は南鳥島を占領したという展

開で始めます。』

『南鳥島、T O K Y Oの島で、確かに軍艦で日本を攻め込むなら中間地としては、効率的ですね。』

『はい、そこで合図として【青い薔薇】を渡します。』

ハリス大使はオニの頭領に餌をかける際に、青い薔薇を餌にするのならば、年明け前：ならば1番日の出が早い場所であり、軍事演習で立ち寄っても不思議ではない場所となると、そこしかありません。』

『こちらの要望を受け入れてくれて、ありがとうございます。次は？』
人力で倒せるのならば、それに越した事はないが、千年も内輪揉めをしている組織では無理だろう。

『私の搭乗する軍艦には、小型、固定型紫外線放射装置を持ち込みました。大型は南鳥島に配置します。』

小型機の方は日本側に提供しましょう。こちらが指示できる立場でない以上、キサツタイは日本政府に任せます。』

見えない所であるが、この国は大日本帝国、他国の領土で私兵だったキサツタイならまだしも、帝国軍にまでは手出しできない。

あのクキと呼ばれる男なら、こちらが持ち込んだ武器を効率的に使うだろう。

『外交的にもそれが1番良いでしょう。日本側にも有能な役人がいますので、問題はないます。』

それと、軍事演習の真の目的に勘づいている人はいないのでですか？』

軍事演習に使う兵器は兎も角、明らかに使わない物も大量に持ち込んでいる。物が物だ。なるべく少数かつ、実験用の器具と称しているとはいえ、疑問に思う人がいてもおかしくはない。

『現時点では何とも言えません。確かに大量の小型紫外線放射装置と、照明と称した大型紫外線放射装置には、疑問を抱く者もあります。が、名目としては【健康増進装置の実験】としての持ち込みであり、殆どを日本側に渡すので、どちらかと言うと、

『友好とは言い切れない国を強化するような真似を何故するのか？』
と言った疑問が多いです。』

オニの存在に勘付く軍人はいません。』

『そうですか…』

本国も考えたものだな。太陽を浴びる事による健康増進は、経験則で知られている事。それを軍人に対して行うのは理にかなった実験だ。名目だけなら、誰も疑わないだろう。

『オニの存在が漏れないのなら、計画についての詳細をお願いします。』

『はい、まずは今日中に日本代表に、小型の紫外線放射装置を秘密裏に流し、その後、私たちの艦隊にいる地上部隊の一部は、この国の滞在場所に降ろし、海から攻め込む隊員のみを連れて、南鳥島に行きます。』

そして、合同軍事演習として例の女に「青い薔薇」を手渡させ、TOKYOに向かい、その後は予定通りの演習を行います。』

『司令官はTOKYOから移動する際は、どのような言い訳を？』

オニの存在を知っているのは司令官のみ。

今更の話だが、目撃者は少なくしなければならぬ。

『それは今回の軍事演習において、日本側と正式に決めております。』

日本側には、演習とはいえ、リアリティ追求のために、ある程度の攻撃を受けたら、一部の軍艦の撤退をし、日本側の攻撃が緩やかになったら、またTOKYOに近づく。

…というのを、不定期に行う事も事前決めていきます。だから、こちら側も予め、司令官不在の演習を前提にきていますので、お気になさらず。』

『なるほど…両国ともに、リアリティ重視の演習という名目ですか。』
それなら、途中から司令官が、南鳥島から動かなくても演習上は正常扱いになるのか。

『はい、なので後は…お任せください。計画の変更があれば即座に連絡をします。』

『分かりました、後は頼みます。』

合同軍事演習における交渉、矛盾点の埋め合わせが終わった以上、大使としての一応の仕事の区切りはついた。

後は本職に一任するべき…か。

▽▽▽

主人公 s i d e

合同軍事演習における最高司令官と面会し、私は早々に特例大使館に帰ることになった。

まあ…そうなるよね。

オニであるだけの子どもには、関係のない話だ。

特命連絡員と言う役職も、どうせ名目だけのお飾りなのだし。

でも、何でだろう？…分かっていた事とはいえ、

『蚊帳の外…か。』

当事者であり、この事態の元凶は私なのに、どこまでいつても、私は余所者なのだと思きつけられる。

私の周囲は常に人がいる。護衛という名の監視者でしかないが、ウイリアム神父との交流時期では、1人よりはまじだと思っていた。だけど、教会の温まりを知ってしまった今となつては、人に囲まれて、そこそこ贅沢な生活をさせてもらっていても、拭いきれない虚しさがある。

『贅沢な生活をして、我儘放題な貴族が、蛮行に及んだ理由…今なら分かる気がするな。』

鬼舞辻無惨…今なら少しだけ…アナタの気持ち…共感できる気がするよ。

武器提供と対価

九鬼大和 side

『荷物はこれで全てです。説明書はこちらに記載しています。』
『はい、確かに承りました。ルーカス司令官』

今の場所は陸軍の施設内だ。あの問題児集団…もとい、鬼殺隊士から目を離す事は、正直したくない。だが、連中に付きつきりでは、それこそ本分を果たせない。

今は、不死川中尉率いる【銃器中隊】に雑務の半分は割り当てているが、一部の連中は相変わらずな態度だ。

「九鬼警視、小型の紫外線放射装置を倉庫に配置しました。」

「そうか、ではここに、銃器中隊の軍人だけを集めなさい。」

「はっ!!」

新しい武器も手に入った。ならば試し打ちをさせなければ。

数時間後…

カツカツ

ダン

「銃器中隊、全て到着しました!」

「よく来ました、不死川中尉、並びに将官達」

「九鬼警視、新兵器とはどの様な物なのでしょう?」

随分と軍人らしくなったな…。今の彼ならアレを任せても問題なかろう。

「本日、皆が知っている様に【日米合同軍事演習】において、米国から渡された対鬼専用兵器を、銃器中隊を中心に、本当に鬼に使用できるのかを検査してもらいます。」

「お待ちください!対鬼ですか!」

不死川中尉は対鬼用銃を使う。

…本来ならば、不死身者相手に刀一本の方が異常な戦い方だ。

罨とか銃が無理なら、せめて弓矢とか毒餌とか考えなかったのだろうか？毒餌は…知性が高い生物だと、猪対策じやあるまいに無理…か。

兎も角、国公認となった以上、組織として武器の増量と多様性を広げる必要があった。こちらも科学力で対鬼兵器の開発をしていたが、やはり本物の列強国の本気には勝てなかったようだ。

似た様な物は作れたが、性能が段違いだった。

…一応、こちらが作った分は、鬼殺隊士にでも渡すか…。

「そうです。最初の命令通り、君たちに求めるのは【鬼を殺すこと】ではない。しかし、鬼に対抗する手段は必要です。なので、刀以外で鬼に対抗する武器を提供してはいますが、銃だけだと弾数問題が残る。

しかし、本日支給する物は、一見だと照明器具ですが、この明かりは太陽と同じ成分が含まれている物です。普段は銃器による対抗、危機的な状況に陥った場合は、こちらを発光させ、確実な情報を持ち帰りなさい。」

「この…短刀のような長さの物から…太陽の光が？」

不死川中尉は支給品を持つ手を強くした。彼は元々は鬼狩りであるとともに、鬼もどきだ。太陽の恐ろしさを誰よりも実感している。

「ええ、鬼舞辻と言う鬼の頭領は一千年も、この国に蔓延んでいる。刀一本で追い詰められる相手ではない。武器は多ければ多いほど不意をつけます。

これだけでは決定打とはなり得ないでしょう…。

しかし、見た事がない兵器は、敵に警戒心を持たせる。警戒対象を増やす事により、鬼とはいえ、元は人間。相手には注意力の低下が起こり、部下相手に適切な指示を与える暇がなくなります。

戦争とは情報戦です。

鬼には、上の立場から下の立場には【思念伝達】テレパシーの日本語訳が出来ます。

我々がゆく鬼との最終決戦では、ほぼ確実に鬼舞辻は自分の領域内で、我々を根絶やしにするでしょう。」

そう…産屋敷が鬼殺隊を公認組織にしようとしなかった理由の一

つは、我々政府側が不老不死の力を欲して、鬼舞辻と裏で繋がっている可能性を懸念していたからだ。

勿論、それ以外にも後ろ暗い人間が多いのもあるが。

だが、逆に言い換えれば、鬼舞辻が我々との繋がりを求めなかった理由、彼も産屋敷が政府と結託している可能性を懸念している。…とも捉える事ができる。

ローズマリー特命連絡員。

鬼でありながらも、人としての理性を保ち、産屋敷を放任している我々に失望し、他国に頼った元帝国民。

鬼の頭領に関する情報を秘密裏に提供している彼女…、手紙に書き記しられていた「鬼の誕生理由」と、「産屋敷一族が鬼狩りに熱心すぎる理由」

血縁であるならば、考えも似る。

特に珠世と言う、元人喰い鬼からの鬼舞辻の性格も含めて予想すれば、鬼舞辻は人間時代の虚弱体質により、極端な完璧主義でありながら、基本的には野心はない。彼の望みは、「完璧な肉体」だけであり、【支配欲】や【征服欲】があるわけではない。鬼の量産も、致し方なく使っているだけだ。そうでもなければ…とうの昔に、この国は鬼の国になっていた。

鬼舞辻無惨と呼ばれる男は、争いを好む者ではない。

むしろ…損害を考えなければ、かなり常識人の類に近いだろう。

そんな男が、表舞台、ましてや帝都で暴れ回るとは思えない。

仮にそれで鬼殺隊は滅ぼせても、それが原因で国家を敵に回すことは、鬼舞辻の本意ではない。

ならば…普段隠れ住んでいる、異次元空間とやらの討伐対象だけを巻き込んで、後腐れないように始末するだろう。

「九鬼…」

「…警視」

「九鬼警視」

「あつ…」

「考え込んでおられましたか、何か不都合でも？」

「いや…何でもない。不死川中尉。」

この所のゴタゴタで疲労が溜まっているようだな。

「この新兵器は、基本的には内密にしてくれたまえ。カイガク？とやらの様な裏切り者が出た以上、鬼殺隊士には出来るだけ、兵器に関する情報は与えたくない。何処で漏れるか分からないからな。」

今の藤襲山の所有権は政府にある。そこで、適当な鬼に光を当てて性能を確かめてくれ。政府が作った物と、米国から贈られた物、どちらが使いやすいか、効果時間が早いのかの検証も頼む。」

「承知致しました！九鬼警視！」

「話は以上だ。持ち場に戻りたまえ。」

「はっ!!」

▽▽▽

不死川中尉 side

兄貴とは【生意気な鬼殺隊士の騷】の件で了承を得たので、俺は風柱邸の土地から早々に出る事になった。

そもそも、俺が率いる部隊は、帝国軍の部隊という扱いだから、基本的には軍人しか派遣されないし、派遣された鬼殺隊士も、《国公認の組織員に相応しくない》と判断された、国から見れば厄介者しかない。い。

だから当然、後から来たのに大きな顔で歩いている俺たちに悪感情しかない奴らばかりだ。

「あー！嘆かわしい！何でこんなむさ苦しい野郎どもの隊服なんぞを」

まあ、コイツはある意味、厄介者の中でも例外枠だが。

文句を言いながらも、銃器中隊の偽装用の隊服を作っている男。

コイツは縫製係のゲスメガネこと、前田まさお。

本来、コイツは隠、しかも戦闘を望んでいる鬼殺隊関係者ではないので、この部隊に派遣される事などない立場だ。

だが、この男、ある悪癖が原因で九鬼警視の怒りを買ひ、罰としてこの部隊に派遣されたという、他の鬼殺隊士とは別の意味で厄介な立場なんだ。

「全く！あの男というか！政府の人間は硬い頭しか持っていない！！なーにが『女性隊士の服の露出がすぎる』だ！なーにが『帝国軍の品性を疑われる』だ！なーにが『甘露寺蜜璃を殺したいのか？』だ！そもそも！恋柱の隊服は、柔軟性を重視した結果、胸が目立つ隊服になっただけだっーの！しかもあの男！それを言ったら『その理屈ではスカートではなく、ズボンでも問題ないですね。今すぐズボンを作るように。』だ！！あの男！男のロマンを全く理解していない！！」

やっぱり甘露寺さんの短すぎるスカート…ゲスメガネの趣味だったんだな。兄貴に殺されかけたとか噂で聞いたけど、これはコイツが悪いな。

「不死川中尉、藤襲山への入山許可が取れました。」

「では、参りましょう。」

こういう言葉がすらすら出てくる俺は、もはや鬼殺隊ではないんだな。

「隊服に着替えました。」

「こちらも終わりました。」

「ああ、ではこれより【実証実験】を開始する。」

「はっー！」

藤襲山は政府の管轄に入った事により、変わった事。それは、ガサガサ

「よっしゃー！久しぶりの肉だぜー!!」
人間の形を残した鬼。

バン

「ガハツ・テメエ…一体俺に何を…」

「ただの飛び道具です。下級の鬼にはそこそこ効く…か。」

試験会場から実験施設になった。鬼殺隊時代でも藤襲山は胡蝶さんが藤の毒の実験に、鬼を利用していたそうだが、あくまでも個人使用が限界だった。だが、政府管轄になった事により、これまでの人員不足が無くなった。その分、大規模な実験施設として利用する事が可能となったのだ。

「時間計測完了しました。この程度の鬼だと5分です。」

「上弦はそれこそ、30秒もかかりませんでした。」

あの鬼…あの時は不意打ちかつ、俺が弱いのもあり、舐められた結果だった。本気で治そうと考えていたなら、それこそ数秒で治っていたはずだ。

「やはり、もっと毒の多様化が必要です。」

「おい！テメエら！何をごちゃごちゃと！」

バン

次は心臓部だ。鬼は首を斬らない限り死なない。だが言い換えれば、それ以外の箇所なら、何度でも実験できる。

「ガハツ…!!」

「トリカブトも混ぜた弾丸です。不死川中尉から見てどうでしょうか？」

計測と記録をする科学者は、俺がほぼ人間の姿である鬼を撃つても、冷静だ。狂っているな…。俺が言えた義理ではないが。

「先ほどよりも回復速度が落ちているようにも見えますが…、一度撃っているの、同じ検証とは言えません。ですが、効果アリと判断します。」

「なるほど…藤をベースに他の毒を混ぜ込む事による相乗効果も期待

出来る。」

カチッ

さあ、本命だ。

「しっかりと記録を」

「了解しました」

「おい、お前ら何を…！」

パッ

「この明かり…この焦げつく匂い…！お前らまさか！」

ガサッ

「逃げられたら困ります。」

カチッ

「足…！ギャー…！！」

足からゆっくりと灰のように消えていく。

「不死川中尉！足の次は胴体までゆっくりとお願いします！」

「了解した、少尉」

「ヒッ…！ヒィー…！！許してくれ…！！」

鬼はゆっくりと胴体も消え、最後は首を消したら、顔までいかずとも消滅を確認した。

「ふうー、政府側の開発品は15分から20分ですか。弱い鬼でもここまでかかるとなると、実戦では使え無さそうですね。」

「同意します。」

強い鬼の回復速度、ましてや鬼舞辻ならそれこそ、傷を作った側から治っていくだろう。実験のためにわざと急所を外して計測したけど、それでも時間がかかりすぎる。

それに俺たちの目的は鬼舞辻無惨討伐ではない。

下手な援護攻撃で、鬼舞辻にこの兵器が太陽と同じ光だと、バレてしまったら優先的に俺たちを殺しにかかる。

俺たちはあくまでも後方支援だ。表立って目立つわけにはいかない。

確実に鬼舞辻無惨を殺せる場面以外では、使用できない。

もしくは、この明かりが太陽と同列だと判断する間もなく刀だと誤

認させるような状況でもない限り。

「では、次は米国からの贈り物の検証を。」

「そうだな…」

俺はいつから、鬼を躊躇いなく殺せるようになったのだろうか。

▽▽▽▽

日本政府

「では…、この度の合同軍事演習における期限付き条約を締結します。」

「貴族院、意義なし」

「衆議院も意義はありません。」

「両議院の承認を得たので、外務省」

「はい」

「これを米国大使館に渡すように」

「承知致しました」

▽▽▽▽

米国大使館

『久しぶりだな、九鬼殿！』

『お久しぶりですハリス大使、こちらが、日米合同軍事演習における特例措置の内容です。』

パラパラ

『はい、確かに頂きました。米国大統領の代理として、この条約を受け入れます。』

『サインも確認致しました。失礼を』

「さて…：ようやく、始まるのか。」

鬼舞辻無惨の産屋敷邸襲撃まで、後…

主人公が認められた理由

『ゴホッ！ゴホゴホ』

咳が治らない。子供の頃に戻ったようだ。

ガチャ

『体調はいかがですか？ウィリアム司祭。』

『ゴホッ…何とか…』

『お医者様からは、慣れない山登りによる疲労との事ですが、いくらローゼ…今は大使館のNo. 3とはいえ、本職でもない司祭に山登りをさせるとは…』

私がリース博士と山登りする期間。

表向きの同行理由は「ローズマリー特命連絡員が季節外れの山菜を欲したから」だ。正式な命令ではなくとも、一国の役人のお願いを無下に出来ないのもあり、私がリース博士と同行する行動はおかしくない。

だが、そのせいでローズマリーが誤解されるのは本意ではない。

『シスター、体調こそ崩してしまいました。布教に体力は不可欠。ゴホッ…良い運動になりましたし、登山に興味を持ったのは私です。あまりローズマリーを責めるものではありません。』

『それもそうですね。あくまでもお願いでしたし…。ところで他に欲しい物はないでしょうか？』

『紙とペンを…こちらに』

『手紙ですね、どうぞ』

『ありがとうございます。』

『神のご加護を』

『シスターにも神のご加護を』

カチャン

ふー…よし、書くか。

.....

イエズス会○○様

パンドラの箱は無事に封印に成功しました。もはや同じ悲劇は起

こらないでしょう。

パンドラの箱がある土地は現在、未成年の少年の所有財産ですが、後見人は国の役人であり、事実上国有地となっております。土地の買取は不可能です。大日本帝国側も鬼の原材料がある山を手放す気配はなく、現在その山は「陸軍の訓練施設」という名目で、軍人が定期的に見回りをしております。

私があこの山に入れたのは、一重に「大使のご息女の我儘を叶えるため」という名目があった為です。

もはや同じ手を使う事は不可能であり、これからは更に警戒度も高まりますでしょう。

確実性を重視して、例の山を全て燃やし尽くしたいですが、そのような行動を起こそうとすれば、カトリック全体が大日本帝国に敵視されるので、放火はやめました。

見たところ、植物が群集していた場所は限られていましたので、燃やし尽くし、土壤に炭や消石灰、ジャークーキーなどを混ぜました。

素人目ですが、植物の生え方から土壤が特殊ゆえのものであると判断し、土壤を変えたので、同じ植物が生える可能性は限りなく低いと判断します。

パンドラの箱は存在しません。

我々の目的は果たせました。

全ての人が神のみもとで幸せでありますように。

A m e n

イエズス会日本支部司祭

ウイリアム・ヤコブ・ウイステイリア

.....

『燃やしたかったな...』

状況的に諦めるしかないのは分かっているが、懸念材料は無くしたかった。だが、布教が本業の私が犯罪者になるわけにはいかない。

『ローズマリーにも会わなくては』

1番気にしていたのは、ローズマリーだ。

『ゴホッ！...これは...』

▽▽▽

特例大使館

『お嬢様、大使からの電話がきています。』

『お父様から?』

合同軍事演習における司令官が到着したことにより、一気に慌ただしくなった。今の特例大使館職員には、鬼殺隊に対する関心が初期よりも低くなっている。

政府が本格的に鬼殺隊士の監視と教育を行った影響で、時折の敵意こそあれど、柱などの上級幹部は本心はどうであれ、私たちに丁寧に接しているからだ。

『お父様、ローズマリーです。ご用件は?』

『おはようローゼ、なに、ご用件などと言う堅苦しい話ではない。司令官も軍艦も来た事だ。帰国する上で持ち帰りたい物があれば、用意しておこうと思つてな。』

『帰国…』

忘れていた…。そうだった、私が【異端の能力者】がアメリカに受け入れられた理由は、私を手元で管理できるからだ。

『ローズマリー嫌なのか?』

『いえ、そんな事はありません。ただ…鬼が滅びる保証もない今の時期に、帰国の話が出るとは思わず、つい反応が遅れました。』

『ならば良いのだが』

考える。私の帰国は絶対だ。これは変えられない案件

だが、鬼舞辻無惨が死ねば、全ての鬼が死ぬ。という法則を知られれば、最悪アメリカは鬼滅殺作戦を変更して、鬼保護作戦に変更しかない。

ただでさえ、鬼殺隊、日本政府、米政府という三つ巴になっている上、その影響で本来の流れから離れてしまっている。

でも待て…この時代は、まだ航空輸送は一般化していない。飛行機の原型自体はあっても、戦争でさえ、陸戦と海戦が通常。

基本、国家間の移動なら、船での移動が一般的だ。

合同軍事演習という名目である上、私の身の上なら移動手段は軍艦になる。

『帰国の話が出ると言う事は、私のお役目は終わったと言うことですか？』

『端的に言うならば、そうだ。君をわざわざ特命連絡員などと言う役職につけたのも、キサツタイから攻撃される危険性の排除と、日本側の動きを探らせる為だった。』

だが、日本側がキサツタイの教育を行い、我々に害なす動きを排除した上、公式に記録には残らないとはいえ、一国に2つの大使館を認めた以上、今の日本側を探る理由がなくなりつつある。

ともなれば、ローズマリー特命連絡員の存在はあっても、なくてもいい。必要性が低くなったのならば、君は早急に安全な場所で、匿うべきだ。』

『確かに私に向けられる敵意の眼差しは、目を追うことに少なくなっています。特例大使館にこだわる必要はありません。』

しかし、そうは言っても名目だけとはいえ、私は【特命連絡員】です。理由もなく、国に帰るのはアメリカの評価にも関わるのでは？』

誰が見ても分かるお飾りとはいえ、役人は役人。表向きは健康体の私が急に親元に帰ります。帰国します。と言い出すのは、余りにも無責任な対応だ。

『多少の評価低下は許す。というのが国の方針だ。合同軍事演習が終わり次第、アメリカに帰りなさい。安心なさい、君は貴重な存在、無下に扱われる事はありません。それは、大使として保証いたします。』

『そうですか。』

無下に扱われる事はない…か。鬼というサンプルが私一人である

以上、その手の心配はしていなかったが、大使として保証されているのは大きい。

『お父様、私には帰国の際に特別必要な物はありません。水と太陽とそれこそ、補助用に土や野菜があれば、数ヶ月は待ちます。でも…もし許されるならば…教会の関係者と共に、帰国の時間ギリギリまで共に過ごしたいです。』

そもそも、私を受け入れてくれたのはウィリアム司祭だ。始まりの人と共に過ごすのが、日本でのファイナーレに相応しいと思う。

彼だけなんだ。全てを知った上で、私を鬼としてではなく、人として見てくれたのは。

《最後の最後は、あの教会で過ごしたいと?》

『はい、特例大使館の特命連絡員がお役御免なら、大使館に留まる理由は、私にはありません。もちろん、お父様の意向に従います。大使館に留まれと仰るならば、私はこの場から一步も外には出ません。教会に移りたい理由も、私なんかの話し相手に、普段忙しい司祭を呼び出すことが、心苦しいという理由だけですから。』

《なるほど…分かりました。後日、また連絡します。Good night, sweet dreams. rosemary》

『お父様も良い夢を』

ガチャン

『ふう…』

なんととしても、時間を稼がないと。

▽▽▽

産屋敷耀哉 side

「あまね…これを子どもたち…ゴホ…柱に…」

【煉獄外伝】

「ついに…決めたのですね。」

「父上！こんな劇薬を渡すつもりですか！」

柱集会議3 上弦の過去

産屋敷邸

カアカア

集まった柱の数だけ鴉も集まりつつある中、

「今回は一体何だっというんだあ？こちとらお前らが押し付けた雑魚共の鍛え上げに忙しいんだがあ。」

不満たらたらの不死川、彼は銃器中隊に派遣された鬼殺隊士も受け持っているため、実際に他の柱よりも忙しい。

「あら？富岡さんと、しのぶちゃんはまだなのかしら？」

一通り、隊士に柱稽古をさせ終わっていたので、そこそこ余裕がある甘露寺。

ゲスメガネ事件を機にスカートからズボンに変わっている。

「おはよう甘露寺、ズボンも似合っている。」

「あら、伊黒さんそうかしら？そうそう、見てちょうだい！伊黒さんからもらった靴下は、見えなくなるけど、着続ける事にしたの。」

「そうか…」

淡々と話してはいるが、靴下の話で明らかに声色が柔らかくなった

伊黒、

「南無…」

相変わらず涙を流している悲鳴嶼、

「待たせたな…」

いつの間にか、しれっと座っている富岡、

「お待たせしました。」

「今回は何のよう？」

同時に入ってきた胡蝶と時透、これで現柱7名全てが揃った。

そして、最後にやってきたのは、

「ようお前らー！」

「今回は私の為に、わざわざ集まってくれてありがとう」

引退した音柱宇髄天元、前任の炎柱、煉獄愼寿郎。そして、もはやいつもの面々に入ってしまった九鬼大和。

「ごきげんよう、柱の皆様。私は今回の柱集会議に直接の関係はありませんが、立场上同席させてもらいます。では、始めてください。」
と言い、本当にこれまでの柱集会議とは違い、明らかにやる気のない、立ち居振る舞いで話を促した。

「う、ううん、忙しい君たちをこの時期に、わざわざ呼んだのは他でもない、以前の柱集会議で話した【上弦の能力】と【過去】をさらに詳しく話す為だ。」

途中で道を踏み外し、一時はアルコール中毒者になりかけたとはいえ、柱だった男の言葉に、今の柱も食いつく。

「上弦の能力と過去だあ？以前聞いた内容だけではダメなのか？」

ただでさえ、軍人が入り込んだ事により、原作よりも訓練生が増えている不死川実弥は、さっそくイラついてきている。

「もしや…刀鍛冶の里で【半天狗】と【玉壺】が討伐された事により、新たな上弦がついたのですか？」

以前の柱集会議で、一通りの上弦情報を通達されたにも拘らず、この忙しい日々には会議を開く意味を、早々に察した胡蝶。

「ああ…そういえば」

「補欠早くない？」

「南無…」

「えっ！もう!？」

「チツ…鬼は相変わらずしつこい。」

胡蝶の言葉に納得した、富岡、時透、悲鳴嶼、甘露寺、伊黒。

「胡蝶しのぶさん…そうだ。新たに上弦の座についた、上弦の能力を説明する為に、今回の会議をお館様に認めてもらった。そして、最後に個別で渡す冊子を読んでいただきたい。」

「そうでしたか…」

「はいー!」

「では、説明をお願いします。」

「…」

「…補欠…か。」

「補欠とはいえ、上弦だ。」

「そうだ、富岡、油断できる相手ではない。」

話を促す胡蝶、やる気満々の返事をする甘露寺、南無を言わなかった悲鳴嶼、無言の時透、補欠の上弦に上の空な富岡、その富岡に反論する不死川と伊黒、

「んじや、派手な俺様がまず説明するぜ！新上弦の肆【鳴女】！前の上弦情報開示で説明した、無惨の居城の管理者だ。」

こいつの武器は、無限城の管理者だということもあって、空間を操る血鬼術に特化してやがる。まず、前提として近寄れないだろうな。「なら、どうすれば…」

「甘露寺、落ち着け、空間に特化しているという事は、逆に真つ当な戦闘能力が低いとも捉えられる。」

「伊黒大正解だぜ！伊黒の言うように、鳴女と呼ばれる鬼は、無限城の管理をしている分、戦いには不向きだ。だが、補欠の上弦とはいえ、何百年も生きているのは事実。油断したらあつという間に殺される。」

「遠距離による攻撃手段が必要…ですか。」

「確か…軍…持っていたか？」

これまでの鬼殺隊だったならば、基本装備は刀一本。だが、今は違う。鬼と直接戦わないことが前提の軍隊もいる。彼らは基本的に逃げの道具を使う為、拳銃や弾丸、爆発物を大量に持ち込んでいる。

「ええ、不死川中尉がまとめる銃器中隊は、文字通り、銃器などの中距離、遠距離でこそ効果を発揮する武器を使うことが前提です。」

上弦の戦いに、軍の中隊を巻き込む事は出来ませんが、銃火器や、手榴弾を腰に下げられる最低数だけならば、数百人の前線で戦う鬼殺隊士に、渡せるだけの数はあります。」

そう、大日本帝国政府は、鬼殺隊を敵視しているとはいえ、実際に鬼と戦うのは鬼殺隊だ。国も最初から、国軍だけで鬼に勝てると思うほど、驕り高ぶっていない。だからこそ、武器提供は一部の秘匿性が高い物を除き、鬼殺隊士に配る事が前提で準備している。

「でも、鳴女という鬼を倒せなければ、無限城は存在し続けるから、最終手段はやつぱり、首を落とす事だけなのね。」

国公認とはいえ、鬼と戦える人数には限りがある。

不利である事には変わりないと、甘露寺は落ち込んだ。

「こればかりは、どうにもなんねえからな。」

それに同意するのは不死川だ。それに頭を縦に振る他の柱。

「悩んでも仕方ない…肆の血鬼術は前回聞いたから、次に行くぞ。」

「新たな上弦の陸は【獺岳】。皆に通達された裏切り者だ。」

獺岳の説明は慎寿郎がする。天元は柱を引退したとはいえ、日数が経っておらず、裏切り者となれば、感情的に話してしまう懸念から、冷静に話せる慎寿郎にかわった。

「確か…雷の呼吸でしたっけ？」

「あの裏切り者か。」

「ああ…あの子か。」

「悲鳴嶼さん、知り合いだったのですか？」

「なに…昔、私が鬼殺隊に入る前に養っていた寺の子どもの1人と、同じ名前だったただけだ。あの子は臆病だった…鬼殺隊に入る訳はない。」

「ふーん？」

「善逸君の兄弟子だった子でしたね。」

「裏切り者には死を持って償ってもらおうぜえ。」

「？」

久しぶりに聞いた名を思い出した甘露寺。

甘露寺の手前、裏切り者への声色を抑えた伊黒。

一瞬、寺のあの子を思い浮かべたが、獺岳の性格から、命の危険が伴う鬼殺隊に入る理由がないと、同名の別人だと判断した悲鳴嶼。

基本的にどうでもいい時透。

善逸君の兄弟子だったので名前を知っていた胡蝶。

どこぞのお奉行様と、某死神世界の宿敵、銀髪ポエム幹部が憑依し

たかのような不死川。

そもそも裏切り者に無関心だった為、獺岳の存在さえ認知していなかった富岡。

それぞれが反応する中、慎寿郎は更に話す。

「いくら数合わせの補欠とはいえ、この短期間で上弦の陸となったのだから、鬼としての才能が、異常に高かったと言わざるを得ない。油断していたら、柱と言えども致命傷を負わされるだろう。」

そう言い切り、一呼吸してから、

「では、奴の血鬼術について話す。

だが、君たちが察しているように基本的に雷の呼吸を鬼が使う内容だ。

だが鬼となった分、強化されている。雷の呼吸を使う者はまるで背後に雷があるような技を出す者がいるが、奴はまるでなく、本当に黒い雷のような斬撃を出す。そして、その斬撃は相手の皮膚や肉をひびわり続け、時間経過と共に敵をじわじわと殺すものだ。」

「雷の呼吸は攻撃範囲が比較的広い呼吸です。その中で斬撃に当たってはいけない…ですか。」

「チツ、鬼に寝返るだけある奴だ。嫌らしい技だ。」

「でも、鳴女に比べれば、まだマシなほうね。」

「ああ、そうだな甘露寺。」

「雷の呼吸…か。」

「伍じゃないの？」

「南無…だが、我々が相手する必要がない上弦だ。」

「えっ？悲鳴嶼の旦那、どう言う事だ」

上弦は柱が相手取るのが常識である。

なのに、悲鳴嶼行冥は、泣きながらも「柱が相手取る敵ではない。」と断言した。それに真っ先に反応したのは宇髄である。

「我妻善逸…獺岳の弟子だった子は、獺岳が鬼となった事を知ってから技の精度が格段に上がっている。そして、新たに新しい技を創った。雷の呼吸が基盤とはいえ、新たな技を一年も掛けずに創り出した我妻善逸は、先の上弦の陸で妹鬼の首を落とすという功績を鑑みれ

ば、十分、柱候補となり得る。何より…本人が「桑島師匠の仇討ち」を望んでいる。上弦の壺には最低でも柱3人は必要な中で、上弦の陸相手に柱を配置するのは非効率的だ。」

「悲鳴嶼さんが、そこまで言うほどなのですね！」（才能に溢れている隊士なのね、凄いわ！）

「確かに、配置できる数に限りがある中で、鬼となつて一年にもみたない陸に柱の相手をさせるくらいなら、仇討ち希望者にしてもらうべきです。」

「ああ、そうだな」

「弱い奴に割く時間はない」

「仮に負けたとしても、その時はその時だしなあ」

「同意する。不死川」

順に、甘露寺、胡蝶、富岡、時透、不死川、伊黒だった。

「これで、前半。上弦の血鬼術についての説明は終わった。そして、君たちにはコレを渡したい。」

スツ

【煉獄外伝 甘露寺用】

【煉獄外伝 胡蝶用】

【煉獄外伝 富岡用】

【煉獄外伝 不死川用】

【煉獄外伝 伊黒用】

【煉獄外伝 悲鳴嶼用】

【煉獄外伝 時透用】

「……煉獄外伝？」「……」

「私たち煉獄家歴代炎柱は、炎柱ノ書を書いているのは、少なくとも甘露寺君は知っているだろう。」

「はい！確かに倉庫に入っていました！」

「今回渡すのは、鬼殺隊に関する過去ではなく、鬼…上弦の鬼が何が原因で鬼となり、なぜ力を求めているのかを書いた過去話だ。」

「……鬼の過去!?!」「……」

「煉獄の旦那あ？一体どう言う事だあ！俺たちは鬼を滅殺するだけ

だ。鬼畜生の過去なんざどうでもいいわ！」

これに真つ先に反応したのは、鬼となった母を自らの手で殺した不死川である。鬼の過去を知る事は逆に足枷になると知っている。

「不死川さんに同意します。上弦の血鬼術など戦略で必要な情報なら兎も角、鬼の過去を知ったところで何になるのでしょうか？仮に悲惨な理由で鬼となったからと言っても、許す理由にはなりません。」

姉の仇撃ちの為に、体を毒にした胡蝶が続く。

「僕の先祖が上弦の壺でも、血縁が理由で手加減するとは思えない」

先祖が上弦の壺であり、元鬼殺隊の月柱だと知った時透もまた、過去を知るメリットはないと反論する。

「そもそも数百年前の人間だった上弦の過去を、何故人間の貴殿が知っている？」

鬼の過去を知っている煉獄慎寿郎に疑惑の目を向ける伊黒。

「ああ……この若さで耄碌していたとは……嘆かわしい。」

認知症になったと判断した悲鳴嶼、

「でも……少しだけ気になる……な。」

「知って損する事ではない。」

鬼に家族が害されたわけでもないのに、好奇心が優った甘露寺と、特に損する内容ではないので、反論する理由がない富岡。

「そもそも何故、わざわざ冊子にしたのですか？上弦の過去には興味はないですが、ここで一斉に話して仕舞えば良いだけの事です。」

「胡蝶君、伊黒君が言ったように、人間である私が数百年前の人間だった鬼の過去を知っているのはおかしい。だからこそ、冊子にしたんだ。読むか、読まないかは各自に任せる。」

だが、各自で内容が異なる。胡蝶君の冊子には上弦の式に関する過去と、彼を成形した家庭環境と性格を多めに書き込んだ。

時透君は先祖である上弦の壺の過去と、血縁の始まりの剣士について重点を置いた内容。

と、言ったお館様の勘で最終決戦で戦う可能性が高い鬼の過去を、重点的に書き込んだ。」

「お館様ですか！」

「南無…」

「なるほどなあ…」

「元が人間、揺さぶれるならば読む価値はある。」

「俺は…どうでもいい」

「僕も…」

「へえ…」

「ここを出てきた産屋敷の勘により、否定的だった不死川、胡蝶、時透、懐疑的だった伊黒、悲鳴嶼が釣れた。

そして、締めを括ったのは、

「ちなみに、煉獄の旦那が持ち込んだ上弦の過去話は当たっているぜ。遊郭で討伐した上弦の陸兄弟の過去が、当たっていたからな！」

宇髄による【確かな実績】であった。

「…ならば、読む価値がありそうですね。では、私は薬の件があるので失礼を。」

冊子を受け取り、蝶屋敷に向かった胡蝶。

「俺も失礼するぜ、宇髄に煉獄の旦那あ」

同じく、雑魚隊士の鍛え上げに向かった不死川。

「私も失礼します。お元氣そうでよかった」

一礼し、屋敷に向かう甘露寺。

「俺も…失礼する。」

静かに去ってゆく富岡。

「俺も稽古が残っているから失礼する。」

結局、最後まで懐疑的な目をしていたが、読んでくれそうな伊黒。

「南無…お二人とも健康そうで何より」

【煉獄外伝】を両手で受け取り、大切に袂にしまった悲鳴嶼。

「僕も帰る」

鴉を呼び寄せて、帰路に向かう時透。

「ああ、さようなら」

「ド派手に元気で過ぐせよな!!」

▽▽▽

胡蝶 side

早速、上弦の式の過去話を読み込みました。

「姉さんが…お前を哀れと言った理由、確かにお前は哀れですねぇ」

あの時は、姉さんは吐血しながらも、童磨を哀れと言っていた。

優しい姉さんだったから、またいつもの事だと思っていたけど、姉

さんは瞬時に分かってしまったのね。

とは言え、私の計画を止める理由にはならないけど。

「それにしても…」

まさか、伊之助君のお母様が童磨と関わっていたとは。

……………

童磨には、一度だけ【人の心】を得る機会があった。

万世極楽教は江戸の世から続く新興宗教であり、同時に駆け込み寺の機能もあった。そこに逃げ込んだのは、頭が弱いばかりに夫と姑に暴力を振るわれていた【嘴平琴葉】。嘴平伊之助の母親である。

当然、琴葉は逃げ込んだ先が鬼の餌場だったとも知らずに、息子と共に万世極楽教で日々を送った。

童磨自身、その時点では何も思っていなかったが、頭が弱い分周りと違い、自身を教祖様として敬わない琴葉を【心が美しい人】と認識し、寿命が尽きるまでそばに置くつもりであった。

しかし、琴葉は頭が弱い分、勘に優れていた。

ある日、琴葉は信者を喰らう童磨を見つけてしまう。

童磨は琴葉に人喰いを【救い】だと言ったが、琴葉にはただの人殺

しにしか見えなかった。

琴葉は息子と共に万世極楽教を脱出。だが、逃げきれないと悟った琴葉は息子を崖に投げ捨て、最終的に琴葉は死亡。

もしも、琴葉を手元に置き続けていたならば、童磨に心が生まれていた可能性があり、童磨は自らの手で、自らに差し伸べられた救いの手を拒んだ形となった。

.....

「これは…伊之助君には言わないほうがよさそうですね。」

育ての父が、上弦の式だったという事実は必要ない。

「童磨……お前を絶対に殺す……!!」

▽▽▽

不死川 side

「はあ!!ふざけんなよ!継国巖勝!」

バタバタ

「どうされましたか!風柱様!!」

「あっ!?いや、こっちの問題だ。なんでもねえお前は下がれ」

「はっ?はあ?失礼します。」

継国巖勝が鬼となった理由、弟が嫌いという自分とは正反対な立場と、国と妻子を捨てたという、情に厚い実弥には理解不能な考えに怒鳴り込んでいた。

「…童磨…胡蝶に地獄に堕とされやがれ。」

続く上弦の式の過去話でも、家庭環境の問題があったとはいえ、歪みすぎた思考回路は、怒りよりも呆れが強かった。

だが、次の猗窩座では、

「狛治ー!!! テメエの求めた強さはそれじゃねえだろうがあ!!」

盗みこそ働いたが、理由が理由で、自分とも似ている家庭だった事。何より、狛治時代の罪もせいぜいがスリ程度で、基本的に暴力には走らなかつた事。

一時は荒れたものの、師匠との出会いと技の継承、何より恋雪さんと幸せな生活が待っていた中での、毒殺事件。

そして、失意のままに訳もわからぬままに鬼となってしまうた、「役立たずの狛犬」に、顔とは似合わず優しい性格の実弥はノックアウトされた。

「お前が煉獄をしつこく勧誘した理由は…」

煉獄杏寿郎を鬼に勧誘していたのも、師匠に勧誘された時の真似をしていると察した実弥は、1日泣きはらし、だが稽古は続けた為、隊士を大いに困惑させた。

▽▽▽

甘露寺 side

私の煉獄外伝に載っていたのは、後任の上弦の肆【鳴女】の過去だったわ。

「武器が琵琶と聞いていたから、何となく予想していたけど…琵琶法師だったのね。」

.....

鳴女の人間時代の名前は不明。

琵琶を演奏して金銭を得ていたが、無名だったのもあり貧しい生活だった。その上、旦那は博打ばかりしていた。

鳴女に転機が訪れたのは、夫が唯一持っていた琵琶演奏用の着物まで売って博打に使ってしまったこと。

鳴女は激怒し、夫を金槌で殴り殺した。

この件から分かるように、元々人殺しに躊躇するような性格ではなかつた模様。

その後も仕事があつたため、仕方なく普段のボロボロの着物で嫌な顔をされながらも、震える手で演奏したところ、音色を賞賛される。これに味を占めた鳴女は琵琶を弾く前に、人を殺す連続殺人魔となつた。

ある日、いつものように人を殺そうとしたところ、相手が鬼舞辻無惨だったため返り討ちにされる。しかし、人を殺す事に躊躇いが無い鳴女を気に入る鬼となつた。

夫の件以外は、同情の余地がない極悪人である。

.....

「人間時代から価値基準が変わっていない鬼なのね。油断できないわ。」

新たに鬼殺への決意を固めた。

▽▽▽

富岡 side

俺の冊子には、猗窩座の過去話と、鬼舞辻無惨の過去話だった。

猗窩座：いや、狛治には同情する。

俺も、姉さんを亡くした理由が鬼でなければ、同じことをしていた可能性が高い。それに狛治は、守る側だった。姉さんに守られ、鱈鬼に守られ、お情けで鬼殺隊に入った俺とは違い、ちゃんと守り通そうと努力を重ねていた。父親とのすれ違いによる悲劇もあつたが、弱者には手出しをしなかつた。恋雪さんの看病を一度も投げ出さなかつた。あの年齢でそこまでの配慮ができる人間はそうそういない。

そして：剣士だ。

煉獄は剣士だった。

狛治の大切な人たちを奪つたのは剣士だ。

なのに、ちゃんと勧誘していた。

いくら記憶がないとは言え、仇と同じ武器を使う人間を、称賛するのは元の人格がしっかりと出来ていないと出来ない所業だ。

だからこそ、これ以上【素流】が血で汚れないように、
「人として終わらせてやる。」

それはそれとして、鬼舞辻無惨がお館様の血縁であるとは。

日の呼吸を過剰に警戒しているならば、隙を見て炭治郎を殺しにか
かる。あの時とは違う、俺はもう守られる側ではない。

▽▽▽

伊黒side

俺の冊子には、上弦の肆だった。

人間時代から全く変わらない極悪人。

強さ的に、甘露寺は上弦の肆を相手取るだろう。

俺も甘露寺の為にこの鬼を殺さなければ。

▽▽▽

悲鳴嶼side

私の冊子には、上弦の壱の過去が書かれていた。

「ああ…お互いの相互不理解からのすれ違いだったとは。」

継国縁壱は兄を尊敬していた。

実際、あの時代で忌み子を弟として、大切に扱った黒死牟は立派な
人格者だ。なのに…いや、だからこそ…か。

物理的な強さが物を言う乱世において、強さを求めるのは当然の義
務だ。ましてや大切な弟がいるならば尚更だ。

だが、弟が天賦の才を与えられていた事。

これが悲劇の始まりだったのだろう。

【守らねばならない弱者】として扱っていた者が、実は誰よりも【強い者】だったと判明してしまえば、責任感の強い人間ほど、自分の存在意義を見失うだろう。

あの2人の父親が、世継ぎを弟に変えると言い出したのも、母親から真正面の愛情を受け取れなかった事も、小さな子供が歪む理由になった。黒死牟は：自らの意思で鬼となったとはいえ、大雑把に見れば、人間側に非がある存在だ。

だからこそ、

「殺さねばなるまい。侍として。」

▽▽▽

時透 side

僕の冊子には、上弦の壱だった。

弟への嫉妬から鬼へ：ね。

もし、兄さんが生きていたら、どうだったんだろう？

僕は天才と呼ばれた。

継国縁壱も天才だった。

継国縁壱は兄を神聖視していた。

記憶が戻った今となっては、僕も兄さんとの思い出は美しいモノばかり。

継国縁壱は人の機敏や想いに鈍感だった。

僕も、隠や剣士たちから、怖い人だと言われた事がある。

「もし…兄さんが生きていたら？」

こうならないと誰が言える？

僕は継国縁壱の評価と、ほぼ同じ評価をもらっている。

この過去話は、僕たち兄弟にとって他人事ではない。

やっぱり、僕のために黒死牟は殺さない。

カア

「どうした虹丸！ん？招待状？」

療養中の特命連絡員 自らの行いには責任を

『おかえりなさい、ローズマリー!』

『帰国までの間、お世話になります。司祭様、シスター様。』

私はお父様の許可を得た事により、表向きは

「ストレス過多による体調不良により、一時的に教会に療養する」という名目で、表向きの立場はそのままに、横浜の教会に戻る事が出来た。

『ここまで送って下さり、ありがとうございます。九鬼さん』

『いえ、元を辿れば、今回の療養は我々の不始末です。国を挙げて守るのは義務です。特命連絡員がお礼を言うことはありません。』

そう、私の立場は未だに「特命連絡員」なんだ。

大使からのお役御免の電話がきたから、てっきりお飾りの役職は解かれるものだと思っていたけど、合同軍事演習が終わるまでは、この異例の役職は解かれなそうだ。

だから、大使館外でも私の正式な呼び方は「ローズマリー特命連絡員」となっている。

『ローゼ、それとも、ローズマリー特命連絡員かしら?』

『ローゼ、ローズマリー、好きなように呼んでください。教会で役職は関係ありません。』

『ならローゼ、前のお部屋をそのまま使ってちょうだい。』

『ありがとうございます。シスター。そうだ、ウィリアム司祭を部屋に呼んでくれませんか』

『ええ、奉仕活動が終わった後なら問題ないわ。』

▽▽▽

ガチャ

窓から光が入り、シンプルなベッドと机と椅子。上に電球一つに、

机にも一つ。

名目が療養だからか、玄関先に置いていたスコップと手袋がなくなっている。えっと…持ち込んだ荷物は…あつた。

ガタン

私の荷物は事前に持ち込む事が決まっていた。表向きは私の所在地は特例大使館だ。最小限の服に、そして…便箋と封筒。

……………

鬼殺隊 音柱 宇ずい天元さま

読みづらい文だとおもわれるでしょうが、かまど炭治郎君と、かまどネズコさんについて、お話したいことがあります。

12月14日の夜に、中にわのある、はなれに来て下さい。

特命レンラクイン ローズマリー・ベネット

……………

『だいぶ…漢字を忘れてきている…』

平仮名、カタカナはまだ大丈夫そうだが…日本語の勉強をするべきか？

《ソメイヨシノさん、ソメイヨシノさん》

《…何かしら？ローズマリー》

ソメイヨシノさんには、特例大使館にいる内にお問い合わせ。

《考えたものですね、私の上部に光沢がある布を巻くなんて》

《宇髄天元は忍です。忍は木の枝を折ったり、布を巻きつけたりして、進行場所を知らせます。そして、虹丸？は派手好き、キラキラ光る布を宇髄さんに、見せつけるはずです。》

私は見張られる立場だ。表立って話すとなると、見張りがつく。本当に大切な話は、秘密裏に届けないといけない。

賭け…だけど、相手は元忍。ここにつけた招待状も気づくだろうし、敵地だとしても、炭治郎案件を無視するとは思えない。

《登らせていただきます。》

《どうぞ》

よし…出来た。さあ、後は夜まで待つこと。

『ローズマリー、お昼よ!』

『はい!』

今は、ただのローズマリーとして…。

▽▽▽

宇髄天元side

《カツコイイだろお!》

「おー、似合ってるな。」

虹丸やムキムキ鼠を使って、ローズマリー特命連絡員を、特例大使館に滞在している外国人を見張らせていた。

烏は鏖鳥だろうが、野生の鳥だろうが、問答無用で射殺していたからなーアイツら。まあその分、空に警戒が集中した分、俺のムキムキ鼠集団は大使館内への侵入が容易だったのは、いい意味での誤算だったな。

「んで、その朱子織の布、どこで手に入れたんだ?」

鏖鳥は特例大使館内に入ることは出来ない。

《キサツタイのサクラ 《必勝》 についてたヨ!》

「あの桜か…」

鬼殺隊士は鬼を殺す事が専門だ。今いる政府集団も同じ目的。だが、虹丸が見つけた布は、見た目重視の織り方だ。俺たちもアイツらも、装飾目的の織り方をした、脆い作りの布を持ち込むほど余裕はない。

あるとすれば…

「あのガキ…」

ローズマリー・ベネット特命連絡員。お飾りとはいえ米国の役人。

《マダ、アルカもしらねーカラナ!》

「おー、行ってこいよー。ローズマリー特命連絡員に移動の予感あり

だそうだ。」

《チヨツクラ見てくるぜー!》

「さーて、俺も柱稽古だ。」

鍛え上げるだけならともかく、勉強がなあ…。

数時間後、柱稽古が休憩になった頃、対象の行動報告時間になり、虹丸が帰還した。

《タイシヨウ! タイシヨウ移動! キョーカイ移動! サクラにヌノとイツシヨにカミあったぜ!》

……………

鬼殺隊 音柱 宇ずい天元さま

読みづらい文だとおもわれるでしょうが、かまど炭治郎君と、かまどネズコさんについて、お話したいことがあります。

12月14日の夜に、中にわのある、はなれに来て下さい。

特命レンラクイン ローズマリー・ベネット

……………

「これは…!」

対象は元々日本人…だが、随分と文章が不自然だ。橘香子の記憶が薄れているのか。そういえば、炭治郎も「通訳を介した会話には違和感があった。」とか言ってたな。

この手紙…やはり虹丸が持ってきた布は、アイツが意図的に括り付けた物だったか。

鳥は光物が好き…を利用したのか? だが、それなら他の鳥が拾う可能性が高い。なぜ、これを俺が受け取る事を前提に出来たのか。アイツの動き…やっぱ違和感がある。行きたくねえが…あの2人を名指ししているからには…

「行かねえとな。」

一応だが、太陽を克服した鬼は俺の「命の恩人」だからな。

▽▽▽

教会：奥。僅かに中に灯りが灯っている離れ：あれか。

トントン

キィ

「オマチしておりました。宇髄天元さま」

コイツの表向きの滞在地は【特例大使館】だ。荷物も大使のお嬢様つう割には、かなり少ない。

「あー：わざわざお出迎えありがとうございます。ローズマリー：特命連絡員？」

「ハイ、トクメイ連絡員で間違いありません。」

対象が役人としての身分があるのは、俺たち鬼殺隊の不祥事が原因。：と表向きはそうなっているが、実際は違う。

「なぜ、あの招待状が俺に届くと確信していた？」

「アナタの鏝鳥は、ハデ好きです。それにアナタはシノビ、木に意図的にかけたヌノを見逃すトハ思えません。」

コイツ：やっぱ、俺たちを知っている。

鏝鳥の特性はともかく、個別の性格まで調べ上げるほど、政府側は時間を持て余してはいない。ある程度、高みの見物をしている米国側もそうだ。つまりコイツは、

「お前、やっぱ産屋敷が華族であり、鬼殺隊の運営者であり、俺たちの過去を知った上で、異国に助けを求めたのか。」

コイツは最初から全て知った上で、俺たちとは手を結べないと判断した。事実、竈門兄弟の件を知っているならば、何もおかしな判断ではない。だが、その情報はどこで知った？

「ハイ、ワタシは柱の過去を知っています。アナタの予想する炭治郎と出会う前から。」

「どこで知った？お館様の事が華族なのは、名字からして分かる人間は分かる。だが、俺たちは違う。」

お館様の家名、産屋敷は商売人の間では有名だ。

だからお館様が華族である事を知っていてもおかしくない。だが、鬼殺隊の運営者であることを知っているのは、それこそ極一部。鬼殺隊士なら知っていてもおかしくないが、橘香子の家系に鬼殺隊士はいない。

橘家で鬼の目撃情報も過去50年遡ってもいない。

「ワタシがワタシとして産まれる前のキオクです。過去ではなく、前世のキオク：キサツタイがただのモノガタリとして、娯楽となっていた世界のキオク：。」

「未来の記憶…か。」

お館様の【先見の明】とは似て異なる能力。対象は前世の記憶だと認識しているが、コレがコイツの血鬼術か。

「前から、不可思議だとは思っていた。」

「ナニがですか？」

コイツは不思議そうな顔で俺を見ている。仮にも元柱相手に。絶対に殺されないと分かっているような…いや、分かっているのか。俺が他国の役人に危害を加えないと。

「鬼を知らずに鬼となりながらも、混乱する様子を見せず、実家に帰る事もせず、日本人には頼らなかつたこと。なのに、他国の宣教師には身内同然の感情を持ち、地下に隠れ住み、炭治郎の訪問後、国籍を得て本物の異人となりながらも、その立場だけだと、俺たちから逃れられないと確信していたこと。これは、俺たちの上司が《国に口利きが出来る》という前提がなければ、利用される事が確定しているにも関わらず、他国の権力者に自分の存在を証明しようと動かない。」

お前は…これまでの行動から見て、頭が弱いわけでもないからな。

追う立場が、俺たちだけなら、外国人には手出しできない。」

教会の孤児として、身元が証明されている外国人に、俺たちは手出

し出来ない。鬼殺隊は政府非公認の組織だ。その立場に甘んじず、異国のさらに上に、保護を求めたという事は、

「おかしいとは思ってたんだよな、いくらお館様の寿命が短くなっているとはいえ、先見の明で財を築き上げた実績の持ち主相手に、お前が毎回先手を打っていることが。」

コイツも、またお館様とは異なる【先見の明】の持ち主だからこそ、対抗出来たという事か。

「それで？お前が俺に竈門兄弟の件で話したいと招待状を送ってきたつう事はよ、お前の知る未来と現実に差が出た…とかだろ？お前の知る竈門兄弟はどうなったんだ？お前は何を求める？」

コイツの価値基準は、西洋寄りだが、所々日本人らしい感性が出たりしている。俺たち相手なら兎も角、少なくとも竈門兄弟を悪く思っていない、そして、俺を秘密裏に呼び出した。

「鬼は…タイショウ時代に滅びます。アナタたち、鬼殺隊の手によって…」

「それで？」

ある程度予想通りだったか。

「モンダイは…ワタシの知るミライでは…鬼殺隊単独でムザンをタオシたミライでした。デモ、今はチガウ。ワタシと言う異分子のセイで、クニが本腰を入れました。ムザンはタオセルと思います。しかし、そうになると、竈門キョーダイのミライが大きく変わります。」

「無惨は倒せる。それなのに、竈門兄弟の未来が変わるだ」と

コイツの知る未来では、無事に竈門妹が人間に戻れたと言う事か。なのに、未来に希望がないかのような反応。鬼殺隊単独…政府主導扱い…ああ、そうか。

「竈門兄弟が国に囲われる未来になるのか。」

「ソウデス。太陽を克服した鬼の唯一のケツエン者。一度は人に戻ったとはいえ、元鬼の妹。タンジローの生家、クモトリ山、今は事実ジョーの軍施設になっています。ワタシの立ち位置から見ても、かなり危うい立場です。そんな中で、鬼を倒し終えたミライに、タンジ

ローたちに待ち構えるミライなんて、ヨソーがつきます。」

「炭治郎、襷豆子を国外に脱出、この場合は密入国させると?」

「ハイ、ワタシは：ワタシを見捨てた日本人のために、死ぬつもりはありません。しかし、だからと言って、本来なら日本で幸せに、平凡なニチジョーを過ごせるミライを潰しても良いと思えるほど、人の心を捨てた覚えはアリマセン。」

自分さえ良ければ良い……。そんな事を考え、実際にミステテしまえば、ワタシを捨てた日本人と同じ存在に成り下がってしまいます。

ワタシは、ワタシのために、竈門キョーダイをできるだけ幸せにする必要があります。」

全ては自分の為。自分が日本人と同じような、臭い物には蓋をする存在に成り下がりがたくない：か。否定出来ないな、1000年もの時間、理性ある鬼の存在を無視し、まともに対応せず、殺し続けたのは事実だからな。

「竈門兄弟に関しての、他国への放流は賛成だ。」

この国に留まれば、どの道利用され、子孫も永遠に監視され続ける未来は、容易に想像つくからな。

それで、お前はどの国に放流するべきだと思う?」

米国も表向き「役人」として、秘密裏に困うほどだ。コイツがわざわざ好ましい態度で接していた、竈門兄弟の話を出すとなれば、俺の予想以上に、向こう側は本気だ。

「地理的に見て、独立コツカであるタイか、多神きよーで民族がカオスなインド。インドは英国のエイキョー下です。米国のエイキョーが低い土地となれば、そのくらいでしょかね。間違ってもChinaとロシアはやめてくださいね。ジサツコイイです。列強国本国に乗りこめれば、最適なのですが、白人国家で、オーシヨク人種がマトモな職につけるとは思えません。」

「賛成だ。確かに安全性だけで考えれば、西洋国家に渡るのが最適だが、言い方は悪いが、教養がない、言葉もまともに話せない黄色人種の平民が、真つ当な職に就けるほど、優しい世界ではない。」

こちらから支援するにも限界がある。距離と本人の体力を考えれ

ば、密航ともなるとタイかインドの二択だ。」

竈門兄弟が紛れ込み、かつ現地で生活の基盤を立てて、生活するとなると…2カ国しかない。

「密航はアナタの専門分野です。ワタシはキョーリヨクできません。仮とはいえ、アメリカの役人ですから。」

「ああ、元よりお前の協力など期待していない。その手の案件は俺の専門だ。だが、少し安心したぜ、炭治郎に子孫を残すなど言っていたそうだからな、てつきり、お前は炭治郎が嫌いなものだとばかり思っていたが、ちゃんとあの2人の今後を考えていたんだな。」

少なくとも嫌ってはいないと予想していたが、だからといって、好きという訳でもない。なんつうか、コイツ、人間に対しての反応が、ぶれる時があるんだよな。

「産屋敷の悲願タツセーの道具になるつもりはないので、炭治郎を拒否しましたが、非のない子どもが不幸になるのを、トーゼンの結果だと思えるほど、キチクにはなれません。そんな事してしまえば、

それこそ鬼ではありませんか。」

「お前の要望は分かった。向こうも俺の予想以上に本気なんだな。戦う子どもの未来が不幸だと分かっているながら、戦わない俺が幸せを享受する道理はない。忍として、全力で竈門兄弟を日本から消そう。」

「あとはお願います。」

そう言って、仮にも役人が俺に頭を下げた。コイツも自分が辿る未来が不幸だと知っていないながらも。

「お前は…このままでいいのか?」

「はい、ワタシは、私は、鬼と知りながらも『私を信じる』と言ってくれた人と、私を仮初とはいえ、親子になつてくれた夫妻が生まれ育つた国を衛るためなら、死んでも構いません。元より生き地獄を覚悟の上で、外国を頼ったのです。理不尽に奪われた竈門兄弟とは違います。私には選択肢がありながら、茨の道を選びました。この選択を後悔していません。」

コイツの覚悟は決まっていた。こりや梃子でも動かないな。

《コケコッコー!!》

「もう朝か！」

やべっ！柱稽古が！

「竈門兄弟のことは俺に任せろ！んじゃ！」

「テメエら起きろ!!今日も基本の座学だ!!」

密航用船の手配もして、死亡偽装用の服の準備もしないと、いけねえな。嫁たちの協力も仰がないと。

▽▽▽

大統領の憂鬱

時はローズマリーの正体発覚当時まで、遡る。

『はあ…』

私は今、改めて人を扱うことの厳しさを知ってしまった。

日本に本物の不老不死者がいることを知った側近の一部が、今は友好国である大日本帝国相手に、焦土作戦の計画書を持ち込んだり、

勿論、却下したが…。

別の側近は、宗教的な確認のために、勝手にイエズス会に連絡を取ったり…。

情報は如何なる場所にも漏らすなど厳命していたのに…。あの確認のせいで、イエズス会まで怪しい動きが見える。

私の理想は、不老不死者の安全な確保のために、せいぜい、ただの大使の娘を帰国させる。という計画だったのに、日本人に往来で襲われたせいで、外交上、表沙汰の問題にするしかなかった。だから、大日本帝国の印象を悪くさせつつ、帰国させる。という筋書きに変更した。なのに、その上イエズス会に知られてしまったせいで、国内でも変な動きが見える。

いくら我が国が、プロテスタントの比率が高くとも、カトリックの影響力もある。そんな中で、

【神の筋書きに背いた異教徒】を国内に入れたら、どうなる？

そう簡単に死なない存在だとしても、万が一がある。

それ以上に、国内で情報が漏れて終えば、それこそジャーナリストの餌食になる。

だからこそ、オニを滅ぼす意志がある。という事を、不特定多数のクリスチャンにわざわざアピールする必要があった。そのための「日米合同軍事演習」だ。

本当はこんな事したくなかった。

なぜ、日本の問題をアメリカ国民が命をかけてまで、救う必要がある。

開発費を回収しないのだぞ。武器提供で十分協力している方ではないか。

だが、このくらい大袈裟なアピールでもしなければならぬほど、カトリック教会関係者の動きがおかしい。

ローズマリー・ベネットの情報漏洩があつてから、

【異教徒との交流会】という名目で、日系人が多く暮らす州を中心に、交流を始め出す。異教徒との交流会が本当の名目ならば、ユダヤ教やイスラム教でもいいはずなのに、あからさまに日系人が多い地区ばかりだ。我が国は自由の国だ。ただの交流会を妨害する理由がない。

宗教組織の厄介なところだ。

カトリック全盛期ほど権威はないが、不老不死者の情報を漏らした側近もクリスチャンだ。人である以上、不安で堪らなくなった時、宗教に縋ってしまうのは、地位が高い、低い関係なく起こる。

あの時…、映像が届いた時点で、1人で観ていればよかった…。【秘密裏に届けた】という事態を重く捉えなかつた私の責任だ。

何より、不老不死者の身元保障先が、イエズス会、カトリックである。あの組織が【キリスト以外の奇跡】など認めるわけがない。

だが、そんなことを言ってしまうえば、過激派は何を仕出かすかわからない。その対策で、カトリックに【ローズマリー・ベネット】を認めざるを得なくするために、権威が落ちているカトリック教会を持ち上げつつ、大日本帝国の評価を落とす、プロパガンダ映像を創り、映画館や【奇跡の実話】として、ジャーナリストに情報が渡ったように見せかけて、新聞で広めさせた。

その効果は絶大だった。

アメリカでは、カトリックは少数派な信徒だ。

久しく見ぬ、綺麗すぎる美談に一部は盛り上がった。

そして、その流れで【ウィリアム・ヤコブ・ウイステイリア司祭】不老不死者の最初の保護者であり、あの不老不死者を溺愛している司祭の名も上がった。

普通の哀れみで助けたならば、わざわざ変わらぬ愛と言う花言葉を持つ、【ローズマリー】そして、極め付けに【ベネット】…ラテン語で、Benedictus…祝福された、恵まれた…などの意味を持つ家名などつけないからな。

あの司祭の入れ込み具合は、書類でしか見た事がないのに、まるで愛娘のようだ。

ハリス大使からの報告書でも、かの不老不死者も、あの司祭を慕っているようだ。ならば、彼が司祭の立場を追われる事態も、なるべく避ける必要がある。あの入れ込み具合なら、所属元のイエズス会の意向よりも、我々の意向を優先してくれるだろう。あわよくば、イエズス会の怪しい動きを報告させるスパイにもできる。

ここまで、名声を高めてしまえば、破門する理由もない。あちらは、あの司祭を放置せざるを得ない。

その結果、モンスターを排除するメリットよりも、美談をそのまま広めるメリットの方が勝り、イエズス会は、『ローズマリー・ベネット

を認めている。』と解答した。

だが、私にはそれが嘘の発表である事は、当初のイエズス会の動きから見て明らかだった。

何よりの証拠は、ローズマリー・ベネットは洗礼していない。

カトリックにおいて、信者の洗礼は絶対だ。

もし、何かしらの理由で洗礼式を行えなかったとしても、洗礼名を付けられていないのは、不自然すぎる。

今の養父であるハリス大使が、プロテスタントでも、引き取られる前はカトリック預かりだ。洗礼名をつける時間くらいある。

洗礼していない上、洗礼名もないローズマリー・ベネットは、いくら教会預かりとはいえ、異教徒のお客さんだ。

身内ではない。

はあ…、側近に敬虔なカトリック信者がいるせいで、常に情報漏洩の心配があるとは…。罷免したいが、そうになると、『不老不死者の情報を外部に漏らしたから』…を公表する必要がある。1人だけを罷免するのに使うにはデメリットが大きすぎるし、ましてや【宗派】を理由に罷免は出来ない。1番警戒するのは、不老不死の存在をジャーナリスト共に嗅ぎつけられる事態だ。

ただし、カトリック対策で、『ローズマリー・ベネットの存在』は大衆に広めておかないと、何か起こった時に迅速な対応が出来ない。

【大使の娘】で優位なのは、日本限定だ。

国内に戻ってきたら、ただの一般人。

だからこそ、国内での安全確保の為に、こじつけでも【役人】にする必要性があった。

そのための【特命連絡員】だ。

折を見て当然、役職は無くすが、国内で【一般人の娘さん】が行方不明。と、【大統領が任命した役人】が行方不明。となれば、後者は州や国を跨いだ捜査をする理由になる。

国内の宗教組織の動きが、安定するまでは、役人の立場は消せない。

『はあ…早くオニを滅ぼしてくれ。』

もうこれ以上、情報漏洩しないように、気を抜かないように、オニだと知っている人間を見張らないと。

司祭の話

本部の司令を達成し、山を降りてからも風邪の症状が治らなかったが、今はだいぶ落ち着いてきている。

『ウイリアム司祭、本当にもう良いのですか？』

『ゴホツ…んん、咳はだいぶ治りました。ミサの聖書朗読は出来ます。まさか、風邪がここまで長引くとは思いませんでしたが、もう体調に変動はありません。』

『ならば…良いのですが…』

『シスター、ご心配をおかけしましたが、自分の体調は自分で管理できます。シスターこそ、私のせいで奉仕活動に支障が出ています。シスターは皆の手本、私の心配よりも、他のシスターたちの事を優先的に考えていただきたい。私はもう、問題ありません。』

私が体調を崩して帰ってきた時、この老齢のシスターは、私の看病をつきつきりですてくれた。

途中からある程度体調が安定的になったとはいえ、私とほぼ同時期に来日したシスターだからか、私のこれまでの風邪とは違うと理解していたのだろう。ベッドから起き上がれるようになった今も、私を心配してくれる。ありがたい事だが、これ以上心配されてしまうのも困り物だ。

『それも…そうですね。では、司祭に神のご加護を。』

『シスターにも神のご加護を』

ガラン

…去ったな。確か、ペーパーナイフはこの辺りに。

確かめなければ、もし…あの血が見間違いではなかったとすれば。

シユツ

『やはり…見間違いではなかったか。』

紙を切るための物とはいえ、ナイフはナイフ。肌に切り込めば傷が付く。本来流れるのは赤い血。

だが、私からは、

『青い…血…』

ペンに吸わせる青インクのような、少し見るだけなら黒に近い色の青い色の血液。私の元々の血液の色は当然、赤。だが、例の山から下山してからの体調悪化により、口から出てきた血液は青。やはり…原因は、

『あの土…』

ローズマリーが処分を秘密裏に求めた時点で、あの植物が存在を公表されてはならない劇物であるのは、わかっていた。やはり特殊な土壌でしか育たない植物だったか。そして、その特殊な土壌を食べた私の身に起きた異常事態。

青の血…まるで、かつての時代に栄光を意のままにしていた、スペイン・ハプスブルク家のようにではないか。だが、【青い血】はあくまでも比喩表現。

ハプスブルクの歴代皇帝が、本当に青い血の持ち主であったわけではない。それに、

『傷の治りが早い。』

ローズマリーほどではなくとも、もう傷口が塞がっている。

オニではない確信は、日光を浴びている時点で明らか、そしてローズマリーのような縦長の瞳孔をしていない。

だが、この変化…オニの中で何故ネズコさんだけが、太陽を克服できたのが明らかになった。

やはりあの植物こそが、オニに対する抗体だったのか。

初めてネズコさんに会った時からほぼ確信していたとはいえ、改めて私の変化を見れば、成程、ローズマリーがあの植物の絶滅を求めるわけか。

こんな劇物が日本に存在していると、明らかになって仕舞えば、世界を巻き込んだ争奪戦になってしまう。何はともあれ、変化が目に見えるものではなかったのが不幸中の幸いと言うものか。流石に、後天的に瞳孔が縦長になってしまったら、どここの組織にも属せなくなる。

『さて…ローズマリーに説明するべきか否か。』

私は太陽を浴びても、何一つ変化はしない。カテゴリー枠があるとす

るならば、私は【人間寄りのオニ】ではなく【オニ寄りの人間】になる。人間ならば、仮にムザンが討伐されても、私は青い血こそ無くなれど、人間であるから、交流初期に聞いた、ローズマリーのように灰になる事はない。

『ふむ…』

黙ろう。ローズマリーを疑うわけではないが、情報と言うものは知る人が多いほど、漏洩確率が上がる。私の場合、怪我をするような職種ではない。

日常生活で困る事はない。ならば…せつかく教会に帰ってこれたローズマリーの心労を増やすばかりの、緊急性がない話題は必要ない。

ガチャ

『ウイリアム神父、ローズマリーが神父と話したいと。』

『分かりました。直ぐに行きます。』

懸念材料の焼却処分に成功した事を話そう。

▽▽▽

『ウイリアム神父！』

キサツタイの魔の手から逃れるために、教会に一時避難をしたローズマリーは、

ギユ

『会いたかったです！』

前回と異なり見た目の年齢に合う、心を持つようになっていた。

もとを辿れば、ローズマリーが特命連絡員などという役職についたのは、ひとえに【キサツタイを挑発】するため。役職を罷免されていないが、教会に戻れたということは、

『よく戻ってきましたね、ローズマリー。仕事を無事に終えたようで何よりです。』

ローズマリーの仕事は終わったのだ。

『…いえ…まだです。ウィリアム神父、約束してくれたツクシは何処ですか?』

再会の喜びを分かち合う暇もない…か。

そうだよな…ローズマリーは、彼女は特命連絡員なのだから。

この部屋は教会関係者の建物とは離れているとはいえ、人に勘ぐられる事態は避けなければならない。

『ローズマリー…あなたのお願いなので、こちらも一生懸命に探しましたが、さすがにこの時期にツクシを見つけることは出来ませんでした。ツクシ以外の山菜ならば、ハリス大使に頼み込んで入手する事は出来ますが、季節外れの野菜や珍しい果物ならともかく、山菜を今の時期に入手する事は困難です。…野菜や果物は駄目なのですか?』

大丈夫、ちゃんと処分できた。私の変化がその証だ。

『いえ…私も我儘を言い過ぎました。』

そう言いつつ、明らかにこれまでの緊張感が抜け、

『そういえばシスターから聞きました。体調は如何ですか?』

話題を矛盾点がないように変更した。

『ええ、ローズマリーよりも健康ですよ。慣れないことをした疲れが出たのだと、医師に診断されました。私自身、布教のためにこの国に入国したのです。元々、普通の人よりも健康面には自信があります。現に私を見て、病人に見えますか?』

体調の変化があったのは事実だが、私は元来健康体だ。

『いいえ、とてもお元気そうです。ウィリアム神父に…いえ、教会の人々と最後まで共に過ごせるようになって…良かった。』

『そうですか…神父冥利につきます。』

最後まで…この子は生き残る術を探すこともせず、あるがままに死ぬ事を決めたのか。

『ローズマリー、あなたはあくまでも療養名目でやって来たお客様です。なるべく教会の外には出ないように。私は溜め込んだ奉仕活動

が残っていますので、ここで失礼を。』

『あ…ありがとうございます…ウイリアム神父。』

キィ

▽▽▽

ローズマリーが帰ってきた初日。

『おはよう、ローズマリー』

お飾りとはいえ、役人であるローズマリーは、初めて会った時のように一緒に行動をすることが出来ない。だけど会えない訳ではない。

『おはようございます。ウイリアム神父、そのジャムとパンは？』

『ああ、私たちは君が健康体であると知っているが、君の表向きは療養だ。私たちは、病人の介護という事になっている。教会の敷地内としても、一般の信者に君の姿を目撃させる訳にはいかない。離れに食事を持つてくる。今日はたまたま私の番だったただけだ。不自由はさせるが、その分、食事は大使館ほどではなくとも、好きな物を食べさせたいと思うてな…ハリス大使や、イーサン軍医からも食事メニューは届いている。存分に食べて、健康を維持するように…とのことだ。』

『そうですか。ありがとうございます、早速頂きます。』

カリッ

『ジャムの味…何味ですか？ブルーベリーのような、ん？藤の風味？』

『それは、イーサン軍医お手製のジャムです。ベリーに藤の花エキスを混ぜ込んだモノだとか。』

『ああ、道理で変な味がすると思いました。』

ローズマリーはそれから黙々と食事を摂り、

『美味しかったです。ウイリアム神父もこの食事を作ってくれた方に

もお礼を伝えてください。』

『お伝えしましょう。ローズマリー』

▽▽▽

『まあ！ちゃんと食べ終えたのね！』

『この調子ならば、藤の花エキス、濃度をあげても問題ないでしょう。』

『では、昼食は誰が持ち込みましょうか、シスターそれとも、イーサン軍医がよろしいでしょうか。』

【特命連絡員】の立場がとれるのは、アメリカに渡り終えてからになるのだろう。ならば、最後の最後まで、健康面を騙し通そう。

【先見の明】 意外な弱点

九鬼大和 side

「産屋敷伯爵が私との面会を求めている？」

「はい、警視。緊急案件だと血反吐を吐きながら、とても演技とは思えません」

はあ：ただでさえ、不穏分子の排除と合同軍事演習における割り振りで大変な時期に限って：：とはいえ、緊急案件を後回しには出来ない。

「分かりました。案内を」

「こちらになります。」

▽▽▽

産屋敷耀哉 side

《無惨!!》

《竈門炭治郎は死んだ。》

《ローズマリー：さようなら》

《誤魔化しも：限界：か。》

《大日本帝国の威信をかけて鬼を滅ぼせ!》

《はっ!!》

ある日から私の能力に陰りが見えるようになった。

太陽を克服した鬼、橘香子。

今でこそローズマリー・ベネットと呼ばれる鬼は、まるで私の性格を知っているかのように、こちらの手段を合法的に避けた上、我々の行動を制限した。

途中まではこちらの手の内だった。

他国宣教師に頼り、国籍を得た時点で、こちら側の関係者と書類だけの養子縁組をするように手配した。

だが、ローズマリー・ベネットと名前を与えられた鬼は、国籍だけで安心をしなかった。こちらの段取りが終わる前に、ハリス全権大使の養女となった。

今までなら、たかが一般人、ましてや女学校のお嬢さん相手に先手を打たれるなどあり得ない。

なのに、先手を打たれた。

私はどこかで驕っていたのだ。

《鬼を知らず、両親に甘やかされて育ったお嬢さんに策略を見破られるなどあり得ない。》…と。

無意識に少女だから、民間人だからと、【橘香子】の経歴だけで相手の能力を見くびった。

その上、これまで上手くいっていた。という成功体験もあり、私は【橘香子】が【ローズマリー・ベネット】となった事態の重さを把握しきれなかった。ここで情報漏洩を覚悟の上で、天元に相談していたら、相手が大使の養女になったと知れた。

そうしていれば、私はウィーン条約を破ってまで、橘香子を利用しようとしなかった。

もし…たられば…最早、意味のない敗者の言い訳でしかないが、私が見ほど見た未来を実現させる為にも、この国も米国も全てを利用して、最良の未来を創る。

「ゴホツ…ゴホゴホ…」

「あなた…」

ガラッ

「産屋敷伯爵、緊急案件とは何事でしょうか？」

「ゴホツ…布団の上から失礼を…。鬼舞辻がこの屋敷を特定…並びにゴホツ鬼殺隊を殲滅する日が…見えました。」

「ゆつくりと話してください。」

この人は、この国のためなら何でもする。

どんな非道な手段も厭わない。

だからこそ、信頼できる。

彼なら確実に、鬼舞辻無惨の息の根を止める。

全てはこの国に住まう私たち以外の人間のために。

あまねは、大和殿に計画を話した。

「なるほど…それで、伯爵や夫人が自爆するのですね。子どもの保護先は何処にするのですか？」

「えっ…？」

「夫人？」

何か…ずれている？

「産屋敷家はお家取り潰しでは？」

あまねと私は、お家取り潰しを前提に計画を練っていた。だが、ならば、何故、そのような終わった後の事を？

「ええ、お家取り潰しは確定です。当然でしょう？曲がりなりにも華族ともあろう立場の人が、国際問題に発展させておいて、鬼を倒し終えたから、本物の繁栄を築くなどと抜かしたら、それこそ断罪案件です。ですが、没収予定なのは爵位と、爵位を理由に得た財産です。産屋敷家は公家の華族なので、爵位を理由に得た財産はない。なので、実質没収するのは爵位だけになります。」

「何故…？」

表向きはそうだろうが、我が一族が財を築き上げた理由の一つに、華族だから融資を受けやすい…と政府側は知っている。

「もちろん、あなた方の予想通り、産屋敷耀哉が個人で稼いだ財産も没収する事は可能です。しかし他国が見張っている現状、罪なき子どもの未来を潰す行為をすれば、更に我が国の評価が下がります。」

我が国は一流国家です。

連座など、封建社会の遺物を残していると思われるくらいなら、産屋敷家の財産など必要ありません。」

「そうですか…。」

あまねは静かにそう言い、

「しかし…鬼舞辻無惨を確実に屋敷に留めさせる為には、子どもの存在が必要です。私たちだって、本当はこのような事をしたくはありません。ですが、鬼舞辻は珠世殿の話では、継国縁壺の一件以来、逃げる事に躊躇いを持たなくなった…と聞きました。懸念材料が少しで

もあれば、奴は確実に逃げます。」

「つまり…産屋敷が自爆する可能性を悟らせない為に、子ども諸共と？」

「はあ…米国の特命連絡員が貴殿ら一族を、竈門兄弟の前例を知った上でも警戒し続ける理由が分かりました。ある程度予想していたとはいえ、狂っていますね。」

表向きは、子ども達を哀れに思っているのだろう。目があからさまに軽蔑の色になった。

「貴殿らの言い分は分かりました。」

正直、米国の見張りがいないなら、こちらとしても、どの道【産屋敷一族の暗殺】を命令していました。しかし今、伯爵と夫人が自爆する分には構いませんが、子どもを巻き込む形の自爆を行えば、米国は：我々が始末したと思いい、《大日本帝国には連座が残っている》と報告されてしまいます。それだけは避けねばならない話です。」

やはり…この男は我ら一族の栄光も衰退も興味を示さない。この男にとって1番優先している事は、【国家と国民の繁栄】のみ。子どもを自爆に巻き込む計画其の物は肯定している。

「ふむ…子ども達が離れないのならば、その子女、ひなき様とにちか様ですね。死なせましょう。」

「死なせる…ですか。」

あまねは懐刀に手を伸ばした。それも想定済みだった九鬼大和は、ガシッ

「痛ッ…！」

あまねの利き手を掴み、懐刀を落とした。私たち一族が華族であることから、彼はこれまで私たちに指一本触れなかった。だが、今回はあまねは刃物を取り出した。見た目がどれほど華奢に見えても、憲兵というだけはあるの…だな。羨ましい限り。

「伯爵夫人、最後までお聞きくださいませ。何も本当に殺すつもりはありません。表向き、【病死した】と事前に宣伝するのです。この建物を知っている人間は少ない。こちら側で仮死薬を準備します。元々が短命な一族ならば、元気な子どもが急死しても、そこまで不自然な

話ではありません。特に今の時期、盛大な葬式などできない。葬式は両親と時間が取れる一部の軍人にさせます。棺桶の中に重りでも入れば、中身が偽物だと気づかれません。万に一つも中身が飛び出さないように、頑丈な棺桶を準備します。」

「ゴホツ…」

「あなた！」

「それで…お願い…します。あまね」

「はい、柱や隊士には、葬式が終わった後に報告をしましょう。」

数日後

「後悔はしませんか？」

「はい」

「そうですか…では、注射をします。ひなき様、にちか様。」

私たちは再度話し合い、ひなきとにちかの体調が悪化していると嘘を言い、娘と私の診察という名目で外部の医者を呼び寄せた。この日を境に残っていた数名の隠は別の部署に配置換えをした。

「伯爵！あまね様！ひなき様とにちか様が!!」

代わりに、戦闘に向かないと判断された何も知らない軍人に、華族一族の警護という名目で、大和殿は軍人を配置した。

当然、何も知らない軍人だから、ひなきとにちかが本当に死んだと認識した。

「そうですか…元々、短命な家系です。」

「ゴホツ…葬式を」

「はっ！直ぐに九鬼様を！」

「この度はご息女を2人も亡くされたと聞きました。土葬の準備はこちらが行います。ご冥福…お祈りいたします。」

「ありがとうございます。」

「ゴホツ…お礼ゴホツ申し上げ…」

そして手筈通りに、仮死状態のひなきとにちかは、天元が作った隠し部屋に運び込まれ、大和殿が用意した子ども用の棺桶に、砂を入れた麻袋の重りを入れ、少数の軍人は大和殿の命令通り、中庭に埋めてもらった。

そして、あまねは鎧烏に速報として、「産屋敷ひなき並びに、にちか急死」【墓参りは全てが終わった後、許可する】と報告した。

大和殿も米国の大使館に説明したようで、百合の花束とお悔やみの言葉が書かれた手紙を渡してきた。

「ところで…本人達はいかがお過ごしで？」

一通りの偽造工作が終わり、産屋敷一族の様子見として屋敷に足を踏み入れた大和殿はそう言った。

「ひなきも、にちかも、隠し部屋の中で過ごしています。今、この屋敷には私たち家族しかいませんので、多少の音漏れは問題なさそうです。」

「そうですか…。では、私たちの合同軍事演習は何日に行えばよろしいので？」

「ゴホツあの日程で…問題…ありま…せん。」

そう、ひなきとにちかが死んだ。自爆するのは私たち夫婦のみ。ともなれば、この男には最早、躊躇う必要が無くなった。

「では、不死川中尉には、もう一つの命令を発令させます。」

そう言い残し、九鬼大和と呼ばれる男は、二度と産屋敷に近づく事はなくなつた。

▽▽▽

不死川中尉 side

俺が表向き率いている【銃器中隊】の軍人も、この頃になると銃撃や近距離戦の訓練も型に入ってきた。

軍が送りこんだ新型の拳銃も、俺用の鬼化する事が前提の拳銃と違い、万人向けの物だからか、俺用よりも多少、藤の弾丸成分が少ないようだが、下弦程度には一時的に怯ませるくらいには効くと証明できた。

一応、日輪刀もあるけど、刀で鬼を殺す訓練はしてないしな。

それに、最近は軍人も鬼殺隊士も新人が送られる事が減った上、厄介な味方の排除もひと段落ついたからか、訓練の練度が上がっているように感じる。

カツカツ

ん？この音は。

「中々良い訓練ですね、不死川中尉」

「はっ！ありがとうございます！」

九鬼さん!?!最近軍に籠っていると聞いてたんだが？

「銃器中隊！集合！」

とりあえず、視界に入っている軍人は集めよう。

「訓練中だが、この度銃器中隊には新たな任務を与える！」

「はっ!!」

「鬼殺隊士は戦うことを前提にした結果、医療知識が乏しい！君たち後方支援部隊は、負傷した仲間の応急措置並びに、鬼殺隊の医療部隊と連動をとり、より多くの傭兵を戦場に送り続ける!!」

「医療知識を今からでありますか!？」

九鬼さん、俺そんなこと聞いていない!

「我々はただでさえ、外部として鬼殺隊では浮いています。戦地が地上ならばまだしも、高い確率で鬼の根城に飲み込まれるでしょう。」

中隊はただでさえ、人数が多い分、逸れると連携が取れなくなり、鬼に食われる確率が上がります。傭兵集団と違い、我々は皇軍です。表向きは合同軍事演習でありながら、死人が出る事態は避けねばなりません。と、なれば鬼殺隊士が嫌々ながらも、助ける必要性を作らねばならない。鬼殺隊は華族の傭兵だったので、医療に湯水の如く金を使えなかった。だが、我々は違う。鬼対策ならば、いくらでも国庫から金を出せる。現に君たちが持っている武器も日輪刀以外は、国家の科学班が作った物です。当然、鬼殺隊よりも我々の医療技術の方が上。鬼殺隊は戦闘、我々は医療に専念する。

分業化する事により、お互いに依存させます。

今の銃器中隊は統制が取れている。だからこそ、戦場の医師を一時的にでも量産させる。分かったな不死川中尉!!」

「仰せのまま!!」

この一月、問題児を送らなくなった理由はコレだったのか。確かに補給経路を確保できないなら、俺たちは孤立する。俺たちは後方支援部隊であり、外部者だ。鬼殺隊士によく思われていない。戦闘に集中したい隊士が、嫌いな俺たちを助けるとは思えない。

後日、銃器中隊に蝶屋敷の女の子たちが派遣された。

「蝶屋敷から派遣されました、神崎アオイと右から、高田なほ、寺内きよ、中原すみです。」

「銃器中隊長、不死川玄弥と申します。階級は中尉。九鬼様からお伺いしました。我々に医療のご教授をして頂けると。」

「はい、こちらも医療に専念する人数が多ければ、戦いに有利となります。しかし…ちゃんと学ぶのですか?」

そういえば…アオイさんと蝶屋敷3人姉妹（血縁ではないけど）は

戦えない事から、俺とは違う意味で馬鹿にされていた事もあったな。
(まあ、クズ野郎は柱の総攻撃にあつたらしいけど)

「ご安心ください、我々は最初から鬼と戦うことを前提としていません。なので、身を守る術として医療技術を学ぶ事に好意的な者が多いです。不当な扱いを受けたならば、それは軍規に違反しているので、遠慮なく、物理的に潰しても構いません。」

そう、俺たちは【国の命令】として医療技術を学ぶのだ。
それに歯向かうなら、それは軍規違反となる。

「分かりました、では基本の応急措置を教えます。」
「よろしくお願いします。」

「産屋敷の本拠地が分かったのか！よくやったぞ鳴女!!」

「ありがとうございます、無惨様。それと、青い薔薇の送り先が南鳥島だそうですね…。」

「南鳥島…か。」

さあ！茶番劇の始まりだ！

教会に療養という名目で滞在して数週間。

カアカア

『ん？あれは』

白い…鳥？

ポト

『これは』

手紙だ。こんな芸当できるのは、

ペラッ

.....

ローズマリー特命連絡員様

鬼殺隊の宇髄天元様だぜ！

一応の密航の手続きが終わったから念のための報告だ。迷ったが
竈門兄弟の密航先は、タイにする事に決まった。

英国が鬼の事を嗅ぎつけないとは限らない。ともなれば、小国とは
いえども独立国家であるタイの方が、竈門兄弟の安全性を高めること
が出来る。密航の準備は一通り終わった。俺様がお前に求めるのは
1つ！

派手に米国の目を釘付けにしろ！

日本なら俺様の手で何とかできるが、他国は無理だ。

それと、お前も軍艦に入っちまえば、もう帰れないぞ。今のうちに
日本での未練を絶てよな。

.....

『さすがは元忍』

私には、合同軍事演習が始まる前に移動するとイーサン軍医から連
絡があった。だが、当然ながら鬼殺隊はその事を知らない。なのに当
たり前のように私が軍艦に移動する日を予想できている。

『未練…か。』

私だって、今でこそこの姿で、記憶が曖昧だが、元を辿れば日本人。
当然、日本人の両親や、友だちだったのだろう。

でも、もはや思い出せない。未練というか、単純な疑問がある。

『最近、妙に体調が良いんだよな。』

冬に近づいてきて、体調が悪化していたのに、教会に移動してから数日経って、食事量が少なくなっているのに、体調は良くなっている。私としては困らないけど、明らかにおかしいよな？

『まるで別の口があるかのような…？』

私の体調悪化は何も、単純な太陽光不足ではない。食事だけならば、仮にも大使の娘で大事な被験体だ。いくらでも準備してくれてたし、下手な中流階級者よりも豪華で、栄養価が高い料理を食べていた。なのに体調は悪化する一方だった。だからこそ、教会への移動が認められたんだ。なのに、教会に移ってからは、食事量は変わらないにも関わらず、体調は良好に持ち直している。

『そういえば』

私が国籍を得る前に暮らしていたカイマクル。

あれ…結局誰にも言っていないなかったな。

まあ、いいか。あそこにあるのは「非常食兼身代わり人形」と、神父さんから貰った聖書だけだもんね。

トントン

『どうぞー！』

『ローズマリー特命連絡員、お食事です。』

『はい、イーサン軍医』

未練はない。そう…未練は。

『食事が終わり次第、軍艦へ移動します。』

『はい。』



鬼殺隊 side

「えっ？包帯ってこんなに複雑にするのか？」

「あー、俺たちは足とか腕とかの、緊急止血しかしていないからな。」

「医療処置がこんなに難しいとは…」

「軍医の地位が高い理由…わかったよ。」

「はいはい、銃器中隊いえ、今は医療中隊でしたね。手を休めずにして、そこ…巻きが甘い！そんなのでは激しく動いたら直ぐに解けてしまいますよ！」

蝶屋敷のアオイは医者でこそないが、医療知識は深い上に経験も豊富だ。蝶屋敷での業務は国の命令で、蝶屋敷の三姉妹と陸軍から派遣された軍医集団に移行されている。（三姉妹は基礎分野のみの教習）アオイは軍人を即席の医療人に変えるために、これまでの知識を全て吐き出して指導している。

「器用な人は出来ない人の指導にまわって下さい。」

「はい、アオイ様」

九鬼の命令もあり、戦えない女の子の命令にも素直に応じる軍人の姿に、本人は、

「はあ、蝶屋敷の入院患者も同じくらい指示を聞いてくれるなら、苦勞しなかったのに。」

と、つぶやいていた。

▽▽▽

不死川玄弥 side

俺は今、九鬼警視の前にいる。

「ご報告いたします。銃器中隊改め、医療中隊では軍医とアオイ殿の指導により、簡易的な処置は一通りできるようになっています。」
「ご苦労、不死川中尉。それとこれから始まる日米合同軍事演習において、帝都内の立ち入りを制限する。君たちは民間人が入り込まないように柵立ても同時並行でするように。」

「はっ！承知しました。」

ついに始まるのか、鬼舞辻討伐が。

「鬼殺隊士も一通りの強化はできたと報告がある。今なら下弦？程度の鬼ならば、一般隊士でも倒せるそうだ。君たちも兵器は常に持ち歩くように。」

「はっ!!」

民間人の立ち入り制限か。これなら鬼舞辻も人喰いしにくいだろうな。

▽▽▽

主人公 s i d e

『これは?』

目の前にあるのは、銃を入れる為の箱。

『ローズマリー特命連絡員が軍艦で帰国することは周知の事実ですが、軍事演習中に乗り込む事を知っているのは、ルーカス・ホワード司令官しか知りません。特命連絡員がお飾りである事は本国では知れ渡っている以上、堂々と今、軍艦に搭乗すれば違和感を抱かれます。なので、このような密航じみた搭乗方法しかありません。ご安心を。ローズマリー様は艦長室に入りますので、他の軍人と鉢合わせる可能性は低いです。』
『そうですか。』

▽▽▽

南鳥島

ピッピ

ピッ

ピー

「通信が届きました。」

「例の女が来たと同時に確保を、」

「承知しました。」

「…こちらが【青い薔薇】です。」

「確かに受け取りました。」

米国艦隊から1人で降り、青い薔薇を渡したのは、着物をきた1人の女。

ガチャン

「橘咲夜、スパイ容疑で再逮捕します。」

「はい…」

▽▽▽

12月某日

ウウウー

ウウウー

「サイレンの音」

「ついに始まったのか、合同軍事演習」

「と言っても、俺たちは産屋敷の土地で待機命令だけだな。」

「武器は配布されているな。」

「というか、本当に来るのか？ 鬼舞辻とやらは？」

「そうだな、わざわざ軍事演習中で来るとは思えないけどな。」

産屋敷邸では、この日のために用意された、軍人専用の離れに全てのメンバーが待機していた。

バン

ババーン

「空砲の音も聞こえてくるなあ」

「まあ、昼間は鬼は出ないから、来るとしても夜だな。」

「俺たちは武器の最終確認で時間を潰すか。」

「おー！」

▽▽▽

主人公 side

『てえー！』

『演習とはいえ気を抜くな！』

『イエッサー!!』

バン

ババン

演習が正式に始まる前に私は、荷物に混じって艦長室に入った。

外の軍事演習の音が聞こえるが、私の存在を知っている人はいない。

これは夜になるまで終わりそうにないな。

一応、私が軍艦で帰国する事を前提に、1人部屋もあるので、夜になつたら、そこに運ばれる予定だ。それまでは、

『この中で眠るか…』

最近、眠くなりがちだなあ。

▽▽▽

side 産屋敷邸

「ゴホツ…待っていたよ、鬼舞辻無惨。」
「何とも醜悪な姿だな、産屋敷」

産屋敷耀哉の覚悟

産屋敷邸

夜になり、辺り一面が闇に包まれる中、因縁の2人が対峙した。「ついに…私の…元へ来た…今…目の前に…鬼舞辻…無惨…我が一族が…鬼殺隊が…千年…追い続けた…鬼…あまね…彼は…どのような姿形を…している…？」

片や今にも死んでしまいそうな包帯巻きの男とその伴侶。妻であるあまねは、因縁の男の姿を話す。

「私は心底興醒めしたよ、産屋敷。」

片や正に健康体の成人男性。瞳と髪の違いさえ省けば、双子と言っても信じられる容姿をした男。

つらつらと述べるは「醜い」「屍の匂いがする」

生きることの特化した鬼ゆえに、死に近い存在を毛嫌う。

「君は…知らないかもしれないが…君と私は…同じ血筋なんだよ…君が生まれたのは…千年以上前のことだろうから…私と君の血はもう…近くないけれど…」

「何の感情も湧かないな、お前は何が言いたいのだ？」

鬼舞辻無惨は自分さえ生き残ればそれで良い考えの持ち主。言い方を変えれば他者の気持ちや理解できない、そもそも理解するつもりもない。

鬼舞辻無惨 side

鳴女を使い、隠れ住む忌々しい一族に会ってみれば、元凶の男は死にかけ。その上随分とどうでもいい迷信をほざく始末だ。

病弱？子どもが直ぐに死ぬ？それはただ単にお前たちの先祖が近

親交配を繰り返してもしたのだろうか？現に、

「私には何の天罰も下っていない。何百何千という人間を殺しても、私は許されている。この千年、神も仏も見ることがない。」

最も、継国縁壺とかいう化け物はいたがな。

「君の夢は何だい？この千年間：君は一体：どんな夢を見ているのかな」

奇妙な感覚だ。

あれ程目障りだった鬼殺隊の元凶を目の前にして、憎しみが湧かない。むしろ…

「ひとつとや」

「一夜明くれば賑やかで賑やかで」

「お飾り立てたり松飾り松飾り」

「二つとや二葉の松は」

「色ようて色ようて」

「三蓋松は上総山上総山」

この奇妙な懐かしさ、安堵感：：気色が悪い。そして、この屋敷には四人しか人間がいない。産屋敷と妻、子供二人だけ。護衛も何もない。

気色が悪い：：仮にも上に立つ者が護衛一人つけぬとは、

「当てようか：：無惨」

「君は永遠を夢見ている：：不滅を夢見ている」

「その通りだ。そしてそれは間もなく叶う。禰豆子を手に入れさえすれば」

妙な安堵感といい、この一族は一体？

「君の夢は叶わないよ無惨。」

「禰 豆子の隠し場所に随分と自信があるようだな、しかし、お前と違い、私にはたつぷりと時間がある。」

死にかけのお前とは違う。私には時間が山のようにある。だが、何かがおかしい？何が？

「大切な人の命を理不尽に奪った者を、許さないという想いは永遠だ。君は誰にも許されていない。この千年間一度も。」

そして君はね無惨、何度も何度も虎の尾を踏み、龍の逆鱗に触れている。本来ならば一生眠っていたはずの虎や龍を君は起こした。彼らはずっと君を睨んでいるよ。絶対に逃がすまいと。」

こいつ…本当に死にかけなのか？

「私を殺した所で、鬼殺隊は痛くも痒くもない。私自身はそれ程重要じゃないんだ。」

この…人の想いと繋がりが、君には理解できないだろうね無惨。

なぜなら君は…君たちは」

「君が死ねば、全ての鬼が滅ぶのだろうか？」

「黙れ」

前言を撤回する。安堵感などない。

「話は終わりだな？」

「ああ…こんなに話を聞いてくれるとは思わなかったな…ありがとう、無惨」

ドン

「ぐっ！」

こいつら…！まさか！！

「産ッ」

「屋敷イイツ」

あの男の顔!! 仏のような笑みを貼り付けたまま！己と妻と子供諸共！爆薬で消し飛ばす!! 私は思い違いをしていた。

産屋敷という男を人間にあてる物差しで測っていたが、あの男は完全に常軌を逸している。

仮にも敵地だ、何か仕掛けてくるとは思っていた。しかしこれ程とは！

爆薬の中にも細かい撒菱のようなものが入っていて殺傷力が上げられている。1秒でも私の再生を遅らせる為に。

つまりまだ何かある。産屋敷は、この後まだ何かするつもりだ。

人の気配が集結しつつある。恐らくは柱。

だが、これではない、もっと別の何か、自分自身を囿に使ったのだ。あの腹黒は、私への怒りと憎しみがマムシのように、真っ黒な腹の中

でトグロを巻いていた。

あれだけの殺意を、あの若さで見事に隠し抜いたことは驚嘆に値する。

妻と子供は承知の上だったのか？

よせ、今考えることではない。動じるな間もなく体も再生する。

《肉の種子》

血鬼術!!

固定された!

誰の血鬼術だ!これは!

肉の中でも棘が細かく枝分かれして抜けない!いや問題ない。大した量じゃない、吸収すればいい。

ドクン

《ズグ》

「珠世!!なぜお前がここに…」

「この棘の血鬼術は貴方が浅草で鬼にした人のものですよ!」

目くらましの血鬼術で近づいたな。

目的は?

何をした?

この女は無駄なこととはしない。

「吸収しましたね無惨、私の拳を!拳の中に何が入っていたと思いませんか?」

「鬼を人間並に弱くする薬ですよ!どうですか効いてきましたか?」

鬼を人間並に弱くする薬だと?

「そんなものが出来るはずは」

「完成したのですよ!状況が随分変わった。私の力だけでは無理でしたが…」

「鬼を人に戻す薬が完成した?」

「はい、全てはここにいます、しのぶさんとイーサン軍医、日本の軍医たちのお陰です。」

私だけでは後100年あっても無理だった。

特に鬼殺の為に、自らの身体を藤に満たすという常軌を逸した胡蝶しのぶさんの力が大きかった。

そして、薬の為にお金を惜しまなかった日本政府と、他国の毒物を大量に持ち込んだイーサン軍医の力も。

「それで?あなたが捨てて身で毒を吸収させる作戦は良いとして、鬼舞辻の意識をどう反らすのですか?あなたが言うには、鬼舞辻とやらは時間さえあれば、全ての毒を無効化できるのでしよう?」

「はい、ですのであくまでも鬼を人に戻す薬は無惨の気を逸らすための毒の一つです。本来の目的...それは、かつて継国縁壹という最強の剣士からさえも逃げ延びた、奴の逃げの能力を封じる薬を隠し通すためのものです。」

鬼を人に戻す他に、この薬には「老化」「分裂阻害」「細胞破壊」そして、大本命の「血鬼止め」が複雑に入り込んでいます。奴の性格から考えれば、まず「鬼を人に戻す薬」を集中して解毒するでしょう。

その間は僅かとはいえ、他の鬼への支配を緩くせざるを得ない。そうなれば、帝国軍が無限城に入り込んでいるという事実を認識するのに時間がかかる。」

「なるほど...ですが、まさか馬鹿正直に言い切るのですか?人間に戻す薬だと。」

「え...ええ?そうです。そうすれば奴は」

「本命さえ気取られなければいいのです。【鬼を人間に戻す薬】ではなく、あくまでも【鬼を人間並に弱くする薬】で貫き通すべきです。産屋敷の血族なのでしょう?ならば鬼舞辻とやらも病弱な人間だったと仮定すれば、病弱な人間に戻るといふ薬を放置するはずがない。解毒の早さを遅くすればするほど、こちら側に有利になる。ならば、無

駄に敵を警戒させる言葉を使うべきではありません。」

そうか…私は復讐心の余り、1番大切なことを忘れていた。

そうだ…確かにこの男の言う通り、奴を煽ることよりも確実に殺す方を取らなくては。

「はい、では九鬼殿の仰る通りに【鬼を人間並に弱くする薬】で通します。」

そして、今、奴に薬を吸収させた。

「お前も大概しつこい女だな、珠世。逆恨みも甚だしい。」

そうだ。私は医者でありながら副作用を聞かなかった。

「お前の夫と子供を殺したのは誰だ？私か？違うだろう、他ならぬお前自身だ！お前が喰いだした！」

「そんなことがわかっていれば、私は鬼になどならなかった!!病で死にたくないと言ったのは!!子供が大人になるのを見届けたかったからだ…!!」

「その後も大勢人間を殺していたが、あれは私の見た幻か？楽しそうに人間を喰っていたように見えたがな」

「そうだ自暴自棄になって大勢殺した！」

鬼殺隊が公認組織になって隊士よりも、イーサン軍医の目の方が何倍も冷たかった。『知らなかった』と言い訳できる立場ではない。

「その罪を償う為にも」

「私はお前とここで死ぬ!!悲鳴嶼さんお願いします!!」

「南無阿弥陀仏」

《ゴシユア》

悲鳴嶼行冥 side

あの方と初めて会った時、お館様は十四、私は十八。

その立ち居振る舞いは己よりも四つも歳が下だと思えなかった。

「君は人を守る為に戦ったのだと私は知っているよ、君は人殺しではない。」

あの方はいつも、その時、人が欲しくてやまない言葉を、かけてくださる人だった。お館様の荘厳さは出会ってから死ぬまで、変わるこゝとがなかった。

「五日…以内に無惨が…くる…私を…囮にして…無惨の頸を…取ってくれ…」

「ふふ…勘だよ…ただの…理屈は…ない…」

特殊な声に加えて、この勘というものが産屋敷一族は凄まじかった。『先見の明』とも言う。

未来を見通す力

これにより彼らは財を成し、幾度もの危機を回避してきた。

最も、例の鬼…隠された太陽を克服した鬼に対しては空振りだったが。

（やはり!!お館様の読み通り無惨、この男は、頸を斬っても死なない!!!）

きついのは確か!しかし、

「テメエかアアアお館様にイイ何しやがったアアー!!!」

柱たちが集結。お館様の采配。見事…

「お館様ア!!」

「お館様」

「無惨だ!!鬼舞辻無惨だ!!奴は頸を斬っても死なない!!」

「無惨!!」

柱が一斉に技をかけた…!!

《ベントツ》

琵琶の音？

「これで私を追い詰めたつもりか？ 貴様らがこれから行くのは地獄だ
!! 目障りな鬼狩り共！ 今宵皆殺しにしてやろう」

とても大きな音が聴こえるが、気配の急激な変化で集中できない！

鬼殺隊士 side

べべん

べべん

「ぎゃー!!」

「何だここはあ!」

「キャハハハッ」

「底に叩きつけられる前に体勢を整えろ!!」

鬼殺隊士たちは、昔とは違う。前だったら体勢を整えることが出来ずに床に体全体を叩きつけられて圧死していただろう。だが、禰豆子の太陽克服以来に始まった柱稽古により、今の鬼殺隊士は1番階級が下の者でも、下弦程度の鬼ならば単独で討伐できるほどに戦闘能力が上がった。

結果、鬼殺隊士たちは1人も圧死することなく無限城の探索ができるようになった。

ドドドド

「うっわ!何だこの鬼共!!」

ウウウウー!!

「怯むな!経験から見てこの手の鬼は理性がない!今の俺たちなら勝てる!」

「殺せ!殺せ!」

「柱の皆様が上弦に行けるように、俺たちはこの鬼共を片付ける!!」

「お前ら!呼吸ごとに分かれる!」

「水で駄目なら炎行くぞ!!」

「医療部隊が来るまでの辛抱だ!しっかりと気を持って!」

柱稽古の結果は出ていた。

【一緒に行動した】事により従来以上に仲間意識が芽生え、さらに軍人による基礎的な訓練教育により、サイステ先輩のようなプライドばかりが上の雑魚は処分されていたのもあり、今の鬼殺隊士は初対面でもお互いの欠点を賄え合えるようになっていた。

「凄い量の鬼ですね」

「下弦程度の力を持たされていようだな。これで私たちを消耗させるつもりなのだ…だが、今の鬼殺隊士ならばあの程度の鬼なら任せても問題なからう。」

最終戦なので、悲鳴嶼行冥は険しい顔ではあるが、聞こえた鬼殺隊士たちの声に微笑んだ。

「単刀直入に聞きます。お館様は自ら囿に？」

「…そうだ。ただでさえ余命幾許もない命。生き残ったとて産屋敷一族の未来は明るくはない。」

「お館様は僕が鬼に襲われて生死の境を、彷徨っていた時ずっと励ましてくださった。今際の隊士たちには同じくそうしていた…父のよう」

「ああ、知っている」

「無惨は兄だけでなく僕たちの父まで奪った。あいつ…無惨…!!なぶり殺しにしてやる地獄を見せてやる」

「安心しろ…皆同じ思いだ。」

過去は変えられないと誰よりも経験している2人は上弦の元へ向かう。

▽▽▽

とある鬼殺隊士

俺の名は…いや、柱でもあるまいし名乗る必要もないか。

まあ、俺は両親を鬼に殺された事から鬼殺隊に入隊した普通の隊士だ。俺のようなありふれた志望動機なんて、誰も気にしないがな。

最初の俺はとにかく荒れていたなあ。馬鹿みたいに木刀を振り回して、育手の訓練一時停止措置も無視して殴られたこともあったけ。

今思うと育手には悪い事をしたよ。当時の俺はちようど成長期の15歳。極端な運動で身体を壊す可能性が高かったのに、それを知らずに無視していたんだならな。そりゃ殴られるし、食事抜きにされるわ。

俺は【水の呼吸】を一通り習得して、最終選抜を無事に突破。

噂じゃ、俺たちの後の選別では、10人以上喰った鬼がいたらしい。真相は明らかじゃねえが、とりあえず俺は鬼殺隊士になることが出来た。

一緒に入った同期たちも「大切な人を鬼に殺された」そうさ。事情が似通っているのもあって、俺の実力は大した事はなかったが、仲間内は仲が良かった。腫れ物扱いされない鬼殺隊という組織は俺のような人間には居心地が良かったし、何より飯がたらふく食える環境は最高だった。俺自身は柱どころか6いや、7年か？務めても階級は【辛】止まり。噂の《10人以上喰った鬼》を討伐した少年はもう【庚】下から4番目だそうさ。やっぱ才能のある奴は違うんだな。

俺自身は他の仲間と違って、【両親の仇】である鬼以外には特別な感情がない。そいつの頸は俺を助けてくれた鬼殺隊士に斬られたし、3年くらいは「鬼憎し」で鬼殺してたけど、減りもしない鬼の頸を斬るのに飽きてしまったのも事実だった。どうせ、下っ端には雑魚鬼以外に仕事が回ってこないしな。

だから、例のソイツが鬼を連れていようが、上弦の顔を見ていようが関係なかった。

まあ、鬼の存在そのものが、人間にとっての害悪であるのは事実だし、仲間がソイツを嫌うのも理解できる。誰だって、いつ爆発するかも分からない火薬を持ち歩く奴に近づくんだ。つう話だわ。

俺は月日を経て、最初の情熱を忘れてしまった。冷めた本心を隠しつつ、鬼殺隊士らしく振る舞っていた。まあ、俺も22になったし、殉職率が高い鬼殺隊から抜けて、これまで溜め込んだ金で市井に戻り、結婚して平凡な生活に戻る計画も立てていた。だが、国家の介入によりそれが出来なくなってしまった。

隠に転職した友人は、国家介入の理由が異国の客人だと話してい

た。俺は直接会ったことはなかったが、その友人が言うには、その客人は《人間に守られている鬼》だそうだ。

最初は「はっ？」と思っただけ、そもそも何で異国の人間が鬼になった上で、国家絡みで守られているんだ？疑問こそあれど俺たち下っ端には事後報告しか届かない。だが、この日を境に全てが変わった。

「鬼殺隊は国家公認の傭兵部隊となった！」

数日後には、明らかに育ちのいい軍人が鬼殺隊内で闊歩しだし、

「これより鬼殺隊士歴3年未満の者は、帝国陸軍での基礎訓練を合格した者しか柱稽古への参加は認めない！」

軍人が蝶屋敷含めて、鬼殺隊士の監視を始めた。

柱稽古に喜んでいた後輩はこの言葉で、やる気を落としていたな。

「初めまして、鬼殺隊士の皆様、特高の九鬼大和です。君たち鬼殺隊関係者全てに【ウィーン条約】の基礎を習得してもらいます。これは国家としての命令です。」

軍人と行動を共にしていた生真面目そうな男は、そう言い、【鬼殺】に燃え上がっている少年たちの反感をかいながらも、「国家命令」の一言で押し切った。

当然、俺が表世界に復帰する事が出来なくなった。一応、退く意思は言ったんだけどなあ。

「却下します。君は7年も鬼殺隊士を続けられた。あなたの實力はさておき、身体的な損傷のない戦闘員を辞めさせるほど、この組織の人材は余っていない。」

鬼殺隊は万年人材不足、例えうだつが上がるらない男でも、【鬼との戦闘経験者】を野放しにする事を却下された。

俺は嫌々ながらも、教養を受けにいった。

「まず最初に言い切ります。今の状態では鬼舞辻無惨とやらを討伐することは不可能。」

ちようど、俺の行った授業は血気盛んな鬼殺隊士が多かったのもあり、政府代表任命官とかいう役職に就いている九鬼大和が教壇に立って言った。最初は別の軍人が授業をしていたそうだが、鬼殺隊士が聞く耳を持たなかったからか、最高責任者の呼び出しになったそうだ。「どういうことだ！ゴラァ！」

「テメエ！政府の人間だがしらねえが俺たちは鬼を殺してきたんだぞ！」

「どうせ命令するだけの人間のくせに生意気な！」

あー…俺にもこんな時期あったなあ。

「…そういうところです。鬼舞辻とやらの勝てないのは。」

自分で言うのも何だが、俺たちは少なからず死線を潜り抜けてきたんだ。いくら子どもらしい顔立ちが抜けなくても、そこらの軍人さんよりかは迫力がある。だが、この男は平然と話を続けた。

「そうやって我先にと鬼に群がり鬼を斬り捨てる。君たちはまともな連携戦闘をした経験者などいないでしょう。」

考えたことはありますか？如何に効率的に鬼を殺すか。違う呼吸を使う隊士と同じ標的を見つけた時、技の組み合わせをするか。

これまでは上の指示に従って動くだけだったから考えたことなどないでしょう。」

確かに言われてみれば、そうだった。水の呼吸は水の呼吸。炎の呼吸は炎の呼吸で固まって戦闘していた。

「無論、それを悪いこととは思いません。むしろ、軍人だったら理想的な姿です。ですが、君たちは傭兵です。国家に所属し、集団で戦闘する事が前提の軍隊とは違い、傭兵の最大の特徴は即戦力です。君たちの言うとおり、これまで国は鬼の存在を無いものとして扱ってきた。我々国家側には鬼と戦闘して勝つなんて出来ない。」

鬼殺隊士が並の軍人よりも高給取りなのも、君たちには「鬼との戦闘が出来る」という前提条件があるからです。」

ダン!!

「ですが、ただ戦えるだけでは意味がない。勝てなければこちら側が法律で禁止されている私兵を雇う意味など一切ない。柱とか呼ばれる即戦力さえも、複数人でようやく一匹という強さの持ち主。その上、人を喰えば喰うほど強くなると言う厄介な特性持ちの化け物相手に死体を積み重ねるような味方など、もはや敵同然。有事の際に速決な連携戦闘が出来なければ、君たちはただの餌でしかない。鬼を殺し、全てを終わらせたいのならば、自分で考えられる頭と私情を抑える冷静さを持って。出来なければ剣を捨てろ。以上だ。」

こちら側の怒気を超える怒気でもって、場を抑えた男は軍人に何か命令を出して去っていった。

俺は気づいたら、軍の教官から水の呼吸の柔軟性を利用した他の呼吸との連携技の考案をしていた。

そうそう、あの男に反抗した鬼殺隊士は「銃器中隊」とか言う軍人の中隊に異動したそうだ。

素行の悪い隊士は続々とそこに派遣されている。

どうやら、その隊長は呼吸が使えないと評判だった不死川玄弥だったそうだ。今まで馬鹿にしていた隊士が、実は軍人だったことを知った隊士の中には不死川玄弥氏を罵倒する者もいたらしい。

当然、軍法会議で裁かれたようだが。

本格的な国家介入の余波で、鬼殺隊はどんどん軍隊色が強くなっていった。

元より、鬼殺隊士を志す者の多くは、俺のような仇討ち目的や他に居場所のない孤児が多い。蝶屋敷に屯っている軍人の中には、「教養が無さすぎる」「私情で命令を聞けないとか馬鹿かアイツら。」とかの愚痴を聞いた。正論すぎて何も言い返せない。

比較対象ができた分、俺は鬼殺隊がどれほど時勢に合わない体制をしていたのかを実感できてしまった。こんな組織じゃ、そりや政府公認にならない。

だが、国家介入全てが悪いことでは無かった。

「なー、銃器中隊に派遣された隊士のアイツらがいなくなってから過ごしやすくなったな。」

「そうだな、財布を隠す必要がなくなったし。」

「胸をじろじろと見られなくなったし。」

「ゲス眼鏡に破廉恥な隊服を送られる事がなくなったし。」

「隠だからと、鬼殺以外でこき使う奴らがいなくなったから、俺たち隠からすれば、軍人には感謝しているよ。」

俺たちのような普通の存在からすれば、階級を理由に理不尽な命令を出す鬼殺隊士ら（当然一部だが）が処分される姿に、喜んでいる仲間が多かった。

それに…

「風と岩の相性は良いけど、水と炎の相性が悪い？」

「はい、前者はどちらも《広範囲攻撃》ですが、水の呼吸はどちらかと言うと《一点集中型》なので柔軟性にこそ優れています。攻撃力は呼吸の中では低いです。」

「なるほど…水の呼吸は攻撃よりも仲間内の防御に集中していると。」
「はい、なので初心者向きとされています。もちろん、水柱のように極める事が出来れば話は別ですが、普通の隊士だと攻撃力はそこそこだけど、防衛特化かと言われるとそれも違うという…中途半端なモノになりがちで…」

自分がそうだからか、水の呼吸の弱点はすらすらと答える事が出来た。

「炎の呼吸は言葉通り、燃え上がる炎のような攻撃が多いです。柱同士なら連携攻撃が上手くできますが、一般隊士同士だとお互いの攻撃力が下がりぎみになりがちで…」

本当に水と炎なんだよな、俺と炎の呼吸使いで同じ鬼倒したけど、あれは鬼が弱かったから何とかなただけで、お互いの技の利点を潰してしまった。

「では、水と相性の良かった呼吸は？」

確か…

「速い代わりに戦闘時、数秒停止する必要がある雷の呼吸や、同じく斬り刻むことに特化した風の呼吸、それと…これは予想でしかありません

んが、水の呼吸から派生した蛇の呼吸と、蟲の呼吸と花の呼吸。蛇、蟲、花は呼吸適応者が1人しかいないので連携することはないと思いますが。」

「なるほど…：水は連携することで力を発揮する呼吸…か。参考になった、上に報告する。」

「お気をつけて」

そんな話をして数日後、

「では、連携技の実践練習を始める！」

数日前に話した内容がそのまま訓練に入ってしまった。

「君たちは弱い！ならば、弱い者同士で組み合って総合的な戦闘力を上げろ！普通の戦場ならまだしも、鬼との戦闘で死ぬ事は認めない！！」

鬼は人を喰えば喰うほど強くなる。…この常識を知った軍関係者は俺たちが鬼の前で死なないようにする事を1番としている。

弱い人間を短期間で強くする事は不可能。

と俺たちの能力の限界を早々に見つけてからは、俺たちを強くすることを諦めた。だが、鬼の前で死なせることは出来ない軍関係者は、俺たちが死なないくらいに自衛できるように鍛える方向にしたそうだ。

高価なレコードで柱の連携を記録して、何度も何度も、柱の技を俺たちに見せて、実践させた。映像による技の基礎を見れた事によって、変な癖がついている事に気づいた隊士も多かった。

幸い、俺は師匠が技よりも基礎を重視していたのもあって、水柱と基礎の形は変わっていなかった。

といっても、だからといって実力が上がったわけではなかったが。

俺は一通りの柱稽古を終えた後は、特に性格の合う奴もいなかった

のもあつて、最初の国が建てた学校に戻ってきた。

基礎的な訓練ならどこでも出来るからな。

それに…

「不死川中尉、報告を」

「はっ!!医療中隊は一通りの軍医訓練を修了しました!」

「そうか…思っていた日程より早いな。では、優秀な者は更に教育するよう。」

「仰せのままに、九鬼政府代表任命官!」

不死川中尉…ね。

やっぱ、最初から軍の人間には見えねえんだよなあ。

あの荒れ具合は演技で出来るものなのか?

そんな違和感はあれど、

ウウウウー!!

「怯むな!経験から見てこの手の鬼は理性がない!今の俺たちなら勝てる!」

とにかく声を出せ!全力で!!鬼の根城なら鬼さえ仕留めれば地上に出られる!

「殺せ!殺せー!」

「柱の皆様が上弦に行けるように、俺たちはこの鬼共を片付ける!!」

「お前ら!呼吸ごとに分かれる!」

「水で駄目なら炎行くぞ!!」

「医療部隊が来るまでの辛抱だ!しっかりと気を持って!」

全てを終わらせる!俺が市井で嫁さんをもろうためにも!!

銃器中隊 side

べべん

「うわ！」

「ぎゃー!!」

床に障子が!?まさか!!

「鬼の根城に吸い込まれるぞ!総員!武器を手離すな!!」

「ぎゃー！」

「佐藤ー!!」

「田中ー!!」

▽▽▽▽

「ここは？」

上下左右が滅茶苦茶、不死川隊長が言っていた鬼の根城か。

「おい!中隊の連中拳手!」

ババババ

20名!?

「残りの180名は、この城のどこかに…」

べべん

べべべん

「ぎゃあー！」

「常に動き続ける戦場なんて想定していないぞ!」

「落ち着け!事前に説明されていた武器はあるか!」

「手榴弾、火炎瓶、輸入物の地雷、拳銃に弾丸」

年末が近づいているのもあって、武器は常に身につけているという、命令があつたから、無限城対策も取られていた。

我々軍人も鬼殺隊同様、日輪刀の配給こそあれど、鬼との戦闘を前提としていない。なぜなら、有り合わせの物を持たされたが、色が変わる事がなかったからだ。

やるのは徹底的な妨害活動のみ。

なんとか呼吸に適性がある軍人もいたが、付け焼き刃の腕前で、鬼と真正面から戦って勝てるわけがない。

くそ：風柱のしごきを突破して銃器中隊に戻ってきた奴らがいな
いなんて！

「今いる銃器中隊！鬼が来たら手榴弾を投げろ！我々は医療班も兼ね
ているのだ！鬼殺隊士に嫌われているとはいえ、我々を助けないと困
るのはアイツらも同じだ!!」

「はっ!!」

そうだ。鬼との戦闘に役立たずな俺たちは、鬼殺隊士から嫌われて
いる。あいつら、特に戦闘員の多くは孤児や貧困家庭出身者。甘露寺
蜜璃のような人間は極端に少ない。

対して俺たち軍人は、中流階級の高等学校卒業生が多い。感性や価
値観の違いで争う事が多かった。

その上、銃器中隊は「情報部隊」であり、俺たちは生き残る事を前
提に動く事が決定していたのもあり、鬼殺隊士と折り合いが悪かつ
た。

だが、正直に言えば、俺たちが優位なのは立場だけだ。それ以外の
面では、鬼殺隊士に依存せざるを得ない。

九鬼政府代表任命官もそれを理解していた。

だからこそ、私兵でありながら、他国大使のお嬢様相手に襲いかか
るような人間を、厳罰に処せなかった。伊達に千年も化け物相手に殺
しあっていた組織ではない。それ相応の実力があったからだ。

そして、トップは抑えられても末端が収まるかと思えば違う。

むしろ、教養と常識がない分、何も持たない末端が暴れた方が厄介
だ。

「武器を使い尽くしたら鬼殺隊服を脱ぎ捨てろ！軍服姿に戻れ!!」

「はっ!!」

政府が鬼を野放しに近い状態にしていた理由。

それは鬼の存在を外国に知られた時に起こる、争奪戦を避ける為
だ。

現に、鎖国体制だった徳川の治政では、鬼殺隊士は見逃すように命

令されていた。

鬼舞辻とやらがもつと派手に害を及ぼしていたならば話は別だったが、裏で活動していたこと、上流階級者を鬼にする事がなかったことで、表の権力者連中も薄々勘付いていながら黙っていた。だが、鬼舞辻はよりにもよって【外国人】に手を出した。それも【大使のご息女】にだ。

他国に存在を隠し通したかったから鬼を見逃していたのに、鬼の棟梁自らが他国に鬼の存在を知らしめた。ならば…最早、我々が見逃す道理がない。

「図体がでかいだけで知性らしきものがない。この建物も直すのには多少なりとも労力があるはずだ。破壊活動に移れ!!」

「はっ!!」

俺たち軍人は鬼を殺すことを専門としていない。

だから、出来るのは妨害活動と軍医の真似事だけだ。

不死川隊長は今頃鬼殺隊士と合流して、鬼に向かっているだろう。俺たち医療部隊も分断されることが前提で少数活動の訓練もしている。

「地雷設置よし!!」

「総員！離れる!!」

ドオオーン

後方から爆発音が聞こえた。

「うわっ!!」

「全力で走ったのにこの威力なのか!？」

「だが、鬼の原形は壊れているな!」

「今のうちに目眩しの札をばら撒け!!鬼の情報源を遮断する!」

俺たちは人間だ。不死身の鬼相手に持久戦で挑まれたら負けるのは必須。短期間、それこそ今日中に鬼の棟梁を潰してもらうしか勝ち目はない。米国もあくまでも技術援助の比率が高い。日本人の手で終わらせなければならぬ。

ぎゃーぎゃー

あの音は、

「医療部隊が来るまでの辛抱だ!!」

鬼殺隊士…団体活動が取れるようになったのか。ならば、

「医療部隊到着しました!!怪我人はこちらに!!」

こちらにも全力で援護しなければな!

▽▽▽

ボリ

ボリツ

ボリボリ

「ん?」

その男は、頭から血を被ったような鬼だった。

「やあやあ初めまして、俺の名前は童磨。いい夜だねえ」

女を笑いながら殺す…、鋭い対の扇。やはりコイツが…姉さんを殺した鬼

「私の姉を殺したのはお前だな?この羽織に見覚えはないか」

国家の力を使っても見つけられなかった万世極楽教の教祖。

童磨戦 胡蝶しのぶ編

胡蝶しのぶ side

鬼の根城に連れ込まれ、部屋を開ければ姉の仇がいた。

その男は、聞かれもしていないにも関わらず、己の立場を話だし、拳信者の幸せのために喰べていると変わらない笑顔で語り出した、嗚呼…本当に、

「正気とは思えませんが、貴方、頭大丈夫ですか？本当に吐き気がする」

国が全力で探しても見つからなかったわけだわ。信者の数を救いのために間引いていたのだから。

私の言葉、姉さんの羽織で、思い出しはしたが、姉さんへの言葉は侮辱以外の何者でもなかった。

(蟲の呼吸… 蜂牙ノ舞 真靡き)

「凄い突きだね、手で止められなかった」

直ぐにあの鬼の血鬼術が飛んだ。

きた！

カポッ

冷たい!!ガスマスクをつけていてもこの冷たさ!肺を裂くような冷たい空気!姉さんがやられた理由はこれか!

「あれー?なーにそれ?せつかくの綺麗な顔が隠れるなんて勿体ないよ。」

この鬼は、その気になれば姉さんを瞬殺できた。なのにしなかった。理由は女だからだ。なら、姉さんより弱い私の肺をもう一度、壊死させようとは思わない。

ガポッ

トン

「ぶはっ…突きでは殺せませんが、毒ならどうです?」

顔の色が変わった。少しでも効けばいい。だって私は、

「ぐっ!!」

とにかく、上弦にこの毒が通用するかどうか、今わかる。姉さん…

お願い…姉さん

ドッ

「ガハッ！これは…累君の山で使った毒よりも強力だね」

やはり、情報は共有されていた…毒は諸刃の剣。

政府役人が最も懸念していた、毒の配合の分析により、自力で無惨が毒の解毒をしてしまうという最悪の事態を避けるために、無惨用の毒に含まれる成分は外した。

「ゲホツグツ…あれえ？毒、分解できちやつたみたいだなあ。ごめんね。せつかく使ってくれたのに」

やはり…か。私は…いや、柱全てに言えるけど、私たちは足止め要員にすぎない。だが、この男は、

「うわーっ楽しい!!毒を喰らうのって面白いね！癖になりそう！次の調合なら効くと思う？やってみようよ！」

個人的に気に入らない存在だ。

「うーん五回目。これも駄目だね、効かないや」

息が続かなくなってきた。肺胞の壊死はしなかったのに、この体力差。

この鬼が、私を舐めてかかっているのも納得せざるを得ない生まれ持った違い。

でも、諦めない！駄目で元々！

連続で大量の毒を打ち込む。

蟲の呼吸蜻蛉ノ舞 複眼六角

「いやあ君、本当に速いね！今まで会った柱の中で1番かも」

バツ

斬ら…れた…！

ドッ

まだ、ダメ、本命が到着しないうちに私が倒れてはダメ。

ボタバタ

血が流れる。医者だから分かる。私はこの場で死ぬ。

《君が死ぬ分には、なんら問題ありません。我々の目的は君ではなく、君の纏めた毒の資料ですから。》

《第一、個人の復讐は法律で禁止されております。今回は相手が人間ではないから認められただけのこと。》

《剣士の才能がないと分かった時点で、君が変な意地を張らずに裏方に落ち着けば我々としてもやりやすかったと言うのに……だが、周りの意見を弾いてまで剣士になったのは、君の意志。》

《弱いと嘆く暇があるのなら、立ち上がり死ぬまで戦い続けろ。》

カナヲ……に引き継ぐ。

「え、立つの？立つちやうの？えー……君ホントに人間なの？」

「鎖骨も肋も斬っているのに、君の体の大きさ……その出血量だと死んでいてもおかしくないんだけど……」

ゴフツ

肺に血が！

「あっほらく！肺に血が入ってゴロゴロ音がしてる。想像を絶する痛みだろう。俺が直ぐに首をストンと落としてあげるから無理しないで！君はもう助からないよ、意地を張らずに」

狙うなら、やはり急所の頸。頸に毒を叩き込めば勝機はある。

(蟲の呼吸 蜈蚣ノ舞 百足蛇腹)

あはは、父さん

幸せな道はずつとずつと遠くまで続いているって思い込んでいた。

破壊されて初めて、その幸福が薄い硝子の上に乗っていたものだと
気づく

そして自分たちが救われたように、
まだ破壊されていない誰かの幸福を、
強くなつて守りたいと思つた。

そう約束した。

《鬼を倒そう一体でも多く、2人で。私たちと同じ思いを他の人には
させない》

力が弱くても、鬼の頸が斬れなくても、鬼を一体倒せば何十人、倒
すのが上弦だったら何百人もの人を助けられる。

できる、できないじゃない。

やらなきゃならないことがある。

《怒ってますか?》

そう、私怒ってるんですよ炭治郎君。ずっとずっと怒ってます
よ。

親を殺された。

姉を殺された。

カナヲ以外の継子も殺された。

蝶屋敷のあの子たちだって、本当なら今も鬼に身内を殺されてなけ
れば今も、家族と幸せに暮らしてた。

ほんと頭にくる

ふざけるな馬鹿

なんで毒が効かないのよコイツ馬鹿野郎

ガシッ

「えらい!!頑張ったね!」

何だ?この鬼?

「俺は感動したよ!!こんな弱い女の子がここまでやれるなんて」

弱い女の子?弱いのは事実だが女の子扱いされるほど、幼くはない。

「姉さんより才も無いのに、よく鬼狩りをやってこれたよ!今まで死ななかつたことが奇跡だ。」

むかつく男だ。

「全部全部無駄だというのにやり抜く愚かさ、これが人間の儂さ、人間の素晴らしさなんだよ」

私の思惑には勘付いていないという事か。

「君は俺が喰うに相応しい人だ、永遠を共に生きよう。言い残すことはあるかい?聞いてあげる!!」

「地獄に堕ちろ」

「師範!!」

よかつた… カナヲまで引き継ぐことができた。

後は頼みました。カナ

ガキツ

ヲ…

ハハハ…地獄?

「いいえ、正確には【地獄行き魂向けの三途の川】ですかね?」

「あなたは?」

「初めまして、私は未練を残した魂の案内役をしております。キヨウ

コと申します。このまま家族の元に帰りますか？」

死んだからこそ分かる。この人は嘘をついていない。

「いいえ、姉の仇が来るまでここで待っています。」

「そうですか。では私は他の方の案内もあるので失礼します。」

そう言ったキョウウコさんは、光の道を進んで去っていった。

獺岳戦 我妻善逸の覚悟

兄弟子が、獺岳が俺を嫌っていたのは十分知っていた。

俺だって「カス」「役立たず」と容赦なく言う獺岳が嫌いだった。

でも、嫌っていても…ひたむきに努力して、爺ちゃんの期待に応えようとしていたアンタの事を尊敬していたんだ。

「いるんだろ出てこい、そこにいるのはわかっている。」

「口の利き方がなつてねえぞ。兄弟子に向かつて」

障子から見える手は鬼特有のモノ。

「少しマシになったようだが、相変わらず貧相な風体をしてやがる。久しぶりだなア善逸。」

もう…そんな事を言い合える仲ではないけど。

「獺岳、鬼になったお前を、俺はもう兄弟子と思わない。」

ドン

ドドン

特有の爆発音…帝国軍が暴れている。なら俺の為すことは一つ。

「変わってねえなあ、チビで、みすばらしい。軟弱なまんまでよ。柱にはなれたのかよ？壺の型以外使えるようになったか？なあ、おい善逸」

この会話だけなら、オレ達の中では日常会話のようなモノだった。

でも、アイツの今の姿。そして禰豆子ちゃんや下弦程度の力を強制的に持たされた鬼と違って自らの意思で鬼となった獺岳。

もはや、希望はない。

「適当な穴埋めで上弦の下っぱに入れたのが随分嬉しいようだな」

《えっ？兄弟子についてですか？》

《カイガクとか呼ばれる裏切り者の経歴をこちら側で調べました。元々は悲鳴嶼行冥の寺に入る前は、両親もいない浮浪児。寺に入ってから悲鳴嶼殿が盲目である事をいい事に金品を盗み、それを他の子どもに咎められ寺を追い出され、自らが生き残るために鬼を招きいれ、1人だけ生き残るように仕向けた性悪です。ちなみに金銭の件や

鬼の件の関連性は、沙代と呼ばれる戦場帰りの兵士によくある精神的な負担により話せなくなった少女から筆談で聞き取り、並びに当時の裁判記録から間違っていないと確定できました。》

《獺岳が…そんな事を…》

《君たちの因縁は記録上知ってしまった以上、本来なら君たちを会わせるわけにはいきません。しかし…向こうから招き入れる可能性の高さから君には忠告をします。》

ピリピリとした音。

《カイガクは自らの意思で鬼となつたのです。奴のような性悪は一回死んだくらいでは直らない。》

そして、師匠の件も介錯をつけなかったのは彼の意思です。理由は異なれど自らの意思で決めた事を他人が責めるのは間違いです。君はカイガクに会つたら冷静に始末すること。私たちが君に求める行動はそれだけです。》

「へえ、ハハツ!!言うようになったじゃねえかお前…」

「もう…俺はさ、アンタが鬼になつた理由なんかどうでもいいんだよ。」

「ハハツ!変わったようだな!!善逸!てつきり爺が死んだこと、切腹した事で俺を責める気だと思つていたが、その目え、今ならテメエとも話があいそうだ!」

九鬼さんの言う通りだった。一回死ぬくらいじゃ、獺岳の心の箱は壊れたままだ。

「だろうな、俺がカスならアンタはクズだ。壺の型しか使えない俺と壺の型だけ使えないアンタ。技に恵まれなかった者同士、今なら仲良くなれるよな!!」

「テメエと俺を一緒にすんじゃねえ!!」

暗い雷…だけど、

「おせーんだよクズ」

ドバツ

(コイツ…言動、態度、そして動きがまるで別人だ!!)

獺岳 side

俺にとつての勝ち生き残る事…それだけだ。だから、

今日の前にいる上弦の壱に跪くことも、鬼となる事も正しい事だと今でも思っている。

「俺を鬼にしてください!!俺は!!もつと強くなりたいのです!!」

この言葉も嘘ではない。

「鬼となり…さらなる強さが…欲しいか…お前も…あの方に…認められれば…我らの…仲間と…なるだろう…強い剣士程…鬼となるには時間がかかる…私は丸三日かかった…呼吸が使える者を鬼とする場合…あの方からの血も…多く頂戴せねばならぬ…そして稀に…鬼とならぬ体質の者も…存在するが…お前は…どうだろうな…有り難き血だ…一滴たりとて零すこと罷り成らぬ…零した時には…」

「お前の首と胴は泣き別れだ。」

あの、体中の細胞が絶叫して泣き出すような恐怖。

あれに比べれば、こんな小物大したことはない。

我妻善逸、俺の知らないところで変わった。

だが、こいつの本性はカスだ。

いつもベソベソと泣いていた。何の矜持も根性もない。

こんなカスと二人で後継だと抜かしやがった糞爺!!

「死んで当然なんだよオオ!!爺もテメエもオオ!!」

雷の呼吸 弍ノ型 稲魂

アイツがなんか喚いているが、そんな事俺は知らねえ!!

参ノ型 聚蚊成雷

「俺を正しく評価し認める者は『善』!!低く評価し認めない者が『悪』だ!」

伍ノ型 熱界雷

俺は強くなった！俺を正しく評価しなかった爺が悪い！！

「どうだ!? 血鬼術で強化された俺の刀の切れ味は！皮膚を!! 肉を!! 罅割って焼く斬撃だ!!」

陸ノ型 電轟雷轟

「喰らった斬撃はお前の体で罅割れ続ける！目に体に焼き付けろ！俺の力を!! 鬼になり雷の呼吸を超えた!!」

アイツが落ちた。

「俺は特別だ！お前とは違う！お前らとは違うんだ!!」

善逸 side

アンタはいつもそんな音をさせてるよな。鬼となってもそこは変わらないんだな。

アンタは最後まで気づかなかったんだ。

いつも不満を抱えている理由を。

アンタはさ、九鬼さんから聞いた話だけど、悲鳴嶼さんの所にいた時は普通の幸せを享受できていたんだろ。

アンタさあ、俺を見ていて気づかなかったのかよ、本物の孤児が箸の使い方なんて学ぶ機会なんてないんだよ。なのに、アンタは爺ちゃんの所にいた時以前から普通に箸を持っていただろ。

それが意味する事は、【箸の使い方を教えてくれる人がいた】事実だけだ。アンタはちゃんと愛されていた子どもだったんだよ。

壊れた幸せの箱を俺が指摘できていたら、未来も変わったのかもな。

爺ちゃん、ごめん。俺が弱虫だったせいで、
体勢を立て直す…

ごめん…兄貴

雷の呼吸 漆ノ型 火雷神

獺岳 side

みつ：見えなかった!!何だ!?今の技速すぎる!俺の知らない型だ。
何を使った!?

「畜生!!畜生!!やっぱりの爺、鼻負しやがったな!!」

カスと同列扱いされた時点で予想できていた!クソ!!

「お前にだけ教えて俺に教えなかった!!」

「違う」

「爺ちゃんはそんな人じゃない。」

爺の技じゃない?まさか!

「これは俺の型だよ、俺が考えた俺だけの型。この技で、いつかアンタと肩を並べて戦いたかった:」

「おい!あれ!!」

「ああ、あの髪色間違いない!」

「余っている救護兵!集まれー!!」

獺岳 side

七つめの技だと?

六つしか型がない雷の呼吸から、七つめを編み出した?アイツが?
壱の型しか使えない奴が?俺よりも劣っていたカスが?

耐えられない、耐えられない!!そんな事実は受け入れられない!!あんな奴に俺が?俺が負けるのか?頭が変になりそうだ。

いや、違う負けじゃない。あのカスも落下して死ぬ。もう体力も

残っていないはず、アイツも俺と死ぬんだ。

「人に与えない者はいずれ人から何も貰えなくなる。」

「欲しがらばかりの奴は、結局何も持ってないのと同じ」

「自分では何も生み出せないから」

「独りで死ぬのは惨めだな」

善逸 side

「爺ちゃん!!」

わかる…ここは!!

「ごめん俺！獺岳と仲良くできなかった！獺岳の箱が壊れている事を知っていたのに、何も出来なかった!!手紙を書いても返事が来なかった時点で、喧嘩覚悟で獺岳に会えば良かった!!」

「俺がいなかったら獺岳もあんなふうにならなかったかも知れない。

ほんとごめん!!許して!!」

「何も恩返し出来なくてごめん！爺ちゃんが生きている内に柱にもさあ…なりたかつたんだけど。」

「ごめん！爺ちゃんごめん!!」

「俺のこと嫌いになった？何か言ってくれよ爺ちゃん…くそっ何だこれ、足に絡まって」

渡れない。

「善逸」

「あっ…」

この声は間違いなく爺ちゃん。

「お前は俺の誇りじゃ」

「どうだ!? 助かりそうか!? 顔見知りなんだよ! 何とかしてくれよ、頼むからな!!」

ボカーン

ドドン

「うわっ! また揺れた!」

「軍人共、暴れまくっているな」

ガツガツガツガツ

「医療中隊! 到着! 救護一名急げ!!」

「はっ!!」

「おい、結鬼止めは使っているが、この顔の傷罅割れが止まらなければ眼球まで裂けるぞ。」

「止血剤は足りるか?」

「今のところ出血が止まらないが、何とかなりそうだ。だが追加は欲しい」

「お前が愈史郎か、わかった。一つだけだが包帯を。流石にこちらも使う分があるからな。」

「絶対大丈夫! 絶対助かる! お前は死なねえぞ!」

「頑張れ我妻!」

「がんばれがんばれ!」

「お前の戦っていた上弦は、まだ自分の術や能力を使い熟せてなかった。運のいいことだ。戦いが一年後だったら即死だったろうな。」

「気が滅入ることばっか言ってるじゃねー!!」

ドドドト

「鬼か。」

「愈史郎、我妻善逸は医療中隊で回復するまで預かる。薬はないのか?」

「今の治療が最善だ。これからはコイツの自己回復力にかかっている。」

「了解した。おい我妻善逸を俺の背中に乗せろ。走る。」

「わかった。」

そうして俺は、体力回復までの時間をかせぐ為に医療中隊に引き渡された。

「走れー！」

「罨はあらかじめ設置した！」

「この紙を四方八方にばら撒けー！」

「ああ、そうだ。」

俺を背負っている軍人さんは言った。

「少しだけだが見てたぞ。よくぞ、強い鬼を始末してくれたな！」
顔は見えなかったが、笑っているように言いながら俺を褒めた。

くそ！くそ！何だここは！真っ暗で何も見えねえ！

俺はあの時、間違いなくカスに首を斬られたのに！！

ボヤーン

光？

シュツシュツシュツ

「初めまして、獺岳さん」

「テメエは？」

俺とは一切縁のない、女学校で呑気に親の金で暮らす、苦勞知らずのお嬢様。

「地獄にようこそ。」

その言葉に俺は納得した。

「ハッ！お前のようなお嬢さんが俺の案内をするのか？地獄とは随分と温い場所らしい。」

「正確には私は案内人です。本来、地獄にしろ、天国にしろ、君と縁のある人が迎えに来るのですが…稀にいるのですよねー、君みたいに関係者全てに断られる案件が。まあ、そのための【案内人制度】です。案内しますよ、地獄まで…ね。」

《人に与えない者はいずれ人から何も貰えなくなる》

「そうかよ」

カツカツ

シユツシユツ

「暇ですねー？」

不意に地獄の道を先導していた女は言った。

「私は君が来る前は、下弦程度の能力を持たされた被害者を天国に送り届けていたのです。鬼とはいえ、君と違って望んだわけではない上、結局一人も殺せていませんでした。なので、天国行きでした。」

「俺は人を殺したぞ。」

「ええ、だからアナタは地獄行きです。まあ、冥土の土産としてネタバラシでもしますか。」

「ネタバラシ？」

「今の我妻善逸の映像を」

あの女が何も無い所で呟くと、

ブウン

まるで昔見た映画のような物が現れた。だが映画と違い、声が聞こえて、鮮やかな色の動画が流れてきた。

《どうだ！助かりそうか！》

これは俺の死後か。

《医療中隊！到着！救護一名！急げ！》

まるで軍隊のような動きだな？

《少しだけだが見てたぞ。よくぞ、強い鬼を始末してくれたな！》

始末？鬼殺隊では討伐と言っている。それにコイツら鬼と直接戦っていない。

《中尉！流石にそろそろ逃げ用に使う武器が限界です!!》

「中尉！医療中隊！コイツら!!」

「ええ：君が鬼化してしばらくして、鬼殺隊は国営の傭兵部隊となりました。君が剣士だと思っていた我妻善逸は正式には傭兵。」

「アイツが妙に変わった理由も奴らか。」

そう考えれば、納得する場面が多かった。

やたら、爆発する音。

アイツが俺の苛立ちを煽るような言葉を使っていたのは、俺たちに軍人の正体がバレるのを恐れたからか。

「ハハッ！」

結局俺は何をしたかったんだろうな、誰も迎えに来ず、独りで死んで、そのくせ、あのカスは軍人共に褒められて、生きることが望まれて。

「これも君の犯した罪を償うための罰の一環。：私の案内はここままで：さあ、あの門が地獄の入り口。最低でも数日は並ぶことになります
が…」

さて：次は天国行きの《下弦程度の強さを与えられた鬼》の元へ。

猗窩座戦 実は似た過去を持つ人間たち

富岡義勇 side

炭治郎と合流し、ひたすら鬼の根城を走るが気配はあれど、見つからない。まさか、遭遇しないように仕向けられているのか？

ガガガガゴゴ

「何だこの揺れは！」

「ぎ、義勇さん」

「生まれ!!落ちつけ!!」

異次元空間で自然災害が起こるとは思えない。

この揺れは外部の圧力ではなく、

「上だ!!炭治郎下がれ!!」

ドオン

まさか…奴の狙いは!!

「久しいなアよく生きていたものだ。お前のような弱者が。」

「竈門」

「炭治郎!!」

「猗窩座アアア!!」

ダメだ炭治郎!今のお前の怒りのままの攻撃では!

助けなければ!!

ザン

バシユ

ダン

斬れ…た!?

煉獄が敗北した相手を、炭治郎が。

炭治郎：格段に技が練り上げられている。

「フウーツフウーツフウーツフウーツ」

お前のその実力は、柱に届くと言っても過言ではない。

上弦の参を相手にこれ程…あの日

雪の中で絶望し、頭を垂れ、涙を流しながら妹の命乞いをするしかなかったお前が、戦えるようになった。命を。尊厳を。奪われないた

めに

ならば、俺も…

「この少年は弱くない。侮辱するな。」杏寿郎の言葉は正しかったと認めよう。」

そうだな…炭治郎は強くなった。

「お前は確かに弱くなかった。敬意を表する。」

ドン

この雪の結晶は…！

「さあ始めようか、宴の時間だ」

▽▽▽

炭治郎 side

義勇さんと鬼の根城で走り回っているけど、何かがおかしい。

義勇さんは冷静な人だけど、匂いは分かりやすかった。でも、今の義勇さんの匂いは、様々な感情が入り乱れて読み取れない。

猗窩座と出会った。

必死だったから、そこまで読み取れないけど、この匂いは…哀れみ？

▽▽▽

富岡義勇 side

あの雪の結晶は一種の結界のようなモノ。

俺は感情を無にすることができない。

だが、素流が素手を武器とする武術であることを知っている。その中に刀に対抗する技があることも。

水の呼吸参の型 流流舞い

俺も教えられた側だから分かる。

完成された武術は基礎の動きを徹底される。

独断の武術ではない以上、特有の動きを見つければ、次の技を予測

できる。素流の動きは知らないが、素手の武術である以上、空手、合気道の動きが少なからず含まれる

「水の柱か、これは良い遭遇したのは五十年振りだ!!」

水の呼吸 拾壺の型 凧…はず!!

ドドド

「見たことがない技だ」

「以前殺した水の柱は使わなかった!」

素手の攻撃とは思えないほどの威力!

血鬼術で底上げしているとはいえ、これは素流そのものが強力な攻撃だ!!仮に鬼ではなかったとしても、これとほぼ同じ威力を出せただろう。

「あつ…!」

炭治郎!!

水の呼吸 弐の型 水車

ビチ

再生が早すぎる!

ドガガガガガガ

よし、ある程度基礎の型が見えてきた。

基本の動きは素手だが、足の攻撃も多い。足では体幹を取るために腕を補助に回す必要がある。これが素流特有の動きか!?それとも、コイツの独学か!?炭治郎の鼻血からやはり擦り傷が致命傷になるほどの威力。

少しでも、コイツの気を炭治郎から離したい!

「流麗!!練り上げられた剣技だ!素晴らしい!」

「名を名乗れ!お前の名は何だ!!覚えておきたい!!」

「富岡義勇、鬼殺隊の…水柱だ。」

錆兎…葛子姉さん

「そうか!!義勇と言うのか!」

話好きのようだ。攻撃は止まらないが、こちらの質問には答えてくれるだろう。

なるべく意識を話にそらし…しまっ！

「義勇さん!!」

背中が痛い…だが、早く戻らなければ…! 猗窩座を狛治に戻すために!!

▽▽▽

炭治郎 side

猗窩座と戦っている義勇さんの匂いがおかしい。

猗窩座との戦闘でも、どこか遠くのことを考えているように見える。

猗窩座と義勇さんは知り合いだったのか？

だが、それなら猗窩座は名前を聞いたりなどしない。

もやもやする!

でも、今は集中しないと!!

ヒノカミ神楽 鬼芯八重 灼骨炎陽

刃がビリビリする! 衝撃に備えなければ!

「いい動きだ。短期間でよくぞここまで鍛錬したな。」

無限列車で煉獄さんを勧誘した時と似てる。

「褒めてやる。それにしても杏寿郎は良い仕事をしてくれたぞ。あの夜、地面に転がっていたお前は圧倒的弱者、雑草でしかなかった。」

「だがどうだ!! 今のお前は!! 目を見張る成長だ! 俺は純粹に嬉しい! 心が躍る!」

「杏寿郎はあの夜、死んでよかった。ともすると、あれ以上強くなれなかったかもしれない。人間のままでいたがるような、くだらぬ価値観を持っていたし」

《竈門少年!》

《炭治郎君》

《炭治郎さん!》

「何だど? お前、お前はもう、黙れ、煉獄さんのことを喋るな」

ああ…そうか、この男は、根本的な価値観すら異なるのか。

「お前の言っていることは全部間違ってる。」

「お前が今そこに居ることがその証明だよ」

「生まれた時は誰もが弱い赤子だ。誰かに助けてもらわなければ生きられない。」

「お前もそうだよ猗窩座、記憶にはないのかもしれないけど、赤ん坊の時、お前は誰かに守られ助けられ、今生きているんだ。」

「強い者は弱い者を助け守る！そして弱い者は強くなり、また自分より弱い者を助け守る！これが自然の摂理だ！猗窩座！俺はお前の考え方を許さない！これ以上お前の好きにはさせない！！」

「シューその通りだ。炭治郎。」

「義勇さん！」

「義勇か、随分と早く戻ってきたな。」

「猗窩座、お前に質問があるのだが、いいか？」

義勇さんは、刀を向けつつも冷静な声色だった。

「質問か？もちろんだ！炭治郎は気に入らないが、義勇は好きだ！」

「だが聞くが、お前は何故強さを求めた？」

「……はっ？強い奴と戦うためだが？」

「俺には姉がいた。」

「そうか！義勇の姉ならばさぞかし、凛のある女だったのだろうな！」

義勇さんとの会話が楽しいのだろう。猗窩座は見たこともない義勇さんのお姉さんを褒めていた。

「蔦子姉さんは祝言をあげる前日に鬼に殺された。」

「……そうか……」

「俺は蔦子姉さんに隠されたから生き残った。俺が強さを求めた理由は姉のように、他者の手によって最高の幸せをこれ以上奪わせないためだ。」

「もう一度聞く。お前が力を求めた本当の理由は何だ？」

▽▽▽

猗窩座 side

炭治郎との会話にイラついていたが、義勇との会話は楽しいものだ。

「だが聞くが、お前は何故強さを求めた？」

そんなもの決まっている。

「……はっ？強い奴と戦うためだが？」

「俺には姉がいた。」

「そうか！義勇の姉ならばさぞかし、凜のある女だったのだろうな！」

だが、それがどうした？

「蔦子姉さんは祝言をあげる前日に鬼に殺された。」

ドクン

「………そうか……」

鬼となつて始めて感じるような心臓の音。

これは何だ？

炭治郎の言葉を聞いた時と同じ感情。

だが少し違う？

怒り……か？だが、義勇の姉のどこに怒りを感じる？

「俺は蔦子姉さんに隠されたから生き残った。俺が強さを求めた理由は姉のように、他者の手によって最高の幸せをこれ以上奪わせないためだ。」

「もう一度聞く。お前が力を求めた本当の理由は何だ？」

《妻の湖雪と娘の小雪を喰うくらいならば、ここで死ぬ!!》

なぜ今、かつて鬼に勧誘して、拳銃を自身の頭に突きつけた憲兵を思い出す？

《………さん》

猗窩座戦 響く言葉の刃

猗窩座 side

義勇の質問から俺はおかしくなった。

《……さん》

《……！思い出せ！》

《俺のせい……》

幻聴が聞こえてくる。今までそんな事なかった。

何だ？義勇の質問に何故、俺が動揺する？

あいつの質問は「何故強さを求めたのか」と、自分の生い立ちである「姉が祝言の前日に殺された」だけだ。どこにも俺が動揺する内容などない。

何故……なぜ……？

ビュー

痣か発現、速度が

ドン

上がった。

手を切られた。だか問題ない。

「生殺与奪の権を他人に握られるな！！目を覚ませ！狛治！！」

ズルツ

頭が……痛い？

▽▽▽

義勇 side

全力で走ったから体温が異様に上がっている。

元々……俺は、

極力、刀を抜きたくはないし、不死川のように誰かれ構わず娯楽の

ように手合わせするのも好きではない。

けれども今、己が圧倒される強者と久々に出会い、短時間で感覚が鋭く練磨されるのが分かった。

閉じていた感覚が叩き起こされ、引きずられる。

強者の立つ場所へ、

限り限りの命の奪い合いというものが、どれ程人の実力を伸ばすのか。理解した。

だからこそ：どうしても言いたい事がある。

俺1人では到底敵わぬ相手だ。

炭治郎が俺の動きから、猗窩座の血鬼術を理解するまでは、意識を俺に向ける。

「生殺与奪の権を他人に握られるな!!目を覚ませ!狛治!!」
頭を抱え始めた。これなら：!

▽▽▽

炭治郎 side

何か：何か理由があるはず!

義勇さんの速度は上がったけど、猗窩座の順応も早い。

長期戦になれば、人間が負けるのは目に見えた事実!

義勇さんの猗窩座に向ける言葉は何を：?

落ち着け!!

考える、焦るな、絶対に思考を放棄するな、なぜ猗窩座の攻撃は磁石のように正確なのか、背後や死角からの攻撃にも必ず反応する理由。

《その闘気、練り上げられている。至高の領域に近い》

トウキ?

トウキって何だ?

俺のように匂いとは違う特殊能力?

そういえば伊之助が…

《特に殺気を込めて見てくる奴は一発でわかる。》

たわいもない会話だったけど、何か核心をついているような気がする。

猗窩座の感知する（と仮定する）トウキとは何だろうか？殺気とは違うのか？闘おうとする意志？鍛錬した時間？それとも量？俺の匂いで動作予知のようなもの？

猗窩座が出した羅針盤、狂わせる方法はないか？

隙が出た！

ヒノカミ神楽円舞…

カチツ

しまっ！ん？目が？

ガシヤン

闘気

磁石

羅針盤

感知

殺気

不可能

至高の領域

そうか、あれだ。

父だ。

熊を、人間を六人喰い殺した熊を殺した父さん。

だから俺は猗窩座の吸い付くような、あの不可避な一撃をかわせた。

猗窩座自体も義勇さんの攻撃で、集中が切れかけていたのもあったのだろうけど、あの一撃は義勇さんが庇ってくれたものではない。

だけど、無理かもしれないとは、あの時なぜか思わなかった。

一瞬だけ感じたんだ。

一瞬だけ入れた。

あの世界

“透き通る世界”

体が透き通って見えた。半天狗が自身の心臓に隠れていた時も同じだった。見えたのか嗅いだのかはわからない。

回避

それだけに集中して他の感覚は閉じた。

未だかつてない程体が速く動いた。

ごめん伊之助、あの時否定してしまったけど多分お前は正しかった。

急げ！

義勇さんが相手をしてくれているうちに
これを使いこなして猗窩座に勝つ!!

さあ！還ろうあるべき世界へ！

炭治郎 side

見極めろ：見極めろ

ゴオオオオ

義勇 side

炭治郎でなければならぬ！俺ではコイツは殺せない。

だって俺は：コイツを人間と思えない！！

パキン

不覚だ。知っていたのに刃を折られた。

「然らば」

ドスッ

攻撃の途中で腕を斬って止めるとは、呼吸の音、髪に目も、何もかも違う！まさか、コレが無惨が恐れた継国縁壺の気配なのか!?

まずい!!

猗窩座は今の炭治郎を弱者として扱わない。

無惨の血が混じるということは、少なからず無惨の記憶を得ることになる！俺は医療には詳しくないが、胡蝶が似たようなことを言っていた。

《鬼の血について調べていたら、不思議なことに人間との共通点が出てきたのですよ。》

《人間の仕組みを調べてみたら、戦地で大量の輸血を行った軍人の中には、輸血した血液の持ち主の性格や、記憶を受け継ぎ、趣味嗜好が似るといふ実例があるそうですよ。》

《つまり、無惨の血を注入された鬼たちも、少なからず無惨の記憶を得ていることになりませぬえ》

そんな記憶を持つ鬼が炭治郎を生かすわけがない！

なんとしても、風で止めなくては!!

この場で俺が死んだとしても!!

猗窩座 s i d e

炭治郎は危険だ。この場で殺さねば。

術式展開

終式青銀乱残光

炭治郎 s i d e

父さんが言っていたのは、ここだったのか。

これが、

透き通る世界

何だろう？不思議だ。時間がゆっくり進む…いや動きがゆっくりに見えるのか？

「猗窩座!!今からお前の頸を斬る!!」

何もかもゆっくりに見える。

ヒノカミ神楽 斜陽転身

頸は斬った!繋げようとしているのか!?!えっ!できるの?
ドッ

義勇さんの刀!?

ゴトン

ボロッ

崩れた!終わりだ、勝った…!!

グラッ

目がまわる。筋肉の痙攣が…もう…体が限界なんだ。
ドン

血鬼術!!

ドゴン

よけた!ギリギリだった!

まだ動く!体が崩れない!頸の断面が閉じている!

うろうう…目が回る。

ゴツ

やばい…!

ドゴン

「かは…っ」

頸を斬っても死なない。

条件…そう妓夫太郎兄弟のように？

いや、頭は崩れて消えた！

変わろうとしている!! 猗窩座も…別の何かに…!

無惨と同じように頸が弱点じゃなくなろうとしている!!

戦いは終わっていない…戦いは…まだ…

義勇 side

失神! 当然だ!! とつくに限界は超えている!!

アイツ! まだ炭治郎を!

水の呼吸 肆ノ型 打ち潮

再生速度が速い!

だが、炭治郎の意識がない以上、俺が戻す。

「待て、俺はまだ…生きているぞ…!!」

この言葉は言うつもりはなかった。だが、コイツを正気に戻せるのも多分…

「これ以上! お前にその技を教えた慶蔵さんと、お前の帰りを待っている恋雪さんを泣かせるな!!」

「…えっ?」

やはり、師匠であり義父になる予定だった人と、妻になる人の名前
は覚えていたようだ。猗窩座は固まった。

左耳が全く聞こえてない。

右手は感覚がない。

力が入るが、どの程度役に立つか…

俺は…いや、俺たち瘡者は長生きできない。子孫を残せるかも怪し

い。だからせめて、託されたものを後に繋ぐ。もう2度と目の前で、家族や仲間を死なせない。守る。炭治郎は俺が守る。自分がそうしてもらったように。

猗窩座 side

「これ以上！お前にその技を教えた慶蔵さんと、お前の帰りを待っている恋雪さんを泣かせるな!!」
ドクン

この武道を教えたけいぞう？に、こゆき？

こゆき？まさか、

《もうやめにしましょう。向こうに行きましょう》

この泣いている女が、こゆき？

駄目だ。俺は奴らを殺さなければならぬ。

《どうしてですか？》

俺は強くならなければいけない。邪魔をする奴は殺す。

《どうしてですか？どうして強くなりたいのですか？》

それは、強くならなければ持つて帰って来られないからだ。親父に薬を

「えっ…」

ガラガラガラ

井戸の組み上げ音？

《ハハハハハ!!斬るなら斬りやがれ！両手首斬られたって足がある！足で掏ってやるよ！どの道、次は捕まらねえぜ!!》

《狛治！お前が捕まったって聞いて、親父さんが首括って死んじまつた！死んじまつたよオ!!》

《反省しろ!!真面目に働け!!》

薬は高えんだよ！クソツタレ!!

《おーおー大したもんだ。子どもが殺されそうだったんで呼ばれて来てみれば、大人七人も素手で申しちまつてる。お前、筋がいいなあ、大人相手に武器も取らず勝つなんてよ。気持ちのいい奴だなあ》
道場、門下生？

ガラガラ

《罪人のお前は先刻ボコボコにしてやっつけたから大丈夫だ！》

思い出した……！けいぞう……慶藏師匠！

くだらない過去……くだらない

《ケホ……ケホ》

《あの、か……顔、怪我……だいじょうぶ？》

こゆき……恋雪……！！

ガラ

きつと治す、助ける、守る、俺の人生は……妄言を吐き散らすだけのくだらないものだった。

大切な人がいない世界で生きたかったわけじゃなかったのに。

義勇は師匠のことも恋雪のことも知っていた。

俺が百年以上も無意味な殺戮を繰り返していたことを、知った上で俺を殺しにきた。

誰の生まれ変わりかは知らないが、俺が死んだところで三人と同じ場所には行けない。

よくも思い出させたな、あんな過去を、人間め、柔く、脆い、弱者、すぐ死ぬ、壊れる、消えてなくなる、そして……手遅れになった頃に生まれ変わる。

今更何を言いに来た！

破壊殺 滅式……

「やめろーっ！！」

バキィィ

《生まれ変われ少年》

弱い奴が嫌いだ。弱い奴は、正々堂々やり合わず、井戸に毒を入れる、醜い、弱い奴は、辛抱が足りない。すぐに自暴自棄になる。守

る拳”で人を殺した。

師範の大切な素流を血塗れにし、親父の遺言も守れない。

そうだ、俺が殺したかったのは、

ありがとう…誰の生まれ変わりかは分からないけど義勇に炭治郎。

ドガガガ

もういい、やめろ、再生するな。

勝負はついた、俺は負けた。あの瞬間完敗した。正々堂々、見事な技だった。敵の動きを完璧に読みギリギリで回転。敵が攻撃を出しきる前に斬りこむ。終わりだ潔く地獄へ行きたい。

《親父…もう平気か？苦しくねえか？》

《大丈夫だ狛治。ありがとうなア…》

《ごめん親父ごめん、俺やり直せなかった駄目だった…》

《関係ねえよ》

《お前がどんなふうになろうが、息子は息子。弟子は弟子。死んでも見捨てない。…天国には連れて行ってやれねえが》

師範…

「はい！通りますよー！」

ブブブー

ボカン

「あれ？何か轆いた？こちら、あまりにも多い地獄行きの鬼向けに急遽、支給された地獄便です！猗窩座改めて「素流の狛治」さんですね。何名で乗りますか？」

雰囲気全台無しにする女が奇妙な乗り物で爆速していた。

ん…あの髪…もしや…？いや違うか。そうだよな。

《狛治さん、ありがとう、もう充分です。私たちのためにありがとう》
《ごめん！ごめん！守れなくてごめん！大事な時、傍にいなくてごめん！約束を何一つ守れなかった…!!許してくれ！俺を許してくれ頼む…許してくれ…!!》

《私たちのことを思い出してくれて良かった。》

《元の狛治さんに戻ってくれて良かった…》

《おかえりなさい、あなた…》

ただいま親父、戻ったよ。

師範、恋雪さん

ただいま

ゴオオオオ

「消えた…終わっ…た」

「はやく 次は 珠世さんの ところに」

ゴン

「炭治郎…」

無事でよかつ

グラッ

ドス

「炭治郎、義勇、上弦の参撃破」

「疲労困憊により意識保てず失神！」

「猗窩座の…気配が…消えた…」

「敗北するとは…猗窩座…私に勝つのでは…なかったのか…」

「さらなる高みへの…開けた道をも…自ら放棄するとは…」

「軟弱千万」

「あれえ？猗窩座殿もしかして死んじゃった？」

「一瞬変な気配になったけど気のせいだよ、猗窩座殿が何か別の生き物になるような…」

「えーと…2名でよろしいですか？」

「あー…そうだな、恋雪もそれを望んでいるし…」

「私が言える立場ではありませんが、その大きな籠のようなモノで向かうよりも、あの2人は炎の中で地獄に行った方が“らしい”のでは？」

「まあ、彼は罪から逃げる人ではないので、案内人の特例として認めますか。どの道、地獄でも本人確認あるしね。」